Ｄｕｅｔ　Ｂｅａｔ

K-JI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｕｅｔ　Ｂｅａｔ

【Ｎコード】
Ｎ７３２０Ｍ

【作者名】
Ｋ－ＪＩ

【あらすじ】
結弦と奏のためだけのアフター・ショートストーリー。物語は最終回ラストシーンの一週間ほど前から始まります。なお、結弦以外のＳＳＳメンバーは登場しません。

Days of Him

ダイニングキッチンで夕食の最後の一口を食べ終えると、ふうと一息ついて、音無初音は満足顔で「ごちそうさま」と手を合わせた。すると、その向かいでテレビを眺めていた二歳下の弟、高校二年生の結弦が「やっと終わったか」と、やれやれといった顔で言った。

食べ始めたのは二人同時。そして一足どころか二足も三足も差をつけて結弦が先に食べ終えていた。ただし、それは結弦が早いからではない。初音が遅すぎるのだ。初音曰く、「たくさん噛んで味わなくちゃ。もったいないよ」とのことなのだが、洗い物担当の結弦としては、少しは咀嚼数を減らしてペースを上げて欲しいところ。とは言え、夕食を作るのは主に姉の担当で、労力の度合いを考えれば、洗い物担当ごときがとやかく言える立場にないことも事実。なので、いつもこうして姉が食べ終わるのを仕方なく待っていた。

本音を言ってしまえば、幸せそうにもぐもぐと食べている姉の顔は嫌いじゃないので、待つことはさほど苦ではないのだが。

そしてその姉は、食器を片付け始めた弟に向かって、期待に充ち満ちた笑顔でこう言った。

「ねえ、結弦。それ終わったらさ、またお姉ちゃんとしよ」

「ダメだ」

「えーっ。いいでしょー」対照的な結弦の素っ気ない口調の断りに、とたんに頬を膨らませて不満を表す。そんな抗議の姿勢など意に介さないと言うように、「宿題あるし。それに、初ネエ下手すぎだし」とばっさり。

「う……、上手くなったよ？　うん。けっこう上手くなった。いや、だいぶ上手くなった。だからさ」

「……目と一緒に声も泳いでるぞ」

「そんなことないよ？　ほらほら。自信満々でしょ？」

仕方なくといった風に顔を向ける結弦。言葉どおり自信に満ちあ

ふれているかのように、椅子に座ったまま背筋をそり返し、やや大きめの胸をぐんと前に突き出し、得意げな顔をしている姉の姿に、結弦はまたもやれやれとため息を一つ。

「俺には、心からそう言ってるようには見えないんだけど」

「気のせい気のせい。そういうことで、早くそれ終わらせちゃおう」

初音はそう言うと椅子から立ち上がり、流しへと小走りをする。むろん、結弦の手伝いをするためだ。結弦は、担当は自分だから自分一人でやると言ったのだが、いいからいいからと始められてしまい、力ずくで止めさせるほど意固地になることもできず、結局二人で片付けることになってしまった。しかも、これが終わったら彼女の相手をすることにもなっていた。初音のテンションに屈して、という言い訳も成り立つのだが、姉の頼みにすこぶる弱いという結弦の根本的な弱点を考えると、その言い訳は、彼自身に向けては成り立たないもの。それは彼も自覚しているところだったので、意気揚々とダイニングキッチンから移動する姉の後ろで、自嘲気味にこっそり苦笑いしていた。

そうして場所を移し、初音ががさごそと準備を始め、用意が調うといざ開始。初音は最初からやや興奮気味に、結弦は気の乗らないような口振りだったにもかかわらずなんだかんだと楽しげに、二人とも忙しなく指を動かす。

そして結弦は思う。嬉々として楽しんでいる姉について。

彼女は姉としてしっかりしている部分を確かにいくつも持っている。小さい頃から結弦の面倒をよく見ていたし、数年前に両親が離婚し、二人の手を引っ張っていった母親が仕事で毎日のように帰りが遅くなってからは、代わりに家のことをやろうとがんばっている。

しかし、その反動というわけではないのだろうが、彼から見て初音は少々子供っぽい一面を持っている。彼の言葉を借りれば、例えば「なんでこの程度のことでそんなにはしゃぐ?」とか、「何かというと猫なで声で自分に甘えられてきても」とか、まさに今とか。

「えいっ！　とうっ！　ほわたあ！　あっ!?　それはダメェ！」

初音は、奇声にも似た掛け声や何やらを発し、身体を大きく動かしている。テレビ画面を一心不乱に見つめながら。

二人はいま、ゲームをしていた。数種類のミニゲームが詰め合わさっているパーティーゲームで、その中の一つ、転がっているアイテムを拾って相手の邪魔をしながら一位を目指すレースゲーム。昨日初音が友達から借りてきたもので、本来の所有者は、その友人の弟の友人の友人だそうで、その所有者の手に戻るのはいつの日になるのか、それ以前に無事もどることができるのか、結弦は心配していた。砂粒程度、だけでしかなかったが。

それはともかく、すぐ横で熱を帯びてはしゃぐ姉の姿を見ていると、本当は自分より年下なのではと思ってしまう。そんな姿を例に挙げだしたら枚挙に暇がないほどで、ある意味、このギャップはなかなかに強力な武器だなと結弦は常々頷いていた。意味は違えど、世の男性に対して、そして実の弟に対しても。

などと頭の片隅で考えながらゲームをしていたので、昨日ほどはうまく出来ずにいた。結果、昨日は圧倒的に負け続けて全敗した初音が、この日は一勝をもぎ取った。ただし、二桁の敗北を喫していたが、それでも終始楽しんでいたようで、上機嫌で「明日はもっと勝つからね」と言いながらゲームを片付けていた。

彼女にとって、勝ち負けはたいして重要ではないらしい。そして、明日も対戦することが確定しているらしかった。

ゲームが終わると、初音はお風呂に入り、結弦は自室で宿題をこなす。母親から仕事が忙しくて今夜も終電帰りになるという電話が入ったのは、それから間もなくしてからだった。

翌朝、結弦は眠たげな母親を残して、今年の春から女子大生となった初音と一緒に家を出ると、ともに最寄りのバス停でバスに乗り、駅前で降りて電車に乗り換える。方向が同じなので途中まで同じ電車に乗り、初音が別の電車に乗り換えるターミナル駅の四つ手前で結弦は降りた。

「いってらっしゃい、結弦。勉強がんばってね」と姉に見送られながら。

結弦の通う高校は、その駅から歩いておよそ一五分ほどの場所にある。その徒歩を嫌ってバスを利用する生徒も少なくはなく、なのでそのバスはわりと混んでいる。そしてそれが嫌だから歩いているという生徒も少なくはなかった。

学校を駅の近くに引っ越すことができれば問題解決なのだが、当然それは実現不可能な方法。ならばと、もはや恒例行事というか伝統行事のようになっている気配もあったが、バス会社に本数をもっと増やして欲しいという要望を実際に出す生徒が毎年現れていた。しかも、明らかに間違った場所へと投書する者もいて、その投書先の一つに生徒会があった。

という状況の中、結弦はというと後者、つまり混んでいるバスが嫌だという理由にやや寄りつつも、まあいいかとてくてく歩いて通っていた。そして改札を出てすぐか、しばらく歩いてから、たまに友人を発見したり逆に発見されたりして、そのときはその友人と学校まで駄話をしながら歩いていた。

この日も一年の時同じクラスだった友人を発見した結弦は、昨日の宿題を出した現代国語の教師をネタにしてその友人と笑いながら歩いた。そうして、一五分という時間を全く感じないまま学校に着き、二年一組と札してある自分の教室の前でその友人と別れると、教室に入って窓際の自分の席に座った。

すると、他のクラスの男子が一人、おはようという朝の挨拶の代わりに、「おう！　やっと来たか！」と笑顔で言いながらつかつかと寄ってきた。彼の名は五十嵐悠太。中学からの友人であり親友でもある。二人して同じ高校に進んだのは、なにも打ち合わせてのことではない。悠太は、歴史と伝統のあるこの高校の古豪剣道部に入りたくて入学したようなもの。結弦は、自分の偏差値と通学時間を考慮した上で決めていた。要するに、たまたま同じだったということだ。

なお、悠太は先月練習中に膝を痛めてしまい、今は日常生活には大きな支障がないにしても、完治するまでの当分の間、部活動は御法度と医者からも顧問からも言い渡されて、ただいま休部中。そして、有り余る気力と体力のはけ口を日々探しているところなのだが、膝の状態を悪化させるような体力の使い方は出来るはずもなく、となれば体力的なはけ口といっても限界があり、結果、気力に全てを注がざるを得ない状況にあるがために、こうして無駄に元気だったりする。

「やっととか言われる時間じゃないぞ。まだ。つか、お前の教室は隣だろ」

「いちゃいけない理由はないだろう？　そんなことより音無、明日暇か？」

「今のところ、これといって用事はないけど」

「よっし」

何がよっしなんだという質問を結弦がする前に、悠太は「最後の一人が決まったぞ！」と、少し離れた場所でこちらを注目していた男子生徒二人、一年の時も同じクラスで、結弦の良き友人であり悪友と言えなくもない斉東と田野中に向けて言ったので、教室中の視線の多くがとたんに集まる中、慌てて「勝手に話進めるな！」とそれを否定した。

「用事ないって言ったばかりだろ。まさか、今言ったこともう忘れたとか言うんじゃないだろうな。その若さで物忘れ激しくなるなんて、勘弁してくれよ？」

「だから勝手に決めつけるなっ。つか、決めるも何も、お前らが何をするつもりなのか聞かなきゃ始まらないだろうが」

「心配するな。悪いようにはしないから」

快活にそう言い切る悠太と、親指を立てた拳をにんまりと突き出す友人二人に対し、結弦は怪訝な視線を向けて「悪巧みをしている顔にしか見えないんだが？」と返す。

「天使の笑顔と言って欲しいな」

「男に向かってそんな気持ちの悪いセリフ、言えるか」
「まあ、今はそれでいいさ。どのみち明日は、俺らに感謝することになるんだからな」
「だからどういう話だよっ」
「おっと、そろそろ予鈴が鳴るな。教室に戻らなくちゃ」
「待てこら！　予鈴って、まだそんな時間じゃないだろ。ちゃんと説明していけっ」
　悠太はそんな結弦の声を完璧に無視して、自分の教室へと戻ろうと踵を返す。このまま逃がしてなるものかと結弦は席を立ち、がっしと悠太の肩を掴む。すると、悠太はくるりと振り返り、にんまり顔で親指をびしっと立てた。
「だからそれの意味を教えろって言ってんだろうが！」
「俺を信じろ。それともお前は、俺がお前にひどいことを無理強いする男だとでも思ってるのか？」
　正直、そんなことをする男でないことはよく知っているし、事実そんなことをされた覚えは今まで一つもない。だが、その言い方は卑怯だと思ったので、「ああ。この頃そう思ってきたところだ」と返す。すると悠太は、まるで別の言葉を聞き取ったかのように、まっすぐに「そうか。それは良かった。明日の集合場所と時間は、あとで俺から連絡するから」と笑顔で答えてきた。
　どうやらこれ以上追求してもホントのことは言わないだろうと諦め、結弦はため息をつき、自分のクラスへと戻る悠太をもはや止めようとはしなかった。しかしこれで全てが終わってしまったわけではない。尋問する相手は、まだ二人残っている。結弦は教室を後にした悠太の背中から、斉東と田野中の二人に視線を移し、にこやかに言った。
「お前らは正直に教えてくれるよな」
　しかし、返してきた二人の返事は悠太を真似したもの。それに返した結弦の言葉も同じようなもので、しかも、過去裏切られた経験を一つ一つ挙げていった。と言っても、その経験はどれも極めて些

細で馬鹿馬鹿しく、裏切りとはとても言えない代物ばかり。口に出している結弦自身さえ、言ってて次第に虚しくなり、やがて抵抗すること自体に疲れてきて、午前中の授業が終わる頃には、彼らに付き合うことに渋々承知している結弦がいた。

午後になると、どうにかならないものかこの性格と思いつつも、今晩また初音の相手をすることになっているだろう自分に、いっぺん死なないとどうにもならないのだろうなと自嘲していた。

Ｄａｙｓ　ｏｆ　Ｈｉｍ（後書き）

感想などありましたら、よろしくお願いします。と言っても、まだ１話じゃ書きようがないですから、今後もしあれば、という意味で。
また、誤字脱字がありましたらご指摘いただけると助かります。

Go Con

集合時間の一〇分ほど前、午前一一時二〇分に結弦が溝ノ内駅東口前の広場へとやって来ると、すでに三人が待ちかまえていた。待ち合わせにはいつもぎりぎりに来る田野中が自分よりも先に来ていることに「珍しいな、お前がこんな早く来てるなんて」と言いながら、さっそく彼らの服装を軽く注目。

男四人で遊ぶにしては、三人とも少しばかり気合いを入れている感じもしたが、極度にめかし込んでいるわけでもない。昨晩、彼らが女の子をナンパでもするつもりで、それに自分を付き合わせるというのならとっとと帰ろうと思っていたのだが、そのつもりはなさそうだとこの点から判断したわけだが、その中でも特に、この日の斉東の服装が決め手となった。

このお気楽男が気合いを入れて女の子を相手にするときの間違ったお洒落姿を、結弦は何度か目の当たりにしているし、その被害を受けたことも一年のとき何度かあった。今日ナンパするつもりなら、そういった格好をしてくるはずなのだが、彼にしてはずいぶんとまともな身なりをしているからだ。

これを確証として重要視するのは早計と言えるのだが、意図せずとも深く染みついてしまった固定観念は、そう簡単には払拭できないもの。仕方のないことだろう。

こうして最初の懸念が晴れると、三人の輪に加わった結弦は「んで、何をするのかもう説明してくれてもいいだろ」と尋ねた。事ここに至れば、ひょっとしたら説明するかもしれないという淡い期待を抱いて。

しかし、返ってきたのは親指を立てた拳と笑顔。しかも、息を合わせたように三人揃って。

「……聞いた俺が馬鹿だったよ。それと、気持ち悪いからもうそのリアクションはするな」やっぱり、という気持ちで、結弦はそれ以

上問い質すことを諦めた。どのみちもうすぐ分かることだし、そのとき自分がどうするかを決めればいいという思いもあって。ただしそれは、“そのとき”がすでに手遅れになっていなければの話なのだが、残念なことに、この時点ではそこまで考え至らなかった。

そしてそのことを後悔することになったのは、それから間もなくのこと。ただし、最後まで後悔していたかと問われれば、結弦は首を縦に振れず、むしろ横に振るべきものだったことも事実なので、少しばかり複雑な心境を残した程度のものでしかなかった。

四人集まったところで、斉東がちょっと便所に行ってくると言って駅前のスーパーへと姿を消し、二〇分以上経ってようやく戻ってきた。大きい方にしても長すぎだろうと思い、結弦が「随分と長い便所だったな。トイレの紙がなくて出られなかったか？」と冗談半分で指摘すると、斉東は驚いた顔で「なんで分かった！」と答えた。

「マジかよ……。って、だったら俺らの誰かしらに電話すればいいだろ。そうすりゃすぐに救出してやれたのに」

「俺もそれは考えたんだけどな、なんか、それってすげー格好悪いじゃんか」

「まあ、確かにすげー格好悪いけどな」

「だろ？　まあ、とにかく悪かったな。待たせちまって」

ずいぶんとあっさりこの話題を流したなと斉東に対して結弦が思う中、その斉東の「んじゃ移動すっか」という音頭で移動を始めた彼らは、目の前にある駅前の大きな通りではなく、駅に沿ってぞろぞろと歩きだした。いったいどこへ向かっているのだろうと思いながら結弦も最後尾を歩いていると、ほどなくして駅の西口改札前に来た。

東口ほどではないが、ほんの少し前の彼らと同じように待ち合わせをしている人たちがいた。イヤホンで音楽を聴きながら一人待っている人や、複数人で立ち話をしながら待っている人たち。年齢層も、中学生ぐらいから背広姿の中年男性まで。その中の、女の子四人の集団の一人が結弦たちの存在に気付くと、他の三人に声を掛け

一斉に視線を向けてきた。そしてその三人の内の一人、肩まで伸びる髪に少しウェーブのかかった、いかにも活発そうな瞳をしている子が、すぐ側まで歩いてきていた結弦たちに向けてこう言ってきた。

「ごめんね、斉東くん」

この事態に、結弦は思わずきょとんとしてしまった。そんな彼を置き去りにするように、ロングヘアーの別の女の子が「ごめんなさい」とぺこりと頭を下げてきて、これに斉東が「別にいいよ」とにこやかに対応。悠太と田野中も、こうなることを知っていたかのように笑顔で答えていた。

しかも、そんなやり取りが簡単に終わるとすぐに、斉東が「とりあえず自己紹介しておくか」と提案し、一人状況を飲み込めずにいる結弦を残して同意された。

「んじゃあ、俺からかな。斉東です。もう聞いてると思うけど、そいつの中学のときの友達やってました。だから、みんなの苦労具合は分かるつもりでっす」

そいつ、というのは最初に謝ってきた活発そうな女の子、安達和美。和美は「ちょっと、それどういう意味よ」と抗議の声を上げるが、斉東はそれを無視して、「んで、こっちが俺の高校のダチ」と隣りに立つ田野中にバトンを渡した。

「田野中っす。斉東と日々馬鹿なことに励んでまっす」

続いて結弦。じわりと事態を受け止め始めていたところに、田野中に肘でつつかれて慌てて「……あ、音無です。ども」と戸惑い気味に答えていた。最後は悠太。

「五十嵐です。今日はよろしく」

男性陣が終わると次は女性陣。まずは、白地に淡い水色の縦縞の入ったシャツに黒のハーフパンツという出で立ちの和美が自己紹介をし、残り三人が続いた。

ボーイッシュなショートヘアで、柄物のTシャツにGパンというラフなスタイルの岸峰ゆん。その格好以上に、とてもはきはきした口調から、和美同様とても活発そうな印象を強く受ける。

頭頂近くで長い髪を結んでいる、ポニーテールの長谷浦真紀。赤と黒を基調にしたチェック柄のキュロットスカートに、ワンポイント入りの白のブラウス、そしてスカートと似た柄のネクタイという姿は、なんとなくアイドル風に見えなくもない。こちらも元気ある女の子といった印象が口調からありありと感じ取れた。

そして最後は、淡いベージュにうっすら白い柄の入ったチュニックにパープルのレギンスという格好の、先ほどごめんなさいと謝ったロングヘアーの女の子、宮倉祐子。少しおっとりした雰囲気の彼女は、四人の中にあっては大人しすぎるような印象を漂わせていたが、かなり天然が入っていることが早々に判明していた。

女性陣の自己紹介が終わった頃には、さすがに結弦もあれこれ考えられるだけの回復はしていたので、場所を移すべく移動し始めたとたん、悠太に「これはどういうことだ」と小声で問い質した。

「お前、この状況にまだ説明が必要だと言うのか？」

「現状じゃなくて、俺が聞いてるのは経緯だ」

「んなこと、自己紹介のときに斉東が言ってただろ。聞いてなかったのか？」

「俺はそれどころじゃなかったんだ」

とここで、誰かが結弦の肩をうしろからちょんちょんと突いてきた。それが斉東か田野中なら確実に邪険な反応をしていたのだが、二人は前を歩いている。加えて斉東の友人和美も。ということは、女性陣の残り三人のうちの誰かということになる。さすがに、ついさっき初めて会った女の子に邪険な態度を示すわけにもいかない。結弦は気持ちを切り替えて、「はい？」と振り返った。

結弦の肩を突いてきたのは、岸峰ゆん。

「ひょっとして、音無くんてさ。何も聞かされないまま拉致られてきたクチ？」と結弦に言うその表情は、どこか意地悪そうなにんまり顔。長谷浦真紀も同じような顔をしており、宮倉祐子はそれを聞いて少し驚いた表情をすると、「えっ！？　それじゃあ、口にガムテープ巻かれてロープで縛られて麻袋に入れられて来たの？」と真

顔で言ってきた。
　これに対し、結弦は困ったように苦笑いして「まあ、そんなようなもんかな。口にガムテープ巻いてたのは、俺というよりこいつらだけど」と答え、女の子二人はいつものことと慣れた様子で彼女の頭に軽くダブルチョップを落としていた。そして結弦のこの回答に悠太はすぐに異論を唱えた。
「おいおい、嘘言うなよ音無。誰も拉致ってないし、説明もしただろ」
「笑顔で親指立てただけの説明を説明って言う世界がどこにある」
「ちゃんと、俺らに感謝することになるって言っただろうが、昨日。聞いてなかったとは言わせねえぞ」
「それも説明になってないし。つか胸張って言うな」
　とここで、ゆんが大きく笑った。するとつられるように真紀も笑いだし、前を歩いていた三人は何事かと振り返って説明を求めた。そしてことの次第を聞いた和美が斉東を「あんたねえ」と睨み付ける一方、ゆんが小悪魔的な眼差しで結弦にこう質問してきた。
「会ったばっかでこういう聞き方するのもなんなんだけどさ、ひょっとして、いま後悔してる？」
　そう聞かれて「はいそうです」と言えるはずもない。そもそも、音無結弦はこの状況を嬉しくないと思ってしまうような不健全な男の子ではないのだ。ただ、素直に答えてしまうと悠太たちの企みに負けたような気がするとあって、そんなことはないけど、と今一つ歯切れの悪い言葉で答えるのが精一杯。
　そんな彼の心の内を六人は簡単に察していたのだが、唯一人、あらぬ勘違いをしていた人物が直球な質問をしてきた。
「あの、音無さんて、彼女さんいるんですか？」そう言ったのは、もちろん宮倉祐子。どうやら、彼女がいるのに何も知らずに連れてこられて困っていると思ってしまっていた。
「いや、いないけど」
「あれ？　そうなんですか？　でも……」自分の考えが間違ってい

ることに少々動揺した彼女に、岸峰ゆんが「でももヘチマもない」とまたも軽くチョップを入れてこの件は終了し、今日一日結弦がこのメンバーに同行することが確定した。

その後、まずはお昼ご飯ということでわりと有名なお好み焼き屋『俺たちの鉄板』に向かった。このシチュエーションで昼飯がお好み焼きというのはどうかと結弦は思ったのだが、斉東と和美が事前に打ち合わせて予約しており、女の子たちはみんな知っていて期待に喜んでいる様子。ならば問題は何もない。それに、個人個人の性格というかキャラクターを改めて見てみると、これも有りかなと思えていた。

初対面のこの女の子たちが皆、聖華女学院というお嬢様女子校の生徒ということを念頭から完全に外すことが出来れば、より納得できていただろうが。

お嬢様という単語とは正反対に位置しているような佇まいのお好み焼き屋の中、長谷浦真紀がヘラを片手に冗談交じりで言った。
「まさかさ、女子校に変な夢持ってないよね？」
そのすぐ目の前には、ものすごい勢いで食べられていくあつあつのお好み焼きが湯気を立てて横たわっている。なんともシュールな絵図らだなと結弦が思う中、田野中が「夢は現実の過酷さを隠してくれる唯一の場所なんだから、持っていても不思議じゃないと思うな」と答えた。
「いまいち、よく分かんないんだけど……」
「つまり、女子校に通っていた姉を持つ俺としては、夢でも見てなきゃやってられないってこと」
「へえ、お姉さん女子校だったんだ。どこの学校？」
「名もない私立の学校、とだけ言っておきます。ここで実名出すと、確実に俺が悲しい想いするから」
田野中がそう言って力ない笑いをすると、斉東が肩をぽんと叩き、意味ありげにうんうんと頷いていた。その様子に、女の子たちは同情の頷きをしていると思ったのだが、それは大きな間違いだった。
「偏差値五〇そこそこの学校じゃあ、天下の聖華女学院の前じゃさすがに実名は言えないもんなあ」
そして斉東のこの一言に、真っ先に冷ややかなツッコミを入れたのは結弦だった。
「お前、それ実名言ってるも同じだろ。本当に鬼だよな」

すべては、数ヶ月前に斉東と和美が街中でばったり再会したことから始まったことだった。二人は中学時代を懐かしんでその場で盛り上がり、当時の連中を集めて遊ぼうということになった。その計画は翌週の週末に実行され、それからも旧友を交えて何度か遊んだ。

もともと気の合っていた二人はやがて、今度はお互いの高校の友達を集めて遊ぼうという話になった。それが二日前。

斉東が最初に選んだメンバーは田野中。その人選理由は、一番気心を知っていて信用できて安心できるから。田野中は当然、その誘いに迷うことなく頷いた。次に選ばれた、というか自ら手を挙げて加わったのが五十嵐悠太。たまたま二人の会話を耳にして、俺も混ぜろと言ってきたのだが、一年からの付き合いである彼についても信用できるし、何より場の雰囲気作りにちょうど良い人材でもあったので、斉東も田野中も了承。

そして最後が結弦。悠太の強い推薦で選ばれたと結弦は思っていたのだが、斉東としても最初から彼をメンバーに入れるつもりでいて、田野中も第四の男は彼しかいないと思っていたので、三人からの推薦と言えた。

という経緯で、結弦は一切の詳細を聞かされないままこの集まりに参加することになり、今こうして、高校の友人と、その友人の友人である安達和美、そして彼女の友人たちとお好み焼きを食べながらお喋りをしていた。

最初の話題は、それぞれの友人関係について。いつからの付き合いなのか、というそれだけのものだったのだが、岸峰ゆんが宮倉祐子との印象深い出会いを言及したところで、他の者も出会い方や第一印象、仲が良くなったきっかけのようなものなどに話を及ばせた。

むろん、結弦と悠太も。

二人の出会いを口にしたのは悠太だった。

「中学一年の時こいつと同じクラスだったんだけど、第一印象は最悪だったなあ。目つきあんま良くなかったし、周囲に対してわりと喧嘩腰だったから」

「意外～」まじまじと結弦の顔を見ながらゆんが言う。祐子も少しだけ不安げに「音無くんて、恐い人だったの？」とコメント。これには悠太でなく結弦が「あの頃はちょっとあって」とだけ、ばつが悪そうに答えていた。

「で、ある日道場の帰り道で、こいつが喧嘩しているところに通りかかったんだ。正直、それまでほとんど口聞いたことなかったし、無視しようかとも思ったんだけど、なんかそういうわけにもいかないかなって思って。だってこいつ、四人相手に一人でまともに喧嘩してたんだぜ？　馬鹿としか言い様がないでしょ」

「その馬鹿に単身加勢する方がよっぽど馬鹿だろ」

「助けを求めてたヤツがなに言ってる」

「誰も頼んでないし。それに、結局二人してボコボコにされたんじゃ、加勢の意味ないだろ」

話の流れ的に、剣道少年だった悠太の加勢によって二人が勝利を収めたのかと思っていた女の子たちは、「なに？　負けちゃったの？」と少々驚いた。

「いやあ、相手の数が途中から増えてね。って言っても三人ぐらいだけど。でもさすがに数の論理には勝てなかったよ。漫画と違って、現実はやっぱり厳しいね。

で、それがきっかけでこいつと話すようになって。つっても、まともに会話するようになったのはそれから随分あとだけど。んで、今に至るって感じかな」

そこまで言ったところで、和美が「なんかいいねえ。いかにも男の子っぽくて。拳で交わした、男同士の友情ってやつ？」と憧れるような口調で言うと、すかさず斉東が「こいつらが拳を交わし合ったわけじゃないですけど」と半眼で指摘し、宮倉祐子も和美の誤用に苦笑いした。真紀は真紀で、別のことを考えていたようで結弦にこう尋ねていた。

「それじゃあ、それがきっかけで、音無くんは立派に更生したってわけ？」

この質問に対し、結弦は素っ気なく「いや。それとはまったく別」と答える。ならばどんな理由で更生したのだろうと、真紀はさらに聞こうと身を乗り出したのだが、それを制したのは、以前その真実を結弦から聞いていた悠太ではなく、岸峰ゆんだった。

「何でもかんでも聞こうとするの、悪い癖だよ。真紀」
「あ……、ごめんごめん」
「謝る相手はそっち」
真紀はゆんの指先が指し示す方向、結弦へ「ごめんね」と手を合わせて軽く謝罪した。結弦としては、そもそも謝られるようなことでもないと思っていたので、気にする様子もなく別にいいよと受け答えていた。
それから話題は次々と別のものに移っていった。主に、自分たちの通う学校の変な先生や、理解に苦しむおかしな校則など学校にまつわるもので、八人で共有してお喋りをしていた。やがて話題は二つに別れ、三つにも別れ、しばらくして再び一つの話題を八人で話したりと、とても流動的な場の流れが形成されていた。
そしてその中で、どうやらそれぞれ気が合ったり話が合ったりする相手がはっきりとし始めてきたようで、相変わらず流動的ではあったが、話題が別れた際の形は目に見えるようになっていった。
結弦と当事者を除いた者たちにとって何より意外だったことは、剣道少年の悠太と天然系お嬢様の宮倉祐子との相性がとても良く、早々に二人は意識し合うような気配を漂わせていたことだった。二人のそんな姿を意外に感じたのは、水と油のように互いに溶け合うことのない性格だと思っていたから、というわけではない。言うなれば、混ぜるとどんな色になるか皆目見当もつかない水彩絵の具のような関係、といった感覚でいたからだ。
結弦も同じような感覚ではいたのだが、彼らとの決定的な違いは、混ざりあった色はきっと面白い色になるだろうと思っていたことだった。むろん、良い意味で。そしてその結弦と相性が合っていたのは誰かと聞かれると、きっと彼は困っていただろう。どの子とも相性は悪くはなかったが、特別良く感じたわけでもなかったからだ。皆この日初めて会った相手なのだから、それもまた当然の感情の一つとして数えられるだろう。
昼食の時間が終わると、彼らは隣町の複合アミューズメント施設

へとバスを使って場所を移した。そこにはゲームセンターやバッティングセンター、ボーリング場、卓球場などの遊技場の他に、映画館やミニライブ会場もあり、定番のプレイスポット的な存在である。

八人が最初に向かったのはゲームセンター。宮倉祐子と長谷浦真紀にとってはとても物珍しいものらしく、感心するように見て回り、ときおり目の前のゲームの説明を周囲に求めたりしていた。お好み焼き屋での歓談でも薄々感じられていたことだが、二人が生粋のお嬢様だということを、男性陣はここではっきりと理解することが出来た。

そんな二人とは異なり、ごく一般の家庭に比べて少しばかり裕福な環境で生まれ育ってはいたが、お嬢様と呼ぶには無理のある、言うなればごく普通の一般庶民と同じような生活を、中学まで友人たちと日々楽しく過ごしてきた安達和美と岸峰ゆんにとって、ここは物珍しい場所ではなく、馴染みのある場所を練り歩くようなもの。興味を示すのは目新しいゲーム機ぐらい。加えて和美に関して言えば、ここではなく別のゲームセンターだが、ついこのあいだも旧友たちと遊んでいる。

お嬢様学校に通う生徒全員が、お嬢様と呼ばれるに足る環境のもとに生まれ、暮らし、育ってきたわけではないということだ。

男連中については言うまでもなく、物珍しいものではまったくない。

主に祐子と真紀が大いに楽しんだゲームセンターを出ると、この二人の希望でバッティングセンターに移動。どちらも実際に体験したことがなく、以前から一度はやってみたいと思っていた。バットを振ったことすらほとんどないという二人は、まずはバットの握り方のレクチャーから始まり、バットスイングの基本動作を教わり、和美の見事なバッティングを解説付きで見学し、それから打席に立った。

球速はもちろん一番遅い七〇キロ。初めて経験する二人にとってはこの球速でも剛速球に感じ、初めのうちは怖がりながらのスイン

グで、振り遅れてばかりだった。だが、男子四人の中で一番野球経験があるという理由で、最初から二人の指導員に任命されていた結弦のアドバイスで、祐子についてはどうにかボールをバットに当てることが出来るようになって大喜びし、前に打ち返せるようになった真紀は、次こそもっと強い打球を飛ばしてやると嬉しそうに意欲を見せていた。

膝のことがあって棄権した悠太を除く全員がバットを振り、一五〇キロに挑戦させられた結弦があえなく空振りの山を築き、ボテボテのゴロながら意地で何球か打ち返したところで、彼らは別の場所に移動。その後も祐子と真紀の希望を優先して施設内を巡り遊び、やがて時計の針が六時を示し、解散の時間を迎えた。

駅へと向かう間、そしてプラットホームで電車を待つ間も、彼らはこれが楽しかったあれをまた挑戦したい等々、感想や意見などを口々にしていた。その様子を、この日のイベントが良いものだったという証拠として主催者である斉東と和美は満足し、またやろうかという相談もしていた。

二番線に電車が入線すると、結弦と悠太を除く六人がその電車に乗り込んだ。その間際、「それじゃまた月曜な」と斉東と田野中が声を掛け、女の子たちも「ばいばい。また遊ぼうね」という、その表情からは本気だか社交辞令だか判断しかねる言葉を掛けていた。そしてその中でただ一人、もの寂しい表情で別れを惜しんでいる子がいた。その人物、宮倉祐子は、悠太に向けてちらりと自分の携帯を見せていた。彼と並んで見送っていた結弦にもそれは見えており、彼女が何を伝えようとしていたのかすぐに分かった。

なので、電車が行ってしまい悠太と二人だけとなると、結弦はあまり関心のない様な口振りで、隣に立つ悠太に向くことなく真っ直ぐ前を見据えたまま尋ねた。

「五十嵐。お前、あの子と付き合うつもりか？」

悠太はその質問に少し思案してから、こちらも結弦の顔を見ることなく、まるで他人事のように答えた。

「こっちは一庶民の剣道馬鹿。向こうは金持ちのお嬢様。どう考えたって釣り合わない。だから諦めろ。とでも言うつもりか？」
「んなこと言うわけないだろ」
「だよな。お前はいつだって、人の背中を後押ししたがるヤツだからな。つっても、荒れてた頃のお前は別だぞ？　あの頃のお前は、背中を押すんじゃなくて、蹴飛ばして――」
　とここで、それまで正面を向いているはずの結弦の痛い視線を感じた悠太は、「まあ冗談はここまでにして」と、脱線させていた話を本線に戻した。
「世間的に見たって、俺じゃあの子と釣り合わないことぐらい分かってる。住んでる世界があまりにも違いすぎるからな。
　でもな、住んでる世界が違うって理由で諦めたくないんだ。
　そんな糞っ食らえな理由で諦めつくようなシロモンじゃないみたいなんだよな。俺のここにあるのは。うまく言えないけど、なんつうか……、好きとかそういう以前に、『この人だ！』って気持ちが、根っこはっちまってる感じなんだ」
　悠太は、そこでようやく結弦を見る。そして、依然として前を向いている結弦は、そのままやれやれと苦笑気味に両肩を持ち上げて、それに応えた。
「運命の人に出会った感じ、みたいなもんかな。
　ぶっちゃけ、正直言えば不安はある。つうか、不安ばっかだ。うまく付き合える自信だってない。なにせ、相手はお嬢様だ。でも、それでも俺は、あの子と付き合いたい。
　だから俺は、あの子と付き合う。もし断られたり、途中でダメになったら……、そうだな、お前の奢りで死ぬほどやけ食いするか」
「なんで俺が奢らなきゃならないんだよ」
「俺の応援団長になるんだろ？　だったらそのときは、お前も俺の痛みとか悲しみを分かち合うってのが筋だろ」
「なんだよその理屈。冗談じゃない」
　結弦は断固拒否するとでも言うように返すが、すでに悠太を応援

している自分がいることに気付いていたので、悠太のため、そして自分の財布のためにも、何としてもうまくいくようにしてやらなければと思っていた。

それからほどなくして、一番線に結弦たちの乗る電車がやって来た。二人はそれに乗り、地元の駅で降りる。そして悠太はそのまま自宅へ、結弦はブックセンターへと向かった。悠太の言った、『運命の人に出会った感じ』とは実際どのようなものなのだろうと考え、これればかりは直接体験しなければ理解しようがないかと苦笑しつつ。

Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　Ｓｐｅｅｄ　Ｓｔａｒ

お昼休み前の四限、とある共学の高校のグラウンドにて、石灰で引かれたトラックを女子生徒四人が全力疾走をしていた。その手にはバトンが握られており、走る先にいるのは、バトンを待ち受ける次の走者でありアンカーを務める女子生徒四人。そしてその周囲では、すでに走り終えている生徒たちが声援を送っている。

彼女たちは体育の授業の真っ最中。そして彼女たちの行っている種目はチーム対抗リレー。一人あたりの受け持ち距離はトラック半周で、およそ一七〇メートル。アンカーだけ丸々一周のおよそ三四〇メートルと倍になっている。

チーム編成は、授業の最初に計った一七〇メートルのタイムを基準に、各チームのトータルタイムがほぼ横一線になるように担当の女性体育教師が選び分けていた。なのでチーム間の不公平は実質無いに等しい。走る順番はそれぞれのチームで決められ、先行逃げ切りの布陣にするか、順当に遅い順から走らせていくか、などといった戦術はチームそれぞれに任されていたので、ゴール付近までは走者間に差があっても、最後の最後は僅差の勝負になるだろうと予想されるところ。

そしてレース内容は、やはりチーム戦術の違いもあって走者間に差は生まれていたのだが、レース前の計測タイムどおりの差で走ることになるだろうという予想とは程遠い展開になっていた。その原因の全ては、バトンの受け渡しの成否にあった。受け取る側がしっかり加速している状態でバトンタッチできるか、逆に加速していないまま受け取ったり、バトンを受け取り損ねたりするかで、タイムと順位に大きな影響を及ぼしているわけだが、リレーとは本来そういう競技なのだから至極当然のことだろう。

そうした中で、最後のバトンの受け渡しが行われようとしていた。三メートルほど離されて二位の走者が一位の走者を追い、二位から

五メートル後方に三位の走者がその後を追い、そこから絶望的な距離を開けられて四位の走者が走っている。

まず一位の走者が、アンカーへまずまずのバトンタッチ。続いて二位の走者が来る。アンカーと前の走者との息がうまく合わず、ここで手痛いミスを犯す。一位との差が開き、三位との差が一気に縮まった。そしてその差をさらに縮めるバトンタッチをして、三位の走者はアンカーの立華奏に託した。

と同時に、奏と同じチームの滝町理恵による「奏ーっ！　そいつらのケツぶち抜いたれーっ！」という不適切と思われる言葉も混ざった、チームからの奏への声援が上がった。

バトンタッチを終えての奏と二位との差は二メートル。先頭との差は加えて五メートル。アンカー同士の対決と考えれば、二位との差はともかく、一位との差はあまりにも大きすぎるように見えるが、現実問題として誰もそう思っていなかった。むしろ、すでに敗北を覚悟するかのような雰囲気を漂わせていた。

そして案の定、奏はあっという間に二位を抜き去り、猛然と一位に襲いかかると、トラック半周を走ったところで一位の走者に追いつき、これもあっさりと抜いてしまった。圧倒的な早さで先頭に躍り出た奏は、そのまま全力で走り続け、後続との差はみるみる広がっていく。彼女が後ろを振り返ったのは、ゴール手前三〇メートルあたり。そこで後との差を確認した奏は、ようやくスピードを落とした。

そして、人差し指を立てた右腕をぴんと挙げて、大きな声ではなかったが「いちば～ん」と嬉しそうに勝利宣言してのゴール。学年で圧倒的な足の速さを誇る奏らしい、圧巻の逆転勝利だった。

最終的に大差をつけてのこの勝利に、同じチームの面々も、また他のチームの面々も、さすがは奏と少しばかり手荒い祝福を送っていた。そして、そんな奏をグラウンド以外から祝福していた者もちらほらいた。この時間担当するクラスがなく、お茶をすすりながら校庭を眺めていた教師や、教室で授業を受けている最中だというの

に、ぼんやりグラウンドを眺めていた生徒、体育館でバスケットボールをしている最中だというのに、さぼってグラウンドを眺めていた同じクラスの男子など数名。さらに、その数名の傍観者たちは、チーム間のトータルタイムがほぼ同じという事実はさすがに知らなかったので、彼女一人の力で勝ったのだと信じて疑わなかった。

トータルタイムがほぼ同じで、奏がここまで速いとなれば、他のメンバーの速さは想像に容易い。実際、アンカーの奏にバトンが届くまでに彼女のチームが三位以上のポジションにつけていたのは一度だけ。奏の前の走者のときだけだ。それ以外はずっと最下位で、三位と水を空けられることもあった。

となれば、彼女一人の力で勝ったと思っても不思議ではない。むしろそれが自然な見解だろう。そして、その傍観者の一人である女子生徒の前に座っていた女子陸上部キャプテンが、直後に背中をつつかれ、このことを小さな紙片に書かれたメッセージによって知らされると、残念な気持ちでいっぱいになった。というのも、奏が陸上部に所属していないからであり、何度か勧誘してみたものの首を縦に振ってもらえず、その理由にしかたがないと諦めるしかなかったからだ。

しかし、大会に出場すれば今のままでも確実に上位入賞できる力を持っており、練習すればさらに上にいけること確実な逸材を諦めろと言うのも難しい話である。なので、奏への未練はいまだ大きかった。

といった、数人の部外者に衝撃や焦燥を与えた奏たちの四限目が終わり、教室で制服に着替え終えれば昼食の時間。奏は鞄からお弁当を取り出し机の上に置く。そしてお弁当箱の蓋を満面の笑みで開け、その中身に笑みがさらに花開いていた。

すると、そんな奏と向かい合って同じくお弁当を広げていた、良き友人である仙台敦穂が「ほんと、奏って食べるの好きだよねえ」と笑った。

奏はこれに「なんかそれ、違う意味に聞こえる。私のこと、大食

漢だって言ってるみたい」と不満げに抗議。しかし敦穂の表情は笑ったまま。

「まさか大食い選手権に出られるレベルだとは思ってないけどさ。でも、そのちっこい身体のわりにはけっこう食べるじゃん」

「やっぱり大食漢だって言ってる。それに、ちっこいは余計」

とここで、やはり奏と仲の良い苗田紗英が「なになに何の話してんの？」と加わってきた。敦穂が笑いながら同じ発言を繰り返して手短に説明すると、彼女も「なに？　奏ってば、自覚なかったの？」と呆れた顔で奏に言ってきた。奏はまたも不満顔で抗議。しかも今度は「二人とも酷い。私、そんなに食べてないよ」と二人に向かって。そしてこの抗議に辛辣な異議が唱えられたのだが、それを言ったのは、さらに加わってきた段田花子。

「酷いのはナカナでしょ。それだけ食って太らないなんて、女の敵としか言い様がないわ」

腕組みをしてそう言う彼女は、標準的な体重に比べて二十数キロ多く、ここ数年ダイエットに挑戦しているものの、今現在その効果がまったく出ていないどころか、じりじりと増加している模様。その怒りをぶつけるように、といっても演技でそうしているだけで、彼女はこう続けた。

「だからナカナ……、私のこの贅肉を、喰らいやがれえっ！　とりゃあ！」

そう言って、自身の脇腹を掴んだ手を、掛け声とともに奏の脇腹に当てた。それがとてもくすぐったく、耐えられずに「くすぐったいよお！　花ちゃん！」と笑いながら、奏はその攻撃から逃れようと身をよじって抵抗する。

この状況に、奏の心配ではなく二人のお弁当を心配して、敦穂がそれをそのまま「ちょっと花、お弁当ひっくり返っちゃうでしょうが」と制した。確かにそれはまずいと思った花子は、ごめんごめんと言って奏の脇腹から手を離し、解放された奏は、目尻にうっすら涙を浮かべて荒い息づかいをしながら安堵する。そしてそんな奏の

息づかいに、男子の何人かが鼻の下を伸ばして密かに歓声を上げていた。

なお、ナカナとは段田花子が付けた愛称。『タチバナカナデ』から『ナカナ』を抽出したものなのだが、彼女以外この愛称を使う者は誰一人としておらず、まったく普及していなかった。

奏は呼吸が落ち着くと、花子に向けて口を尖らせた。

「もう、花ちゃんってば」

「うははは。いやあ、この贅肉、マジでどうにかしたくってさー」

そして敦穂も花子へと叱るような口調で「まったく花は」と言うと、奏の脇腹を指さして「脂肪をあげるならここじゃなくて」と言い、間髪入れず奏の胸をびしっと指さして「ここにしてあげなさい！」と真剣な眼差しで言い放った。

「……あっちゃん、もう、宿題見せてあげないからね」そう言葉を返す奏は半眼。

「うえっ！？　そ、それはないでしょ。私は奏のことも思って――」

「知らない」敦穂の発言にすっかり立腹したと言わんばかりの奏は、もう何を言ってきても聞く耳などないと、お弁当を食べ始めた。

「あーららー、敦穂ってば、本気で怒らせちゃったー」と紗英が面白がるように言うと、敦穂は真剣な顔で「あんたも他人事じゃないでしょうが。あんた、誰のノートを写してるか忘れたの？」と指摘。

「誰のって、敦穂の……、って私までとばっちり食らってるじゃんっ！　早く土下座して奏に謝んなさいっ！」

そしてこのとばっちりを食らうのは他にも数名いたので、敦穂を糾弾する声が複数上がった。この様子を滝町理恵が「これが世に言う、風が吹けば風呂屋が儲かるってやつか」と評し、男子女子問わず幾人かが「おしい！」「風呂屋じゃなくて桶屋だろ」「それ以前にこの場合それは違うし」といったようなツッコミを入れていた。

動揺を顕わにしている敦穂は、さすがに土下座まではしなかったが、奏の機嫌を直すべく何度も頭を下げた。しかし自身が一番気にしていることを言われた奏はそう簡単に許そうとしない。そこで敦

穂は作戦を変更。
「お詫びにケーキ奢るから！　だから奏さまっ！　このとおりっ！」
だが奏の反応はなし。ならばと「しかもクリスタルガーデンのケーキだっ！」と条件をアップ。クリスタルガーデンとは、種類が多くてそのどれもがとても美味しいと今人気のケーキショップ。すると奏の箸が一瞬止まった。だが反応はそれだけで、彼女を許すまでには至ってない。いつの間にか集まっていた周囲の人集りからは、ため息混じりのどよめきが起こる。
こうなればもう一押しだと、敦穂はさらに「ええいっ！　しかも食べ放題だっ！」と提示し、まさかそこまでの好条件を出すとは思っていなかった周囲の群衆から驚きの声が上がる。そして、奏もこの条件に反応していた。群衆は彼女のその反応に「あ、箸が止まったわよ！」「ついに交渉成立か？」と口々にし、中には「仙台のやつ、破産するつもりか！」という声も混ざっていた。それはケーキ一つ一つがとても高いという理由で言ったことなのだが、聞きようによっては奏が大食漢だからとも取れて、もし彼女の耳に届いていれば奏がこの条件を蹴っていたことはまず間違いない。幸いにして聞こえていなかったのでその事態は避けられていたが。
実際のところ、奏の食欲は旺盛と言うほどのものではない。彼女の体格から想像する適正量に比べると、大きく超えているような印象があり、故にそう思われているだけで、栄養学的見地から見れば適度な内容と量であると言えた。
それはともかく、群衆が注目する中、再び箸を動かし始めた奏が表情を変えずにぽつりと口を開いた。
「紅茶付き。おかわり自由」
ごくり、という唾を飲み込む音が数カ所から聞こえた。果たして仙台敦穂はその条件まで呑むのか。それとも自身の財布を優先させるのか。そんな緊張感がこの一団を覆い尽くす。そして、敦穂は言った。
「よ……、よしっ！　それも呑もうじゃない！」

「それなら、許してあげる」
静かに交渉成立を告げる奏のこの言葉に、地鳴りのような歓声が上がった。続けざまに安堵に頬を弛める者もいれば、ガッツポーズをする者、隣に立つ友人と固い握手を交わす者が続出し、敦穂の肩を叩いて健闘を称える者や、奏におめでとうと言って握手をする者、手を合わせて奏をありがたく拝む者までおり、たくさんの友人に囲まれた奏のお昼ご飯は、この馬鹿騒ぎが収まるまでお預けとなってしまったのだが、奏はこの騒ぎをむしろ楽しんでいる様子だったので、事態の収拾を急がせることはしなかった。
そしてこのとき奏たちの教室の前を通りかかった余所のクラスの生徒たちは、この馬鹿騒ぎはいったい何だろうと不思議に思いながら通り過ぎ、お昼休みが終わるまでに複数のクラスが特派員を送ってきていた。放課後になると新聞部までやってくる始末で、その二日後、新聞部が発行している学校新聞にこの一件が大きく取り扱われていた。
その記事の見出しが、
“Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ Ｓｐｅｅｄ Ｓｔａｒ Ｅａｔ Ａｌｌ Ｃａｋｅｓ ｏｆ ＣＲＩＳＴＡＬ ＧＡＲＤＥＮ（美しきスピードスター、クリスタルガーデンのケーキをすべて食らう）”
というもの。この見出しに、立華奏が「まだ食べてないもん」と新聞部に乗り込んで抗議したという噂が流布された。確かに奏は新聞部に抗議したのだが、彼女の親しい友人でもある新聞部編集長に言った彼女の言葉は、そうではなかった。
「まだ食べてないし、全部なんて食べられるわけないじゃない。そもそも、報道がねつ造するのは悪いことでしょ。どこかの新聞社じゃあるまいし」
その翌日、学校の掲示板には新聞部からの謝罪文があった。その文章を書いたのは、ついつい悪乗りしてそのような記事を作ってしまった編集長だった。

Heaven's Door, Hell's Door

週末の朝、パジャマ姿で二階の自室から降りてきた愛娘の奏に、母親はおはようと朝の挨拶を交わしてすぐ、上機嫌なその様子にくすりと笑いながら「今朝は一段と楽しそうね。素敵な夢でも見てきたのかしら？」と尋ねた。

「夢は見てないけど、これから叶えるの」

「これから叶える？　ああ、そういえば今日、敦穂ちゃんと遊びに出掛けるって言ってたわね」

母親は、何を叶えるというのだろうと不思議に思ったが、娘に全幅の信頼を置いていることもあって、あえて詮索するようなことはせず、優しく「楽しむのはいいけど、ちゃんと時間には帰ってくるのよ」とだけ言った。

「うん。わかってる」奏はそう答え、顔を洗いに洗面所へ向かった。まだ完全に覚醒しきっていなかった意識は、ばしゃばしゃと顔に掛けた水ではっきりとしたものになり、ようやく自分の状態を認識することが出来るようになった奏だったが、タオルで顔を拭き、まず寝癖具合を確認しようと鏡を見たとたん、そこに映っている自身の顔に思わず悲鳴を上げたくなっていた。

自分のことながら、恐ろしいまでににやけていたのだ。その理由を瞬時に理解した奏は、あまりの恥ずかしさに慌ててもう一度ばしゃばしゃと顔を洗った。それはもう、なんとしても今の自分を削ぎ落としてやらなければと言わんばかりの激しさで。

結局それは数回繰り返され、ようやく見られる顔になったと思えたときには、あたりは飛び散った水でびしょびしょになっていた。加えて、洗濯機を使おうと洗面所にやってきた母親に、「何があったの？」と驚かれてもいた。奏の髪が濡れていたのであれば、寝癖と格闘したその痕跡とでも思い驚きもしなかっただろう。

そんな、いつもと違った朝の一幕が終わり、洗面所での朝の身支

度も済ませた奏は、一度自室に戻り洋服に着替え、再び階下に降りると居間へ。そして大好きな祖母の前にきちんと正座して、「おはよう、お婆ちゃん」と、毎朝欠かさずしている朝の挨拶をしてから、朝ご飯の待つダイニングへと向かい、純和風といった朝食を食べた。

それからは母親に頼まれて父を起こしに行ったり、庭に水をまいたり、自室で専門書を読んだりしながら過ごし、時刻が一一時半を少し過ぎた頃、そろそろ行かなくちゃと準備を調えて家を出た。

電車に乗って溝ノ内駅に着き、約束の時間の五分ほど前に待ち合わせ場所の西口改札前に立つ。すぐに敦穂の姿を探したが、まだ来ていないようで見当たらない。奏は壁に寄りかかり、敦穂の到着を待ちながら周囲に目を配ってみた。

彼女と同じように待ち合わせの相手を待っている人たちがいる。サラリーマンや、これから遊びに行こうという若者たち、女の子三人の集団もあった。別に興味を持ったわけではなかったが、自然とその三人の会話が耳に入ってくるので、敦穂が来るまでのちょっとした暇潰しにでもしようと、何の気なしにそのまま聞き流すことにした。

ボーイッシュなショートヘアでラフな格好の女の子が「はいはい分かったから。今度は間違えないでよ。んじゃ待ってるから」と言って、ため息混じりに携帯電話を切ると、仲間の二人に「祐子、ちょっと遅れるって」と告げた。

その二人のうちの一人、少しウェーブのかかった髪の女の子が「何かあったの?」と、あまり心配する様子もなく尋ねると、ラフな女の子がやれやれといった仕草で答える。

「乗る電車、間違えたんだって」

「やってしまったかあの子。これだからお嬢様は」

そう呆れたように感想を述べたのはポニーテールの女の子。すると、その女の子に向けてラフな女の子が「あんただってお嬢様でしょうが。つうか、あんたも過去何度かしでかしてるんですけど?」とチクリ。そう指摘されたポニーテールの女の子は、とぼけた様子

で「そうだっけ？　まあ、電車なんて乗り慣れてないからね」と笑った。

どうやらこの子たちは、お嬢様と呼ばれる属性の人たちのようだ。奏はそう思いつつさらに聞き流していると、不意に肩をぽんと叩かれた。

「お待たせ」

奏が振り返ると、彼女の待ち人である仙台敦穂が元気よく、とは言い難い様子でそこにいた。腕時計を見ると待ち合わせ時間の一分前。

「ううん、私もついさっき来たところ」

「それで、ちゃんと朝ご飯食べてきた？」

「もちろん。でも、少し少なめにしてきた」そう言って、奏は微笑む。すると敦穂の表情がさらに暗さを増し、ああそう、と力なく笑って答えた。敦穂がこのような状態にあるのは、体調が悪いからではない。これから向かう先である、ケーキショップ『クリスタルガーデン』でどれだけ散財するか、分かったものではなかったからだ。

正直なところ、敦穂はずっと後悔していた。あの場でのあの条件提示は、明らかに勢いだけで言ってしまったこと。どれだけの予算が必要になるかを冷静に考えていれば、食べ放題などという条件を提示するはずもない。しかも自らケーキショップを指定し、交渉相手の追加条件まで呑んでいた。

あれだけの面前で言ってしまったのだから、後から取り下げることなど出来るはずもない。しかしながら彼女一人で支払うのは財政上厳しい。やむなく、翌日敦穂は命運を共にしていた者たちに、低姿勢で、表情をややひくつかせながらこう言った。

「あのお……、日頃お世話になっている奏様への貢ぎ物だと思って、ちょっとでいいから、ご協力願えないかしら」

当然、最初は誰もが冗談じゃないと怒った。そもそも敦穂の余計な一言が原因なのであって、自分たちにはいっさい責任はないのだ

からと。しかし、敦穂の財布のことを考えると無碍に断るのも可哀想かと思う者もいたり、多大なる世話を奏にしてもらっていることは事実で、何かしらの恩返しをしなければバチが当たると常々思っていた者もいたりで、どうにか協力を得ることが出来た。その結果、今回の件の責任として敦穂が半分を払うことになり、奏の恩恵を賜っていた他の者たちが残り半分を払うことになった。

これで敦穂の出費は半分に抑えられることとなったのだが、手放しで喜べる額まで下がったかと言えば、そうとは思っていなかった。なにぶん、ケーキ食べ放題に紅茶飲み放題。そしてそのケーキは一つ一つが高くて小さい。彼女自身が食べ放題と言われれば、恐らく五、六個は軽くいってしまうだろうし、最終的なレシートの額を見たら目を剥いて驚くこと間違いない。

しかも、である。そのケーキ食べ放題紅茶飲み放題が実施されるのはこの日のお昼前であり、お昼代わりにケーキを食べるも同然である。これで、満面の笑みで鼻歌を歌っている奏と同じ気持ちでいろと言う方が無理だろう。

「それじゃあっちゃん、行こ」

「へ～い……」

奏とは対照的な表情と足取りで、敦穂はのっそりと歩き出した。

そんな友人の姿に奏が気を回さなかったのは、胸のことを言った彼女に意地悪をするためではない。そもそも奏は意地悪をするような性格ではなく、ただたんに、『クリスタルガーデン』のケーキが食べられる喜びに、すっかり気が回らなくなっていたからである。

これぞスイーツの魔力か。敦穂はそんなことを思いながら、ぼそりと呟いた。

「あんたが白い羽の生えた悪魔に見えるわ」

それはただの独り言だったのだが、奏が「うん？　何か言った？」と、弾む声と満面の笑みで反応。敦穂はその笑みに、本当にこの子は、と思いこう訂正した。

ああ、黒いしっぽを生やした、白い羽の天使だな、と。

お店の前までやってきたときには、敦穂は重たい気持ちを切り替えて、というよりもヤケクソ気分で開き直っていた。店の前には行列ができており、その列は店内のショーケースの前まで蛇行しながら続いていたが、そのほとんどは店内で食べるのではなくお持ち帰りのお客。なので、列の長さの割にはたいして待たずに、自動ドアの向こうの店内へ入り、テーブルに着くことができた。

さすがにこの時間からがっつり食べようというお客はそう多くないらしい。

二人はテーブルに座ると、さっそく注文をした。事前調査をして、どれを食べようか決めていたからこその早々の注文だったのだが、メニューを見てから考えていたのなら、恐らく注文一つ決めるのに相当な時間を要していただろう。メニューに書かれている各ケーキの名前とお店のコメントの横に、いかにも美味しそうなそのケーキの写真がそれぞれ添付されており、目移りすること間違いなかったからである。事実、次はどれにしようかとひどく悩んでいるテーブルはいくつもあった。

そして飲み物とともに運ばれてきたケーキに、奏も敦穂も歓声を上げた。

「写真よりも、ずっと美味しそう。それに、とってもきれい」

「そだね。んじゃとりあえず証拠写真、と。さよなら野口さん。達者でね」

「ねえ、あっちゃん」

「うん？」

「私のと半分こしない？　それも食べてみたいから」

「だったら同じの注文すればいいんじゃない？　なんたって今日は、食べ放題、なん、だし……。ついでに飲みも……ね。ハア……」一気にトーンを落としていく敦穂。

「それはそうだけど、でも限界あるから。だから半分こしあって、いろんなケーキを食べたいなって」

「いやまあ、別に私はそれでも良……、くなかったわ」
「どうして？」
「後々の処理があるから。ってしまった！　レシート別々にしてもらわなきゃいけないんだった！」
　実は、週明けに奏の食べた分を決済するにあたり、証拠としてレシートを提出することになっていた。またレシート以外にも、証拠品として一品ずつ奏と一緒に携帯で写真を撮ることにもなっているのだが、その決済に使われるレシートに敦穂個人の分が含まれていると、少々ややこしいことになる。それを避けるべく、レシートを分けてもらうことになっていた。
　敦穂は慌てて、その店の可愛らしいコスチュームを纏った女性の店員を呼ぶと、今からレシートを出し直してもらっていいかと尋ねた。店員は、承知しましたと笑顔で返答し、すぐに新しいレシートを持ってきた。
　そこでほっと胸を一撫ですると、待っていたかのように奏が「だめかな」と言ってきた。
「え？　何が？」
「半分こ」
「ああそっか。いやあ、経理上の問題がね……」
　半ぶんずつになると、計算が面倒なことになるだろうと考えての敦穂の回答だったのだが、学年トップクラスの成績をもつ奏に「それは私がちゃんと計算するから」と言ってもらい、その心配はなくなった。
「それなら……、まあ、いいか。私も色々食べてみたいし。って、あんま頼めないけど……。いや！　ここまで来たら食ってやる！　おお食ってやるともさこんちくしょう！」
　これで敦穂の了解を得た奏は、「良かった」と嬉しそうに言うと、「じゃあ半分こ」とさっそくフォークで半分にしようとした。すると、それを見た敦穂が慌てて「ストップ！」と奏を制止。
「わざわざ分けなくて良いから。適当なところまで食べて、そのま

まくれればいいよ」
「でも、食べかけじゃ――」
「それじゃ私が切るよ。奏がやると、確実にぐちゃぐちゃになっちゃうからね。そりゃもう見るも無惨というか悲惨というか」
「あっちゃん……」
「――はっ!?　しまった!」
その一言で、奏の注文が一品増えたことは言うまでもないだろう。
そしてそんな奏に、やっぱり羽は白じゃなくて黒だ、と敦穂は考え直していた。

Myrmecophaga tridactyla

最終的に奏が食べたケーキの数は四個半、飲んだ紅茶は一杯。彼女が情け容赦なく食べ尽くすとはさすがに敦穂も思っていなかったが、最低でもケーキをもう二、三個、紅茶ももう一、二杯ぐらいはいくと見積もっていたこともあり、美味しかったと満足そうにしている奏にほっと胸をなで下ろす反面、本当にこれだけで良かったのだろうかとも思っていた。

そして実際のところ、奏にはまだまだ余力があった。それでもここで終わりにしたのは、予定されていた上限に達していたから。

そもそも奏は、ケーキ一つと紅茶一杯おごってもらえれば十分で、それ以上の飲食代は自分で払うつもりだった。しかし交渉成立の翌々日、そのことをちらりと友人に話したところ、ここは容赦なく飲み食いするべきだという意見を返され、しかもその友人と意見を同じくする者たちが続出。

これに奏は、敦穂とのやり取りはあくまで冗談で言ったことだからと答えたのだが、奏はそれだけのことをしてもらうだけのことを今までしてきたのだから当然の権利で、これは彼女らにとって当然の捧げ物なのだから遠慮する必要はない、それどころか彼女らに奏のありがたみを身をもって教える意味で遠慮してはいけない、などと誰もが説いた。

そう力説し続けた甲斐があり、奏は「わかった」と同意。ただしそれは『理解した』という意味で、そのとおり実行するという意味ではなかった。皆、奏は優しすぎると言って譲ろうとしなかったのだが、奏の真剣な一言で、ああなるほどとやむなく矛を下ろした。

「たくさん食べたら、本当に大食漢みたいに思われて、とっても恥ずかしいもの。私がどれだけ食べたかって、きっとみんなの耳に入るだろうし」

この日刊行された新聞部による学校新聞を考えれば、奏の言うこ

とはもっともであると納得せざるを得ない。間違いなく、彼女の食べた数は公表されたも同然の状態になり、学校中の話題になっていることだろう。そこで大量のケーキを食べたのなら、恥ずかしい思いをするのは必至。

そこで議題は、何個までならセーフか、というものに取って代えられた。これは奏そっちのけで喧々諤々と議論が交わされ、折衷案としてようやく出された数字が四・五。小数点以下の数字が含まれているあたりが、意見をとりまとめた苦労の証と言えよう。

とこのような経緯の中で、奏自身三個程度と密かに考えていた。そして実際にケーキを口にしたところ、あまりにも美味しく、朝からテンションが上がったままということもあり、敦穂の余計な一言に便乗して一つ追加。結果、周囲が決めた四・五をぎりぎり守った数字となっていた。

こうして取引が無事終了すると、二人は早々にお店を出た。自分たちが並んでいたときよりも確実に行列が長くなっており、時間を考えれば、店内で食べるお客の割合も増えているはずで、それが無言のプレッシャーになっていたからだ。

店を出た二人は、当初の予定どおり隣町の映画館へ向かった。その映画館は複合アミューズメント施設の中にあり、上映時間になるまでの間をゲームセンターで潰すことも出来たのだが、あまりゲームというものをしない奏は、ミニライヴ会場を覗いてみようと提案。敦穂も、場合によってはタイミング悪くゲーム途中で席を立たなければならない事態も考えられ、奏の提案に賛成した。そしてその会場で演奏されていたジャズをしばし聴き、やがて時間となって映画館に入っていった。

二人が観る映画は、アクションシーン満載のＳＦ映画。

遠い未来、突如大艦隊でやってきた宇宙人が地球を侵略。地球人は必死の抵抗を見せるが、瞬く間に生存圏を失っていく。そんな中、一人の地球人科学者が立ち上がり、肉体そのものを武装化させた戦士を作り出す。そして戦士たちは、苦難の末に敵の旗艦に乗り込み

システムを破壊。すると、旗艦のシステムダウンにともなって他の宇宙船が次々と制御不能に陥り、艦内で爆発が起きたり、味方の艦に衝突したりと大混乱。やがて大規模な誘爆が発生し、旗艦もそれに巻き込まれ、ついには全ての艦が爆発し霧散してしまう。一切の補給を受けられずに地上で孤立化した宇宙人たちは、次々と倒れ、やがて地球は平和を勝ち取ったのだった――。

　という、ご都合主義でどこにでもありがちな内容の映画。これにはかなり厳しい批評も少なくなかったのだが、見所はストーリーではなく迫力ある音と映像で、そちらの評判はすこぶる良い。観賞後の敦穂も、ストーリーはともかくとして、音と映像については凄かったと評価していた。そして奏はというと、音と映像も評価していたがストーリーも評価していた。

「みんなの為に自分自身を兵器にして戦っていくって、なんか格好いいじゃない」

「いやまあ、それは否定しないけどさ。けどねえ、やっぱありきたりな展開だったし、たった一隻のシステムやられただけであああも簡単に全滅しちゃうって。テクノロジーって単語が泣くってもんよ。それにどんだけ危機管理能力ないのよ、あの宇宙人ども」敦穂のこの批評は、方々で言われていることでもある。

「今まであれでまったく問題がなくて、危険性を感じることもなかったからじゃない？　何の心配もする必要がなければ、そもそも危機意識なんて持たないもの。危機意識がなければ対策を講じようなんて考えないし」

「確かに、そう言われてみれば……」

「そんなことよりも、やっぱりレイバンよ。プラズマライフルとアームソードで敵をやっつけていって。特に敵の旗艦に乗り込んで、メインシステムを目の前にした戦いのときなんて」と、奏はややうっとりするような表情で語る。なお、レイバンというのはこの映画の主人公。そんな奏とは対照的に、敦穂はややげっそりしたような表情で言った。

「あれか……。迫力はあったけどさ、なんつーか、けっこう――、いやだいぶグロかったよね……」
「そうかなあ」
「ああ、奏はああいうの、ぜんぜん平気だったんだっけ」
「だって作りものだし、あれぐらいでダメだったら、私、夢を諦めなきゃいけなくなっちゃうもの」
「いやいや、あれがダメでも同じ夢叶えてる人いるでしょ。確実に」
そんな、少々脱線しつつも映画観賞後の談義をしながら、アミューズメント施設内にある軽食コーナーに向かった。さすがにお昼ご飯をケーキ数個で済ませるられるほど胃は小さくない。ただ、ケーキを食べた直後にお昼ご飯を食べる気にもなれなかったので、映画鑑賞を挟んでの昼食にしていた。
二人はそこで軽めの食事をとることにして、敦穂はピラフ、奏は小さないなり寿司が二つ付いた冷やしうどん定食を注文した。そしてそれをついばみながら映画談義を続けていたのだが、途中から話題は別の方向へと移っていった。そのきっかけが、とある恋愛映画での告白シーン。
そこで敦穂が、思い出したように奏に言った。それは、奏が中学時代から度々男子から告白されており、それは高校に入ってからも同じという事実を知っての、敦穂の何の気なしの質問だった。
「告白って言えばさあ、奏、最近誰かに告白された？」
「うん」
「おおっ。新情報ゲット。んで、誰に告白されたの？」奏のうなずきに、敦穂が目をランランと輝かせてすぐさま問い質す。もしこのように聞いてきたのが敦穂のような、絶対に黙っていてくれると信頼し、実際にその信頼に応えてきた相手でなければ、喋りはしなかっただろう。しかし相手は敦穂。告白されたことや相手の名前を自ら誰かに明かすことは決してないが、聞かれた相手によっては奏も素直に答えていた。
「三年の、高木って人」

「三年の高木……、って、ひょっとして高木大成？」
「うん」
「……な、なんとっ！　ついに高木先輩まで籠絡したか！　それで、もちろんＯＫしたんでしょ？　いくら奏でも、高木先輩相手じゃ断るわけ――」
「断った」
「な、なんでっ！　しかもそんな、事も無げに！　高木先輩ほどの人でも駄目だっていうのかこの娘はっ！」
「だって、別に好きでもなかったから」あっさりとそう答える奏の表情を見れば、どれだけその先輩に興味がなかったかよくわかる。
「ぐは……。校内女子人気ベストスリーに入るお方に対するセリフじゃないよね。ルックス抜群スタイル抜群。ついでにスポーツ抜群。頭はそこそこだけど性格は良好。これ以上は贅沢ってもんでしょうが」
「でも、別に好きじゃないから」
「二度言わんでいい……。はあ、これでまた、奏の前で散っていった人が一人増えたってわけね。たく、高望みもほどほどにしておきなさいよ？」
「私、高望みなんてしてないよ。そもそも、ああじゃなきゃヤだ、こうじゃなきゃヤだ、なんて一言も言ってないもの。ただ、この人とならいいなって思える人と巡り会ってないだけで」
「はあ……。高校生にもなってまだそんなことを。あのねえ、私は運命の人との出会いを待ち続けるんだあー、なあんて痛い夢を見続けてっと、一生彼氏出来ないよ？　それに、最初たいして好きじゃなくても、付き合っているうちに本気で好きになったりすることだってあるし」
「それは分かるけど、でも、まだ高校生なんだし、焦る必要なんてないでしょ？」
「光陰矢の如し。歳月人を待たず。んなこと言ってると、あっという間にオバさんになって、売れ残りの負け組に仲間入りしちゃうわ

よ」

「そうなったらそうなったよ」奏は鼻を鳴らすようにそう言って、うどんの最後の一口をずずっとすすった。敦穂もまた、「まったく。だったら奏のモテ成分を私に分けてくれい」と言ってジュースをずずっとすすった。

その後、二人は一度建物から出てウィンドウショッピングを楽しんだ。主に女性向けのファッションストアやファンシーな雑貨屋を巡り、これなんか可愛い、これは大人っぽくていい、と身体に当てたり試着したりしては品評しあい、雑貨屋に並ぶ小物を手にとっては、可愛いという言葉を連発させていた。そしてとある雑貨屋で、奏は一つのペンダントに釘付けになった。そのうっとりした眼差しは、まさに運命の出会いを果たしたとでも言いたげ。奏は買おうかどうしようか迷うことなく、そのペンダントを手に取ると、白とライムグリーンの太いラインが傾いて交互に並ぶ膝下丈のスカートをふわりとはためかせながら、スタスタとレジへ向かった。

その様子に、少々呆気にとられてしまった敦穂は、肩に掛けているポシェットから財布を取り出して、レジで会計をし始めた奏の背中を見ながら、ぼそりと半眼で呟いていた。

「たまにあんたの美的センスを疑いたくなるわ」

奏が一目惚れして買ったペンダントには、後ろ足を前に出してぺたんと座り、前足と長い鼻をだらりと垂らし、つぶらな瞳をした、立体的に作られた淡い青色のオオアリクイがぶら下がっていた。

Intersection Part I

雑貨屋を出ると、奏はさっそくオオアリクイのペンダントを首から提げて、白いノースリーブのブラウスの上で呑気に鎮座しているオオアリクイも含め「どうかな？」と笑顔で敦穂に尋ねた。いかにも良い返事を期待しているその表情に、敦穂は心の中で「なにこの拷問」とどんより呟きつつ、苦笑いしながら正直に答えた。

「微妙……」

この感想に、奏はやはり不満顔で「そんなことない。こんなに可愛いんだから」と言うと、胸元のオオアリクイを自分の顔の前までつまみ上げ、まっすぐ見つめる。そして敦穂に向けて、というより彼女自身に向けて、表情を和らげて言った。

「ほら。すごく可愛い」

「まあ、奏が可愛いと思うならそれでいいんじゃない？　美的センスは人それぞれだし、人に押しつけるものじゃないでしょ？」

「それはそうだけど……、でも、やっぱりみんなにも『可愛い』って思ってもらいたいな。この子のこと」

奏はそう言って、かざしたままオオアリクイを小さく揺らした。すると、ぷらんぷらんと揺れ動くその姿に「可愛い」と、さらに頬と目尻を弛めていた。そんな奏の横顔に敦穂はほくそ笑みつつ、「はいはい。それでさ、奏。次なんだけど、バッティングセンターに行かない？」と話題を変えた。

突然の提案に、どうして急にと一瞬思った奏だったが、拒否する理由はなにもない。

「バッティングセンター？　いいよ。別に」

「それじゃ決定ってことで」

奏の快諾を得たことで、敦穂は意気揚々と雑貨屋の軒先から歩き出し、アミューズメント施設内にあるバッティングセンターへと向かった。彼女が何故そのようなリクエストをしたのかというと、今

し方の雑貨屋で野球を題材にしたコミカルなオブジェを見つけたとたん、大の野球好きであり、今でもたまに父親や兄、弟たちとキャッチボールをしたりバッティングをしたりしている彼女の血がたぎり、無性に行きたくなった、という次第だった。

そしてその道すがら、敦穂はそのたぎる血を一歩ごとに充填しながら歩いていた。血湧き肉躍る、とまではいかないまでも、それに近い雰囲気を纏って。その隣を歩く奏はというと、胸元のオオアリクイをさわりながら、上機嫌で鼻歌を歌いながら歩いていた。

しばらく敦穂は、奏の口ずさむそのメロディーに気付かずにいた。しかし不意にその鼻歌に気が付くと、しみじみといった様子でにこにこ顔の奏に言った。

「奏ってさ、機嫌がすごく良いときって、決まってそれ歌うよね」

「え？」

「今歌ってたでしょ？」

「あ、うん。別に意識はしてないんだけど、口ずさんじゃうみたい。癖みたいなものね」

「それで？　曲名かアーティスト名か思い出せた？」

以前に何度も、敦穂はまったく同じ質問を奏にしていた。しかしいずれも分からないと答え、いつどこで聞いたのかも憶えていないと言っていた。そして今回の回答も、残念ながら今までと同じもの。

「ううん。全然」

「そっかあ。ん～、早く思い出してくれると助かるんだけどねえ～」

「どうしてあっちゃんが助かるの？」

「そりゃもちろん、四六時中ってわけじゃないけど、やっぱり気になるじゃない？　なんかこう、喉の奥に魚の小骨が刺さったみたいでさ。奏は気にならないの？」

「あんまり。それに、私が作った曲かもしれないでしょ？」奏がえっへんと笑顔で敦穂に言うと、敦穂も笑顔と平坦な口調で即答した。

「いやそれは絶対ないから安心しなさいうん大丈夫大丈夫」

手厳しいこの即答に、奏は表情を曇らせると「あっちゃんひどい。

もう宿題の面倒みてあげない」と言ってぷいと前を向いてしまった。
敦穂は「うげっ！？　それは勘弁してください！　ケーキ――、じゃなくてドーナツ奢ってあげるから、しかも好きなだけ！」と申し訳なさそうに謝ったのだが、そこまで言ったところで、態度をがらりと変えてきた。
「って、私を破産させるつもりかあ！」と語気を強め、自分より頭半分低い奏の首に腕をぐるりと巻き付ける。むろん、冗談で。奏もこれに応えるように、巻き付けられた腕の中で「それもいいかも」と笑っていた。
なお、大なり小なり奏の鼻歌の原曲が気になっている者は、敦穂以外にも数人いた。そして奏オリジナルという説に対しては、みな懐疑的だったり否定的だったりで、肯定的意見を持つ者は一人もいなかった。このことについて奏は「私にだって、良いメロディーが浮かぶときだってあるんだから」と少々不満に思っていたのだが、正直、自分で考え出したメロディーだと本気で思うことは一度もなく、彼女自身も、いつか分からない何処かで無意識のうちに耳にして、それが自然と頭に残っているのだろうと考えていた。
再びアミューズメント施設にやってきた二人は、エレベーターに乗り最上階へ。目的地のバッティングセンターにやってくると、受付でそれぞれ名前を書き記した。ここで靴やグローブを借りることも出来たのだが、二人ともその必要はなく、そもそもあまり清潔感を感じさせないそれらをわざわざ借りようとも思わず、そのまま出陣。
「さあて、どっからいこうかな」闘志を燃やす瞳で敦穂は球速を選ぶ。このバッティングセンターに用意されている球速は、七〇キロ、九〇キロ、一〇〇キロ、一一〇キロ、一二〇キロ、そして一足飛びに一五〇キロと六種類。その中からまずはウォーミングアップと彼女が選んだのは一〇〇キロ。
敦穂はバッターボックスで軽く素振りをしてから、ネットと強化ガラスの向こうで見守っている奏に、コインを投入してくれと頼ん

だ。奏はその投入口に、渡されていた三〇〇円を入れる。それから少し間を置いて、一球目が投じられた。

ゆったりとした構えから、力むことなくスムーズに振られた金属バットは、見事にボールを弾き返した。その後も、空振りしたりファウルチップすることなく、確実に前へ弾き返し続けた。一回分の三〇球が終わると、ウォーミングアップ終了と外に出て、一二〇キロのバッターボックスに移動。そこでもまず素振りし、奏に頼んで三〇〇円を入れてもらった。

それまでの練習モードから本番モードへとスイッチを入れ替えた敦穂は、先ほどとは比べものにならないほど力強い構えとスイングで、またもボールを弾き返していった。一〇〇キロのときと違って、ファイルチップやボテボテのゴロを打つこともあったが、鋭い打球を打つこともあり、隣のバッターボックスに立っていた体格の良い三〇ぐらいの男性を驚かせるに足りる内容だった。

そして三〇球を打ち終えると、ちょっと小休止と敦穂は缶ジュースを買って喉を潤し、次は奏の番となった。

「で、奏はいつもの？　それともステップアップしてみる？」

「う〜ん、それじゃあ挑戦してみようかな」

奏はそう言うと、いつもより一〇キロ速い一〇〇キロのバッターボックスに入った。敦穂にお金を入れてもらい、投じられるボールを待つ。敦穂の真似をしてそれより遅いボールでウォーミングアップ、といきたいところでもあったが、計六〇球分バットを振ろうとは思わなかったので断念。

その代わりというわけではなく、いつもそうしていることだが、奏は敦穂のアドバイスを忠実に守り、最初からフルスイングするのではなく、バットを少しだけ引いてスイングし、ボールをミートすることを心掛けた。そうして五球を費やすと、今度はもう少し後に引いて、やはりミートを心掛けて次の五球を振る。それからまた五球、さらに大きく後ろに引きフォロースルーも大きくしてスイング。

敦穂曰く、まず目と身体のタイミングを調節しなければ打てるも

のも打てない、とのことで、その調節に半分の一五球を使ったわけだ。こうして調節が済む、というよりも終わらせると、いよいよ本番。奏はしっかりと構え、来たボールに向かって力強くバットを振る。小柄な奏がバットを振る姿は、どちらかというとバットに振られている奏、という印象を与えやすいが、身体を軸にしっかりとバットが振れていた。これはすべて、敦穂の指導によるもの。ということもあり、三〇球すべてを打ち終えバッターボックスから出た奏を、敦穂は「うんうん。良い感じだったね」と満足そうに迎えた。

当の奏も、内容に満足したようで「もうちょっとがんばれば、ちゃんとした打球が打てるかも」と微笑んでいた。

奏が打ち終わると、再び敦穂の出番。

「悪い奏、これ持ってて。ああ、なんだったら飲んじゃっていいよ」そう言って飲みかけの缶ジュースと一〇〇円玉三枚を奏に渡し、一二〇キロのバッターボックスに立つ。そして数回素振りをして、奏に合図を送り三〇〇円が投入されると、おっしゃあという掛け声とともに構え、ボールが投じられた。その初球を、敦穂は見事鋭い打球で打ち返し、奏は拍手。続くボールはやや打ち損じ。そして三球目――。

とそのとき、がやがやと喋っている男女の集団の声が受付の方から聞こえてきた。きっとすぐに賑やかになるんだろうな、と他人事のようにぼんやり思いつつ、目の前の敦穂のバッティングを見つめる。しかしその集団が受付を済ませて入ってくると、重なり合う声はそれなりの音量となってどっと押し寄せてきて、まったく無視することも出来なくなっていた。

といっても、迷惑に感じるような合唱ではなかったので、特に気にはしなかったのだが、無秩序に重なり合っていたそれぞれの声が、多少聞き分けられるぐらいにその集団が落ち着きを持つと、「あれ……」と思った。

その中に、聞き覚えのあるような声を見つけたからだった。

奏は、ちらりとその集団に目を向ける。

するとそこには、見覚えのある人物の姿があり、どこで見かけたかすぐに思い出した。

「さて、誰がトップバッターになる？」

「決まっているだろ斉東くん。やっぱここは、一番の野球経験者がまずお手本を見せるべきだ。ということで、お前がトップバッターだ。音無」

「いや、俺は二人にグリップから教えなきゃならないから後だろ。斉東か田野中でいいんじゃないか？」

「ふむ。それもそうだな。じゃあ二人で決めてくれ。ああ、俺はパスな。まだ膝が万全じゃないから」

などと相談しているその側にいる女の子たちに、奏は横目で注目した。

数時間前に四人いる女の子のうちの三人を駅の西口で見かけ、敦穂が来るまでの数分間三人のやり取りを聞き流していたことを思い出したからだった。あのときの会話から、唯一見かけなかったロングヘアーの女の子が“電車を乗り間違えて遅刻した祐子”であると推測し、会話の中で彼女がそう呼ばれたことで確かなものになった。そして奏は、なるほど見るからにお嬢様といった雰囲気を持っている、とその第一印象から感じ取っていた。

そんな女の子四人の様子をちらりと見終えると、視線を敦穂へと戻す。特別強い興味を抱いて見たわけではないのだから、いつまでも注目し続けることはない。しかし、奏は再び視線をその集団に向けることとなった。

それまで彼女たちの会話を聞き流していられたのだが、一人の男子が初心者の女子二人に、つまり音無結弦が宮倉祐子と長谷浦真紀にバットの握り方を教え始めたところで、再び興味を抱いたのだ。ただしそれは、奏も敦穂に一から教えてもらっていることもあって、その男子がどのように教えるのか少し気になったからで、その時点ではそれ以外の興味はなかった。

「まず握り方はこう。いやそうじゃなくて、もっとこう。じゃなくて、ええと、ちょっとごめん。こんな感じ」

戸惑い気味の表情で彼女たちの手を取ったり肩を押さえたりしながら真剣に教える結弦の姿に、女の子同士なので戸惑うことはなか

ったがやはり同じように手取り足取りといった感じで奏にレクチャーしていた敦穂の姿と声が重なり、奏はくすりと笑ってしまった。

私も、あっちゃんにあんな感じで教えてもらったな。しかも、そのうち自分一人じゃ難しいからって、体育の時間に周りにいた友達を呼び集めて、みんなで私の足を押さえたり、腰を押さえたり、肩を押さえたり、しまいには頭まで押さえて。なんとなくコツ掴んでからはそこまでされなくなったけど、たぶん、相当苦労させちゃったんだろうな。

などと思いながら、悪戦苦闘している祐子と真紀、そしてそれ以上に悪戦苦闘している結弦の姿をそれとなく眺めていると、バッターボックスのドアが開けられる音が間近でして、いつの間にか敦穂が三〇球打ち終わっていたことを知った。

「ようし、けっこう仕上がってきたぞお。って、どうかしたの？奏」

「え？　あ、ううん。何でもない」

奏がそう答えると、敦穂は彼女が向けていたと思わしき視線の先を見る。その途端、敦穂は顔をあからさまに歪め、囁くように呻いた。

「うげっ……。なんか迷惑そうな集団が来ちゃったよ。ひょっとして、あいつらうるさくしてたの？」

「そんなことないよ」

それは偽りのない本心だったので、その表情から敦穂は「ならいいんだけど」とあっさり刺々しい態度を解いた。ただし、棘が抜け落ちていったようにバッティングへの闘志もぽたぽたと萎えてしまい、もう三〇球だけ打とうと思い奏に渡そうとしていた三〇〇円を引っ込めてしまっていた。

集団がやって来ては騒ぎ立てられ、バッティングに集中できなくなって苛々し、十分に打つことなく腹を立てたままその場を去った、という経験をいくつもしていたので、ある意味、集団の来襲は敦穂にとってトラウマになっていると言っても過言ではなかった。

ゆえに、結弦たちを見た瞬間またかとついつい思い、途端に闘志が消えてしまったのだ。実際のところ、結弦たちは他のお客に迷惑を掛けるほど騒ぎ立ててはいなかったのだが。

「さって、場所変えようか」

「もういいの？」

「なんかやる気なくなっちゃった。それに、九〇球も打てば十分でしょ」

「あっちゃんがそう言うなら」奏はそう言って、持っていたジュースを敦穂に返す。敦穂は残りを一気に飲み干し、空き缶をごみ箱に捨てると二人して手を洗いに洗面所へ移動。石けんでこれでもかと泡立ててしっかり洗い、手のひらのべたつきと臭いが完全に取れたことが確認できると受付へ向かった。その際、途中で結弦たちの側を通り過ぎたのだが、奏の目は、依然としてスイングの基本を教えている結弦と、教えられている祐子と真紀の三人の方へと向けられていた。

そのことに気付いていた敦穂だったが、恐らく昔の自分を思い出して目が向いていたのだろうと思っていたこともあり、あえてその場で話題にしようとは思わず、バッティングセンターを出てしばらく経ってからふと思い出して、話のネタにどこかで使ってやろうかなと冗談半分に思うぐらいだった。

そしてその冗談半分が実際に使用されたのは、そろそろ解散の時間となった頃だった。駅へ向かって歩いていた二人は信号で足を止め、話題もそこで一区切りした。さて次の話題はと敦穂は思ったのだが、ちょうどそこで、二人の背後で同じく信号待ちをしている若い女性の話し声が一際よく聞こえてきた。

その会話を要約すると、このようなものだった――。

聞こえる声とやり取りから二人組のようで、その二人はつい先ほどまでハンバーガーショップにいた。そして彼女たちが座っていたテーブルの隣に一人で座っていた女の子が、そこから少し離れたテーブルに座っていた男二人女三人のグループをしばらくじっと見つ

めていた。それからも何度もちらちらとそちらの方を見やっていた。
お店を出た二人組の女の子は、なぜその女の子が別グループに視線を送っていたのかを考えた。男二人のどっちかが片思いの相手じゃないの？　すでにどっちかが彼氏で、その彼氏が二股してるところに出くわしちゃったとか？　それでどうしていいか分からなくて見ることしか出来なかったんじゃない？　それじゃヘタレ女じゃない、私なら速攻蹴り入れに行くわね、そしてボコボコにしてやるわよ。ひょっとしたらただの一目惚れかもよ？　けっこういい感じの男だったからそれもありね。
といった感じで。そしてその二人組のお喋りの主題は、その女の子から早々に自分たちの彼氏へと移行していった。
特別耳をそばだてるような話でもないので、奏は右から左に聞き流していたのだが、敦穂は少々違っていた。会話の内容そのものにはほとんど興味なく、早々に意識から遠ざけていたのだが、代わりに、バッティングセンターでの奏のことを話すいいタイミングだと思っていたのだ。
しかし、この場ですぐにその話を切り出すわけにもいかない。もし彼女たちの目の前で奏に話を振れば、彼女たちの話を盗み聞きしていたと思われても仕方がないからだ。このまま後ろの二人も駅に向かっているのなら、タイミングを完全に逸するだろう。
といっても、敦穂自身どうしても話したいとまでは思っていなかったので、タイミングがなくなれば別の話題にすればいいだけだと思っていた。
すると、信号が青になり横断歩道を渡りきったところで、その二人組の声はみるみる遠ざかっていった。敦穂はちらりと振り返り一応確認。これで、話をしたところで何の問題もなくなった。加えてタイミングもまだ失われていない。これは私に話を振れとのお告げかな、などと冗談に思いつつ、さっそく「そういえば奏さ」と切り出した。
「なに？」

「バッティングセンター出るとき、男の子のこと食い入るように見てたね。ひょっとして、片思いの相手だったとか？　それとも隠してた彼氏だったりして？」にやりと笑みを浮かべ、いかにも冗談といった口調の敦穂。そんな敦穂に、奏はつい先ほど二人の後ろから聞こえていた会話をちらりと思い出し、「あっちゃんまで」とやや呆れたような顔で答える。

「だって、見かけた男の子のことを奏があんなに見てるだなんて、今までなかったじゃない？　ひょっとして、一目惚れした？」

「もう。私もあっちゃんに教えてもらってる立場だから、どんな風に教えてもらってるのかなって思って見てただけ。あの人だけを見ていたわけじゃないから」

「それは分かってるんだけどさ」

「分かってるなら、そんなこと言わなくていいでしょ」

「いやでも、ここで奏が『実は一目惚れしちゃったの』とか言ってくれたら、すっごく面白いじゃない？」

「面白いのはあっちゃんだけ。それと、私のモノマネはやめてよね」

「そんなことないわよ。学校中で盛り上がるわよ？　きっと失恋に涙を流す男子たちの姿もあちこちで出没するだろうし」

「あっちゃん悪趣味」

「面白ければ正義になるのよ」敦穂はそう言うと、奏の痛い視線を感じ取り「まあ冗談はこのくらいにして」と自ら方向修正をした。

「実際のところどうだった？　私よりも教えるの上手かった？　その人」

「あっちゃんとだいたい同じ感じで教えていたかな。でも、女の子相手でちょっと困った顔もしてて、可愛かった」

「可愛い、ねえ……。格好良かったとかはないの？」

「う〜ん……、ちょっとだけ格好良かった、かな」

「ちょっと、か」敦穂な少々残念そうにそう繰り返していた。

それからしばらく、奏は結弦が教えていたことを思い出しながら敦穂に話した。主に敦穂がバットを振っていたときに横目で見てい

たものなのだが、その思い出されるものに、奏は心の中で小首を傾げていた。

耳に残ってる音声は確かに三人分。しかし瞳に残っている映像の多くが、結弦一人のものなのだ。しかも帰り際のときのものに至っては、圧倒的に結弦の映像ばかり。

おかしいな。別にそんなつもりまったくなかったのに。

奏はそんなことを心の片隅で思いつつ、ささやかな身振りでこういう風に教えていたと説明。もともとそう長い時間見ていたわけでもなく聞いていたわけでもないので、その説明は早々に終わり、すぐに次の話題に移行していったのだが、結弦の顔は奏の頭の中でしばらく居座っていた。

駅に着いた二人は同じ電車に乗り、下車するにはまだ早いというのに奏は電車を降りた。ついでだから、その駅の側にあるブックセンターに寄っていこうと思ったからだった。近頃では珍しい大きなそのブックセンターは、様々な専門書をわりと多く取り扱っているので、奏はたまに利用していた。

敦穂も付き合うと言ったのだが、けっこう時間かかるかもしれないからと遠慮して、そこで敦穂とお別れ。一人、改札を抜けていった。それから歩くこと数分、目的のブックセンターへとやってきた。

店内に入ると、雑誌や趣味関連の本を扱う一階には目もくれず、小説を扱う二階までエスカレーターで上がり少々物色。数冊手に取りパラパラとめくっては書棚に戻していった。結局一冊も買わずにそのフロアを後にすると、コミックを扱う三階、学生向けの参考書や問題集などを扱う四階を通りこし、わりと難しい専門書を扱う五階へと行く。そこで目的のコーナーへと歩いていった。

彼女の向かった先には、医学関連の書籍がずらりと並んでいる。それらから適当に引き抜いてはパラパラとめくり、また適当に引き抜いて、とまたも物色。そうして数冊見てから一冊を選び出し、会計へと持っていく。レジに表示される本の値段に、こうした本についてはお金を惜しまず出してくれる両親に感謝しつつ支払い、お釣

りとレシート、そして本を受け取ると、エスカレーターで階下へ降りた。

本を買ったことで気分がすこぶる良くなっていた奏は、鏡面状になっている一部の壁に映る自分の姿の中に見つけた、胸元で依然鎮座しているオオアリクイにさらに気分が上昇し、『可愛い』というキーワードつながりで、少々困った顔で教えていた結弦を思い出してくすりと笑ってしまい、さらに上昇。結果、気付かないうちにいつものメロディーを口ずさんでいた。

その後、奏は一度通りこした四階で降りて、適当に問題集一冊を選ぶ。鼻歌交じりで二つあるうちの片方のレジに並び、会計を済ませるとそのまま店を出て、自宅へと帰って行った。

Intersection Part II

夕食の献立は何にしようかと悩みながらキッチンに入ると、母親が思案げに佇んでいた。初音はそれを見て、何をしているのだろうと少しだけ心配な気持ちで「お母さん？」と声を掛ける。毎日遅くまで働いていることを考えると、どうしても余計な心配をしてしまうことは彼女自身自覚しているのだが、こればかりはしかたのないこと。

「ああ、初音」

「どうかしたの？」

「うん、久々に何か作ろうと思ってね。で、何を作ろうか考えていたところ」

なんだそんなことか、とちょっと安心した初音は、「いいよ、私が作るから」と笑顔で返した。

「でも、たまには母親らしいことしなくちゃ」

「毎日一生懸命してくれてるでしょ？　だから、休みの日ぐらいのんびりしてて」

「もう十分にのんびりさせてもらったわよ。だから――」

「お母さん」初音は母親の言葉を遮ってそう言うと、ぴしゃりと言った。

「三人でがんばろうって言ったの、お母さんだよ？」

娘にこうまで言われてしまっては素直に従うしかないかと苦笑し、母親は「そうだったわね。それじゃあ、初音に任せるわ」と答えた。

「うん。それで、お母さん何かリクエストある？　実はいいのが浮かばなくて、さっきから困ってたの」

「そうねえ……、シーフードパスタはどうかしら。正直、あんまり重たいものは食べたくないのよね」

初音はそれに快く同意し、こうして献立が決まると冷蔵庫の中を一応覗いて、具材の有無を確認し始めた。日々冷蔵庫を開け閉めし

ている初音はだいたいその中を把握しているのだが、万が一の場合もある。実際、すっかり忘れられていた食べ物が可哀想な姿で発見されたことは何度かあった。

「そういえば結弦は？」と、がさごそと冷蔵庫の中を見る初音に、母親は姿の見えない息子のことを尋ねた。

「結弦なら、お友達と遊びに出掛けてるよ」

「ああ、そうだったわね。寝ぼけた頭で聞いてたから、すっかり忘れてたわ。それであの子、夕食はどうするつもりなのかしら」

そう言われてみれば、と初音の手が止まった。遊びに行くとは聞いていたが、夕食については何も聞いていない。買う量はひとまず三人分にして、一人分使わなかったとしても明日明後日の夕食の材料にすれば問題ないが、作る量には影響が及ぶ。

初音はひとまず冷凍庫を閉めて、確認すべく電話を取る。そしてコール音が少し長めに続いた後に、結弦の声が受話器のスピーカー越しに聞こえてきた。

「もしもし？」

「結弦？　今だいじょうぶ？」

「ああ、いいけど」

「ごめんね。今日の夕食のことなんだけど……」初音はそこまで言ったところで、「ねえ、やっぱり拙かった？」と聞いた。結弦の声がやや平静さを失っており、息も荒い感じがして、何かしているところだったのかなと考えたからだった。

「そんなことないって。で、夕食がどうしたんだ？」

「えっとね、結弦はみんなと食べてくるのかなって」

「あれ？　俺言わなかったっけ？　時間までに帰るって」

私聞いてない、と言おうとしたところで、そんなことを聞いたような気がしてきた初音。

「あれ、そうだっけ？」

「たぶん言ったと思うけど。まあとにかく、あと三〇分ぐらいで帰るから」

「うん。分かった。気をつけてね」
結弦との短い電話を終えると、再び冷蔵庫の中をチェック。何をどれだけ買ってこなければいけないか確認すると、初音は買い物へと出掛けていった。

姉からの電話を切った結弦は、ほんの少し前に見ていた場所へと視線を戻し、次いで周囲を見回した。しかしそこにはもう姿はなく、聞こえてくるのも店内のざわめきだけ。
電話が掛かってきたことでレジ前の列からいったん外に出ていた結弦は、ふうと息を吐き出して、二つある会計の片側の列の最後尾へともう一度並ぶ。そう待たずして順番がくると、手にしていた参考書をレジに出した――。
この日結弦は、高校の友人である斉東の主催した合コンに参加した。ただしそれは、合コンと知っての参加ではなく、何も知らされないままにやって来たら合コンだった、という次第。そしてその合コンは、有意義な時間と言うに足りるものだった。斉東の中学時代の友人である安達和美も、彼女の友人たちも、なかなかに良いキャラクターの持ち主で、恋愛感情のようなものは抱かなかったにせよ印象は終始良かった。
という感想を素直に斉東たちへ言ってしまうと、だまし討ちのような計略に自分が見事にはまったような気がして、それはあまり面白くないという気持ちから、感謝の言葉は彼らには言うまいと心の中で密かに決めていた。
その合コンも終わり、駅前で悠太と別れた結弦はブックストアーへとやって来た。店に入った結弦はまず、コミックを扱う三階へと向かう。エレベーターを降りてすぐ目の前の、一番目立つところで平積みされている新刊コーナーでまず足を止め、次いで棚の間を流し見ながら歩く。時間にして数分といったところ。
買い揃えているコミックの新刊もなく、結局何も買わずにエスカレーターに乗ると、今度は四階で降りた。もともとこのフロアに用

事があり、三階へ立ち寄ったのはちょっとした寄り道に過ぎない。結弦は客もまばらなフロアを、目的の棚へと向かって一直線に歩く。

彼の向かった先は、参考書が並べられているコーナー。この辺りで一番大きな本屋だけあって参考書や問題集の品揃えも充実しており、複数の棚に分類され置かれている。結弦はそのうちの一つの棚の前へと向かい、はたと足を止めた。ちょうどその場所に買いたい参考書が並んでいるから、というものではない。本来立ち止まる場所はほんの少し横にずれている。

結弦が立ち止まったのは、明らかに女性の声色の鼻歌が聞こえ、そのメロディーが不思議と引っ掛かったからだった。

このような、たまたま耳にしたメロディーに「あれ？　この曲なんだっけ」とついつい考えてしまうことは、日常の中でそう珍しいものでもない。そして、それが気になってしかたがなくなるときもあれば、すぐにどうでも良くなることもある。今回はどちらかというと前者寄り。

まさかそのまま突っ立ち黙考するわけにもいかないので、結弦は本来立ち止まるべき場所の前に移動し、どの参考書にしようかと選びながら、このメロディーについて考えてみた。どこかで聞いたことがあるような気がするのだが、どこで聞いたかの答えは霞のずっと向こう。そのメロディーの原曲の名前に至っては、霞の向こうどころか底なし沼の底に沈んでいるようなもので、思い出せる気がしない。

そんな状態が徐々にもどかしくなってきた結弦は、いっそのこといまだ口ずさんでいるその人に直接聞いてみようかとも考えてみたが、その人が知り合いであれば何の問題もないが、見ず知らずの人だったらそれまで。まさか、「今の鼻歌、なんて曲ですか？」などと聞けるはずもなく、そのようなことをすれば、ナンパをしていると受け取られて面倒なことになりかねない。最悪の場合、相手に騒がれて警備員を呼ばれて詰め所に連行されて警察に連絡されて――、というのはさすがに大袈裟すぎだが、警備員を呼ばれる可能性はな

いとは言えない。
　ということで、結弦はその声の主が知り合いかどうかをまず確認してみようと、参考書選びを一時中断した。声はちょうど棚の向こう側から聞こえてきているようで、棚をぐるりと回り込む。そして結弦は、その声の主を見た。正面でも横でもなく、その後ろ姿を。
　歌声の主はちょうどレジへ向かって歩き出したところだったらしい。
　ただ、後ろ姿ではあったがその背格好と髪にまったく見覚えがなく、知り合いでないと判断するに十分なものだったので、少々残念に思いながら、鼻歌交じりにレジへと向かうその小柄な少女を見送るだけにして、踵を返して参考書選びを再開した。その間、彼女のメロディーが耳から離れずにいた結弦は、じっくり選んでいられる状態じゃないなと、数冊手に取りその中から適当に一冊選んでいた。
　レジへと向かい、二列あるうちの片方の最後尾に並び、順番を待つ。そのときになってようやく結弦は気付いた。もう片方の列の先頭で会計をしているのが、先ほどの少女だということに。あのメロディーを口ずさんでいれば、並ぶ前に彼は気付いていただろうが、さすがに鼻歌交じりで支払いは出来ないようだ。しかし支払いが済むと、このときを待っていたかのように同じメロディーを口ずさんでいた。
　よっぽど好きな曲なんだな、と思いながらその少女に目をやっていた結弦だったが、会計を終えてレジから離れようとその少女がくるりと向きを変えて、わずか数メートルという距離で彼女の顔が見えたとき、なんとも表現しがたい感情が心の臓を揺さぶり、その中の一滴がぽとりと落ちて心の中で言葉となった。
「可愛い……」という言葉に。
　他の言葉も滴となって落ちてこようとしているようだったが、言葉そのものがまだ形になっていないので落ちようがなく、もどかしげにふるふると身悶えするだけ。
　そして、まるで仕組まれていたかのように悠太の言葉が瞬時に脳

裏をよぎった。

――運命の人に出会った感じ、みたいなもんかな。

なんでこのタイミングでそのセリフが、と結弦はさらに混乱してしまったが、視線は真っ直ぐにその少女、立華奏へと向けられていた。

そして結弦の思考は、二つの対立する自我によってさらなる深みへと旅立とうとしていた。片方は、この出会いを運命的な出会いとして受け取って、今すぐその少女を呼び止めるべきだと主張する自我。もう片方は、運命などといった重々しいものなどではなく、ただの偶然の出会いにすぎず、呼び止める行為は下心の具体行動でしかないと主張する自我。そしてそのせめぎ合いはすぐに終わりを迎えた。初音からの電話によって。

もしもその電話がもう数十秒でも遅れて掛かってきていたのなら、前者の自我が高々と勝利の握り拳を挙げていたかもしれない。しかし、その過程がどうであれこの場は後者の自我が勝利を収めることとなった。電話が掛かってきたことで、まず心臓が止まってしまいそうなほど驚き、慌ててポケットから携帯電話を取り出した。マナーモードにしていたので、驚いた様子の結弦に気付いていたのはほんの数人。その中に奏は含まれておらず、そもそも彼女は結弦の存在にまったく気付いていなかった。

驚きのあまり、僅か一、二秒間でしかなかったが激しい攻防戦が行われていたことを完全に忘れて、列に並んだまま通話するわけにもいかないとそそくさと列から抜けると、携帯の着信番号を確認。その番号は自宅のもので、相手は姉か母親かのどちらか。

ひとまず動悸を落ち着かせようと深呼吸を三つほどしてから電話に出た。相手は初音で、夕食はどうするのかという問い合わせ。それは短いやり取りで終わり、並びなおすべく列に戻ろうとしたところで、少女のことを思い出した。

結弦はその姿を探すように辺りを見回したが、もうどこにも見当たらず、あのメロディーも聞こえてはこなかった。店員にその少女

が歩いていった先を聞けば、もしかしたら見つけられるかもしれない。だが、そこまで必死に探し出さなければならない人なのだろうかと考えると、店員に尋ねることに躊躇いを感じてしまう。

結局、見知らぬ少女とのささやかなすれ違いに過ぎなかったのだと結論づけることにした。しかし、その少女の顔と彼女のメロディーが結弦の頭の中からきれいに消えてなくなることはなく、むしろ強く意識されるようになっていったのだが、このときの結弦には、そのような未来はまったく見えていなかった。そして、一週間後に再び出会うという未来も、その先の未来も。

Dear Girl

週の明けた月曜日の朝。教室に入ると、さっそく斉東と田野中が近寄ってきた。むろん、昨日の合コンの感想を聞くためだ。この質問に対して、素直に感謝の弁を述べるつもりもなかった結弦は、まず『なかなかに楽しかった』ことを強調して話し、最後にこう締めくくった。

「とにかく、安達さんにありがとうってことだな」

この返答に対して斉東が「俺にもそのセリフ言ってくれてもいいんじゃないか？」と不服そうに言ってきたので、それは断ると返答。田野中はこのやり取りに傍観を決め込み、側にいた何も知らないクラスメイト数名が、何の話しをしてるんだと加わってくると、昨日の一件がクラス中に知れ渡ることとなった。その結果、数多くのクラスメイトの男子が、次回は俺も参加させろと斉東に要求し始め、休み時間毎に他のクラスからも参加申込者が次々とやってきて、斉東はその処理に追われるようになってしまっていた。

相手がお嬢様女子校の生徒となれば、目の色を変えた連中が絶え間なくやって来るのも当然だろう。付け加えておくと、女子の反応の大半は、一般ピープルな彼らがお嬢様に本気で相手にされるはずもないといった冷ややかなもので、残りはすべて無関心に近いものだった。

こうして休み時間の教室を斉東は賑わせていたのだが、その中に五十嵐悠太が現れたのは、昼休みの時間を迎えたときだった。てっきり朝一番にこの教室に立ち寄るものと待ちかまえていた結弦にとっては、少々肩透かしを食らったような格好で、珍しいこともあるものだと思っているうちに四限目が終わる。生徒たちはそれぞれお弁当を広げたり机を寄せたり購買部へと走っていったりと、途端にざわめきだす。

このまま今日は顔を出さないつもりなのだろうかと考えながら、

結弦もまた昼食を確保すべく購買部へと席を立った。とそこに、悠太がのそりとやって来た。そして彼の表情に結弦は軽く驚いてしまっていた。

「五十嵐……、ずいぶんと疲れた顔してるな」

「……ああ、徹夜で携帯とにらめっこしてたからな」

「なんでそんなこと。携帯サイトでゲームでもしてたのか？」悠太の返答に、やや呆れ口調で言う。

「んなことするか」

「じゃあなんで」

「それは……、まあ、とりあえず付き合え」

悠太は濁すような態度でそう言って、結弦の肩をがっしと掴んだ。付き合え、と言われても、このまま購買部へ行かなければ、毎度売れ残る謎なパンを買って“勇敢なチャレンジャー”の称号を得るか、昼食を抜いて午後の授業を堪えしのぐかの選択を強いられることになる。それだけは避けたかったので、「別にいいけど、その前に昼飯の確保が先だ」と、肩に置かれた悠太の腕を取りすっと下ろす。

「昼飯？」

「ちょっと待て。お前は今何時だと思ってるんだ？」

「そりゃあ……、ああ、そうか。そんな時間か」

どうやら本気で時間に気付いていなかった様子の悠太。いったい何があって彼はこんなに状態になっているのだろうと訝しく思いつつ、とりあえず二人で購買部へ向かい、激戦を勝ち抜いて無事に昼食を確保すると、話すのに適当な場所を探した。しばし校内を徘徊した末に腰を落ち着かせた場所は校庭の片隅。

周りに人はいたが顔見知りは見当たらなかったので、悠太がここでいいと言ったのだ。

「んで、俺に何の相談だ？」結弦はそう言いながら、パンを一つ取る。対して悠太の手はパンに手が伸びていない。

「実は、だな……。なんて書けばいいか、ぜんぜん分からないんだ……」

「話が見えないんだが」
「だから！　あの子にどんなメールすりゃいいか分からないんだよ！」
　急に声を大きくした悠太に、結弦は「分かったから、ひとまず落ち着け」となだめようとする。その言葉に悠太ははたと周囲に意識を向け、コホンと咳を一つして取り繕う。
「だから、なんて書けばいいかお前に教えてもらいたいんだ」
「一つ重要なことを確認したいんだが」
「なんだ？」
「誰に何を書こうとしてるんだ？」
　なんでそんな分かりきったことを聞く、とばかりに「だから！」とまたも大きな声を上げたが、すぐにトーンを落として先を続ける。
「決まってるだろ。宮倉さんに、俺と付き合ってくださいって」
　ここで結弦は、ようやく思い出した。
「ああ、そういうことか。すっかり忘れてた」
「忘れんなよ、応援団長だろ」
　応援団長の就任を認めた覚えはないが、ここで反論して本題から逸れてしまうのもどうかと思い、あえて「それはともかく、今お前が言ったことをそのままメールすればいいだろ」と答える。
「そのままって、それじゃまんますぎるだろうが。それが駄目だから相談してんだよ」
「変に回りくどくするよりはいいと思うけどな。それに、ストレートな文章にしないとちゃんと伝わらない危険性もあるし」
「う……、確かに」わずか数時間の出会いであったが、それでも宮倉祐子という女の子の天然加減を知る一端はしっかり見ていたので、結弦の言い分にも一理あると呻く。しかし、ストレートすぎて嫌われたりしないかという不安もある。どうにも煮え切らない悠太のそんな姿に、結弦はぷっと笑ってしまった。それは彼を馬鹿にしてのものではない。一本気な気質で、ストレートな言動が多く、泰然とした雰囲気のある悠太をよく知っているからこそ、今の悠太を微笑

ましく感じてしまったからだった。
「お前、人が真剣に悩んでるってのに！」
「悪い悪い。いや、馬鹿にしたわけじゃないんだ」
「じゃあどういう意味だよ」眉間にしわを寄せてそう問い質す悠太に、結弦はこう答えた。
「お前って、ほんと青春してるよなって、思ってさ」
「当たり前だろ。いま謳歌しないでいつするんだ。って、んなことよりどうすんだよ」
「何が？」
「……お前、絶対喧嘩売ってるだろ」
「ほんの冗談だ」結弦は真顔でそう言うと、「そうだなあ、例えば――」と、パンをかじりながらいくつか例文をあげていった。そのどれもが、基本文となる『お付き合いしてください』という文言の前に短い文章を加えたもので、結弦としてはこれぐらいがちょうど良いと思っていた。しかしそれでは短すぎるしストレートすぎるとして悠太は納得しない。そうしてお昼休みの時間を費やして悠太の出した結論は、根本をひっくり返したものとなった。
「とりあえず、またみんなで遊んで、それからというのは？」
これに結弦は、それではこの費やした時間はなんだったんだと「だったら俺にじゃなく、斉東に相談しろ」と言って返した。
「それはそうだな。よし、斉東のところに行くぞ、音無」
「まだ俺を付き合わせるのかよ」
「付き合うもなにも、お前の教室だろうが」
昼食を食べ終えていた二人は、すぐに教室へと向かった。しかし、朝から多くの男子生徒に合コン参加の申し入れの相手をさせられていたので、後にしてくれと断られてしまった。その疲労具合から、二人ともしかたがない諦め、その場は素直に引き下がった。
結局斉東が悠太の相談に乗ったのは、家に帰ってから。学校では最後までそれどころではなかった。悠太の相談をひととおり聞いた斉東は、彼が生粋なお嬢様である宮倉祐子を本気で好きになったこ

とにまず驚き、それから、付き合うにしても色々と難しいだろうと苦言を呈した上で、とりあえず当たって砕けろでがんばれよと応援していた。

またみんなで遊んで、という部分に関しては、それはちょっと待ってくれと答えた。申し込み殺到のこの状況で早々にまた合コンをするのは難しいということと、向こうの都合もあるだろうからというのがその理由。

その代わり、というわけではなかったが、自分が仲介役に立ってやろうかと持ちかけた。ただし、彼も宮倉祐子とは昨日会ったばかりで、さすがに本人へと直接取り次ぐわけにもいかず、安達和美を経由することになる。となると、悠太の気持ちはある程度知られるところになるだろうが、と注釈を付けて。

その提案に、悠太は逡巡した。もしかしたらストレートすぎるメールよりも悪い印象を与えてしまうのでは、と。例えば、「自分の口から言えないで、友人を頼るだなんて、なんて男らしくない。最低っ」といった具合に。しかもその台詞が彼女の声をともなって脳内で再生され、一人で勝手に頭を抱えそうになっていた。

この姿を、彼らしくないと評する者は数多くいるだろう。しかし、彼も悩める多感な少年ということだ。

そうして電話を握りしめながら苦悩する悠太に、斉東は、とりあえず結論を出すのは今じゃなくていいのではないか、もう数日考えてからでもいいのではないかと助言。しかしこれ以上悩み続けるのも悠太自身勘弁願いたいところだったので、今日のところはここまでにしておこうと言う斉東を遮り、ついに腹をくくった。

「やっぱ、俺からメールするわ。付き合いたいってのは早すぎるみたいだから、それはひとまずお預けにして、また会って君と話したいとか、そんな感じで」

これを聞いてそれはいいかもと斉東が答え、相談が終了となった。

しかしこれですべて解決したわけではない。文面の方向性は決まったが、具体的な文章はまだ決まっていない。ということで、悠太

は結弦の携帯へ電話した。発信元から電話の相手が悠太であると分かると、さて結論は出たのかなと結弦は電話にでる。
「よう。結局どうなった？」
「俺が彼女に直接メールすることにした」
それ、振り出しに戻っただけじゃん。と言いたいところをぐっと堪えて、「そうか。で？　もう送ったのか？」と答える。
「なわけないだろ。何のためにお前に電話したと思ってるんだ」
「俺が知るか。ってか、まさかまた文章を考えてくれなんて言うんじゃないだろうな」
「それ以外に何がある。とにかく、付き合いたいってのはなしにして、また会いたいって内容にしたいんだが、なにかいい文章あるか？」
「いきなり言われてもなあ」結弦はしばし考える。とそこに、自室のドアがノックされた。母親はまだ帰ってきていないので、誰がノックしたか考えるまでもない。
「わり、初ネエが来た」
「じゃあ電話切ろうか？」
「いや、すぐ済むかもしれないから、そのまま待っててくれ」
そう言って、携帯を持ったままドアへ向かいかちゃりと開ける。
そしてそこにいる初音に「なに？」と尋ねた。
「あ、ごめん。電話中ならあとでいいよ」
「そう。んじゃあ電話終わったらリビングに行くよ」
「うん」
初音はぺたぺたと廊下を歩き出す。とそこで、結弦は突然ひらめいた。そのひらめきを実行に移すべく、「ちょっと待った初ネエ！」と呼び止めた。初音はびくりとして振り返り、不敵な笑みを浮かべている弟に「なに？」と不安げな表情を浮かべた。
簡単に言ってしまえば、初音にも相談に乗ってもらい、アドバイスを頂戴しようという魂胆だった。結弦はまず、マイク部分に指を当てる。次いで初音にちょいちょいと手招きする。初音がそれに従

うと、近寄ってきた初音に耳打ちをした。その内容は言うまでもなく、悠太の相談そのもの。

「というわけなんだ。女性目線で、五十嵐の力になってくれないかな」

「そういうことならいいよ。どれだけ力になれるか分からないけど」

交渉が成立すると、結弦は携帯を初音に渡した。そして初音が「こんばんは、五十嵐くん」と言うと、スピーカーから悠太の驚く声が結弦にも聞こえてきて、思わず笑ってしまった。

「結弦から話は聞いたよ。やるね、五十嵐くん。さっすが男の子」

「ど、どもッス……」

「それで？　五十嵐くんはどんな文面を考えてるの？」

「いやあ、それが分からなくて……」

「それじゃ駄目よ。伝えたい想いは君だけのものなんだから、君自身が考えなきゃ」

「そう、なんスけどね……」

「くすっ。仕方ないなあ。それじゃあちょっとだけ力貸してあげるね――」

初音はそれから一〇数分ほど、途中で結弦の部屋に入って悠太にあれこれとレクチャー。そのレクチャー内容に、結弦もいつの間にか感心するように頷きながら聞き入っていたので、初音が電話を返してきたとき、結弦はきょとんとしてしまっていた。

再び電話に出た結弦は、「どうにかなりそうか？」と聞く。

「ああ、初音さんのおかげでどうにかなりそうだ」そう言葉を返す悠太は、やりやがったなこの野郎という語気をふんだんに漂わせていた。実は五十嵐は、初音に弱い。無駄に緊張してしまうらしいのだ。それは初音を畏れて、という意味ではなく、健全な男の子としてという意味で。そしてそれを知っての結弦の所行。しかも恋愛相談に初音を意図的に巻き込んだので、結弦に対して心穏やかでいられるはずもない。友人の姉に自分の恋愛相談をするなど、男として悶絶級に恥ずかしい行為なのだから。

とにもかくにこれでメドが立ったようで、電話を切る悠太の声から困惑の色はほぼ消え去っていた。

これで一仕事終えた気分になっていた結弦だったが、終わったのは悠太の分で、まさか自分にまで火の粉が降ってくるとは思っていなかった。にんまりと彼の顔を見つめる初音に、怪訝な顔を浮かべた。

「……な、なに？」

「ねえ、結弦はいないの？」

「何が？」

「決まってるでしょ。コ・イ・ビ・ト」

そのセリフに、しまった、と思いつつ「ンなの、いるわけないだろ」と素っ気なく答える。

「それじゃあ、好きな人は？」

これもまた簡単に答えようとしたのだが、「それもいない――」と言い掛けたところで、一人の少女の顔がふと浮かび上がった。ブックストアーで見かけた小柄な少女の、楽しげなその表情を。思わず、どうしてここであの子が出てくるんだ？　と息を飲んだ。この結弦の反応に、初音が何も感づかないはずもない。

「なんだ、いるんじゃない」

「いや、違うって。そういうんじゃないんだ」

「じゃあどういうの？」

「う、ぐ……」

したり顔で追求してくる姉に、強い口調で回答を拒否することも出来ず、初ネエこそどうなんだよとやり返しても容易くかわされ、結弦はずるずると後退するばかり。そしてついに陥落し、ブックストアーで出会った少女のことを話し始めたのは、それから一分も経たずしてのことだった。

恐るべし、音無初音。

と姉に対して改めて思う結弦であった。

初音に話したことで、それまであまり意識せずにいられたその少女のことが、妙に結弦の頭から離れなくなってしまった。寝ても覚めても、というほどではないが、常に意識のどこかにあるような感覚。なんだってこんなに頭の中に張り付いているんだと思っても、どうすることも出来ない。無理に意識の底に沈めてしまおうとしても反作用が働いて、かえって表層へと這い上がって来さえする。

結局俺は、あの子のことを忘れたくないのか？　それとも忘れたいのか？　いや、忘れたいってことはないみたいだけど……。これって一目惚れ？　俺が？　いやいや。俺が誰かに一目惚れって。まあ、可愛い子ではあったけど……。いやだからそういうことじゃなくてだな。

思い浮かぶ少女の顔をいつのまにかぼんやりと眺めては、そんな自問自答をたまに行き交わせ、この日の夜、結弦はなかなか寝付くことが出来なかった。どうでも良いことだが、悠太と電話したあとの初音とのゲーム対決では、散漫な操作で大敗していた。

翌朝、瞼を重たそうにしてキッチンにやってきた結弦に、初音は心配するのではなく、どこか楽しそうに「あんまり眠れなかったみたいね」などと言ってきた。弟にようやく気になる人が現れて、心ざわめいているのだと考えるとどうしても頬が緩む。しかし結弦にとって姉のそんな反応は喜ばしいものではない。出来れば何も気付かない振りをしていて欲しいぐらいだった。だというのに、いつもの通学の時間の中、結弦が駅で電車を降り初音と別れる際、初音は「女の子のことも大事だろうけど、ちゃんと授業も聞かなきゃ駄目よ」などと笑顔で発言。

このセリフを耳にした周囲の人たちの多くは無関心だったが、結弦を注目したり失笑したりする人もちらほら。幸いなことに、クラスメイトや知り合いの姿はその中に見当たらなかったが、恥ずかし

い思いをしたことに変わりなかった。
学校では、名前も知らないその少女、奏のことを夢想するどころではなく、一限目から教師の講義が子守歌となって結弦に襲いかかり、目の前で睡魔がしたり顔をして笑い続け、ときおり船を漕いでいた。そうして一限目が終わると結弦は机にばたりと突っ伏し、そのまま寝入ってしまった。彼が目を覚ましたのは、次の授業が始まり、みなが起立しているところだった。しかも自分で目覚めたわけではなく、クラスメイトに揺り動かされて。
寝ぼけ眼で起きた結弦は、起こしてくれたクラスメイトに対して、なんでみんな立っているのかと不思議そうな眼差しを向けていた。その様子に教師が呆れ顔で「顔洗ってこい！」と怒ると、結弦は言われたとおり教室を退室し、流し場で顔を洗う。完全ではないがその甲斐あってひとまず目を覚まして教室に戻ると、教師およびクラスメイトから失笑とともに迎えられた。
これでこの日恥ずかしい思いをしたのは二度目。今日はなんて一日だ、と思いながらため息混じりに席に着き、授業を受ける。しかし顔を洗っただけで眠気がすべて消えてなくなってくれるわけではない。足りない睡眠時間をそれだけで満たすことなど、そもそも不可能なのだから。しばらくすると睡魔がひたひたとやって来て、結弦の意識を刈り取ろうとし始めた。まさかもう一度「顔を洗ってこい」と言われるわけにもいかず、必死に耐える。どうにか二限目のあいだ持ちこたえると、時間になったらまた起こしてくれとクラスメイトに頼み、休み時間を仮眠に充てた。そうして三限目、四限目をしのぎきると、昼食をさっさと済ませて、昼休みの時間を本格的な睡眠時間に割り当てた。
これでどうにか眠気をほぼ一掃することが出来た結弦は、午後の授業をしっかりと受けることが出来たのだが、そこであることを思い出した。
そういえば、五十嵐は宮倉さんにメールできたのだろうか？
休み時間は寝ていたので、悠太がこの教室に来たかどうかも分か

らない。とりあえず手っ取り早く、ようやく合コン参加申込者の波が一潮引いてだらりと休んでいる斉東に尋ねた。
「五十嵐のヤツ、今日こっち来た？」
「今日は見てないな。どうかしたのか？」
「いや、結局メールできたのかなって思って」
「たぶん、まだしてないんじゃないの？　してたら俺たちに自慢しに来てそうだし」
　それもそうだと結弦は斉東の意見に頷く。そして斉東は、「で？　お前も五十嵐と同じクチか？」と冗談半分に言った。ひどく眠そうな結弦を見て、昨日の悠太と重ね合わせての発言。彼が言いたいことなど明々白々で、お前は誰に告白したくなったんだ？　と興味ありげな目を向けている。
　普段の結弦なら鼻で笑ってそれでお終いにしてしまう程度のものでしかないのだが、こう言われた結弦の頭に奏の顔が浮かび上がったことで、いつもどおりの振る舞いが出来なくなり、それどころか動揺の色をはっきりと出してしまっていた。
　これに斉東は、知った顔で「ほほう」とにやり。
「お前、完璧に勘違いしてるだろ。俺はそういうんじゃないぞ」
「それじゃあどう勘違いしているのか、あとでじっくり聞こうじゃないか？　学校終わったあとで。それとも、今ここで説明するかね？　音無くん？」
「なんで説明しなきゃいけないんだよ」
「なら、俺が勘違いしたままでもかまわないってことだな？　しかしそうなると、和美にも伝えておいた方がいいだろうな。今後のためにも」
　今にも口笛を吹き出しそうな斉東に、結弦は顔をしかめる。
「まさかお前、昨日の鬱憤を俺にぶつけてスッキリしようだなんて考えてるんじゃないだろうな」
　正確に言えば、合コン参加申込者の対応で溜まっているストレスの解消が目的だとするその問いに、ぎくり、という音が彼の瞳の動

きから聞こえてきた。とたんに結弦は「斉東～」と唸り声を上げる。すると斉東は、真剣な顔でこう言い返した。

「音無……、友情とはときに、残酷な運命に導かれてしまうものなんだよ。その人の意志に関係なく、な。ああ、なんて無情なんだ、この世は」

「カッコつけて言っても、お前、最低だからな」

「ぐうっ！　俺だって人間なんだいっ！」

こうして、いつの間にか悠太の件はどうでもよくなっていた二人であった。

結局この日、悠太は教室にやってこなかった。きっと、送れずにいるから顔を出せないのだろうというのが、結弦と斉東の共通見解。そしてそれは事実であった。悠太は昨日の夜の、初音に相談させた結弦の所行のこともあって、メールを送るまでは意地でも顔を合わすまいと考えていたのだ。ただし、送信ボタンを押す最後の勇気がなくて、ということではなく、一睡もせず徹夜で考え抜いた文章が果たして大丈夫か、自信が持てなかったから。結果として同じような意味でも、その本質は異なる。

そんな事情までは知る由もなく、学校の帰り道、結弦は斉東の勘違いを簡素で短い説明で正していた。結弦が昨日の三人のうちの誰かに恋心を抱いているわけではないと理解させることは、少々拍子抜けしてしまいそうなほど簡単だった。そしてその説明のために仕方なく話に出した、ブックストアーで出会った見ず知らずの少女についても、「よくあること」と簡単に片付けられた。初音のような反応をするのではないかと危惧していたのだが、斉東もまた多感な少年期の只中にいる身なのだから、結弦に共感を示して、ごく普通のことと受け取るのも当然と言えば当然であろう。

これは誰にでもあることであり、年頃なら特にあること。そしてこれは一過性の感情に過ぎない。時間と共に勝手に意識の底に沈み込み、記憶の彼方へと消え去り、どうということもない出来事となって忘れ去られる。だから深く考える必要もなければ、悩む必要だ

ってない。
　という斉東の意見に、そういうものかと結弦は頷いていた。それで心から納得したわけではなかったが。
　途中で斉東と別れて地元の駅を降りた結弦は、ふとブックストアーに足を向けようとした自分に、一過性のものだろうからと言ってバス乗り場へと向かった。
　家に着くと、初音が先に帰ってきていた。ただいまと家の中に向かって言うが、おかえりの返事がない。電話でもしてるのだろうかと思いながら靴を脱ぐと、リビングの方から初音の声が聞こえた。誰かと話しているようだが、相手の声は一切聞こえてこない。そこにある靴は結弦と初音のものだけ。
　やっぱり電話中だったかと結論づけて、そのまま自室に行く。そして普段着に着替え、飲み物を求めてキッチンへと向かった。その途中にある、大きな曇りガラスがはめ込まれたドアで閉められているリビングの前を通った結弦は、とりあえず自分の帰宅を伝えておこうと思い、そのドアを開ける。
　中では初音が楽しそうに家の電話でお喋りをしていた。
「ただいま」
　ドアの開く音でこちらへと顔を向けていた初音が「おかえりなさい」と答えたのを聞いて、結弦は邪魔しちゃ悪いとすぐにドアを閉め、キッチンに行った。その際、初音のこんな言葉が最後に聞こえていた。それは結弦に向けたものではなく、電話の相手に向けたもの。
「うん？　そうだよ？　分かってる。絶対に言わないから」
　初音の話し相手は彼女の友達であるという前提条件が、最初から結弦の中で確固たるものになっていたので、その言葉を意識することはまったくなかった。そしてその話し相手が、この文章で大丈夫かなと勇気を振り絞って初音に相談してきた五十嵐悠太だと知ったのは、それからわずか数時間後のことだった。
　夕食の準備をしていた初音を結弦が手伝っている最中、話題が悠

太のことになり、彼女がついつい喋ってしまったのだ。しかも悠太が送ろうとしていた文章の内容まで。その文面は別段気取ったものでもなく、畏まりすぎたものでもなく、砕けすぎたものでもなく、結弦が聞いても妥当と評価できるもの。

そして文章が公開された直後、結弦ははたと思い出した。リビングから立ち去ったときに耳にしていた言葉を。

「そう言えば、絶対言わないとか言ってなかったっけ？」

「あ……。ど、どうしよう、結弦、今すぐ忘れて」

「それは無理。ていうか、包丁振り回さないでくれる？」

身の危険を避けるために、そして美味しい夕食のために、結弦は絶対に言わないことを初音に誓い、怪我一つなく無事に美味しい夕食を美味しく食べることができた。そうして食後、初音と二人でリビングでくつろいでいると、結弦の携帯が鳴った。ディスプレイに表示される電話相手の名前に、彼は「よう。まだ送れずにいるのか？」と第一声を送る。

「ふっ。俺がいつまでもウジウジしていると思ったか？」と、相手の五十嵐悠太が得意げに言い返す。

「昨日俺に泣きついてきたヤツとは別人みたいな口振りだな」

「言ってろ。お前だって、いつか俺と同じ道を踏むんだからな。人のこと笑っていられるのもそれまでだ」

「かもしれないけど、とりあえず今は笑ってやる」

「なんてひどいヤツだ。それでも俺の親友か」

「友情とはときに、残酷な運命に導かれてしまうものなんだ。その人の意志に関係なく。なんて無情なんだ、この世は」

「なんだそのいかにも受け売りみたいな棒読みセリフは」

そう言い合う二人の表情はどこか嬉しそう。そして二人は、電話越しに聞こえる声から互いにそれを感じ取っていた。

「とにかく、あとは返事待ちか。良い返事がくるといいな」と結弦。送っただけで、返事はまだ来ていないと思っていたのだ。しかし、すでに返事はもらっていた。しかも彼の口調から分かるとおり、そ

の内容は彼にとって喜ばしいもの。
「それは心配無用だ、音無。もう返事はもらってるんだ」
そう不敵な笑いと共に言った悠太の言葉に、結弦は思わず「え？」と驚いた。
「今度の週末に、また会うことになってるんだ」
「マ、マジか……？　いきなり二人きりでデートかよ」
「そんな急展開になるわけないだろ。二対二だ。俺と宮倉さん、それと斉東に安達さんだ。俺としては二人きりでも良かったんだが、さすがに彼女的にはそうもいかないだろ」
「そりゃそうか」ほんの少しでも考えれば分かるようなことに気付かなかった自分に、どれだけ自身が驚いていたのかを改めて結弦は感じた。
斉東と安達和美が同伴者に選ばれたのは必然と言えよう。二人を引き合わせた張本人でもあるし、悠太と祐子とのパイプラインとしても最適任者であったからだ。それは斉東も和美も自覚していたので、この船に乗ることにやぶさかではなかった。ただし斉東については、合コン参加申込者をどう相手しようと頭を悩ませることになったが。
なお、悠太からのメールを読んで、祐子が一緒に来てもらおうと思った最初の相手は、実は和美ではなく岸峰ゆんだった。しかしゆんは、自分よりも和美の方が今後も含めて話がスムーズになるからと答え、結局和美が選ばれた。そして和美は斉東を指名、という次第での人選であった。
それから一通り悠太の話を聞き終えた結弦は、最後に「たぶん、お前なら上手くいくよ」と言って電話を切った。そして、さて二人の行く末について物思いにふけようかとしたところで、初音の視線をここでようやく感じ、ちらりと見るとやはり視線が注がれていた。実は、悠太と電話している間ずっと初音は注目していたのだが、油断していた結弦はその視線に思わず身を少し引いて驚いていた。
「なに……？」

「五十嵐くん、良かったね」
「あ、ああ……。たぶん、初ネエのアドバイスが良かったんじゃないか？」
「なら、私も嬉しいな」
初音はそう言うと、にこりと結弦に言った。
「ようし。結弦にも、たくさんアドバイスしてあげるからね」
「いや、それはいい」
「遠慮しなくていいのよ。お姉ちゃんに任せなさい」
鼻息荒く胸を張る姉に、今は何を言っても無駄だろうと結弦は苦笑混じりでそっぽを向いた。

When a Man Meets a Woman

翌日の朝、待ちかまえていた悠太は、教室にやってきた結弦を異常なまでのハイテンションで迎えた。こうなることを半ば予想していたので、親友への祝福の気持ちはもちろんあったが、それ以上に勘弁してくれという気持ちがあった。

というのも、昨晩も寝付きが悪かったのだ。それどころかその前の晩よりも悪化しており、この日も睡眠不足で登校。原因は言うまでもなく、名前を知らない少女。

覇気を持って悠太の相手をすることが出来ない結弦に、悠太は「どうした、恋わずらいか？」と冗談を言った。斉東のときと同じ轍は踏むまいと、結弦は「いや、変な時間にうたた寝しちゃって。夜眠れなかったんだ」と言い訳。まだ何も知らず、気付きようのない悠太は、それで納得していた。しかし斉東がそれをそのまま鵜呑みにすることはない。にやりと結弦に視線を送っていた。

子守歌との熾烈な戦いを午前中一杯繰り広げ、数度教師から注意されただけで済んでいた結弦は、昼食をさっさと終わらせて、昼休みの多くをまたも睡眠時間に充てる。午後になると、睡魔はやっとどこかへ行き、まともに授業を受けることが出来た。そうして六限目が終わり、下校の時間となった。部活組は部室へと向かい、帰宅部の結弦はまっすぐ下駄箱へと向かう。鉄道研究会の部員ではあったが実態は立派な幽霊部員である斉東も一緒に教室を出ると、剣道部部員だが怪我で休部中の悠太と遭遇、というよりもちょうどこちらに顔を出すつもりだったようだ。

その理由を、週末の相談とすぐに思い当てた結弦は、自分は邪魔かなとなんとなく思ったのだが、悠太の「お前も付き合え」という誘いに、ならば問題ないだろうと同行することにした。

三人が向かった場所は、斉東の自宅。幽霊部員とはいえ鉄道研究会に所属しているとは到底思えない彼の部屋で、お菓子をつまみジ

ュースを飲みながら、決戦の週末に向けての作戦会議をした。
なぜ研究会部員の部屋と思えないかというと、鉄道に関するものがいっさい部屋に飾られておらず、代わりに海外のロックバンドのポスターがこれ見よがしに貼られているのだ。そもそも鉄道研究会に入部したのは、ただたんに友人に付き合ってのことで、鉄道に対しては最初からほとんど興味を持っていなかった。ものは試しと付き合って入部してみたのだが、先輩たちとあまりうまくいかず、早々に幽霊部員に。ならば退部してもよいはずだが、三年になったとき部室を自由に使えたらラッキーという思惑があって、退部届を出さずにいるのだ。
それはともかく、作戦会議では色々なことが話し合われた。一番真剣味を帯びていたものは、宮倉祐子嬢に絶対にしてはいけない行動および発言とは何か、という議題だった。彼女の性格を考えれば、それほどタブーが多いとは考えにくいのだが、だからこそ、一つのタブーの重みが計り知れない。とは斉東の意見。当事者である悠太は真剣な表情で頷いていたのだが、結弦はどちらかというと半信半疑で聞いていた。
そうしていくつかタブーが挙げられていった中で、結弦はふと思った。
安達さんに聞いてみた方が早いんじゃないか？　同じ女の子で、彼女の親しいんだから、と。しかし、『同じ女の子に相談』というキーワードから姉の初音が連想されると、ぶるっと身を震わせ、口をつぐんでしまった。まさか初音にまで飛び火することはないだろうが、万が一飛び火した場合、炎が自分にまで襲ってくる可能性が高いと考えて。そして、昨晩の「お姉ちゃんに任せなさい」と胸を叩いた姉を思い出して。
そうして、ある程度意見がまとまってきたところで事件は起きた。事件と言うほどのものではまったくないが。
会話が一瞬落ち着いたとき、斉東が不意に「二人ともいいよなあ、好きな人がいて」とぼそりと言った。これに真っ先に反応したのが

悠太。
「二人？」と繰り返すと、はっとした顔で結弦に顔を向けた。
「な、なに言い出すんだよ斉東！」結弦は慌てて反論するが、興味津々といった顔に変えて悠太が詰め寄る。
「お～と～な～し～？　どういうことかな～？」
「どうもこうも、別に好きとかそういうんじゃないって！　誤解招くような言い方するなよ！」
「あれ？　お前、五十嵐には言ってなかったの？」
「俺たち、親友だよなあ、音無？」
「友情とは、ときに残酷な運命を――」視線を逸らしてそう棒読みし始めた結弦を、悠太がすぐに断ち切る。
「そのボケはもう賞味期限切れだ」
結局、結弦は例の少女のことを話すこととなった。そして話を聞いた悠太は、期待はずれに鼻を鳴らすように「なんだよ、そんなことかよ」と言い捨てていた。しかし斉東は、興味を失い掛けている悠太とは対照的に「それで、どうなんだ？」と尋ねてきた。学校での様子から、昨晩も寝付けなかったのだろうと推察し、その理由もきっとそうだろうと考えての質問だった。
「どうって」
「まだ頭から離れないでいるのか？」
「まあ……、そんな感じ……だな」照れくさい結弦は、そう小さく答える。
「ほほう。これはひょっとすると、マジ惚れか？」
「一過性の感情だって言ったの、お前だろ？」
「あくまでも可能性の話に決まってるだろ。でもさ、実際問題、マジ惚れだったとしたらどうすんだ？　もっかい会おうにも、名前も住所も何一つ分からないんじゃどうにもならないし、探そうにも探しようがないからなあ」
「そりゃあ……、諦める他ないだろうな」
とここで、悠太が「二度あることは三度あるって言うじゃないか」

と力強い声で言った。
「さっき説明しただろ。会ったのは一度だ。しかも向こうはこっちにまったく気付いていない」
「ものの例えだ。つまり、可能性はゼロじゃないってことだよ」
「限りなくゼロに近い確率だけどな」斉東はそう言い添えるが、可能性を否定するつもりはなく「しかし五十嵐の言うとおり、ゼロじゃない」と続けた。
それから悠太と斉東は、どうすれば結弦とその少女が再会できるかを検討し始めた。しかも二人の中では、結弦の想いは本物であると認識されていた。お前のことはいいのかよと五十嵐に言うも、今はお前の話が重要だと返答。斉東もそれに頷く。結局、二人を相手に苦労してこの流れを断ち切るのも面倒に感じた結弦は、勝手に盛り上がってくれと傍観者になりきっていた。
途中からすっかり会議の趣旨が変わってしまったが、週末に向けての会議もそれなりに成果はあった。と三人は思っていた。三人のその認識が正しいという保証はどこにもないが。
こうして斉東の家で過ごし、夕方になって結弦と悠太は斉東宅を出て自宅へと帰った。地元の駅に着くと、もしかしたら再会できるかもしれないと、悠太は結弦をブックストアーへ行こうと持ちかけた。そこまでやることもないだろとは思った結弦だったが、帰宅を急いでいるわけでもないし、と付き合うことにした。しかしそれは建前のようなもので、彼の心のどこかで、ひょっとしたらまた会えるかもしれないという期待があったのも事実。
二人はまず、四階に上がった。そしてフロアをぐるりと一回りする。しかし少女の姿はなく、他の階もひととおり巡回する。そしてその結果は、現実とはそう甘いものではないと改めて思わせるものだった。
ブックストアーを出て、駅の反対側のバスターミナルへと向かう途中で、「まあ次があるさ」と悠太は結弦を励ますように言葉を掛けた。僅かながら残念な気持ちはあったが、落ち込んでもいなけれ

ば、たいして気にもしていない結弦は、「どうでもいいが、ずいぶんと一生懸命だな」と訝しげに返す。
「そりゃあ、親友のためだからな」
「で、本当のところは？」
「俺もその子を見てみたい」本心そのままに、楽しげにそう答える悠太。
「だと思ったよ」
結弦はそう言って、ため息混じりに笑った。ただし、親友のためという言葉をまったく信じなかったわけではない。少なくともその気持ちはあると信じて疑わなかった。
「ところで音無。その子と会えたら、お前どうする？　告白するのか？」
「ンなことしたら、キモがられて逃げられるだけだろ。ていうか、なんでいきなり告白になる。お前じゃあるまいし」
「好きなんだろ？　その子のことが」
「だからまだそうだと決まったわけじゃないって――」
「ったく、そんなだからいつまで経っても彼女ができないんだよ、お前は」
「大きなお世話だ」
「ま、とにかく。お前の応援団長として、協力できることは協力してやるよ」
「だから俺の応援もしっかり頼むぞ。てか？」
「分かってるじゃないか」
「だてにお前の親友やっるわけじゃないからな」
「お互いに、な」

バス停に着いてからもあれこれと喋っていると、やがて丘野運動場・川堀病院経由坂田駅行きのバスがやってきた。中学を卒業するまでは悠太もこのバスを利用し、乗り降りするバス停も結弦の一つ隣だったのだが、卒業を待っていたかのように引っ越しをして、以

来別のバスを利用している。引っ越しと言っても、以前暮らしていた家から自転車で三〇分もかからない距離しか動いていないので、地理的には引っ越しした実感はあまりないらしい。それまでの交友も未だしっかり続いていることもその一因。ただ、団地暮らしから一軒家への変化は、それはもう衝撃的だったと今でも口にしていた。

バスが停車すると、悠太は「それじゃあな」と結弦に言って列から外れる。本来彼が並ぶべきバス停は隣。こちらのバスが一足早く来るということで、悠太はこの列に並んで結弦と喋っていたのだ。その結弦も、「ああ。また明日な」と言葉を返し、バスに乗り込むべく他の乗客とともにのっそりと前に進みながら、自分のバス停へと歩いていく悠太を見送った。

席に座り、バスが動き出すと、窓越しに悠太へと小さく手のひらを向けた。そしてバスは、駅前のバスターミナルを後にした。

揺られるバスの中、ぼんやりと外を眺める。やがて流れる風景は、いつしか彼の意識をこの世界から切り離し、低く唸るエンジン音はどこか遠い場所で囁きだしていた。そして思考は、少女と、悠太の問いかけに満たされていた。

――会ったらどうするつもりだ？

そんなこと言われても分からない。自分の気持ちさえよく分かっていないのに、どうして答えることができる？

――告白するのか？

だからなんでいきなり告白になる。自分の気持ちさえよく分かっていないのに。

そう。俺は分からない。自分の気持ちが、この感情の正体が。

でも、もし彼女ともう一度会うことが出来たら、その正体がはっきりするかもしれない。そしてそのとき俺は、どうするのだろう……。

もしかしたら俺は、告白してしまうのだろうか……。

やや混濁し始めていた意識の中でそんなことを繰り返し思い巡らせていると、とつぜん結弦の体ががくんと前のめりになり、とっさ

に意識が引き戻された。反射的に両手を前の座席に当てて、頭を打たずに難を逃れると、何事かと周囲を見る。他の乗客はみな平然としており、やや強いブレーキを掛けただけだった。

どうやら眠りかけていたらしいと思いながら、今どの当たりを走っているのかを、窓の外を見て確認する。バスは、結弦が降りる停留所の手前の道を走っていた。ひとまず降車ボタンを見る。ランプが点いており、すでに誰かが押していた。それから一分ほどしてバスは止まり、結弦はバスを降りてから数分歩いて自宅へと着いた。

そしてその日の夜も、思考ばかりが忙しなく走り回ってしまい、なかなか寝付けることが出来ず、ようやく眠りに落ちた結弦は、数ヶ月ぶりに夢というものを見た。

Unforgettable Part I

「それはもう確定だな」
隣のクラスと合同授業となる二限目の体育の時間、悠太にそう言われて、目の下は明らかに疲れた様子をしているが瞳は力強さを感じさせている結弦は「やっぱり、そうなのか？」ともう一度問う。それに対する返事はこうだった。
「おめでとう」
疲労感をひどく感じながらも妙に覚醒している頭の中で、果たして祝福されるようなことなのだろうかと思いながら、ようやく受け入れた。
昨晩見た夢を――。

なぜか結弦は荒れた土地で戦っていた。フルフェイスのバイクのヘルメットを被り、迷彩服を着て、アサルトライフルを構え、うつ伏せに寝転がるようにして、前方の見えない敵に向かって必死に銃弾を撃ち放っている。そして彼の周囲では、サブマシンガンや拳銃などを手に戦っている者もいれば、ピコピコハンマーを手に鬼神のごとき形相で戦っている兵士もいたり、浴衣姿の見知らぬ外国人たちが悠長に将棋をして盛り上がっていたり、日本人の若い夫婦がなぜか腕相撲していたり、他にも戦場とは思えぬ場違いな格好と行動をしている連中があちこちにいて、まったく意味不明な光景が広がっている。
やがて結弦の弾薬が尽きると、それまであった緊張感がすっぽりと抜け落ちたような表情で、すっくと立ち上がり、戦線の後方へとてくてく歩き出した。まるで近所のコンビニエンスストアへ買い物にでも行くような気軽さで。
歩き出してすぐ、周囲の風景が一変した。格好はそのままで彼は自宅の中にいた。その変化に驚くことなく、土足であることに構う

ことなく屋内を歩き、リビングに入る。テレビの画面が点っており、ゲームが映し出されていた。ただしそのゲーム画面は、遙か昔のもの。ドットが異常に大きく、色もわずか一六色しかない。まるで画面全体がモザイクを掛けられているようであるが、コミカルなキャラクターがはっきりと認識できる。

そしてそのテレビ画面を、迷彩服姿の初音が双眼鏡で見ながら、もう片方の手で器用にコントローラーを操作していた。

この光景に、見てはいけないモノを見てしまったかのように、結弦はコマのように身体を反転させ、リビングを出る。それから再び歩き始めると、ぺたぺたという足音を感じた。そして、お姉ちゃんに任せなさいという声も感じた。振り返っては駄目だと唱えながら歩く。

周囲の風景が荒れた土地になった。結弦の歩きは次第に速くなっていく。同時に、依然として感じる初音の足音と声が大きくなっていくような気がした。彼は全力で走ろうとした。しかし思うように足が動かない。それでも必死に足を動かそうとする。

助けてくれ。

そう口を開きながら。その状態がしばらく続き、もう疲れ果てたと足を止めようとしたところ、前方の一点が小さく光った。その光はとても強く、本来なら直視できないほどのもの。しかしそれを真っ直ぐ見据え、最後の力を振り絞って前へ進む。後ろには姉の足音と声。

助けてくれ。

また口を開く。そして、一歩進む毎に光が大きくなる。

また一歩。助けてくれ。光がさらに大きくなる。

そうして一〇歩ほど歩くと、光は世界のほとんどを覆い尽くし、その中心にはいつの間にか、一人の少女がいた。楽しそうに歌を歌いながら佇んでいる。

結弦はその少女に向かって言った。声なき声で。

「愛してるんだ！」

これが結弦の見た夢の全容である。この夢の中の出来事や風景の一つ一つに深い意味があるわけでもなく、ほぼ無意味なもので埋め尽くされているのだが、裏を返せば、全て無意味というわけではなかった。だからこそ、結弦はこの夢をただの夢と鼻で笑って忘れることが出来なかったのだ。

明け方近く、「愛してるんだ！」と告白したところで目を覚ました結弦は、夢の中とはいえ自身の放った言葉に驚き、そのまましばらく思考停止状態に陥ってしまっていた。ようやく思考が動き出すと、この夢が何を告げようとしているのか考え、戸惑い続けることとなった。目覚まし時計が鳴り出すまでずっと。

目覚まし音でどうにか我に返るも、平静を保つことが極度に難しく、初音にも母親にも心配されてしまったほどだった。世にも恐ろしい夢を見てしまったからと苦し紛れに誤魔化し、今日はちょっと早く行かなきゃいけないからと、初音より一足早く家を出ていた。

そうして学校に着いたら着いたで、斉東や悠太が追求してきた。最初は秘密にしておこうと口を閉ざしていたのだが、悠太に斉東、そして田野中の三人による誘導尋問に容易く引っ掛かり、夢に件の少女が出てきたこと、その少女に告白したことが見事に知られてしまったのだ。肉体的にも精神的にも疲労していたために冷静に対処できなかったが故の失策であった。

最後の一言まではさすがに教えはしなかったが、三人にとっては何と言ったかなどあまり重要ではなかった。告白したことが何よりも重要だったのだ。

こうして、結弦の彼女への気持ちがはっきりした、ということになると、その少女をどうにかして捜し出さなければという話に流れていった。しかしどうにかしてと言っても、出来ることは何もないに等しい。結弦が似顔絵を描いて、尋ね人と言ってビラを配るか、という話や、探偵を雇って捜してもらおうか、といった話など出たが、どれも非現実的な案で、現実的に可能な案となるとせいぜいが、

時間の許す範囲で、ブックストアーで張り込むというものぐらいだった。ただしその許す範囲はとても狭く、効果はゼロも同然。

そもそも出会える確率自体がゼロ同然なのだから、大差ないと言えば大差ないが。

二限目の体育以降、結弦はこんなことを考えるようになった。

彼女への気持ちについて、夢を見たことが確証になるとは信じきれなかったが、それでも恋愛感情であると認めざるを得ないという考えにほぼ固定してきている。今の問題は、別のところにあった。この感情が一過性のものなのか、それとも恒久的なものなのか、ということ。

どちらにしろ、再会できる確率を考えれば、結果的に失恋という形で終わることはまず間違いなく、ならばいつまでも想い続けるような事態は歓迎したくない。だからこそ、短期か長期かが気になってしまっていたのだ。

しかし事態は、歓迎したくない方向へと進んだ。

その日の夜、またも夢を見た。そのときの夢の中の風景は前回のものとまったく異なったものだったが、ほぼ意味不明なものに埋め尽くされていた点と、夢の中に少女が現れた点は同じだった。このとき、結弦は「愛してるんだ！」とは言わず、涼やかな少女の顔を眺めるだけ。しばらくそうしていたら、少女がこちらを向いて、そこで目を覚ました。窓の外は白み始めていて、明け方の空がくすくすと笑っているようだった。

そこから一睡も出来なかったことは言うに及ばないだろうし、日毎に疲れていくような顔で朝起きてくる結弦を初音と母親が心配したことも言うに及ばないだろう。またそれだけではなく、悠太たちもさすがに結弦の恋患いを微笑ましく笑っていられなくなってきたようだった。

またも長い一日を過ごしてきた結弦は、ぐったりした気分で学校から帰るなりベッドに倒れこんだ。正直、今は何も考えたくなかった。しかしそれを妨げるようなノックの音がした。

母親はこの日、平日だというのに珍しく会社をお休み。溜まりに溜まっている代休を、半ば無理矢理消化させられたそうだ。初音はというとまだ大学から帰ってきていない。ということで、ノックしたのは母親。

「結弦？　大丈夫？」

ドア越しに聞こえる声に、結弦はベッドから起きることなく「ああ、大丈夫」と素っ気ない口調で応えた。単に、疲れていてまともに話す気力がなく、答えることすら面倒に感じたからだった。そして会話そのものがひどく面倒で煩わしく思えてくると、ついつい口調は乱暴なものになってしまっていた。

「ここのところ、あんまり体調良くないみたいじゃない。お医者さんに行った？」

「行くわけないだろ」

「ちゃんと行かないとだめでしょう。もし病気でもしてたら――」

「だからそんなんじゃないって言ってんだろ！」

苛立ちのこもった結弦のこの一言に、母親の声がぴたりと止まった。そして数秒の間を置いて、弱々しい声で言った。「ごめんね」と。

結弦もまた、母親のこの一言にはっとして、自分自身を罵倒した。なにガキみたいなことやってだよ、お前はっ！　とっくに卒業したはずだろっ！

結弦は、自身に向かって「馬鹿野郎！」と心の中で怒鳴りつけると、ベッドからガバッと起き上がり、部屋のドアを開けた。母親はすでに部屋から離れ始めていたが、ドアの開く音でその足を止め、こちらへと向いていた。どこか寂しそうな顔で。

「母さん、ごめん。その……」

「いいのよ。私こそごめんなさいね、またあなたに、嫌な思いをさせてしまって」

「違うんだ、母さんのせいじゃないんだ、なんていうか……」どう説明しようかと言い淀んでしまう結弦。だがこのまま中途半端に言

い訳してそれでいいとは思えず、今し方の母親への態度に対する謝罪も含めて、やっぱりちゃんと説明すべきだと考え至ると、視線は床に向いてしまっていたが、振り絞るようにこう切り出した。

「俺、好きな子が出来たみたいなんだ」

なに言ってんだ俺、いきなりそれじゃ意味分かんないだろ、と自分の第一声にツッコミを入れる。しかしめげることなく先を続けた。

「それで、なんか気持ちが落ち着かなくて、苛々しちまって……。さっきのも、母さんのせいじゃないんだ。悪いのは全部俺で、だから、ごめん。母さん」

そこまで言い終えて、ようやく母親を見る。そこにあった母親の顔は、驚きに塗りつぶされていたのだが、すぐに喜びの色に取って変えられ、まるで年頃の女の子のようなはしゃぎっぷりで息子へ駆け寄った。

「やだもうっ！　この子ったらっ！　それならそうと言ってよ！　そうなの、好きな子が出来たの。ねえ、どんな子なの？　もちろん可愛いんでしょ？　そりゃそうよねえ、結弦って、昔っから面食いなところがあったものねえ。同じ学校の子？　どこで知り合ったの？　ああそういえば、あなたが幼稚園の頃だったかしら、隣のクラスの――」

嬉々としてまくし立てる母親に、結弦は何度か「ちょっと待った母さん、とりあえず落ち着け」と言うが、その声は聞き届けられず、この状況に、さっきの罰として甘んじて受けようと白旗を揚げたのだった。

母親が冷静さを取り戻すと、ようやく結弦も喋ることが出来るようになり、補足の説明をした。相手の女の子は一度本屋で見掛けただけで、名前も知らず、住所も年齢も知らないということを。それを聞いた母親は、我が事のようにひどく残念がった。

「もう一度会えるといいわね」

「ああ。俺もそう思う」

「ねえ、もし再会できたら、絶対に家に呼ぶのよ？」

「そんなの向こう次第だろ。ていうか、向こうが俺のことどう思うかだって分からないんだし、相手にされない場合だってあるんだぜ？」

「なに情けないこと言ってんの。男の子でしょ。それにね、あなたはお母さんの子なのよ？　もっと自信持ちなさい」

「ごめん。たったいま完璧に自信なくなった」

「なによそれ」

「冗談だよ」結弦はあまり表情を作らずにそう言うと、直後に素直な笑顔で笑った。そしてつられるように母親も笑っていた。

この出来事を境に、それまでのもやもやしていたものが嘘のように消え去り、気持ちはとても落ち着いたものになった。そして、それまでのここ数日の自分を改めて思い返すと、なんてガキ臭いことしてたんだと、顔から火が噴き出しそうなほど恥ずかしく思えてならなかった。そしてこれが、恋患いという病の症例なのかとも。

その後、初音が帰ってくると母親はそのことを娘に話し、すでに知っていたことを聞かされると、少し寂しそうにしていたので、姉に口止めをしていた理由を話した。ちょっと前に自分の気持ちに気付いたのであって、それまでは自分でもよく分からなかったからだと。

そして初音の気合いは、結弦が本気で心配になってしまうほどさらに増したものになっていた。

Intersection Part III

ベッドで寝っ転がりながら、電話の相手に向かって神妙な顔で結弦が言った。
「いよいよ明日だな」
相手もまた神妙な声で答える。
「ああ、いよいよだ」
「緊張しすぎてしくじるなよ」
「かませろ！」
少し間を置いて、「……とりあえず深呼吸だ。五十嵐」と冷静な結弦の声。
などと、明日の決戦についてしばらく二人は話した。
明日は日曜日。悠太と宮倉祐子がもう一度会う日である。付添人として斉東と彼の旧友である安達和美が同行するのだから、破滅的な失敗はないだろうと思ってはいたが、それでも心配はある。なにぶん、相手は生粋のお嬢様。今まで幾人かの女の子と付き合ってきた経験を持つ悠太とは言え、勝手が違いすぎるのだ。
ゆえに悠太がこれだけ戸惑いを見せていたのだ。またそれはつまり、それだけ本気であるという証拠でもある。
「とにかく、あんまり意識しすぎるなよ。この前みたいな感じで接していれば、悪いようにはならないだろうからさ」
「ああ、それは理解しているつもりなんだけどな。実践できるかどうか」
「お前なら大丈夫だって。まあ、駄目だったら駄目だったで、お前の骨を二、三本拾って、丁重に川に流してやるよ」
「……お前、俺の応援団長じゃなかったのか？　んなこと言いやがると、お前の応援団長を、直々に初音さんに依頼してやるぞ」
「すまん俺が悪かった許してください」
「よし。じゃあ、成功するように、明日一日俺のために祈り続けろ」

「それは面倒だ。もっと簡単なのにしてくれ。例えば、空の向こうのお前に向かって一回だけ敬礼するとか」
「応援したいのかしたくないのか、よく分からないんだけどよ」
「両方」
「やっぱ初音さんに――」
「やっぱ片方。応援の方だ」
「ならそれで手を打ってやろう。間違っても、空に向かって『ムチャしやがって』とか言うなよ」
それからもうしばらく、笑い声を交えながら話をして、悠太との電話を終えた。電話を掛けてきたときの彼は心落ち着かない様子であったが、電話を切るときには、いつもの悠太にだいぶ近づいていたので、結弦も多少ながら気が楽になった。
とはいえ、現実問題として障害は少なくはないと思われるので、まだまだ気は許せない。生活環境が大きく異なり、それ以上に様々な価値観が異なる二人がうまく付き合っていくことは、とても難しいことのように考えているからだ。
「まあ、なるようになるだろ」
通話を終えた携帯の待ち受け画面をぼんやり眺めながら、そう独り言を呟いた。すると、その言葉がするりと自分自身に返ってきて、そのまま悠太のことから自分自身のことに思考が移った。
なるようになるしかない。
名前の知らないあの少女のことは。
そう、あの少女と再会できるのだろうかと考えたところで、なるようにしかならないのである。出会う運命であれば、いつの日かどこかで出会うだろうし、そういう運命でないのなら、永遠に出会うことはないだろう。ただその運命に従うだけだ。そしてもしももう一度出会うことが出来たのなら、それは奇跡と呼ぶにふさわしい出来事だろう。
しかし、奇跡などそうそう起こるものではない。ましてや、都合良くすぐに起こるものでもない。となれば、その奇跡を気長に待ち

続けるしかない。その間にこの想いが薄れたり消えてなくなってしまえば、それまでのこと。

そんなことを考えていると、ドア越しに「晩ご飯出来たよ」という初音の声がした。結弦はすぐにベッドから起き上がり、そのまま初音とダイニングキッチンへと向かう。その途中、初音が「明日、なにか予定ある？」と聞いてきた。

条件反射的に、一瞬悠太のことを思い浮かべたが、すぐに「いや、何もないけど」と頭を切り換えて答える。

「そう。それじゃあ明日は、私の荷物持ちに決定ね」そう笑顔で言い切る初音に、結弦が即答。

「断る」

「えー、いいでしょう？　結弦にも何か買ってあげるから。ね？」

「なんで俺がそんなことしなくちゃいけないんだよ」

「だって、私一人じゃ持ちきれそうにないんだもん」

「だったら、持ちきれる分だけ買えばいいじゃないか。無理にたくさん買わなくたって」

「安くなるのは明日だけなの。ね？」

初音はそう言うと「このとおり、お願いっ」と、結弦を拝むのではなく、満面の笑みで思いっ切り抱きついた。初音が結弦へお願い事をするときの、最終奥義を放った瞬間である。結弦は「なにしてんだよ！　離れろ！」ともがくが、あまり乱暴に引き剥がすわけにもいかずに防戦一方。そして最終奥義を出されての持久戦において、結弦が勝利したことはここ数年一度もない。今回もまた、やはり敗北したのだった。

「わかった！　わかったから！」

「ほんと？　じゃあ明日、付き合ってくれる？」

「するする！」

「よし。なら放してあげよう」

初音はそう言ってようやく、腕ごと抱きしめていた結弦の身体から離れると、スキップの音が聞こえてきそうな足取りで歩き出した。

その姿を、ぜいぜい言いながら眺める結弦は、こう思わずにはいられなかった。

初ネエって、実はとんでもない悪女なんじゃなかろうか、と。

そして翌日、悠太のことを気にしつつ、結弦は約束どおり初音の買い物に付き合うこととなった。開店前に並ばないといけないということで、日曜日だというのに、二人はいつも家を出る時間とたいして変わらない時間に出立。幸いにして、結弦の眠れない夜は母親に言ったところで終わりを告げ、最低限の睡眠時間は取ることが出来ていたので、やや眠たさはあったものの、疲労感はなかった。

二人は通学時のコースをなぞるようにバスに乗り、電車に乗り換える。そして結弦がいつも降りる駅を通り過ぎ、初音が電車を乗り換えるその先のターミナル駅で降りた。この辺りで一番栄えている街で、若者向けの店が数多く存在している。ゆえに若者の姿がとても多い場所なのだが、時間が時間なので、その面影はまだなかった。

駅から少し歩いたところで、開店前のお店の前に並ぶ十数人の行列を発見。若い女性ばかりなので、おそらく姉の目的地はあそこだろうと察すると、まさにそのとおり。二人はブランドバッグの専門店であるそのお店に並ぶ行列の最後尾に並んだ。

覚悟はしていたが、居心地の悪さは思っていたよりもひどく、さすがに開店まで耐え続けるのは辛いと思った結弦は、店が開く時間には戻ってくるから、ちょっとぶらついてきていいかと聞いた。初音の了承を得ると、時間には必ず戻ってくるようにと念を押されて、その場から離れていった。

そうして街中をぶらつき始めたのだが、どこの店もまだ開いていない。さてどうしたものかと考え、手っ取り早くコンビニエンスストアーで時間を潰すことにした。漫画雑誌を適当に選び、ぱらぱらと立ち読み。時間を確認しながら別の漫画雑誌も流し読み。続いて端にあるコミックに手を伸ばすも、時計を見て止めた。まだ少々時間はあったが、コミック一冊を読み切る時間はない。ならばまた別の漫画雑誌を、と思っても先ほど立ち読みした二誌以外に興味のあ

るものはない。
そこで、たまたま目に付いた男性向けのマガジンを手に取った。その内容は、服や帽子、サングラスなどのファッション関連から、ミニカーやらモデルガンやら様々な趣味の世界のアイテムなどを紹介したもの。
自分に興味のあるモノが載っているかなとめくり、何度か手を止めては少しだけ記事を読む。そうして最後のページをめくったところで、星座別の今週の運勢が掲載されていた。こういう類の占いをまったく信じない結弦は、いつもであれば相手にしないところだが、この日は事情が違う。
悠太の星座を探し、数行の短い文章を読んだ。その内容は、大きなイベントで大成功か大失敗かするでしょう、といった感じのもの。当たり障りのない、無難な着地はきっと無理、と言いたいのだろうと解釈した結弦は、いかにも悠太の運勢らしいコメントだなと思った。
次いでその下に書かれている、恋愛運を示す星印を見た。五段階評価になっており、その星座の星の数は四つ。まずまずじゃないかと、結弦の頬が少し緩む。占いなど信じていないと言ってても、良いことが書かれていると期待したくなってしまうのは、人間として自然な反応だろう。
そして、ついでに自分の星座にも目を向けてみた。初音に連行されているまさに今を予言するような内容が書かれていたら笑えるな、などと冗談で思いながら。
「上司や先輩ともめて、人間関係が気まずくなるかもしれません。目上の人への言葉遣いや態度に十分に気をつけましょう。とくに異性の上司には要注意です。って、俺帰宅部の学生なんですけど。知り合いの先輩だってほとんどいないし」
そう呟いて、待てよ？　と思いついた。
「異性の上司って、実の姉も入るのか？」
この件については、早々にどうでもよくなっていた。恋愛運をち

らりと見て、こちらのことが優先されたからだった。そこにある星の数は、たったの一つ。彼女と再会できる確率を考えれば、その数は驚くものでもない。だが妙に生々しく感じ、「そんなとこだろ」と独り言を呟いて見なかったことにした。

マガジンをもとの場所に戻すと、時間を確認する。そろそろ頃合いになっていたので、自分の分と初音の分の飲み物を買って戻った。

行列の長さは、結弦が離れたときの二倍以上になっていた。しかもその長さはまだ延びる気配を見せており、お店が開いたら店内でどんな光景が繰り広げられることになるかを想像した途端、冷たい汗が毛穴という毛穴から噴き出してきたような気がした。

初音のいる場所へと戻ると「お帰り」と迎えられ、結弦はレモンティーを初音に渡すと、たまらず聞く。

「なあ、店が開いたら、俺はどうすればいいんだ？　やっぱり俺も中に入るのか？」

「もちろん」

その返事に、やっぱり昨日断固として拒否すべきだったとため息が落ちる。そんな結弦に初音はくすっと笑う。

「そんなに心配しなくていいわよ。なにも、結弦にも買わせようだなんて思ってないから。言ったでしょ？　荷物持ちだって。結弦は私の側で、私が渡すモノを受け取って、持っていてくれればいいの」

そうは言われても、ニュース番組などで見掛けるようなバーゲンセールでの修羅場を想像している結弦の気持ちは、たいして楽にはならない。果たして自分は、生きてこの店を出られるのだろうかと半分本気で考えてしまっていた。

やがて店員が拡声器を手にして現れ、注意事項を喋る。飲みかけのペットボトルを二つ、背負っている自分のバッグにしまいながらそれを聞いているうちに、結弦はますます不安になっていった。

そして、ついにゴングが鳴った。店内に入るまではそう行儀悪くなかった客たちも、入るや否や、特設コーナーへと猛然と走り出す。とうぜん初音と結弦も。店内は苛烈な女の戦場と化し、甲高い怒号

や奇声が狂ったように乱れ飛ぶ中、逃げ出したい心を必死に抑えて、微塵も怯まずに戦利品を次々と手にしていく初音から、その戦利品を受け取っていった。

このときの様子を、彼は後にこう語っていた。

「女って、ほんと恐ろしい生き物なんだな」

荒れていた頃の自分を棚に上げての発言ではあるが、間違ってはいない発言である。

それはともかく、いったいいつまでこの地獄絵図の中にいなくちゃいけないんだと思っていると、突然初音から撤収命令が下った。やっとここから出られると思いながら、押し合う群衆からどうにか脱出。比較的息のつける一角に出ると、結弦は深い深いため息をもらした。一方、初音はというと息切れ一つなく平然としている。

なぜ平気な顔をしていられるのだろうと疑問に思ったが、占いを思い出し、考えるのは止めにした。

その後、ハンドバッグやショルダーバッグなど計八点の戦利品を初音が手早くチェック。どれも満足のいくものだったらしく、それら全てを持ってレジへと移動した。このとき、店内に置かれている時計を見て、結弦は驚いてしまっていた。というのも、戦争が始まってから撤退するまでの時間が、一〇分にも満たなかったのだ。一時間近くああしていたような感覚でいた結弦にとっては、信じがたい時間だった。

このお店での買い物を終えた二人は、バッグ八つを手に店を出る。そして、不安を胸に結弦は尋ねた。

「あのさ、まだ買い物する気？」

「もちろんよ」

「いやでも、こんなに荷物があっちゃあ……」

「まさか、これ持ちながらなんてしないわよ。確か駅の近くに宅配屋さんがあったはずだから、そこで家に送っちゃうわ」

「なるほど。で、まさかまたこのぐらい買うつもり？」

「ううん。もうそんなには買わないから、安心して」

駅前の宅配屋に着くと、さっそく配送の手続きをした。その際、結弦は業者の男性に「金遣いの荒い彼女を持って、大変だねえ」と小声で囁かれたので、「いや、姉です。それと、ほとんど友達に頼まれたものらしいです」と、誤解を解いていた。

その後、結弦は初音のあとに付いていくようにして、あまり馴染みのないこの街の中を歩き回り、たくさんのお店に連れて行かれたのだが、ただでさえファッションというものにあまり関心がなく、入るお店の多くが縁の遠いものばかり。しかも女性ものだけを揃えた店に入ることもあったりで、結弦の体力は徐々に削られていった。

昼頃になると、そろそろ解放して欲しいと思い始めていた。最初のお店を出てから買った荷物も、初音一人で余裕で持てる量でもあったので。しかし、まだ解放してもらえそうになかった。荷物持ちの交換条件として初音が言った「結弦にも何か買ってあげるから」という約束が、まだ果たされていないのだ。

結弦としては別に買ってもらおうとは思っていないのだが、どうやら初音が、何か買ってあげないと気が済まないらしい。しかも、何を買うかは初音が選ぶようになっているらしかった。なお、結弦に似合う格好いい服、というのは決まっていた。ということで、その似合う服を探す旅は、お昼ご飯を挟んで続けられた。

そして幸いなことに、昼食後に入った二軒目のお店で、その旅は終わりを告げた。

「これいいんじゃない？　ちょっと着てみて？　うん。なかなか。それじゃあ、これと組み合わせてみたら……。うんうん。格好いい。ね、どう？　ほら、結弦も格好いいと思うでしょ？　よし、これとこれにしよう。いいよね？」

初音が選んだその服に不満はまったくなかったので、結弦は「ああ、いいと思う」と答える。正直、どちらもそれなりにいい値段のするものだったので、申し訳ない気持ちもあったが、ここはひとまず甘えておいて、違う形で返そうと考えていた。

店を出ると、初音は「んーっ！」と大きく伸びをして、結弦に「

疲れた？」と聞いた。
「正直、ちょっとね」
「だよね。それじゃあ、買うものも買ったし、帰ろうか」
「いや、俺もうちょっと歩くよ。滅多に来ないから、いい機会だし」
「私もついてこっか？」
「いや、一人でぶらつく」
「ん。じゃあ私は帰るね。遅くまでいちゃ駄目だよ？　それと、変なお店に入ったりしたら駄目だよ？」
　変な店ってどんな店だよ、とは怖くて聞けない結弦は、「分かってる」と答えておいた。そして初音は、自分の分は自分で持つと言った結弦の申し出を断り、買った荷物を一人で全部持って家へと帰っていった。全部、と言ってもそう重い荷物でもなく、かさばる量でもないが。
　ようやく荷物持ちから解放された結弦は、適当に歩き始めた。
　初音のあとにくっついて、ファッション関係の店ばかりに入っていたので、それまであまり気に止まらなかったのだが、一人で歩いてみて、様々な種類のお店があることに気付いた。お店だけではない。行き交う人々についても。若者の街というイメージの強かったこの場所も、よくよく見回してみると、様々な年齢層の人たちが楽しげに歩いており、外国人の姿もぽつりぽつりと見受けられる。
　この街の多種多様性に今更ながら気付き、周りの景色が活気ある色に彩られているような感覚が全身に広がってくると、思わず感心するように「へえ、こういう街だったんだ」と呟いていた。
　いつしか疲れは霧散し、肌に伝わってくるさまざまな色や音に身を委ねながら歩く。どこかに行くためでなく、それを感じるために。こういう楽しみ方もあるのか、そんなことを考えたりしながら。
　時間というものをすっかり忘れて、そうやって黙々と歩いていると、全身を無数の針で軽く突かれて総毛立ったように、肌が震え上がった。そして、まさかという気持ちで、それを耳にした。
　ブックストアーで聞いた、あの少女が歌っていたメロディーを。

咄嗟に、結弦は振り返った。そしてツバの狭い麦わら帽子を被った、小柄な少女の後ろ姿が彼の瞳に映った。

一瞬、これは夢ではなかろうか、もしくはまったく別の少女なのではなかろうか、などと、目の前の現実を受け止めることが出来なかった。しかし、その少女が口ずさんでいる歌がそれらの否定意見をことごとく粉砕していく。まるで、自分がその少女であることを結弦に告げるかのように。

そして結弦は駆け出し、少女を追った。離れていた距離があっという間に詰まると、彼女へと伸ばした手が届き、華奢なその肩に触れた――。

Bullet and Shorts

朝の光を全身に浴びながら、全長二、三センチのオオアリクイは楽しげに揺れていた。そしてそのオオアリクイの目の前には、楽しげに微笑む奏の顔があった。それは昨日雑貨屋で買ったペンダント。まさかそれを首から提げて登校するわけにもいかないので、奏は上着のポケットに忍ばせ、見るときはこうしてポケットから出していた。

アクセサリーの類を学校に持ち込むことは滅多にしない奏がこうして持っているということは、それだけ気に入っているという証拠でもある。

そしてオオアリクイを少し眺めてはポケットにしまい、しばらく経って思い出したようにポケットから取り出しては眺めていた。例えばホームで電車を待っている間とか。その際、彼女が「可愛い」と呟くと、周囲にいた人たちの一人か二人がつられるようにオオアリクイに目を向けて、え？　という反応をしていたのだが、彼女の瞳には映っておらず、耳にも届いてこなかったので、その事実を知る由もなかった。

こうして何度もオオアリクイを眺めてはくすりと微笑み、ときおりその向こう側で、バッティングセンターで見かけた少年のことを思い出していた。

バットの握り方すら知らない女の子二人を相手に孤軍奮闘する男の子。そのときの様子が鮮明に思い返され、その微笑ましさに、昨日の夜から幾度となく繰り返してきたようにくすりと笑ってしまう。その回数は、奏自身まったく気にしていなかったので知らずにいたが、実際に数えていたら驚いていたことだろう。

オオアリクイへと投げかける言葉によってささやかな驚きを周囲に提供しつつ、上機嫌でメロディーを口ずさみながら学校に向かった。しかし学校に着くと、早々に鼻歌どころではなくなった。

先週の馬鹿騒ぎからある程度の予想はしていたが、まさか上履きに履き替えるところから騒ぎが始まるとは思っていなかった奏は、今立っている下駄箱の前から自宅の玄関へと戻りたい気持ちになっていた。それほど、何人もの生徒が奏を見るや否や瞬く間にわらわらと集まってきて、周囲を取り囲まれ、質問攻めの苦行に遭っていた。その質問の内容はどれも同じで、クリスタルガーデンで食べたケーキは何か、それはどんなケーキで、美味しかったかどうかといった、予想と寸分違わぬものだった。

みな自分勝手に質問してくるので、どれに答えればいいのかまったく分からず、あとで教えてあげるからとこの場をどうにかしようとするも、みな質問することに夢中で聞こうとしない。靴を履き替えようにも彼らが邪魔で迷惑に感じる生徒は多いはずなのに、文句をいう者は一人もいない。そこは群衆も気を遣っているようで、そのときだけ場所を空け、立ち去るとすぐにその場所を埋める。さらに、履き替える生徒の中に、この群衆と一体となる者もいた。

自分の力ではどうにも出来ないのかと思うと、誰か助けて、と救いを求めながらも、予鈴のチャイムを待つしかないのかしらと諦めの気持ちでため息をついていた。

すると、奏の目の前に、逆さになったマイクがすると降りてきた。まるで天井から蜘蛛が降りてきたかのように。誰一人として予期していなかったこの展開に、全員が目を点にして言葉を失った。世界から切り取られたかのような空白が、奏たちを覆った。

そしてその隙を逃すことなく、一人の女生徒が「一度にそんな聞かれたら答えられないでしょ」と言った。

その声は群衆の中からでもなく、奏の口からでもなく、頭上から聞こえてきた。

はたと現実に戻った奏と生徒たちが、何事が起きたんだと見上げると、下駄箱の上で、棒を使って奏の前にマイクを垂らしている男子生徒と、もう一人女子生徒がいた。二人の腕には『報道関係』と書かれた腕章が巻かれており、女子生徒の方は奏のよく知った人物

だった。先週、奏と敦穂の取引を大々的に取り上げ、すぐに謝罪文を発表した新聞部編集長である。

「ここは我ら新聞部に任せてちょうだいっ。我が部の総力を挙げて、余すことなく徹底取材して、髪の毛一本も逃さず記事にするから」

演説めいた彼女の言葉に、それならばという声がぽつぽつと漏れ出し、すぐに誰もが同意していた。大半の生徒から支持されている新聞部だからこその力技と言えよう。奏からはあまり支持されてはいないが。

こうして場が収まったところで、今度は横から声が飛んできた。男性教師の声で、怒気を含ませて。

「またお前らか新聞部！」

教師の怒りの矛先の一人である編集長は、マイク担当である側の男子生徒に「退却！」と号令を出す。その男子生徒は「サー、イエッサー！」と真剣な表情で返事をし、二人は身をかがめて下駄箱の上を走りだした。男子はズボンだからいいが、女子である編集長はスカート。中には色めき出す男子生徒や、そんな男子生徒に白い視線や言葉を投げつける女子生徒もいたが、ほとんどの者は知っていた。

「報道する者にとって、一瞬一瞬が戦場なのよ。だから、いつでも戦場に立てるように準備しておかなきゃいけないの」とよく口にする編集長が、スカートの下に常に短パンを穿いているという事実を。

そしてその事実は、編集長が下駄箱から華麗に飛び降りたときに改めて確認されたのだった。

新聞部が色々と問題を残していったような気もしたが、散っていく群衆を前に奏はほっと一息つく。しかし、この場はこれで収まったが、今日一日こんな感じで過ごすのかと思うとため息もこぼれてしまう。

どうしてこんな馬鹿騒ぎするのかしら。

そんな愚痴を心の中で呟き、それはこの学校だから、という一人ボケツッコミをしつつ、また色々聞かれるのだろうかと気を重くし

て教室に入った。すると意外なことに、誰も根掘り葉掘り聞き出そうとはしてこない。昨日のことについて何も触れてこないわけではないが、その触れ具合が驚くほど浅いのだ。その状況に少し不思議に思ったのだが、理由はすぐに分かった。

「楽しみにしてるね、奏」

「くうっ、今から号外が待ち遠しいわ」

などと喋り掛けてくるクラスメイトの手に、『特報』と書かれた新聞部発行のチラシが握られていた。そのチラシの発行日は今日。そしてそれを見せてもらうと、奏の独占インタビューを告知した内容となっており、しかも新聞部以外による奏への取材は控えて欲しいという文章まで書かれていた。

このチラシをいつもらったのか聞いたところ、新聞部の部員たちが朝一で全教室を回り、配っていたそうだ。新聞部のこの行動力には、奏もただただ呆れるほかなかった。しかし、これで平和な日常を送りやすくなったのは事実。感謝もしなければならないところだろう。

そうして平穏のうちに二限目まで終わり、続く休み時間に編集長がやってきた。本当は一限目の休み時間に来たかったのだが、その時間は部下一名とともに職員室で怒られていたので、この時間の来訪と相成った。

編集長は奏の席へと突き進み、「奏。学校終わったあとなにか予定ある？」と尋ねた。

「ある」

「そう。それじゃあ迎えに来るわね」

「私、あるって言ったんだけど」

「インタビューは新聞部の部室でやる予定だから。それと、何枚か写真撮らせてもらうからよろしく。それじゃまたあとで」

「だからあるって」

奏の言葉は中空を虚しく舞い、言いたいこと全てを言い終えた編集長は、教室の空気を切り裂くようにさっそうと出て行った。風格

さえ感じるその様子に、風のようにやって来て、風のように去っていくとはまさにこの事だろうと、数人の生徒たちは感心していた。

当の奏は悠長に感心している場合ではなく、「もう。いっつも強引なんだから。さっさと帰っちゃおうかな」とこぼしていた。するとそれを聞いた友人たちが、本当に用事があるのか聞いてきた。彼女たちにまで嘘を付くのもどうかと思った奏は、実はないと答えていたのだが、それがいけなかった。

昼休みになりお弁当を食べ終わると、敦穂が昨日のレシートと、証拠として携帯で撮した写真のプリントを教壇に並べ、黒板を使って公開決済が行われた。そして奏の食べた四・五という数字に、事前の協議どおりだと密かに納得する者や、せっかくなんだからもっと食べてやれば良かったのにと言う者もいた。

この公開決済は、奏にとって恥ずかしいものではあったが、事前協議と、四・五を少ないとする意見の多さに助けられて、恥ずかしさはだいぶ軽減されていた。そして、もう一個ぐらい食べても良かったかなとも、ちらりと思っていた。

公開決済が無事に終了し、なぜか拍手に包まれながら閉会となると、今度は奏の世話になっている者たちだけで集まった。むろん、仙台敦穂もその一人である。そこで一人一人の負担金額が明示され、明日間違いなく敦穂に支払うということで解散となった。

そして引き続き午後の授業を受け、ホームルームも終わった。掃除当番でもなく、所属している研究会も定休日の奏は、帰り支度をして編集長を待つことなく席を立つ。すると、一人の男子生徒が「ちょっといいかな、立華」と声を掛けてきた。彼はクラスメイトからも教師からも信頼の厚い、クラス委員長。ただしあまり頭は良くない。それでも信頼を受けているのは、彼の人柄によるところが大きく、それは誰もが認めていることであった。

「なに？」

「実はさ、羽山から頼まれ事されちゃってさ。それがけっこう面倒で、立華の力を借りたいんだ。いいかな」羽山とは、このクラスの

担任教師。補足説明をすると、妻一人娘三人を持つ、最後の二〇代を送っている愛妻家。
「別にいいけど、今？」
「ああ、今日の夕方までって言われてるんだ」
「そう。分かった。それで、どんなこと頼まれたの？」
「いいのか？」
「うん」
「よかった、助かるよ。それじゃあ場所を移そう。実は羽山に、準備室使っていいって言われてるんだ。掃除の邪魔しちゃ悪いからね」
奏はその言葉に「そうね」と答えて、鞄を持って委員長とともに教室を出る。これで編集長とも顔を合わせずに済むという思惑も抱いて。そして数学の準備室の前にやってくると、委員長はドアをノックし、返事を待たずに「失礼しまあす」と戸を開けた。中では、壁に向かって並べられた三つの机のうちの一つで、担任の羽山が一人で仕事をしていた。
「おう。悪いな」
「いえ。それじゃあ隣の部屋使わせてもらいます」
「ああ。立華も悪いな。力になってやってくれ」
「はい」
このとき奏は、続き部屋になっている隣の部屋には話し合いをするスペースなどなかったはずだけどと首をひねった。そこは数学の授業に使う教材を保管する部屋で、狭苦しい物置と化していたはずだからだ。しかし、整理整頓をしてレイアウトを変更した可能性は十二分にある。もしそうでなければ、そこでは出来ないだろうと言って、担任が止めるはずだからだ。そしてその考えがそもそもの間違いだった。彼女は、担任の言葉の意味をまったく理解していなかったのだ。
保管室の手前まで来たところで、委員長が「あ、そうだ。先生」と足を止めた。そしてくるりと反転して担任の方へと歩き出す。その際、「先に入って待ってて」と奏を促した。奏は何の疑問もなく

それに従い、入り口脇にある保管室の明かりのスイッチを押すと同時に、先に一人で部屋に入った。

そして、目の前の光景に思考回路が止まり掛けた。

保管室に足を踏み入れた瞬間、異空間にでも迷い込んでしまったのかと本気で思った。

彼女の記憶では、そこは薄暗く、天井まで届きそうなスチール製の棚が部屋の中央と壁際に並び、そこには様々な教材や段ボール箱が雑然と置かれていて、まさに物置部屋だった。そこで相談すると直前に知った奏は、整理整頓して、小さなテーブルと丸椅子が置かれているのだろうと想像した。しかし彼女が踏み入れたその場所には、まったく想像していなかった空間があった。

中央にあった棚もなければ、壁際にあった棚もない。いや、壁際の棚はあるのだろうが、きれいな白い布で隠されているのだ。しかもその白い布は壁一面に掛けられており、天井も一部分だが隠されていた。そして、部屋の奥に一人掛けの赤いソファーが置かれている。肘掛けや背もたれなど、全体が丸みを帯びたデザインのそのソファーは、まるでこのまま写真を撮ってカタログに掲載してもらおうとしているかのようにも見受けられる。

この状況に半ば呆然としつつ立ち尽くしていると、準備室の戸が開く音がして、はたと意識が現実に戻ってきた。そしてこの状況の説明を委員長か担任に説明してもらおうと振り返ると、そこには「お待たせー」とにこやかに中に入ってきた編集長がいた。しかもその後ろには、見覚えのある新聞部の顔がいくつもあり、その手には照明やマイク、録音の機材などがあった。

状況を理解した奏は、すぐに委員長を責めるような眼差しで「嘘ついたのね」と言った。しかし委員長は、その眼差しに動じることなく「嘘は言ってないよ」と笑顔で答える。

「だって、先生に頼まれたって」

「うん。先生に頼まれたんだ。ねえ、先生？」

その言葉に、奏の視線が担任へと向けられ、担任は申し訳なさそ

うに「いやあ、僕も頼まれたんだよ」と答えた。そしてその返事に、奏の頭の中ですべてが繋がった。誰が頼んだかなど、事ここに至って考えるまでもない。そして頼まれたその担任は、新聞部の顧問でもある。

担任が言った「力になってやってくれ」という言葉は、てっきり“委員長の力に”という意味だと思っていたのだが、実際は“新聞部の力に”という意味だったのだ。つまり、担任も委員長もグルだったというわけだ。

思わず、「ひどい」という言葉が奏の口からぽつりと漏れた。

これにはさすがに担任として、何もフォローしないわけにはいかない。

「まあ、こうでもしないと、立華も年がら年中みんなから騒ぎ立てられて困るんじゃないかと思ってな。これも平穏な学生生活を送るためだと思ってくれ。それに、記事は事前に僕がチェックするし、立華にも見てもらう。先週みたいなことは絶対にさせないから」

担任の言うことは奏も理解できる。確かに新聞部のインタビューを受けた方が、彼女自身への実害はより小さいものになるだろう。しかし、だからといって人を騙すようなやり方はどうにも納得できない。

「それでもやっぱりひどいです。こんな風に騙して」

さらなる奏の言葉に、罪悪感から担任が「う……、申し訳ない。本当にすまん」と頭を下げた。しかし誰よりも頭を下げるべき人物は、頭を下げるどころか高らかに言い放った。

「エンターテイメントにサプライズは当然でしょ」

「まったく説明になってない」

「読者の心をつかむには、まず出演者の心からってやつよ」

「つかんでないし」この場合の読者とは当然この学校の生徒および教師。そして出演者とは立華奏。

「そう言わずに、入って入って。嫌な思いは絶対させないから。約束する。それに、もちろん独占インタビューさせてもらうお礼も用

意してるから」
　編集長はにやりと笑みを浮かべると、ポケットから何やら取り出した。すると、手に持っているものとは別に、何かが床にひらりと落ちた。奏は編集長の手にあるモノよりも床に落ちたモノにまず興味を持ち、それを見る。
　それは一枚の写真だった。そしてそこに映っていたのは、学校の机に突っ伏してすやすやと眠っている、奏の寝顔。
　なんでこんな写真が、と思った瞬間、はっとして視線を委員長に向け、この写真が賄賂であることを理解した。そしてまさかと思いつつ担任を見ると、その意図を察したようで、「僕はたんに、立華のことを考えてだな」と弁明。しかしその目は泳いでおり、賄賂を受け取っているのは明らか。
「教師なのに、嘘ついていいんですか？」
「い……、いやあ、色紙もらっちゃってね。プリキューってアニメ知ってるか？　あれ、娘たちが大好きでさあ。それの声やっている人のサインがちょうど三枚あるって言うんだよ。あはは、よく三枚も手に入れられたよね～」
「笑いながら言っても無駄ですから」
「そ、そうだよね……、うん。で、でもな？　お前のことを考えてっていうのは本当だぞ？　お前にとって不利益になるんだったら、例え色紙をちらつかされても、協力したりしないよ」
　しかし半分呆れたような奏の眼差しがそれは嘘だと訴えていることに気付き、「……たぶん」という力ない言葉を正直に付け加えていた。
　そして奏が次に視線を向けた相手は、編集長。
「もう。こういうことしてるから、女フライジャーって言われるのよ？」
「そんな誉めないでよ。照れるじゃない」
「誉めてないし、照れるんじゃなくて落ち込むところ」
　フライジャーとはＵＷＥ（Ｕｎｉｔｅｄ　Ｗｅｓｔ　Ｅｕｒｏｐ

e）の元首相ユーリック・フライジャーのことで、莫大な賄賂によって権力を欲しいままにした、悪名高き人物の名である。ただし、彼の行った政策の中には後のＵＷＥにとって重要な基盤となったものもあり、彼のやり方はともかくとして、その業績を評価する声も一部ではあった。

「まあその件はいいとして、これ、どうする？」

編集長はそう言って、手に持っているモノをひらひらとはためかす。それが奏への賄賂であることは言うまでもない。

「私にそんなモノが通用すると思ってるの？」

挑戦的な奏のその問いかけに、編集長は余裕の表情で「うん」と答え、手にしているそれの正体を明かした。

「だってこれ、イエローバーズのライヴチケットだもの。ちなみに、ＳＳ席のペアチケット」

嘘、と言いたかったが、それが嘘でないことは編集長の自信が物語っており、彼女ならそのプレミアチケットを入手していても不思議ではないと考えた奏は、思わずごくりと喉を鳴らしてしまった。

ここで奏は考えた。大好きなバンドのチケットを諦めるか、それとも賄賂に屈するか。

そして、もはやインタビューのことなど二の次になっていたことに気付く余裕は、奏にはなかった。賄賂とは、本当に恐ろしい代物である。

真剣な表情で悩む奏。屈したくないけど、諦めきれない。そんな葛藤が繰り広げられた。そして彼女の様子をじっと見守っていた編集長は、時は満ちたというように、軽やかに言った。

「結論を出すのは後でいいわよ」

「え？」まさかの彼女の一言に驚きの声を上げる奏。てっきり、意地でも今ここでインタビューを成功させようと企んでいて、交渉の延期は絶対にないと思っていたからだ。しかし奏のその驚きも、結局のところは無駄なものだった。やはり編集長は、インタビューの延期など考えていなかった。

「とりあえずインタビューして、もし最終的に記事にして欲しくないって思ったら、号外を取りやめにすればいいんだから。先週の今週で、またあなたに無断で出すわけにもいかないし、大事な金ずる――じゃなくて学校側が本気で怒りかねないからね。で、最終的に記事にしていいってなったら、このチケットは奏のもの」

「たかだかケーキの感想とか言うだけで、そんな高価なチケットを用意するなんて、絶対に何かある」

「本当に信用ないなあ。このインタビュー記事にはそれだけの価値があるってこと。新聞部にとっても、読者にとってもね。んで、その価値に相当するものが、このチケットってこと。それだけよ。で、どう？　悪い交渉だとは思わないけど？」

決断はあとですればいい、という交渉術は、時として相手を油断させ、最後は相手の迷う心を折って成立させてしまう。時間という毒が交渉材料の価値を何倍にも高めて、最終的にその交渉材料を諦められなくさせるのだ。そしてこの場での交渉材料が、奏の大好きなイエローバーズというメジャーバンドのライヴチケットで、ファンからすれば喉から手が出るほどの代物である。

そして、奏はまんまと編集長の策略にのってしまった。

「本当に、あとで断ってもいいのね？」

「報道魂に偽りなし」

「ここでそれ言われても、ぜんぜん説得力ないんだけど」

と言いながらも、結局インタビューを受けることにしていた。奏は赤いソファーに座らされ、編集長がインタビュアーとしてパイプ椅子に座る。他の新聞部員たちは、照明やマイク、録音などのセッティング。端から見れば、有名人を迎えての本格的なインタビューといった、とても学校新聞の号外のためとは思えない光景だった。

驚くほど座り心地の良いソファーに少々うっとりと身を沈め、現場監督らしき男子生徒の指示に従って手際よく動いている様子を眺めなていると、そう待たずして準備が整い、そしてインタビューが始まった。

「それでは、どうぞよろしくお願いします。立華奏さん」とまず編集長が真面目な口調で、しかも本物のインタビュアーさながらな笑顔を作って口火を切る。それがどうも彼女に似つかわしくないと感じた奏は、「なんか変」と返した。

「気分よ気分。奏も、大女優になったつもりになっていいからね」

「出来るわけないでしょう」

「ま、あなたの好きなように答えてくれればそれでいいから。さて、それでは話を進めましょう。とその前に、とある情報筋から入手したのですが、当日、とても可愛らしいペンダントを購入したとか。私に見せてもらえないかしら」

なぜ彼女がそれを知っているのか。答えは、奏がクラスメイトに「可愛いでしょ」と紹介していたから。つまり、もはや誰でも知っている情報なわけである。そしてなぜ、いきなり別の話題を持ってきたのか。答えは、本題から入るよりも、相手が気を許しやすい話題から入った方がインタビューしやすくなるから。そしてその目論見は見事成功。

奏が少し得意げにポケットからペンダントを出した。これを見て編集長が応える言葉など誰でも想像できよう。そしてその言葉を奏自身も期待し、そのとおりのことを編集長が言った。

「可愛いペンダントですねえ。このオオアリクイさんも、とっても可愛らしくて」

これで立華奏は、完全に編集長の手のひらの上に乗ってしまった。その事に気付くことなく。彼女もまた、ごく普通の女の子ということだろう。

編集長の巧みな話術によって、奏の機嫌がすっかり良くなった状態のまま、いつの間にか話題がペンダントからケーキへと移った。そして、見ても楽しく食べても美味しかったあのときを鮮明に思い返しては、その感動を伝えようと自ら色々と語っていった。

そうしておよそ一時間、途中で写真を撮られたことにも気が付かないうちにインタビューが終わり、「立華奏さんでした。どうもあ

りがとうございました」と編集長が締めくくる。そして、素晴らしいインタビューだったと満足そうな顔で撤収作業に取りかかり始めた部員たちを見て、はたと我に返った奏は、しまった、と自己嫌悪でがっくり項垂れてしまっていた。

帰り道では、ポケットから取り出したオオアリクイにも変な目で見られている気になってしまい、さらには、名前も知らない昨日の少年にも変な目で見られているような気もしてしまった。

「そんな目で見なくたっていいじゃない」

奏は、顔の前にかざしているオオアリクイと、その向こう側のやや呆れた表情の少年に、不機嫌に口を尖らせていた。

She Got a Tickets

インタビューを受けたその翌日、一年生の新聞部員がさっそく教室にやってきた。記事が書き上がったので、それを見てもらうために昼休みか放課後のどちらかに新聞部の部室へ来てもらえないか、という用件で。お昼ご飯を食べ終えたら行くと奏が答えると、その一年生は「サンキュー、サー！」と言って出て行った。

新聞部がどんな部なのか分からなくなるようなその軍隊式言い回しは、ある意味新聞部を象徴していよう。なにぶん、ブラックボックスの多い部であることは周知の事実となっているのだから。そのブラックボックスの中で一番謎とされているのが、いかにして賄賂を用立てているのか、ということ。その資金にしても、人員にしても、新聞部だけでは絶対に賄いきれないはずなのだが、現実は好き放題。

その暗部を突き止めてやろうと動いた猛者は過去に何人もいたそうだが、生きて真実に辿り着いた者はたったの一人。しかもその者は、真実を知った数日後に「世界はなんて汚いんだ」と虚ろな目をしたまま転校していったらしい。

そして、こうした猛者たちの伝説には明らかに作り話が盛り込まれているというのに、ほとんどの生徒が全て真実だと信じていた。偏差値の高い進学校だというのに、である。

なお、そのブラックボックスに触れることが出来るのは、代表という名の新聞部部長と、編集長という名の副部長のみ。そしてその両名は、役職に就任する際に、どんなことがあろうと秘密を明かさないという血の誓約書を書くことになっていた。

まさに、どこぞの怪しい秘密結社のようである。

その秘密結社の総本山である新聞部の部室の戸を、お昼ご飯を食べ終えた奏が軽くノックした。すぐに中から「どちら様？」という男子生徒の声が返ってきた。

「立華です。あの、記事をチェックしに来たんですけど」
「ああ、お待ちしてました。いま開けますんで」そう返事すると、足音が戸へと近づき、がらがらと開けられた。その男子生徒は、昨日インタビューをした際に現場監督的な立ち回りをしていた人物だった。
「どうぞ中へ」
「どうも」律儀に奏は答え、足を踏み入れる。中には誰もおらず、どうやら応対した男子生徒が一人でいたようだった。
新聞部の部室は、もともとは一般の教室だった二部屋を改修して造られたもの。大きく六つの部屋に分けられており、編集室、企画室、資料室、仮眠室、印刷室、そして応接室がある。ドアを開けてまずあるのがこぢんまりした応接室で、低いテーブルにソファー、それと事務机が二つある。その向こうに残りの部屋があるのだが、そこがどういう風景なのかは新聞部の部員ではない奏には知る由もない。
奏を部屋に入れた男子生徒は、ソファーに座るよう勧め、彼女が腰を下ろすのを横目で確認しつつ、新聞部の奥へと続く戸を軽くノックし、「立華さんがお見えになりました」と戸を開けることなく報告。すぐさま「はいよ」という編集長の声が返ってくると、戸が開き編集長が応接室に入ってきた。
「や。来てくれて良かったよ。今日中に印刷したかったから」
「また勝手に出されたら困るもの」
「だからそれはしないって。とりあえずそこに座って。いまお茶出すから。名塚、私のもついでに頼む」
奏の向かい側のソファーに座った編集長にそう言われた男子生徒は「はい」と答え、隣の部屋へとその姿を消した。
「さて、これが記事。それとこれが、一緒に掲載する写真。とりあえず顧問にはＯＫもらってるけど、お手柔らかにお願いね」
「内容次第ね」と言って、差し出された記事の原稿と写真を受け取り、まずは目を通す。号外の特集記事とあって、ボリュームはそれ

なりにあったが、読み終えるのに何十分もかかりはしない。そして読み終わると写真を手に取る。自分はこんな楽しそうに喋っていたのかと少し落ち込みつつ、一目見ただけでテーブルに置いた。

その様子を、奏が記事を読んでいる間に運ばれてきていたお茶をすすりながら編集長が見て言った。

「どう？」その声には自信が満ちている。実際、奏は一度も不快な表情を見せていないのだから、当然の自信だろう。しかし彼女から出た言葉は、それまでの表情とは真逆のものだった。

「変」

「そんなことはないと思うけど。さっきも言ったとおり、顧問の太鼓判もあるんだから」

「ううん。絶対変。だって、変なところが一つも見当たらないんだもの」

一理ある奏の回答である。

「あ、あのねえ……。変なこと書いて奏のＯＫもらえなかったら、号外出せないのよ？　それはつまり、全生徒と教師の期待を裏切るってことなのよ？　新聞部の信用はガタ落ちよ？　そんな真似、わざわざするわけないでしょうが」

これも一理ある回答である。

「ひょっとして、先週のことまだ怒ってるの？」

「それはもう怒ってない。ただ、らしくないと思って」

「まあ、うちの部に対する奏の信用の程度は理解してるつもりだけどね。とりあえずここは信用してちょうだい。信用できないと言い切られたら、諦めるしかないけど」

彼女は苦笑いをして万歳するように両手を挙げる。あくまでも自分たちが諦めると言うように。そしてその言葉の裏に、奏もライヴチケットを諦める、という意味も含まれていることは、わざわざ説明する必要もなければ、ちらつかせる必要もない。

奏は考えた。この記事と写真を了承するかしないか、ではなく、あくまでも信用できないとして断ってチケットを諦めるか、それと

も信用してチケットを受け取るか。
　信用に至らない理由が、新聞部の過去の所行によるところもあるが、この件に限って言えば、彼女自身の感情によるところが大きいことは認めざるを得ない。対して、外堀が埋まっているこの状況は信用するに足りるだけの説得力を有している。加えて、チケットの存在。そもそも初めから勝負になっていなかったのだが、それでも葛藤したのは、指先一本だけ引っかけていたプライドが拒んでいたから。
　だが当然それだけでは支えきれないし、持ちこたえきれるはずもない。しばし考えたのち、その指もついに離れ、奏は落ちた。
「分かった。信用する」
「よしっ。交渉成立！」編集長が高らかにそう言うと、この部屋にいる他の新聞部員二人が、良かった良かったと拍手をし、奏は本当にこれで良かったのかしらと少し不安になった。もしも謝って前言撤回をお願いすれば、編集長はそれを受け入れて放課後までには最終決定して欲しいと言うつもりだった。彼女は、常に考え得るシナリオをいくつも用意し、その対応も考えているのだ。だが奏自身が悩んだ末に信用すると言ってしまった以上、完全に交渉成立。
「ありがとう、奏。はい、掲載料。好きな人と行ってきて」
「うん」好きな人と、というフレーズに気付くことなく、編集長がポケットから取り出して差し出してきたペアチケットを受け取った。そしてそのチケットをしげしげと見つめる。ライヴの開催日はおよそ二ヶ月後の土曜日夕方。確かにＳＳ席のペアチケットで、しかも前から一一列目と前の方でセンター寄り。間違いなくプレミア・チケットである。ついついにんまりと笑みを浮かべてしまうのも無理はないだろう。
　交渉も終わり、掲載料を受け取った奏は、そろそろお昼休みも終わろうとしていた時間に部室を出た。教室へと戻る足取りは、軽かったり重かったり。まんまと屈してしまったような情けなさで、プレミア・チケットに喜び浸ることが出来なかったのだ。そして教室

に戻ってくると、クラスメイトたちが「で、ＯＫしたの？」と聞いてきた。これに奏は、遠慮がちに頷いて答えるのが精一杯だった。なんとなく、罪悪感というか背徳感のようなものがあったので。

掲載料であるチケットについては、結局一言も口にすることはなかった。敦穂に対しても。その存在を知っているはずのクラス委員長もいっさい言わなかった。ただでさえ昨日の一件で奏からの評価が急下降してしまい落ち込んでいるというのに、これ以上の株価低下を招いては、とうてい耐えきれない悲しみとなって押し潰されかねないからだった。

こうしてインタビューの一件は一段落し、号外を期待する声がいっそう高まる中、午後の授業が終わった。締めくくりのホームルームとなり、担任が教室に入ってくる。担任も昨日の一件があり、奏を前にやや居心地悪そうにしていた。その理由を知っているのは奏とクラス委員長だけで、他は誰も知らない。もしもその誰かから指摘を受けていたら、担任も少々困っただろう。だが、誰も気に留めなかった。

喜ぶべきか、悲しむべきか。

ホームルームが終わると、これから水泳部の部活動がある敦穂からも、号外楽しみにしてるね、と言われながら教室を出て、奏は研究会の部室に行く。そこで時間を過ごし、部活が終わると友人とともに下駄箱へと向かった。その途中、奏たちは掲示板に大きく張り出されている一枚の記事を目に止めた。

それは、『立華奏独占ロング・インタビュー！　真実はここに！』などという文字が華々しく躍っている、号外の告知。その号外の発行予定日を見ると、明日になっていた。ということは、今まさに新聞部の印刷室で刷られようとしているわけである。印刷室と言っても、まさか輪転機が置かれているわけではなく、いわゆるオンデマンド印刷なので、パソコンとオンデマンドプリンタが主設備となっている。発行部数を考えれば当然であろう。

発行日までは聞いていなかった奏は、新聞部のこの迅速な行動力

には感心すると同時に、部員たちのエネルギーの使い方が激しく間違っているようで呆れてもいた。この号外の数日後には、通常の学校新聞が発行されるからである。

そんな告知を見ていると、そこに通りかかった何人かの生徒に、楽しみにしてますとやはり声を掛けられ、長居は無用と掲示板から離れ、下駄箱で靴を履き替えて家に帰った。

昨日に続いて今日もなかなかに疲れた一日。その疲れを癒してもらおうと、帰り道で奏はポケットに手を入れる。そしてオオアリクイのペンダントを取り出そうとした。だが、なんとなく出しづらかったので、空手のままポケットから手を出していた。そんなことを何度か繰り返し、結局一度も取り出すこともなく家に着いてしまっていた。それだけ、今回の取引に負い目を感じているということだろう。

彼女が制服のポケットからペンダントを取り出したのは、女の子らしい内装とアイテムで飾られている部屋で普段着に着替えたあと。

そのまま入れっ放しにしておくわけにもいかないかなと、ハンガーに掛けられている制服の上着のポケットから取り出し、机の上に置いた。そして椅子に座り、片肘をついてオオアリクイを指先でつつくようにして小さく動かす。最初は、なんとなくといった気分でそうしていたのだが、なんだか自分が意地悪をしているような気分になってくると、その指を止め、言い訳を始めた。まるで叱られた子供が弁解するかのように。

「別に、賄賂に負けたわけじゃないのよ？　あの記事と写真に問題なかったから、ＯＫしたんだからね？　それに、先生が言ってたとおり、やっぱりこうした方が私も楽だから。年がら年中誰彼構わず聞いてこられたら、たまったものじゃないもの。あなただって、そう思うでしょ？」

そこで言葉を止めて、返事を待つようにじっと見つめる。

しかし、当然なにも言い返してこない。その向こう側にいる少年も、相変わらず呆れたような顔をしている。

これに奏は、深々とため息をして、ぽつりと呟いていた。一匹と一人に向かって。

「やっぱり、断るべきだったのかなあ」

電話越しに話を聞いた敦穂は、苦笑しながら答えた。
「気にする必要なんてまったくないと思うけど？」
「そう、かな……」
「真面目に考えすぎるのよ。奏は。新聞部の力を借りることは何も悪い事じゃないし、むしろそうすべきなのよ。じゃないと、収拾なんてつくわけないでしょ？　チケットの事だって、話題性を考えれば、ギャラとして妥当なんじゃない？　奏は、必要なことをして、妥当な報酬を受け取った。これのどこに何の問題があるっていうの？」
「報酬って言っても、結局は賄賂だし、実際、その賄賂に目がくらんだというか……」
「それを賄賂って言いだしたら、世の中賄賂だらけになっちゃうわよ。もっと簡単に考えなさい」
「簡単に？」
「そ。新聞部のおかげで平和を得られた、やっほー！　正直インタビューなんて受けたくなかったけど、その報酬としてチケットげっとー！　ラッキー！　てな具合に」
「本当にそれでいいのかな」
「私が許す！　だからもっと喜べ！　立華奏！　きみは当たり前のことをして、当たり前のことをされたまでなのだ！」
敦穂の言い方はともかくとして、ここまで言ってもらえたお陰で、奏は気持ちをずっと軽くすることが出来た。こうしてやっと吹っ切れた奏は、最後にありがとうとお礼を言って、電話を切った。そして、机の上で寝っ転がっているオオアリクイに目を向け、褒められて喜ぶ少女のような声でこう言った。
「喜んでいいんだって」
すると、それまでどこか責めるような眼差しを向けていたオオア

リクイと少年が、やっと笑ってくれたような気がした。これで、心に引っ掛かっていたものは全て取り除かれ、晴れ晴れとした気分になった。その後お風呂に入った奏は、いつものメロディーをずっと口ずさんでいた。

そして翌日、学校に着くと号外が配られていた。

昨夜敦穂に相談していなかったら、きっとその光景にいたたまれなくなっていただろう。しかし相談したお陰で、堂々と号外を受け取り、その記事を読むことが出来た。その内容と写真は事前に確認したものとまったく同じもの。どうやら今回は変なことしてこなかったのね、と心の中で苦笑していた。

だが奏は知らなかった。最後まで知ることもなかった。録音データと数枚の写真が、のちにブラックボックスの中で大活躍していたことを。

こうしてクリスタルガーデンの一件は、奏個人については無事に収拾がつき、いつもとあまり変わらぬ日々を送れるようになった。対して周囲は、さらに過熱しているが。その過熱ぶりもそうだが、たかだかクリスタルガーデンのケーキの感想ごときでこんなにも盛り上がっている生徒たちに対して、奏は「本当に進学校なのかしら、この学校」とコメント。有名大学に数多くの卒業生を送り込んでいる進学校の生徒とは思えない、とても頭の悪そうな乗りの良さが一部の生徒に限られているのなら、どんな学校にも必ずいるものだよねと笑って終わってしまう程度のこと。だが、この学校のほとんどと言って良いほどの生徒たちがこのような有様なのだから、人によっては学校を間違えたかなと頭を抱えても不思議ではない。

このような乗りの良さは、実は校風から生まれていた。

真剣に勉強に取り組むことも大切だが、好奇心を持って日々楽しむことこそ、何よりも大切なことである。

というのが校訓の一番最初に掲げられており、そういった校風に惹かれて入学した生徒がほとんど。ゆえに、このような現状も当然の成り行きだろう。ちなみに奏がこの学校を選んだ理由にこの校風

も含まれてはいたが、それはあくまでもほんの一部。主たる理由は、彼女が所属している研究会の存在だった。

そしてこの日も研究会の活動日。放課後、奏は先輩や友人たちと部活動をしている中で、この件について振ってみた。この乗りの良さは絶対変だよ、と。しかし返ってきた答えは、「楽しくていいんじゃない？」という肯定的な意見で占められていた。それに異を唱えるつもりはなかったが、さすがに度を超しすぎているように思うと奏が言うと、馬鹿と天才は紙一重って言うし、という言葉が返ってきた。

言われて改めて考えていると、確かに紙一重な生徒が多いような気がしてきた。そしてその代表選手が、新聞部代表と新聞部編集長。「ま、みんな犯罪予備軍ってわけじゃないんだから」と研究会部長である三年生の折原雄也がフォローするように付け加えると、奏はそうは思えず「明らかに予備軍入りの人たちがいると思うんですけど。例えば、新聞部とか」と指摘。これにはさすがに部長も納得してしまったらしい。

「ああ、確かに犯罪予備軍はいたな。違う意味で……」

そして他の部員たちもこれには同意していた。

そんな雑談もありながら、この日の部活が終わった。奏はみなと連れだって玄関へと向かう。そして、その途中にある掲示板でまたも一枚の記事に目が止まった。

『号外の重版決定！　これが最後だ！』

と書かれた、新聞部発行のチラシである。これを見て、奏は「やっぱりこの学校、重症だよね」と呟いた。すると、それを聞いた部長が提案してきた。

「どうだろう。ここは一つ、この重症患者たちへの最良の処方箋を考えてみようじゃないか」

この提案に、二年生の男子部員が「と言われても、何とかに付ける薬はないって言いますしねえ」と笑って答えた。しかし部長は真面目な顔でこう返した。

「だからこそ挑戦するんだ。挑戦なくして進歩も未来もない。そうだろう？」

「いやまあそうなんでしょうけど……。それとこれとは――」

「よし決まった。明後日の部活までに各自考えてくるように」

「マジですか？」

「マジだ。考えてこなかった者には……、そうだなあ、罰として一回だけ実験体になってもらおう」

部長のこの提案に反対する者もいたが、なかなか面白そうな研究テーマだと盛り上がる輩が圧倒的に多く、結局その場の勢いでこの提案は採択されてしまった。奏はもちろん反対派。

そしてこの結果に、ここにも馬鹿な人たちが、とまたも奏はため息を落としていた。

その帰り道、同じ部員でありクラスは違うが同級生である西沢栄子と二人で歩いているとき、そのことを思い出した奏は、無意識のうちに「うちの研究会、本当に大丈夫なのかしら」と不安げに呟いていた。この言葉を聞き逃さなかった西沢は、笑顔で答えた。

「大丈夫だよ、奏ちゃん。さすがに実験体にはしないよ」

「そこじゃないんだけど……」

「へ？　じゃあどこ？」

奏はそれに答えようとしたのだが、彼女は賛成派の人間。説明したところで理解してもらえないだろうと思い、諦めの気持ちで「全部」とだけ答えた。西沢はその言葉を理解しようと、やや上に視線を向けながら考える。そうしてその答えが導き出されると、眼鏡越しに奏を見つめて言った。

「うちの部、ぜんぜん変じゃないと思うけど。他の部の方がよっぽど変だよ」

確かに余所の部と比べれば真っ当な部類に属されるだろうとは奏も思う。しかし、そもそも基準値がおかしなところにあるのだから、比較論で語るべきでない。ここは一般論で語るべきである。しかし、すっかり基準値がずれてしまっているらしい彼女に一般論を言った

ところで、どれだけ通じるか。
たぶん、無駄な努力だろうし、努力する意義もないに等しいだろう。
という結論が先にあったので、「それは、私もそう思うけど」と濁して終わりにしていた。しかし釈然としない気持ちもないわけではなかったので、ポケットに手を突っ込み、オオアリクイと名前の知らない少年に、自分の考えに同意してもらおうと取り出した。
部活中も机に置いて、たまに眺めたり指先でいじったりしており、教室でもよく同じことをしているという話も耳にしているので、それを見た西沢は「奏ちゃん、ほんとそれ好きだね」と微笑ましそうに顔を綻ばせて言った。
「うん。とっても可愛いから」
「可愛い……かな。やっぱり奏ちゃんもちょっと変だよ」
「なんでみんな、この子の可愛さがわからないの？」
「さあ」
「いいもん。私にとっては可愛いんだから」少しだけ口を尖らせてそう言う奏の横顔に、西沢はついつい笑ってしまった。普段はわりと大人な発言をしている印象を持っているので、こうした子供っぽさを感じる奏の姿は、やはり誰にとっても微笑ましいもの。しかしその微笑ましさに笑われてしまった奏は、さらに口を尖らせて言った。それは彼女に対してではなく、手のひらに向かって。
「笑うなんてひどいよね。二人ともそう思うでしょ？　そう思うよね？」
二人とは、むろんオオアリクイと少年のこと。しかし彼女の手にあるのはオオアリクイのみ。当然、西沢は不思議に思った。
「二人？」
「うん。二人」彼女が不思議に思うことに対して不思議に思っていない奏は、当たり前のように返す。さらに不思議に思った西沢の声は、疑問符を一つ追加したような戸惑いの声だった。
「いやでも、その手の上にあるの、一つだけだよね」

「うん」
「いや、『うん』じゃなくて……。って、それじゃあもう一人は誰？　どこにいるの？」
ここでようやく彼女が言わんとしていることに気付いた奏は、彼女が不思議がるのも当然かと理解した。
「あ、ごめん。説明しないと分からないよね」
「分かるわけないっしょ」
そして奏は、手短に説明をした。
この前の日曜日、敦穂とバッティングセンターに行ったとき、途中で、自分たちと同い年ぐらいの男の子と女の子の団体がやってきた。そして一人の少年が、野球経験がまったくない女の子二人を相手に、困り顔で戸惑いながらも、バットの握り方から一生懸命に教えていた。そのときの様子や表情がとても微笑ましくて、このペンダントを見るたびについつい思い出してしまう。
といった内容を簡潔に。
すると、これを聞いた西沢は、苦笑いしながら「いや、普通結びつかないでしょ。それとそれは」と感想を言った直後、あることに気が付いた。
「ねえ、奏ちゃん。ひょっとして、今でもそれ見るたんびに、その子のこと思い浮かべてるの？」
「うん。たいていそうだけど……。なんでそんな顔するの？」
「いやだって、奏ちゃんって年がら年中それ眺めてるんでしょ？」
と言う西沢は、意味ありげににやついている。
「そんなに眺めていないよ。たまにぐらいだよ」
「でもさ、一日に何十回も見てるらしいじゃない？」
そんなことない、と言い返そうとした奏だったが、よくよく自分の行動を思い返してみると、何十回と眺めているのは疑いようのない事実。登校中、休み時間中、下校中、部活中、そして家にいるときも、それこそ年がら年中という言葉が合ってしまうほどに。
その事実に奏が自分の事ながら驚いてしまうと、ほらね、と言い

たげな顔の西沢は、さらにんまりとさせて言葉を続けた。そしてその言葉は、まさに核心をついたものだった。

「ていうことはさ、一日に何十回も、その男の子のこと思い浮かべてるってことでしょ？　しかも話し掛けて、答えてくれてるんでしょ？　それって、その男の子のことが好きってことなんじゃない？」

奏はすぐに「そんなんじゃないよ」と答えたが、その言葉に自信を持てていない自分をしっかり感じていた。

「だあって、好きでもない男の子のことなんか、そんなに思い出したりなんかしないでしょ。普通。ましてやそんな相手に、脳内で話し掛けたり、答えてくれたりなんかしないって。まあ、その子が超美形ならともかく。って、ひょっとしてそんなに格好いい人だったの？」

「えと、ちょっとだけ……」

「ちょっと？　う～ん、奏ちゃんの美的センスは微妙だからなあ」

わざと眼鏡を上下に動かす西沢。

「そんなことないもん」

「まあそれはいいとして、とにかく、奏ちゃんにとって気になっている人であることは間違いないわよ。その子」

もはや強く否定できなくなっていた奏は、「う……、そうなの、かな」と頼りなさげに答えるのが精一杯。それが恋愛感情かどうかは別にして、思い浮かべて嫌な思いはしないし、むしろ楽しい気持ちになるのだから。

対して西沢は、嬉々とした表情へと変わっていった。邪な考えを伴って。

「そうそう。いやあ、しかしさあ、ついに奏ちゃんのハートを射止めた人が現れたわけだね。奏に好きな人が出来たって聞いたら、みんな驚くどころじゃないだろうなあ。まず間違いなく、今回のケーキどころの騒ぎじゃなくなるわ。

う～、とんでもないスクープを拾ってしまったわ。これを新聞部に売りつけたら、いくらもらえるかしら。きっととんでもない額に

――」

「やめてよ、もう騒ぎに巻き込まれるのはうんざりなんだから」

「あっはは、冗談冗談。そんなことしないわよ」

「ヨダレ拭いてから言ってもらわないと、説得力ないんだけど」

「うっ、しまった……。まあ、本当にバラしたりはしないから。だいたい、どこの誰とも分からない相手じゃ、眉唾の情報ぐらいにしか受け取ってくれないだろうしね。下手したらでっち上げだって笑われるだけよ。もし二人が再会できて、そのツーショット写真でも撮れれば、それを新聞部に売ってとんでもないギャラもらえるだろうけど。まあ、再会するのは無理だろうし」

「ヨダレ、また流れてる」

「え、嘘っ」西沢は慌てて口元を袖で拭う。すると奏は悪戯っぽく「嘘」と言った。

「なにぃ～！　もしギャラもらったら、その半分を奏ちゃんにあげようと思ったのに！　そんなこと言うんだったら、独り占めしてやるっ！　そんでクリスタルガーデンのケーキを全部食べ尽くしてやる！」

西沢はそう言うと、ぷっと吹き出して笑った。奏もつられるように笑う。しかし奏の笑顔には、わずかに寂しさが混ざっていた。

――再会するのは無理だろう。

確かに、再会するのは無理に等しいだろう。たった一度すれ違っただけの、どこの誰かも分からない人と偶然遭遇して再会するなど、奇跡以外の何者でもないのだから。もう二度と会えないのだろうか。その思いが寂しさを滲ませ、奏は心の中でぽつりと呟いていた。

もう一度、あの人に会いたいな、と。

Unforgettable Part II

西沢に指摘されて以来、オオアリクイを見ずとも、名も知らない少年、音無結弦のことを少しずつ意識するようになっていた。同時に、また会いたいという気持ちも少しずつ強くなっていった。しかしそれは、想いを馳せる喜びよりも、もう会えないのだろうという寂しさが強くなっていくことでもあった。

その寂しさから逃れるように、とは大袈裟だが、あまり考えてしまわないように、突発的に研究会で出された課題、『馬鹿に付ける有効な薬』に挑んだ。これはなかなかに難題で、考えれば考えるほど答えが遠退いていくよう。しかも遠退くだけでなく、考えることそのものが馬鹿馬鹿しく思えてならなくなっていくのだ。

そもそもが馬鹿馬鹿しい課題なのだから、真剣に考えることじたい間違っているのかもしれない。だが悲しいかな、基本的に真面目な奏は、どうしても真剣に考えようとしてしまう。だからこそ余計に馬鹿馬鹿しく思えてしまう。

そうこうしていくうちに、金曜日の放課後となり、部活の時間となった。

奏の出した結論は、毒をもって毒を制す。つまり馬鹿をもって馬鹿を制す、という処方箋。より馬鹿者を用意し、己の馬鹿さ加減を思い知らせるという方法だ。そしてこの結論は、ほとんどの部員が導き出したものと同じものだった。奇抜なアイデアを求めていた部長は、期待していたよりも頭の悪い回答が少なく、残念そうにしていた。なお、奏たちの処方箋が無効であることは、この学校の生徒たちを見ればすぐに分かる。それを聞いて、なるほどと納得する者もいたり、盲点だったと残念がる者もいた。

なお、部長の処方箋は、馬鹿の限界を超えた馬鹿にすることで、新たな次元へと導き、もはや馬鹿と呼べない存在にする、というもの。そして、馬鹿と呼べない存在がどういうものか、という結論は、

不毛な議論の末に「アホらしすぎたな」という部長の言葉で片付けられてしまった。

この発言には、部員の誰もが「あんたが言い出したことだろ」と心の中でツッコミを入れていた。

こうして課題がなくなってしまうと、再び結弦のことが奏の思考をじわじわと占領していく。その日の帰り道ではまだ心配するほどのものでもなかったが、夕食を食べ終えて、勉強をし始めたときには結弦のことばかり頭に浮かんでいた。どうにも勉強が手に付かず、本気で自分はこのままどうなってしまうのだろうと心配するようにもなってしまう始末。

そして翌日の土曜日、登校してきた奏の元気のなさに、風邪でも引いたのかしらと敦穂は心配そうに「大丈夫？」と尋ね、彼女のおでこに手のひらを当ててみた。しかし本当に風邪を引いたわけではないので、「熱はないみたいね」と手を離すだけ。ならば何が原因なのだろうと考え、ひょっとしたらケーキ絡みのドタバタに疲れてしまっているのでは、と思うも、確かにあの件で相当な体力と精神力を消耗させられたことは疑いようがないが、しかしここまで疲弊するものかどうかは甚だ疑問。

あれこれ考えてみたが、結局分かるはずもなく、奏が大丈夫と言うので引き下がることにした。しかし一限目の間、珍しく授業をちゃんと聞いてなかったり、うっかり筆箱を落としてしまったりと、らしくない姿が目立っていた。そこで敦穂は、一限目が終わり休み時間になると、命令口調で奏に言った。

「奏、とりあえず保健室に行くよ」

「私、病気なんかしてないよ」

「いいや、絶対変だ。病気じゃないとしても、絶対に変。だから行くの」

「でも私、本当にどこも悪くないから」

「それを決めるのは奏じゃなくて、保健の先生。さ、病院を怖がるお子ちゃまみないに駄々こねない」

「そんなつもりで言ってるんじゃないもん」子供扱いされたことでちょっと腹を立てる奏。しかしここで、段田花子が敦穂に加勢した。
「ナカナ、とりあえず行ってきな。何でもなければ何でもないで、教室に戻ってくればいいんだから」
さらに苗田紗英も参戦。むろん、敦穂の側につく。四面楚歌のようなこの状況に、奏は渋々負けを認め、保健室に行くことになった。付き添いはいらないと言ったのだが、敦穂がクラスメイトからその任を指名されたことで、二人で。
「本当に、そんなんじゃないのに」
「はいはい。先生の診断を聞いてから、いくらでも好きなだけ何時間でも聞いてあげるから」
「もう……」何を言っても無駄だと思った奏は、保健の先生と話すまで口をつぐんでしまっていた。
保健室に入ると、白衣を着た若い保健医が「どうかしたの?」と出迎えた。
「はい、この子が、ちょっと体調が優れないみたいなんで」
「まあ、そうなの。とりあえずその椅子に座って」
仕方なく、奏は素直に勧められた丸椅子に座る。
「それで、どんな風に体調が優れないのかしら?」
「別にどこも変じゃないんですけど、友達が保健室に行けっていうから」と奏。保健医はその言葉を聞いて、彼女に聞くよりも連れてきた友人に尋ねる方が早いと判断し、敦穂に「そうなの?」と尋ねた。
「明らかに体調が悪そうなんです。熱はないみたいなんですけど、とにかく授業中ボーってしてたり、ドジったり、それから、なんだか身体が重そうだし」
敦穂の言葉に奏は不満そうな顔をしていたが、ここで言い合っても保健医の先生に迷惑を掛けるだけだど、何も言い返さずにいた。その様子もしっかりと視界の端で捉えていた保健医は、「それじゃあ、とりあえず体温を測りましょうか」と言ってデジタル式体温計

を出し、奏に渡した。奏は素直に、制服のボタンをいくつか外して脇の下に挟む。

そして測定が終わるまでの間に、クラスと名前を保健医に伝え、保健医がそれを帳簿に書き記し、簡単な問診をした。

気分は悪くないか、怠さはないか、どこか痛みはないか、夜はちゃんと眠れているか等々。その問診の結果と体温計が示した温度を参考に、保健医が出した結論は「寝不足による疲労でしょう」だった。となれば、保健室で仮眠を取ればいいだけだ、と敦穂は苦笑いしながら言った。結局自分の早合点で大騒ぎしてしまったと気恥ずかしく思いながら。

しかし保健医は、それで終わりにはしなかった。もしも思い過ごしならばいいのだが、そうでないケースをいくつも経験してきたからこその質問を、すばり奏にした。

「もし良かったら、眠れない理由を教えてもらえるかしら？」

「え……っ！？」

そう来るとは思っていなかった奏は、思わず驚きを顕わにする。そしてその反応に、敦穂の目がきらりと光った。

「奏、ひょっとして、何か隠してる？　あ、まさかあんた、まだ気にしてるの？　チケットのこと」

「それはもう、気にしてない」

「じゃあ何？」

「それは……」

「さあ、洗いざらい白状しなさい」

じり、と詰め寄ってくるような敦穂の眼差しに、奏は一瞬怯む。すると保健医が「無理強いしては駄目よ。誰だって、人に言いづらいことや言いたくないことはあるんだから」と敦穂を諭した。確かに、と思った敦穂は、「ごめん、つい」と奏に謝る。そして謝られた奏は、やや困惑してしまった。

別に、言いたくないわけではない。言いづらいこと、というわけでもない。タイミング的に、そしてシチュエーション的に、なんと

なく切り出しづらかっただけなのだ。しかしこう言われてしまうと、まるで親友である敦穂に隠し事をしようとしているように思えてくる。

彼女が心配してくれたことには違いない。その気持ちをそっぽに置き、別に隠さなくてもいいことを隠そうとするのは、やはり良くない。そう考え至り、奏は話すことにした。あの少年のことを。

「なんか、あの人のこと、昨日の夜から気になってばっかりで……」

「あの人？」と敦穂。

「バッティングセンターの」

それですぐに誰のことか理解した敦穂は、途端ににやにやし始める。保健医の先生もそれだけで話の要点は理解できて、なるほど、と得心のいった表情をしていた。ただ、もう少しだけ詳しく聞いておいた方がいいだろうと“その人”についてもう少し話してもらえないかと頼み、奏は簡潔に説明した。バッティングセンターでその少年が何をしていて、どんな様子だったのか。それから引き続いて、ペンダントを眺めてはその姿をよく思い返したりしていたこと、三日前の研究会の帰り道で、同じ研究会の子に指摘されて彼女自身初めて気付いたこと、もう一度会いたいと思っても、恐らくもう二度と会えないのだろうと考えると、寂しくて胸が苦しくなること、研究会の課題で考えないようにしていたが、その課題も昨日終わり、胸の苦しみがもっとひどくなってしまったことを。

その話を、最初のうちはガールズトーク真っ最中といった興味津々の顔で聞いていた敦穂だったが、奏がひとまず話し終えたころには浮かない表情をしていた。

彼女の相手がいつでも会える人なら良いが、まず間違いなく会えないと考えると、奏の胸の苦しみが敦穂の胸にも伝わってきてしまう。それは保健医も同じようであったが、奏のような少年少女をこの保健室で何人も診てきたので、暗く沈んでしまうことはない。

「なるほど、恋患いにかかっちゃったのね」

「恋患い？　私が、ですか？」その単語に、奏が少し驚いた表情を

見せた。
「そう。会いたいけど、会えないかもしれない。それでもやっぱり会いたい。でも……。そんな繰り返しも、恋患いの症状の一つなのよ。そして、あなたのように恋に悩む子はたくさんいるわ」
そうなんだ、奏はそう思いながら、敦穂の方を見てみた。あっちゃんは？　と尋ねる瞳で。
「わ、私？　いやあ、そこまで重症になったことは、今のところ一度もないから……」
「でも、好きな人が出来たとき、あっちゃんもたくさん悩んだの？」
なんで私の恋バナになるのよ、と「今は私じゃないでしょ？」と矛先を戻した。
「参考に聞かせてくれないかな。私、どうしたらいいか分からないから」
「だからそこまで重症になってないから、アドバイスできることがないんだってば」
「それじゃあ私、どうすればいいの？」
とここで、保健医が「想い続けるしかないわね」とあっさりと言った。このアドバイスに、奏ではなく敦穂が不満を示す。しかし、彼女もまたそうするしかないとも思っていた。
「すぐに忘れられるものじゃないわ。それに、考えないようにすればするほど、苦しくもなっていく。だから、想い続けるの。その人のことを。たくさんたくさん。そして祈るの。もう一度会えますようにって。もしかしたら、その願いが届くかもしれない。ううん、きっと届いてくれる。そう信じてね。
大切なのは、辛く感じるほどその人のことを想うことじゃない。幸せに感じようとすること。私は、そう思うわ」
「幸せに、感じようとすること……」深く胸に突き刺さったその言葉を、奏が復唱する。
「そう。せっかく誰かを好きになったのですもの、幸せに感じなきゃ損じゃない」

奏は保健医の言葉を心の中で噛みしめる。ついでに敦穂も感心した様子で噛みしめていた。そうして短い沈黙がおり、その通りだと全身が頷いた奏は「そうですね」と答え、やっと笑顔を見せることができた。それを見て、敦穂の表情も自然と笑顔になり、保健医もとりあえずは一件落着と微笑み、保健室が一気に華やぐ。

「しかしついに奏にも春が来たかあ！　こりゃあ大騒動になるぞお！」

「もうそれはいいよ」

数日前にも同じようなセリフを聞いていた奏はそう言いながら、さっそくポケットからペンダントを取り出そうと手を突っ込む。そして指先に触れたチェーンをつまみ、何の抵抗も感じることなく引っ張り出した。

しかし、出てきたのはチェーンだけ。あれ？　と思い、チェーンをもう一方の手に持ち替えて再度ポケットに手を突っ込む。そして指先に触れたものをつまみ、取り出す。その手にあるのはオオアリクイ。反対の手にあるのはチェーン。

これはつまり、どういうこと？　とそれが暗示しているものを考えるよりも一足先に、敦穂は思った。

……なんか、いろいろと台無しじゃん。

Intersection Part IV

その日の授業が終わると、奏と敦穂はさっそくペンダントを買った雑貨屋へと向う。たまたま入ったようなお店だったので、敦穂はその場所をはっきりと憶えていなかったのだが、奏がしっかりと憶えていたので、探し回ることなくそのお店へとやって来た。土曜日のお昼時とあって街は人で賑わっており、その雑貨屋にも中学生ぐらいから二十歳ぐらいまでの女の子のお客たちが数組、お喋りしながら品々を吟味している。

お店に入った二人は、そのままレジへと向かい若い女性の店員に声を掛けた。愛想良く「いらっしゃいませ」と答えたその店員に、奏はすぐに、オオアリクイと壊れたチェーンとそのとき買ったレシートを見せて、いつの間にか外れてしまったことを説明した。もともと不良品だったのだろうと考え、店員は申し訳ございませんでしたと丁寧に頭を下げて謝り、新しいのと交換させて頂きますと言った。

高価なものでもないので、たいていのお客は良品との交換で事が済む。中にはお金返せと怒ったり、客商売としてなってないなどと文句をいうお客もいるが極めて希。そして中には奏のように、「いえ、出来れば、直して欲しいんですけど」と要望するお客もいる。例えば、彼氏に買ってもらったものだから、という理由だったり、親しい友達と交換したものだから、愛着があるから、など。奏が修理を頼んだのも、このオオアリクイと少年が重なり、これでなくちゃ嫌だと思っていたから。

しかしこの若い店員は経験が浅く、このような要望を受けたことは今までなかったので、どうしてよいか困ってしまった。

「そう言われましても……。良品との交換では、駄目でしょうか」

その店員の口振りから、修理は無理なのかなと諦めようとする奏と敦穂。すると、近くにいた二人組の女性客の一人が「前に、私も

ここで直してもらったこと、ありますよ？」と店員に言った。
「そうなんですか？」
「はい。一年くらい前だけど」
店員はそれを聞いて、ならばと「それでは、今でも大丈夫か確認してみますので、すみませんが、少々お待ちいただけますか？」と言って、お店の電話を取り、短縮ダイヤルでこのお店の営業本部に連絡を入れる。そして一度目のコール音で繋がり、事の次第を説明した。電話を受けた担当者は、もちろん修理もしていると答えた直後、ちゃんとマニュアルを見るようにと注意し、手続きのしかたと修理期間を教えて、電話は終わった。
受話器を置いた店員は、ふうと一息ついてから、修理は可能であることと、その修理期間を説明。修理の内容にもよるが、今回のケースは通常二日後に渡せるとのこと。急げば一日、つまり明日。そしてバイク便をチャーターしてさらに急げば、今日中に渡すことができるが、時間は閉店間際の夜になってしまうとのこと。
奏としては、今日中にとまでは思わないが、やはり早く直して欲しいという気持ちがあり、明日受取にして欲しいと頼んだ。店員は「かしこまりました」と答え、壊れたペンダントを受け取り、修理依頼書の必要な項目への記入をお願いする。奏はそこに記入し、店員も破損内容などを記入して事務手続きが終了。
最後に、店員が一つ確認の質問をした。直ったペンダントの入荷を知らせる際の連絡先を、自宅の番号にするか、携帯の番号にするか、もしくはメールにするか。これに奏は「携帯のメールで」と答えた。
こうして、あとは直って戻ってくるのを待つだけとなり、修理依頼書の受取控えをポケットにしまい、二人はお店を出た。当然、口添えしてくれた女性にお礼を言うことを忘れずに。
その後、少し遅れたお昼ご飯を食べるべく、目移りしてしまいそうなほどたくさんある美味しそうなお店の中の一軒を選び、今にも鳴き出しそうなお腹を連れて入っていった。そこはバイキング方式

のレストラン。メニューはまさに何でもありと言えるほど多種多彩だが、低カロリーな品々が一際目立っている。それもあってか、女性客が圧倒的に多かった。

二人は次々と獲物を平皿に盛っていく。あっという間に山盛りになり、二人して欲張りすぎと笑いあってテーブルに置き、次は飲み物だとドリンクバーに移動。そして全て揃うと、いただきますと食べ始めた。どれもなかなかに美味しく、二人ともご満悦な表情で口の中に運んでいった。

「それにしても、直してもらえて良かったね」

「うん。本当に良かった」

「しっかし、あの時はほんと目が点になったわ。保健の先生がせっかく良い話をしてくれたっていうのに、奏のペンダント、あんな有様になってて」

「私もびっくりしたよ」

「泣きそうになるぐらい、ね」

「だって、なんだか嫌なことを暗示されたみたいだったんだもの」

「ま、そう思っちゃうよね。やっぱり。でもさ、ひょっとしたらこれも、何かの暗示なんじゃない？」

「何かって？」

「例えば……、二人は出会えない運命だったけど、出会う運命に変わったあ、とか」

「あっちゃん……」奏は敦穂の言葉に少し驚いたような表情を見せると、しみじみと言った。

「ロマンティックなこと、言えるんだね。びっくり」

「……どんな目で見てるのよ。私のこと」

「こんな目」真顔でそう言って、自分の目を指さす。敦穂はこれに、

「む。そんな目ン玉にこれは贅沢だ、私が食べてやる！」と、奏のお皿から一品をひょいとつまみ上げ、そのままぱくりと食べてしまった。

「お、これも美味しい」

「あっちゃん、お行儀悪い」
そんな風に、お喋りをしながらお皿の上の料理を食べ尽くし、飲み物を飲み干し、胃袋を十二分に満足させると、二人はお店を出た。それから二人は、ここで遊ぶにも残っている今月分の軍資金の状況から、きっと指をくわえるばかりで悲しくなるだろう、ということで敦穂の家で遊ぶことになり、奏は敦穂の家で晩ご飯をご馳走になったのだった。

そして翌日。ペンダントが届いたというメールがお店から来る前に、白いワンピースに青い半袖シャツを羽織り、ストローハットを被り、ペンダントを首に掛け、肩にはバッグを引っ掛けて、奏は家を出た。朝からどうにもそわそわしてしまっていた彼女は、家で待っているぐらいなら、お店の周辺を散策したりウィンドウショッピングをしたりしながらメールを待っていた方が気分が落ち着くだろうからと、そうしたのだ。

そんな娘の様子を、母親は「ペンダント一つであんなになって。あの子も、やっぱりまだ子供なのね」と嬉しそうに微笑み、父親もまた目を細めて笑っていた。

今からお気に入りで大切なペンダントを取りに行くというのに、別のペンダントを着けて行くというのも変な話だが、月曜日からずっとポケットに入れて持ち歩いていたせいで、オオアリクイのペンダントの居場所はポケットの中という意識が芽生えていたので、次にお気に入りのペンダントをこうして掛けていたのだった。

雑貨屋のある駅に着いた奏は、自然とそのお店へと向かって歩いていた。しかし、まだメールが届いていないというのにお店に行ってしまうのも、なんだか子供っぽい行動のように思えたので、急遽方向転換。当初の予定どおり、周辺を歩き回った。しかし、先週見て回ったばかりだったので早々に退屈になり、余計にメールが待ち遠しくなってしまった。

これはまずいと思った奏は、もしかしたらとほんの少しだけ期待

して、バッティングセンターに行くことにした。しかしそこに少年の姿はなく、せっかくだからちょっとやっていこうと、一〇〇キロのバッターボックスに立つ前に、まず九〇キロのバッターボックスに立った。七〇キロでのウォーミングも考えたが、スピード差がありすぎてあまり効果がないだろうと考えての選択。

九〇キロの最初の一五球をウォーミングアップに使い、残り一五球を全力で打つ。続いて一〇〇キロで、一〇球をウォーミングアップに使い、残り二〇球を真剣に打った。結果は上々。周りにいたお客に拍手されてしまうほどだった。とはいえ、鋭い打球をいくつも披露したわけではないが。

計六〇回もバットを振ったことで身体が火照った奏は、洗面所で手を洗ってから、ジュースを飲みながら他の人のバッティングをしばし眺めて休む。

さすがにもう一打席立とうとは思わなかったので、一休みし終えると奏はバッティングセンターを後にした。

さて次はどうしよう。

奏は思案し、そうだ、と次にミニライヴ会場へと足を運ぶ。しかしそこで演奏されていたのは、あまり好みではない音楽だったので、すぐに立ち去ってしまった。他に何かないかなと館内の案内板を見渡すが、これと言って見当たらない。すっかり困ってしまった奏は、いっそのこと場所を変えてしまおうと、ターミナル駅のある街へ行ってみることにした。

雑貨屋の周辺で待ちかまえるという当初の作戦は、この時点で終了となったわけである。

そうと決まればさっそく移動。駅へと引き返し、電車に乗ってその街へと向かった。そして目的の駅に着き、人で賑わう街の中に降り立つと散策開始。ここには何度も来ており、いつもは友達と連れだってわいわいお喋りしながら、あっちのお店に入ったりこっちのお店に入ったりとしていた。しかし今回は一人。それも初めての経験。それがとても新鮮に感じられ、少々気分が高揚していることを

彼女自身も認識していた。

彼女はあちこち見て回る前に、腹ごしらえをしてしまおうとハンバーガーショップに入り、そこでハンバーガーとコーラを注文して、二階席の窓際で外の風景を眺めたがら食べる。ガラス越しに、たくさんの人々がそれぞれの向かう先へと行き交っている様子がよく見えた。

同じ方向に歩いていても、行き先はバラバラ。歩いている人々も様々。子供から大人、歳のいっている人まで。その人たちの服も、季節感はほぼ同じだがやはりバラバラ。

まさに、『るつぼ』と呼んでも違和感のない光景である。そしてこのるつぼは、誰かがこのようにしようと意図し、計算されて出来上がったものであるはずもなく、これは偶然の中で生じている現象に過ぎない。そう、すべてが偶然なのである。一人一人がこの場にいることも、すれ違うことも、奏がこの街へと場所を移したことも。そしてこうした偶然は、世界中のありとあらゆる場所で起きている。

そう考えてみると、人と人がすれ違うということが、どれだけ奇跡的な出来事なのかと思えてならず、ふとこんな言葉が頭の中に浮かんだ。

出会いは、常に奇跡の中にある。

その言葉を、今度は小さく口に出してみた。

「出会いは、常に奇跡の中にある」

出会うことは奇跡。その奇跡は、そう都合良く何度も起きるものではない。それどころか、二度三度ある方が不自然なのかもしれない。彼との再会は、どれだけの奇跡が必要なんだろう。そんな思考が奏の頭の中にじわりと広がってくると、いけないいけないと振り払う。保健医の先生に言われたとおり、幸せに感じるようにしなければと。

それに、行動範囲や行動時間が互いに近ければ近いほど、出会う確率は上がり、奇跡ではなく必然になることだったある。そう考えれば、悲観に暮れる必要はないのかもしれない。

もしかしたら、あの人も今この街に来ているかもしれない、などと夢想してどうにか気持ちを立て直し、ハンバーガーの残りを食べ、コーラの残りも一息で飲み、お腹を満たしてお店を出た。

それから街の中を歩き回り、色々なお店に入った。友人たちと見て歩くのと、一人で見て歩くのと、同じ景色や同じお店でもこんなに違うものかと改めて感じながら。ただ、心の隅には常にペンダントのことがあったので、メールが届いてないか何度も確認していた。

やがて、待ちきれなくなってくるとお店に行ってみようかしらと考えるようになった。もしくは電話をしてみようかしらと。そんな気持ちがむくむくと立ち上がってくると、奏は足を止め思案する。

とその時、メールの着信を知らせる呼び出し音が鳴った。一瞬びくりとしてしまったが、すぐに「着た！」と表情が花開いた。しかし、残念ながらお店からではなかった。送り主は仙台敦穂。なあんだ、と残念に思いながらメールを読む。内容はというと、お店から連絡があったかどうかの問い合わせのようなもの。

奏はそれに返信するべく、足を止めてビルの壁に寄りかかり、携帯のキーを押し、『まだ』とだけ打って返事を送る。するとすぐにまた敦穂からメールがきた。

『ひょっとして、今お店の前で待ってるとか？』

そうしかけた自分を思い出すと、言い当てられてしまったような気になり、『そんなことするはずないでしょ』と返す。これを読んだ敦穂は、やっぱりと言いたげなメールをすぐさま送ってきた。そうしてしばし壁に寄り掛かったままメールでやり取りし、『お店からメールきたら、あっちゃんにも教えるね』という奏のメールに対する『分かった。待ってるから。私のこと、忘れちゃ絶対に嫌だよ？』という文字と、いくつもの笑いを誘う絵文字による返事でようやく終わった。

そして携帯をバッグにしまい、ふうと一息つくと、直接電話で話した方が早かったんじゃないかしらとふと思い、ついついくすりと笑ってしまった。その笑いついでに、このやり取りを履歴で見直し

てみた。本当に他愛のない言葉の掛け合いばかりで、なんて科学力の無駄遣いかしらと思うとさらにおかしくなってきて、いつの間にか、いつものメロディーを口ずさんでいた。

履歴を見終えると、携帯をバッグにしまい、今から雑貨屋にいってみようかとしばし思案してみた。相変わらず鼻歌を歌いながら。するとメールの着信音が鳴った。もしかしたら今度こそお店からかも、と期待を寄せて携帯をバッグから取りだし、ディスプレイを見る。

期待通り、修理が終わって今し方店に届いたという、雑貨店からのメールだった。奏は携帯をバッグにしまい、意気揚々と駅の方へと歩き出す。

と、歩き始めてすぐ、突然肩を叩かれた。叩かれた、というよりは誰かが自分の肩に触れた、といった感じだったが。ともかく、呼び止められたと思った奏は、いったい誰がどんな用で私に声を掛けてきたのだろうと、後ろを振り返った――。

the Third Time's the Charm

思わず追いかけて呼び止めたまでは良かったのだが、掛ける言葉はまったく考えていなかった。ゆえに結弦は、振り返った奏を前にやっぱりあのときの子だと喜ぶ反面、口からは何の言葉も出せなかった。口にしたい想いは抱えきれないほど胸の中に詰まっているというのに。

一方奏はというと――。

突然後ろから呼び止められたので、何だろうと足を止めて振り返る。そこにいたのは、もう一度会いたいと願っていたあの少年。一瞬、息が止まりかけた。何が起きたのかまったく理解できなくなり、これが現実の出来事なのか、それとも白昼夢なのかすらも判断できなかった。

あまりにも唐突な再会。このときを願い、祈っていたというのに、この瞬間を認識し受け止めることが出来ない。ただただ、何かを言いたそうにしているが戸惑うだけの結弦を、驚きの表情で呆然と眺めることしか出来なかった。

二人のそばを通り過ぎていく人々の多くは特に気にする様子もないが、どうしたのだろうと視線を向け続ける人もいた。しかし誰一人として関与しようとはしない。二人の空間だけが、透明なカプセルで隔離されてしまったかのようだった。

とはいえ、いつまでもそのままということはない。時間は止まってしまったわけではなく、止まってしまったと見紛うほど遅々としたものになっていただけのこと。結弦が言葉を見つけ出すよりも先に、奏がぽつりと一言呟いた。ただし冷静な思考を取り戻しての一言ではなく、半ば呆然とした状態で言ったこと。そしてその言葉は、結弦にとってあまりにも想定外のものだったので、焦りを消す代わりに彼の目を点にさせ、困惑させることとなった。

奏の一言とは。

「オオアリクイの人……」

「……は？　オオアリクイ？　……え、ええと、オオアリクイの人が誰だか、知らないんですけど……、それが俺、なんですか？」

奏の肩から手を離し、困った顔でそう言う結弦に、奏がはたと正気に戻ると「……あ、ごめんなさい」と恥ずかしそうに謝った。

結弦は、なぜ彼女は謝ったのか、それよりもオオアリクイの人ってなんだろう、という疑問に思考を支配されかけてしまった。それも無理はないだろうが、今はその疑問に対処している場合ではない。言うべき事をしっかり言わなければいけない場面である。

しかし、とにかく何か言わなければと考えるがやはり良い言葉が出てこない。だからといって何も言えずにいるのも悔しく、なるようになれという気持ちで言葉を落としていった。ただしその声は、勢いを付けて言ったと思ったらトーンダウンし、また勢いを付けて、トーンダウン、といった調子でしどろもどろ。しかも視線は早々に足下に。もしもこの場に五十嵐悠太がいたのなら、しっかりしろと大声で叱咤激励していたことだろう。

「あの……！　じ、じつは、前に君のこと、本屋で見掛けたことがあって……、それで、その……、また会えたらいいなって！　お、思って……。何て言うか、ナンパみたいに聞こえるだろうけど！　いや、そう思われてもしかたないんだろうけど……、そういうんじゃなくて、純粋に、俺は……」とここまで言ったところで、情けないことにギブアップ。誤魔化すように「って、なに言ってんだかな、俺」と照れ笑いをした。

しかし、そこで奏の表情を見た瞬間、あれ？　と思った。俯いて喋っていた間、結弦が想像していた奏の表情は、呆れているか、迷惑そうにしているか、怒っているか、といったような、悪い印象を持たれてしまったときの顔ばかり。しかしいま彼女がしている表情は、それらとは明らかに異なり驚きに満ちている。この表情の意味はいったい何だろうと考える。そして、いきなり道の真ん中で知らない男からこんなことを言われたので、単純に驚き固まってしまっ

ているだけかもしれない、と一人で納得。
しまった。と今し方の自分の行動に舌打ちをし、このあとなんて言えばいいんだ、と更なる深みにはまっていこうとしていた。
すると、それまで驚くばかりの奏が、ぽつりと口を開いた。
「私も……」と。
「また会えたらいいなって、思ってた……。また会いたいなって、お願いしてた。駄目かもしれないって、思ったりもしたけど、それでもお願いしたの……。そしたら……」
そう、そっと語る奏はそこで言葉を止めて、それまでの驚きの表情から、じわりと浮かび上がってくる喜びの表情へと変わり、潤みだしたその瞳から一筋の涙がすうっと流れた。
その涙は、再会の喜びと、不安からの解放によるもの。
願っていれば、きっとまた出会える。そのときを夢見ながら幸せに感じていよう。そう頭で考えても、心にはそれを否定するものが常にあった。そんな奇跡、起こるはずないと。希望と不安。その狭間に彼女は立ち、希望が不安に負けてしまわないように願い、祈っていた。
そしていま、希望が現実となった。祈りが届き、願いが叶ったのだ。そのことがはっきりと認識できると、彼女を押し潰そうとしていた不安が慌てて逃げだし、現実が津波のように奏の心に押し寄せ、喜びと安堵に満ちたその波頭が、彼女の瞳からあふれ出たのだった。
そんな奏の心のうちを、彼女の少し震えていた声と表情、そして涙から感じ取ることはできた。本来ならば結弦も、この再会に胸を熱くし、一滴でも感涙していてもよさそうなもの。だが、『オオアリクイの人』という結弦にとって意味不明な奏の一言目からそのタイミングを完全に見失ったことから始まり、突然の彼女のこの涙に動揺する中で、人が行き交う歩道の真ん中でこの状況を続けるのはよろしくないと判断したりと、感動どころではなくなってしまっていた。
結弦は慌ててポケットからハンカチを出し、奏に差し出す。そし

て「とりあえず、ここじゃなんだから」と場所を変えようとした。それを断る理由などないので、ハンカチを受け取りながら奏もそれに同意するように頷き、そっと後ろから回した結弦の腕で支え押してもらうようにして歩いた。

二人はビルの脇に回り、結弦は植え込みの縁に奏を座ら、自分もその隣に腰を下ろした。そして、この短時間で生じたいくつもの疑問について聞いてみたい衝動に駆られ、その中でも特に聞きたいことが一つあった。しかし、今は質問するよりも彼女が落ち着く方が先だとぐっと堪える。

間違いなく、この子は言った。私も会いたかった、といった意味の言葉を。私も、ということはどこかで自分と会っているということだ。ひょっとしたら、本屋で？　実はこの子を捜しているときに？　俺が気付かなかっただけだとでも？

奏を見守りながらそんなことを考えているうちに、彼女の感情はやがて落ち着きを取り戻していった。奏は、ありがとうとハンカチを返すと、少しばかり目を赤くしながらも嬉しそうに言った。

「ごめんなさい。いきなり。あんまり突然だったから、つい」

「え？　ああ、いや。驚かせるようなことしちゃって、ごめん」

「ううん。私の方こそ」

「いや、俺の方こそ」

お互いに同じことを言う、結弦と奏。すると奏がおどけるように言った。

「それじゃあ、おあいこ」

これに、結弦もつられるように笑みを浮かべて「そうだね」と同意。彼もまた、互いにいつまでも同じことを言い合っても不毛なだけだと思ったからだ。これでひとまず一段落、といった雰囲気が二人の間に流れ出し、二人ともそれを感じ取っていた。そこでさっそく、結弦は尋ねた。

「あの、俺のこと、知ってるみたいだけど」

「うん。知ってる。お話ししたことはないけど、一度だけ会ってる

から」
「どこで？　ひょっとして、本屋で俺のこと気付いてたとか？」
「本屋？　ううん、あなたのこと見掛けたのは、バッティングセンター」それから奏は、そのときのことを話した。先週、友達とバッティングセンターに行ったとき、途中で大勢の友達と一緒にやってきて、初心者の女の子二人に一生懸命教えている様子を見てた、と。
　よりにもよってあのときかよ、変なところ見られたな、とバツの悪い気分がした結弦は、「全然気付かなかったよ」と頭をかく。教えていたときの自分の姿に恥ずかしさを感じ、また彼女たちへの教え方に、なんとなく罪の意識を感じてしまったのだ。そしてその教え方についてうがった見方をしようとすれば、いくらでも邪推できる。例えば、下心があってわざとあのように教えていたのだろう、などと。
　幸いなことに、彼女がそのような邪推をしている様子は微塵もなく、それはなさそうだと、心の中で冷や汗を拭いていた。
「それで、私のことは？」
「俺も同じ日だったんだ。と言っても、時間的にはその後だけど。帰りの途中で、地元の本屋に寄ったとき」今度は結弦がそのときのことを話す。参考書を買いに来たところ、聞き覚えのあるようなメロディーが聞こえてきて、知り合いだったら曲名を教えてもらおうとして、そのときに後ろ姿だったが一度見掛けた。そのすぐあと参考書を持ってレジに並んだときに、今度はちゃんと正面から見ることができたこと。そして、そのとき可愛いと思った、ということを。そのまま言葉にして――。
「かわ、いい……？」
「ああ。可愛いって思……、ってなに自分で暴露してんだよ俺っ！」
　そこで、会話は一時中断となった。奏は可愛いと言われたことに顔を真っ赤にして、結弦も、あのとき思ったことを本人を目の前にそのまま言ってしまったことに顔を真っ赤にして、二人とも喋るどころではなくなってしまったのだ。

それからしばらく、二人は胸を高鳴らせながら黙り込んでしまった。沈黙により静まりかえってしまったような気もし、それとは真逆に、自分の動悸が耳喧しく鳴り響いていてうるさくもあった。

そんな中で先に喋ったのは奏。「ありがとう」と恥ずかしそうに小さく言った。これに結弦も応えたのだが、何も考えずに反射的に言ったその言葉は、「どう、いたしまして」というもの。なんとも間の抜けたその回答に、奏がくすりと笑ってしまい、結弦は自分の言った言葉を認識していないまま、変なこと言ってしまったのかと動揺してしまう。その動揺した表情がまた彼女に笑顔をもたらし、けたけたと笑い出した。

「う……、俺、そんな恥ずかしいこと言った……？」

奏は笑いながらも、「ううん、違うの」とそれを否定するが、ちゃんと喋るにはもう少しだけ時間が必要だった。結弦はその笑い声の原因に困惑しつつも、それがひとまずおさまるのを待つしかないかと思う。そしてふと、ついさっき彼女が涙をこぼし始めたときもこうして待つことになってたなと思い出し、不思議と可笑しくなってきた。

自分の目の前で、再会に嬉しそうに涙を流し、そして今度は笑っている。その光景に、本当に再会したんだと実感が湧いてきた。奏の最初の一言で出鼻を挫かれ、必死に話し掛け、涙に困惑し、ようやく話し合えるようになり、そうしたら笑われてと、状況をしっかりと理解してこの喜びを実感する余裕のなかった結弦が、今になってようやく。

と、笑っていた奏が、おもむろにバッグからハンカチを取り出した。笑いすぎて涙が出てきたのかなと結弦が思いながら見ていると、奏はそのハンカチを結弦に差し出した。どうして自分に渡そうとするのか不思議に思った結弦が、「え？」と首を傾げる。すると、にこりと微笑んで言った。

「涙」

「涙って、俺は別に泣いてなんか――」そう言った自分の声が少し

震えていることに気が付くと、自分の頬を伝うものにも気付き、どうして彼女がハンカチを渡そうとしているのか理解した。
「あれ……、俺、泣いてる……？　な、なに泣いてんだろうな、なんで俺……」
みっともないところ見られてしまったと思いながら、結弦は自分の腕でその涙を拭い取り、「なんか、かっこ悪いな、男のくせに、こんな」と無理に笑顔を作って見せた。しかしその声は依然として少し震え気味で、拭ったばかりだというのにまた涙が頬を伝い流れる。
そんな結弦に、奏は真っ白いハンカチを差し出したまま、優しい声で言った。
「おあいこ」
その言葉と、奏の笑顔にほだされるように、結弦の涙はさらに流れる。その涙のすべては、受け取った奏のハンカチの中に溶けていったのだった。

Beginning

通りでは、たくさんの人々が行き交っていた。その通りを挟む建物の中でも、たくさんの人々がそれぞれの目的を持って過ごしている。そしていたるところで、一瞬の出会いが生まれては、声を掛け合うことも目を合わせることもなく消えていく。その数のなんと多いことか。

こうした一瞬の出会いも含めると、人が一生のうちで出会う人の数はとてつもなく多い。それこそ、数えることなど到底不可能なほどに。そして、その中で人間関係を築くに至る人の数は、ほんの一握りにも至らないだろう。砂漠の中の一粒の砂に匹敵するかもしれない。

それほど、人と人との出会いは奇跡の上に成り立っていると言っても過言ではない。ましてや、その瞬間までは見ず知らずの他人同士が、相手を一目見ただけだというのに互いに再会を望み、もともと接点を持たない日々を送っていたにも関わらず、その願いが成就されるとなると、奇跡という言葉ではまだまだ足りない。

もはや運命づけられた出会いとしか言い様がないだろう。

そして、今まさにその運命に導かれたかのような二人が、植え込みの縁に腰を下ろし、その再会を実感していた。

涙もようやく止まり、結弦はハンカチを返そうとした。しかし、そのハンカチはじっとりと湿っている。涙を拭いていたのだから当然なのだが、こんなになるまで泣いていたのかと思うと急に気恥ずかしくなると同時に、洗って返さないと失礼になると思いとどまり、「ごめん、こんなにしちゃって。洗って返すよ」と言った。

すると奏は、「ううん。気にしないで」と言って、そのハンカチを受け取ろうと手を伸ばす。そう言われても、やはり洗って返さないとと答えたのだが、彼女の次の一言で、返さないわけにはいかなくなってしまった。

「洗っちゃったら、もったいないもの」
ここで無理に洗濯すると言い張るのは違うと思ったので、申し訳ない気持ちも残しつつ返す。奏はハンカチを受け取ると、手のひらのそれを大切そうにしげしげと眺める。その横顔を見ながら、彼女がいまどんな気持ちでそれを見ているのかを考えると、結弦の心はどうにもこそばゆくなっていた。
とそこで、携帯電話の着信音が聞こえてきた。奏はそのメロディーから自分の携帯ではないとすぐに分かったので、バッグから取り出すことなく、一方そのメロディーを聞き慣れている結弦は、ズボンのポケットから携帯を取りだす。ディスプレイにあった送り主の名は、斉東だった。
この日は、悠太にとって決戦の日。その付添人として同行している斉東からの、状況報告のメールである。てっきり悠太本人が送ってくるものだと思っていたのだが、悠太にそんな余裕はまったくないらしい。代わり自分がこうして報告することになった、とそのメールにも書かれていた。そして肝心なその状況だが、今のところ順調に進んでいるらしく、相手の宮倉祐子もまんざらでもない様子だそうだ。ホームで別れ際に悠太へと合図を送っていたのだから、余程の失態をしてしまったり、それと気付かず不評を買ってしまう言動や行動をしない限りは、彼女も嫌な気持ちにはならないだろう。
この内容に結弦の表情は自然と綻び、また報告を頼むと返信しておいた。
携帯を閉じると、奏の視線を感じて目を向けたのだが、結弦は驚いてしまった。奏もまた、結弦が驚く前から驚いたような表情をしていた。
「え、と。どうしたの？」
「……忘れてた」
「なにを？」
「オオアリクイ」
その単語を再び聞いた結弦は、思わず少し間を開けてから、「…

…はい？」と不思議そうに答えた。
「“直った”ってメール来たから、取りに行くところだったの」
「“治った”って、まさかとは思うけど……、“飼って”るの？」
「“勝って”る？」言葉のアクセントから、奏は思わずそう繰り返す。
　単純な同音異字の間違い。しかしこの勘違いもやむを得ないことかも知れない。奏のリアクションから、自分の言葉が通じていないと感じた結弦は、もう少し分かりやすいように言い直した。
「いやだから、オオアリクイをペットとして飼ってるのかなって」
　ペットという単語がここで出てきたことに不思議に思った奏は、小首を傾げる。
「なんで？」
「なんでって、“治った”って言ったから」
「確かに“直った”って言ったけど。ペンダントが」
「ペンダント？　ってつまり、オオアリクイのペンダントが直った、てこと？」
「そう」
「……なんだ、“なおった”って、そっちの“直った”か。オオアリクイって言うから、てっきり」
　ここでようやく、結弦がどう勘違いしていたのかを奏は理解し、まったく噛み合っていなかった会話が噛み合うこととなった。
「まさか、オオアリクイをペットにしようだなんて思ったりしないわ。せいぜいが等身大のぬいぐるみぐらいよ」
「いや、それもどうかと思うけど」と微妙な顔をする結弦。
「そうかな」
「まあ、人の好みはそれぞれだから」
「あっちゃんみたいのこと言うのね」とやや拗ねたような表情に変える奏。しかし結弦に「あっちゃん？」と聞かれると、今度は得意げな表情で答えた。
「私の一番のお友達」

「そっか。良い友達を持ってるんだね」
「それ、どういう意味？」
「言葉のとおりだけど？」そう答える結弦が何を言わんとしているかはその表情からも明白。そこで奏は、「意地悪」と言ってすっくと立ち上がった。別に怒ったわけではない。彼女もまた、ちょっとした遊び心を出しただけだった。しかし結弦は彼女の行動を真に受けてしまったようで、「ご、ごめん、その、冗談だから、冗談」と動揺を顕わに後を追って立ち上がる。
　となると、このまま無視しては奏が結弦に意地悪をすることになってしまう。それは彼女の本意ではない。奏はくるっと向き直り、にこりと言った。
「嘘」
「う、そ……？」
　一瞬、まさかといった顔をした結弦だったが、これには一本取られたと兜を脱ぐしかなく、苦笑しながら「参りました」と降参。そして二人は笑い合った。通りかかった人たちは、何を笑っているのだろうと不思議そうな目をちらりと向けていたが、すぐに興味を失い去っていく。雑踏の中、二人の笑い声はしばし続いた。
　ひとしきり笑うと、この後のことを思い結弦が聞いた。
「ペンダント、今から取りに行くの？」
　その言葉には、少しばかり不安が抱かれていた。これを聞いてしまったら、これから一人でペンダントを受け取りに行くと言って、ここでお別れとなってしまうのではないかという不安が。ただし、それが今生の別れになると思うほど極度の悲観論者ではない。彼女の涙などを考えれば、携帯の番号かメールアドレスはおそらく教えてもらえるだろうとは思っており、あくまでも一時の別れに過ぎないと考えていた。それでも不安に思ってしまうのは、この再会を、この短い時間で終わらせてしまうのはあまりにも寂しすぎると思っていたからである。
　一方、結弦の問いに奏は、瞬時に自分の心の声に耳を傾け、どう

答えるべきか思考を働かせた。
　ペンダントも大切だが、それ以上に彼とこのまま話し続けていたい。もしも受け取りに行くと言ったのなら、もしかしたらここでお別れになってしまうかもしれない。それ以前に、このあと用事があってお別れになってしまう可能性もある。連絡先はお願いすれば教えてくれるとは思っていたが、奏もやはり、再会してまだそんなに時間は経っていないのにここでお別れというのは寂しく感じていた。
　詰まるところ、二人とも同じような想いと同じような不安があったということだ。
　そして奏は、質問を質問で返すのはあまり良い答え方ではないが、このあと用事があるのかどうかやはり聞いておいた方が絶対にいいと思い、こう返事した。
「ううん、急いではいないから。それで、もし良かったら、もう少しお話していたいのだけど、このあと用事とか、あるんですか？」
　これを聞いて結弦が喜ばないはずはない。そしてその気持ちを隠せるはずもない。ついつい声を大きくし、瞳を輝かせて「いや、なんにもない。ただぶらついてただけだから」と答えた。その声に、またも通行人たちが二人に視線を向けていたが、やはり早々に興味をなくしていた。そしてそんな周囲の反応など目にも耳にも届くことなく、奏も瞳を輝かせて「本当？」と聞いた。
　結弦が喜びをそのままに「ああ、もちろん」と力強く答えると、安堵したように「良かった」と呟いていた。そんな奏に、結弦もまた「俺も、そう思う」と笑顔を見せる。
　これで二人の不安はきれいに解消され、この再会をもっと喜び合うことが出来るという思いが、二人の心を満たしていった。
　こうなれば、奏としてもペンダントを取りに行くことに何ら問題はない。二人は雑貨屋に向かうことにしたのだが、相手の連絡先を聞くという行為が頭によぎったときに、もっと前にしておくべきだった事にそれぞれが気が付き、「……そうだ」と同時に声を出した。このように、二人同時に何か言おうとして声が重なった場合、たい

ていはどちらが先に喋るかを互いに譲り合ったりするもの。この場面でも、やはり例に漏れず譲り合いが行われたのだが、それはたったの一回だけで結弦が終わらせ、それじゃあ自分からと先に言った。

「まだ、自己紹介してなかったなって。俺、音無結弦」

そう言われて、奏はついついくすりと笑ってしまった。それを不思議に思った結弦は、「変な名前、だったかな」と頬を掻く。

「違うの。ごめんなさい、私も同じこと言おうとしてたから、なんだか可笑しく思えて」

「なるほど」

「私は立華奏。新星高校の二年生です」

自分と同い年という事実に、結弦はついつい意外そうに「俺とタメだったんだ」と言ってしまった。実際のところ、自分と同じかそれ以上という予想はなく、一つ下だったらいいなという認識で、万が一ずっと下だったらどうしようという心配も少しだけあった。例えば中学一年生とか。

自分が小柄であるということは疑いようのない事実で、実年齢より下に見られることは珍しいことでないのだが、それを嬉しいとはさすがに奏も思わない。なので、結弦のこの反応にちくりと返すべく、わざと笑顔で「ずっと年下だと思ってた？」と言った。

案の定、結弦は「い、いやあ、そんなこと……」と目を泳がせて答えてしまっていた。奏にとってはその動揺ぶりでもう十分だったようで、「分かってます。私、背は小さい方ですから」と言った奏の笑顔は、作り物ではなくなっていた。

「ご、ごめん」

「くすっ。もういいです。よく間違われてますし。それより、音無さんも高校二年生なんですね」

「あ、ああ。俺の学校は……、そんじょそこら辺の普通の学校です」

新星高校と言われて、自分の高校の名前を出すのが恥ずかしくなってしまった結弦であった。まさに、合コンのときに姉の卒業高の名前を出せなかった田野中と同じような心境で。ちなみに結弦の通う

高校は、恥ずかしく思ってしまうようなレベルの学校では決してない。ただ相手が悪すぎるだけの話。

そしてこの話題から早く離れなければと、思いついたままに「そうだ、あの、連絡先とか聞いても、いいかな」と言い、いきなりそれはマズいだろうと直後に後悔する。だが、奏も結弦の連絡先を教えてもらいたいと思っていたので、この申し出に驚くことなく、むしろ喜んで快諾。互いに携帯電話を出し、センサー部を向き合わせ、電話番号とメールアドレスを直接データ交換。双方ともデータは問題なく送られ、いつでも連絡を取り合うことが出来るようになった。これで二人は、次の奇跡を願い、ひたすらに待ち続ける日々を送る必要はなくなったのだ。

それがどれだけの奇跡か、そのことを噛みしめながら、ディスプレイに映し出されている相手の名前を、結弦も奏も心の中でそっと呟いていた。

Anywhere, Anyone

電話番号とメールアドレスを交換するあいだ会話が一時的に途切れたことで、二人とも急に言葉に詰まらせてしまった。一つの話題が終わり、さて次の話題をどうしようと困ってしまったわけである。普段から付き合いのある相手なら、ひどく他愛のないことだろうと適当にピックアップすれば良いだけのこと。しかしお互いに、この日はじめて言葉を交わし、しかも喋ったのが十数分ほど前という相手。さらに加えれば、再会を待ち望んでいた相手である。次に何を話せばよいのかと頭の中で空回りしてしまうのも、しかたのないことだろう。

そんな状況下で駅へと歩き始めた二人であったが、心境もまったく同じ、というわけではなかった。

結弦については、もちろん話題を探してはいるのだが、奏と並んで歩いているという状況に、驚きと喜びをかき混ぜたような感情が躍っており、目に映る街の情景も、また違った印象を受けていた。

奏もまた話題を探し、再会の驚きと喜びの只中にいたのだが、そのような自分自身に対して驚き、これも恋患いの症状なのかしらと、未体験のこの事態を少しばかり楽しんでもいた。

そうして歩くこと数分、最初に次の話題を持ち出したのは奏だった。その話題とは一週間前のバッティングセンターでのこと。ただし、「あの子たち、ちゃんと打てた?」という唐突な話し出しだったので、奏が何を言っているのか結弦はすぐに理解できなかった。

「え? と、誰が?」

「先週、音無くんがバットの握り方とか教えてあげてた女の子」

そう言われて理解すると同時に、じくりと心の隅が疼く。変な邪推はされてないと思ってはいても、結弦にとって流暢に話せる話題でもなかったからだ。とは言え、話題を無理に変えるわけにもいかない。

「ああ、とりあえず途中からバットには当たってたよ。さすがに良い当たりはなかったけど。初めてにしては、結構よかったと思うよ」と答える。

「そうなんだ。きっと、教え方が良かったのね」

「それはどうかな……」教え方、という言葉についつい反応してしまう結弦。しかし、手取り足取りといった感じでもあったその教え方についてまったく気にしていない様子で、奏が「そんなことないよ」と微笑んだので、気を揉むだけ無駄なのではとも思え、いくらか気持ちが軽くなっていた。

それから奏は、自分も友達に色々と教えてもらいながらバッティングセンターでボールを打っていると話し、そのバッティングコーチである敦穂の話題から互いの友人話になり、話題を探していたのが嘘のように会話が盛り上がっていった。そして、雑貨屋へ着くまでの間、二人はずっとお喋りをしていた。その時間は実質四〇分近くあったのだが、楽しいと感じる時間は誰にとってもあっという間に過ぎてしまうもの。二人にとってはほんの数分といった感覚しかなく、もう着いたのかと本気で驚いていた。

お店の中に入ると数人の客がおり、所狭しと置いてある商品を見ている。そしてそのお客全員歳が若い女性で、この空間にいる男性は、店員も含めて結弦ただ一人。当然、居心地の悪さと恥ずかしさは感じていた。しかし今朝セールの行列に初音と並んだときに比べれば、耐えきれないものでもないと考えていたので、逃げ出すことはなかった。人によっては、あの行列に並ぶよりもこちらの方が遙かに恥ずかしいと思うかもしれないが。

奏が先頭に立ち、二人は奥へと進みレジの前で足を止めると、店員がすぐに笑顔で「いらっしゃいませ」と応対してきた。その店員は昨日の若い女性店員ではなく、大人っぽい雰囲気の女性。

「あの、昨日ペンダントの修理をお願いして、それが直ったって連絡があったので」

奏はそう言いながら、バッグから修理依頼の控えを取り出し、レ

ジの店員に見せた。店員はすぐに理解したような表情でカウンター越しにそれを受け取り、一応さっと目を通す。

「はい。少々お待ち下さいませ」店員はそう答え、腰をかがめ、カウンターの下からワラで編まれたバスケットを取り出す。そこには輪ゴムで一括りにされた、透明なビニール袋に入ったペンダントと修理依頼書のお店控えが入っていた。それをバスケットから出し、輪ゴムを外して修理依頼書と控えを一瞥。照合が終わると、「こちらになります。ご確認、いただけますか？」と奏に確認を求めた。

奏はペンダントをビニールから取り出し、およそ二〇時間ぶりのオオアリクイとの再会に笑顔を見せながら、外れていた部分をしげしげと見る。きれいに直されており、見た目もなんの問題もない。軽く強度も確認し、納得したような表情を浮かべる。それを見て店員が「いかがでしょうか」と尋ねた。

「はい。大丈夫です」

これで修理の確認は無事終了。修理依頼書の受取欄にサインをして、店員が再度丁寧に謝り、用事はすべて終わった。帰ってきたオオアリクイにご満悦の顔で、奏はくるりと振り返る。そしてそこいる結弦に、オオアリクイを紹介するようにチェーンをつまんで見せた。良い返事を期待しているような眼差しで。

彼は、こう感想を述べた。

「味があるね」

もしもこの瞬間に初めて見たというのであれば、他の人たちと同じような表情を彼女に見せてしまっていたことだろう。実際、奏が修理の仕上がり具合をチェックしている様子を後ろから見ていた結弦の感想と表情は、やはり微妙なものだった。しかもその中には、再会したときの奏の第一声である『オオアリクイの人』という言葉への苦笑いも含まれていた。その反応を店員はちらりと目に止めていたので、結弦のこのセリフに「上手い」とこっそり笑っていた。

そして奏は、この評価を好意的なものとして受け取っていた。微妙だの何だのと目の前で言われ続けていたせいで、基準がずっと下

方修正されてしまっていたようだ。
　こうして結弦とオオアリクイの対面も済み、オオアリクイは奏のポケットにしまわれ、二人はお店を出た。ひとまずの用事が終わると、とりあえず落ち着いて話せそうな場所に行こうということになり、駅近くのコーヒーショップに向かった。だが、休日ということで満席。結弦は他に良いところはないかと考え、ハンバーガーショップなんてどうだろうと提案。しかし、奏が数時間前にハンバーガーショップで食事していたことを知ると、その案を取り下げ、それじゃあ他にはと再考。すると今度は奏が提案した。
「私は、お店の中じゃなくてもいいよ？」
　一瞬、それもありかと結弦は思ったが、彼女に気を遣わせてしまったと思うと、そういうわけにもいかないと「いや、でも」と言葉を返す。しかし、本当に自分は外でもいいと思っているし、外で話すのも気持ちがいいかも、などと奏が答えると、その表情と声から彼女が気を遣って無理に言っているとは思いにくくなり、結局、奏の案を採択。となれば、それではどこに腰を下ろすか、という問題になり、腰を下ろせそうな場所が近くにないかと周囲を見回す。だが適当な場所は見当たらない。
　となると移動するほかないのだが、その場所を探して放浪してしまっては、外にした意味がないに等しい。ほぼ確実に腰を下ろせそうな場所があり、しかもここから近い、という条件で結弦は考え、奏も考える。そして二人は同じ場所を考え当てた。
　ここからそう離れていない遊歩道。そこには花壇が並んでおり、それを椅子代わりにすることが出来、実際に座って話しをしている人の姿を奏は何度も見ており、結弦も一人で散策していたときに目撃していた。
　この回答の一致に、考えることは一緒だねと笑いあっていた。
　遊歩道へとやって来た二人は、適当に花壇の一つを選び、そういえばさっきもこうして花壇に座ったねとまた笑いあった。奏が先に花壇の縁に腰を下ろすと、結弦は腰を下ろす代わりに、「なにか飲

み物でも買ってくるけど、立華さんはなにがいい？」と尋ねる。
　奏は、なら私も一緒に行くと言ったのだが、わざわざ二人で行くこともないし、リクエストのジュースがなかったとしても、そのときはこれがあるからと携帯電話を見せられると、それじゃあ、とお茶をリクエスト。それを聞いて、結弦は自動販売機へと歩いていった。その後ろ姿を奏は感慨深そうにじっと眺め、見えなくなってしまうと、今度は携帯電話をバッグから取りだし、結弦のアドレスを開いた。
　ディスプレイにはしっかりと『音無結弦』という名前が表示されている。それを見て、胸が熱くなるのを感じた。
　夢じゃない。本当に、夢じゃない。という喜びに。
　そして、詳細ボタンを押して電話番号とメールアドレスも見る。これもちゃんと表示されており、喜びと安心感が増す。となれば、いつものメロディーが奏の口から流れ出すのも必然であり、コーヒーとお茶を買って戻ってきた結弦が、それを聞いて「その曲だけどさ、なんていう歌だっけ」と質問したのも必然。
　奏は、ありがとうと言ってお茶を受け取ってから、それに答えた。
「私も知らないの」
「え？　そうなの？」てっきり知っているものだと思っていた結弦は、少々驚いていた。
「そういえば、音無くんも聞き覚えがあるって、さっき言ってたけど。いつ頃聞いたか覚えてる？」
「俺も、ただ聞き覚えがあるってだけで、いつどこで聞いたのかまったく憶えていないんだ。ていうか、立華さんが歌っているのを聞くまで、すっかり忘れてたし。立華さんはどうなの？」
「私は、子供の頃からすごく楽しい気分になると口ずさんでたみたい。まるで口癖みたいに」
「みたいって？」
「お祖母ちゃんに教えてもらうまで、ずっと自覚がなかったの」
「なるほど。しかし子供の頃からっていうことは、十年近く前かそ

れ以上の古い曲ってことになるのか。そのお祖母ちゃんも知らないって？」

「聞いたことないって言ってた。お父さんもお母さんも。友達も」

「つまり、誰も知らないってことか。となると、むかし流行った曲っていうわけじゃなさそうだな。んじゃあ、ＢＧＭで使われただけとか、そんな感じなのかも」

「たぶん、そんな感じだと思う」

「そして、何の作品に使われたかも分からない。まさか片っ端からしらみつぶしに調べる、なんて出来るわけもないし。参ったな」

早くも手詰まりとなってしまった結弦は、どうしたものかと考え込む。すると奏が「音無くんも、やっぱり気になる？」と言った。

「それはまあ、それなりに気にはなるな。この歌があったからこそ、君とこうして出会えたようなものなんだから。それになんていうか、喉の奥に魚の小骨が刺さってるような感じがして。さすがに、喉を掻きむしりたくなるほど知りたいとまでは思ってないけど」

「ごめんね」

「いや、俺の方こそ、何も憶えてなくて……、って、また『おあいこ』になるのかな？」

結弦がおどけるようにそう言うと、奏も「そうね」と笑う。そして変わらず笑顔ではあったが、今度はおどける様子なく、この話題を締めくくった。

「とりあえず、この曲を知ってる人に出会うことを期待することにしよう。きっとどこかにいるはずだから。曲名をちゃんと憶えているヤツが。俺たち二人しか聞いたことがない、なんてことはないだろうしさ」

その言葉に、不思議とその出会いを予感しつつ、奏は頷いていた。

Endless Party Part I

お喋りに興じて、時間のことをすっかり失念してしまっていた二人に、現在の時刻を気付かせたのは斉東からの報告メールだった。携帯が着信を知らせ、結弦は送り主を見ると、その内容を読むのは後にしようかとも思った。しかし、悠太のこともやはり気にはなるので、「ごめん」と言って会話を一時中断し、携帯を開く。そしてメールを読もうとしたところ、その見出しに動揺してしまった。『大変だ！』という文字が書かれていたのだ。

まさか悠太のやつ、何かやらかしてしまったのかと心配になりつつ、その内容を読む。文章はそう長いものでもなかったのですぐに読み終わり、『大変だ！』という言葉の意味を理解した。と同時に、心配とは真逆だったその内容への安堵と、このような見出しをつけた斉東への「驚かせやがって」という恨み言を呟き、この日の悠太の大勝負が終わったことを伝える文章から、もうそんな時間なのかと現在の時刻を知る。ディスプレイに表示されている時刻は、六時一二分。

この数字に結弦は驚き、またすっかり日の落ちた空と、頭上で照らしている街灯の明かりに、いつの間にこんな時間になっていたのかと驚いた。

そんな結弦の様子をすぐ隣で見ていた奏は、いったい何があったのだろうと不思議に思い、「どうかしたの？」と尋ねる。

「いや、もうこんな時間だったから」そう言って、奏に携帯のディスプレイを向けると、彼女もまた驚いていた。

まだ一緒にいたいという気持ちは互いにあったが、時間が時間なので、さすがにこれ以上お喋りを続けるわけにもいかない。ついにタイムリミットが来てしまったかと、後ろ髪を引かれる思いの中で「そろそろ、帰らないとね」と結弦が言うと、奏もそれに同意。ただし真っ直ぐに家に帰るのは奏だけで、結弦は違った。

斉東からのメールに、いま五十嵐の祝勝会をやってるから、来られたら来いという一文が添えてあり、家とは反対方向だが、悠太の応援団長でもあるわけだからまあいいかと、彼らと合流することにしたからだった。もしそれを断って真っ直ぐ家に帰るのであれば、もう少しだけ奏といられたのだが。

刻々と近づくこの日の幕引きに寂しさを抱いて駅へと向かい、プラットホームで電車を待つ。このときばかりは、気を利かせて電車が遅れているといいな、と結弦は密かに思っていた。しかしダイヤは滞りなく運行されており、定刻通り奏の乗る電車がホームに入線するアナウンスが、ホームのスピーカーから響いた。

奏は、線路へと向けていた身体の向きを、まっすぐ結弦へと向けて、「今日は、ありがとう。とっても楽しかった」と言った。結弦もまた、奏へと正面に身体を向け、「俺の方こそ、ありがと」と答える。そして二人は微笑み合い、結弦が「あの――」と言いかけた。ちょうどそこで、続く言葉をかき消すかのように、騒音をまき散らしながら電車がブレーキを掛けながら滑り込んできた。その音に結弦は諦めるように言葉を途中で止めて、この騒がしさがおさまるまで待つことにした。そして同時に、一週間前のこの場所のことがふと頭をよぎった。

電車に乗り込む面々を、結弦と悠太はホームで見送った。その際、宮倉祐子は悠太にサインを送るように携帯を見せ、電車が行ってしまった後、悠太は想いを結弦に語った。

彼女と付き合いたい。彼女と自分とでは釣り合わないことぐらい分かっている。それでも、そんな理由で諦めたくない。好きとかそういうのではなく、運命の人だと感じたからだと。

運命の人との出会い。その言葉の意味を、結弦は今ならはっきりと理解できる。すぐ側にいる立華奏という少女が、自分にとって『運命の人』であると確信していたから。そして、こうして再会を果たせたこと、彼女も自分のことを想っていてくれたこと、それらこそが証拠であると、確信していたから。

だから彼は強く思った。何度でも彼女と会いたい。立華奏という、運命の人と。

などと考えてしまっていたため、「音無くん？」と奏に声を掛けられて現実に戻ったときには、残された時間は無きに等しくなっていた。しかも、すぐに発車のベルが鳴り出した。

「え？　ああ、ごめん。ちょっと考え事……、ってもう発車しちまうのかよ！？」

「うん。だから、またね。音無くん」

奏はそう言って、電車に乗り込む。そしてドア脇の手すりにつかまり、空いているもう一方の手を振った。このままでは、言おうとしていたことを何一つ言えずに終わってしまうと、結弦は慌てて言った。だが、「俺、電話するから！　だからまた――」と言ったところで、結弦の言葉を断ち切るかのようにドアが閉まった。

だからまた会おう、と最後まで言い切る前に。しかし、最後まで言わずとも奏には伝わっていた。奏は、窓越しにはっきり「うん」と微笑み返したのだ。他にも言いたかった言葉はあったが、その笑顔だけで、最低限のことは伝えられたと結弦は安堵していた。

そして奏を乗せた電車はゆっくりと動きだし、奇跡と言っても過言ではない再会の時間は終わった。ホームで一人となった結弦の心に、なんとも寂しい気持ちが押し寄せる。しかし、これは終わりではなく始まり。これから彼女との時間が回り始めるのだと思うと、明日への期待も押し寄せてくるというもの。いつしかその期待は寂しさを呑み込み、再会の喜びを改めて噛みしめるように、たったの数時間の間に目にした、奏の色々な表情を思い返していた。

泣いた顔。笑った顔。思案中の顔。怒った顔、といっても本気ではなかったが。そして、楽しげな顔。

それらのどれもが、強く目に焼き付いている。また記憶に残ったものは顔だけではない。彼女の様々な声も、褪せることなく強く耳に残していた。それだけ、奏が見せて、そして聞かせてくれた一つ一つが、結弦にとって特別なものだったということかもしれない。

こうした幸せな邂逅は、轟音を引き連れて電車がやって来ると終わった。結弦は電車に乗り、斉東からのメールを改めて読む。奏がいたので、読み流す程度にしか見ていなかったのだ。しかもまだ返信していない。車内でじっくりと読み返すと、最初目を通したときよりも、より嬉しく感じられた。大喜びしている悠太の様を想像すれば尚更のことだ。

大一番の結果、今度は付添人なしの、五十嵐悠太と宮倉祐子の二人きりで遊ぶことが決まったのだそうだ。斉東と旧友の和美が、それぞれ悠太と祐子の背中を押したことが大きかったらしいのだが、過程など問題ではない。結果こそなによりも重要であり、価値がある。

メールを再度読み終えると、返信を手短に打って送った。その内容は、『あと二〇分ぐらいでそっちに行く』といったもの。

それから少ししてから、携帯の着信の音が鳴った。ただしその音はメールを知らせるものではなく、通常の電話を知らせるもの。まさかとは思いつつ、ひょっとしたら奏からかもとどきりとしてしまった。しかし、発信元を見ると自宅の番号。きっと、この時間になっても帰ってこないので電話を掛けてきたのだろうと思いつつ、電車の中なので取るわけにもいかないので、ひとまず留守番ボタンを押してその場をやり過ごし、悠太たちのいる駅で降りてから自宅へ電話を掛けた。

電話に出たのは母親。やはり少しばかり心配していた様子。結弦は、街中で友達とばったり会って、話し込んでしまったらこんな時間になっていた、という話をし、これから五十嵐と斉東と会うことになったから、晩ご飯はいらないと告げる。『友達と』と言ったのは、なにも意図して奏のことを隠そうとしたわけではない。単に、説明に時間を掛けることが億劫に感じ、帰ってから話せばいいと思ってのこと。

母親は、あまり遅くならないようにとだけ注意し、電話を切った。駅からほど近いファミレスに着くと、二人はすでに夕食をとって

いた。悠太はイタリアンハンバーグ、斉東はビビンバ。悠太は、口の中のものをやっつけながら手を挙げて応え、斉東は笑いながら「まさか本当に来るとはな」と出迎えた。

「人を呼んどいてそういうこと言うか」

「時間が時間だろ。家にいるもんだと思って」

「家にいると思ってたヤツに、ここまで来いなんて言うなよ」

「んで、どこに行ってたんだ？」と、咀嚼し終えた悠太が会話に加わる。ひとまず席に着き、「新寄（しんより）。初ネエの荷物持ちにされてさ」と答えると、斉東が「この時間までか！　しかも二人きりでか！　くそう！　羨ましいぞ！　っていうか、一緒だったならなぜ連れてきてくれなかった！　そんなに初音さんを独占したいのか！　職権乱用だぞ！」と過剰に反応。この言動が示すとおり、斉東は初音のファンである。さらに言えば、初音を理想の姉と評する友人は多い。

「とりあえず落ち着け、斉東。それと、恥ずかしいからでかい声で訳の分からないこと言うのもやめてくれ」

そう言われて、斉東ははたと自分を取り戻し、「おっといかん」と笑う。しかし恨み節は止まってはくれなかった。

「んで、なぜ初音さんを連れてきてくれなかった。お前、それでも友達か？」

「友達とかそういう問題じゃないだろ。それに、初ネエはとっくに帰ってるよ。お前からメール来たときは、すでに家で晩飯の準備中だ」

「なんだよ」

「悪かったな、俺一人で」

「それじゃあ、この時間まで新寄で一人で遊んでたのか？」と悠太が意外そうに言う。荒れていた頃は別だが、落ち着いてからのこの数年は、一人で遅い時間まで遊ぶことはほとんどしなくなっていたからだ。

この質問に、結弦は鋭いところを突いてきたなと思った。ここで、一人で遊んでいたと答えたところで二人とも疑いはしないだろう。

ただ、奏のことを隠すつもりなどない。隠す必要などどこにもないのだし、結弦が悠太の応援団長となっているように、悠太は結弦の応援団長。斉東もまた、再会できることを願ってくれたのだから。

　ということで、結弦は「いや、一人じゃなかったんだ。実は――」と、奏との再会を二人に話す。どこで、どのように出会い、何を話したのかを。その出会い方に、二人は口を揃えて「まるでドラマみたいだな」と言い、結弦自身も、説明していてその通りだと思っていた。なお、再会の際に自分が思わず泣いてしまったことだけはあえて隠した。男のささやかなプライド、といったところだろう。

　話し終えると、二人から良かったなと祝福の言葉を贈られたのだが、ただ一点だけ、二人にとって大いに不満があった。

「それじゃあ、どんな子か拝ませてもらおうか」と悠太。

「ああ、そのうち、な」

「そのうちじゃない。今だ今」

「なコトできるわけないだろ。まさか、本気で今からここに呼び出せなんて言うつもりじゃないだろうな」

「それが出来るなら拒みはしないが。いいから、観念して写真を見せろ」

「写真？　そんなの、あるわけないだろ」

「なにっ！　まさかお前、携帯でその子との写真を撮ってこなかったとでも言うのか！」悠太は心底驚きの表情でそう言い、斉東は呆れ果てた顔をして首を振っていた。思いもしなかった二人のこの反応に、結弦は「なんだよそのリアクションは。いきなりそんなこと出来るわけないだろ」と不満そうに力説する。だが、返ってきた悠太の言葉とそれに同調した斉東の頷きは、無情なものだった。

「まさかお前が、そこまでのヘタレだとは思わなかったぜ」

「……そこまで言うかお前ら。ていうか、そういう問題じゃないだろうが」

　結弦は口を尖らせてそう言い返す。しかし内心では、言われるように写真を撮っておけば良かったと、自分の考えの至らなさに悔し

く思っていた。それから九時を過ぎる頃まで、結弦の再会祝いと悠太の祝勝会で三人は賑やいだのだった。

Endless Party Part II

電車のドアが、結弦の言葉を遮るように閉じられた。だが、その先を聞かずとも、何を言おうとしていたのかは分かっている。

――だから、また会おう。

奏自身も、これっきりで終わりにするつもりなど微塵もない。彼女もまた、結弦と会いたいと思っている。だから奏はドアの窓越しに「うん」と答えた。結弦は安心したような顔を浮かべ、ちゃんと伝わったのだと奏も安心する。そしてすぐに、電車がのっそりと動き出した。外の風景が流れ出し、あっという間に結弦の姿は見えなくなった。ホームから出ると、夜に沈む東の空の下で、人の営みを彩る色鮮やかな明かりが忙しげに走り去っていく。

まるで、どこまでも続く縁日の屋台の間を駆け抜けていくように。奏はしばらくのあいだ、数時間の再会を思い返しながら、名残惜しそうに窓の外を眺めていた。すると、携帯の着信音が鳴った。年頃の一人娘の帰りが遅いことに少々心配して、親が電話してきたのだ。友人と一緒ならば、この時間で電話を掛けることはしなかっただろうが、やはりずっと一人で出歩いていると考えると、心配はどうしても割り増しされてしまうようだ。

結弦と同じく車内で通話するわけにはいかないと考えた奏は、留守ボタンを押してその場は対応。そして次の停車駅で一度降りて自宅に電話した。母親の口調から、それほど心配していないようではあったが、まったく心配していなかったわけではないことぐらい、奏にも聞いて取れていた。

一分にも満たない電話が終わり、奏は次の電車を待つ。そして、ふと「音無くん、まだ電車待ってるのかな」と、ホームで奏を見送る結弦の姿を思い出した。彼女が認識している中では、逆方向へと走り抜けていく電車とは遭遇していない。そしてその認識は正しいものだった。再会を思い返すことに没頭していたとはいえ、すれ違

っていれば彼女のすぐ目の前を電車が駆け抜け、風圧がドアを叩き、奏が気付ずに終わるはずもないのだから。

奏は、ついさっき同じ駅のホームで別々の電車を待っていた二人が、別の駅のホームで同じく別々の電車を待っているというこの状況を、妙に楽しく感じ、くすりと笑う。

もしかしたら、今なら何にでも笑ってしまうかも。

そんなことを考えつつ、オオアリクイを顔の前に掲げ、楽しげにいつものメロディーを口ずさんでいた。結弦との出会いを作ってくれた、とも言えるメロディーを。

家に帰ってきた愛娘の上機嫌ぶりに、両親はてっきり、それほどペンダントが直って嬉しかったのかと勘違いしてしまっていた。また帰りが遅くなった理由も、特に聞こうとはしなかった。なので、結弦のことを両親に話すきっかけは一度もなくこの日が終わった。ただし、約一名はそうもいかない。

夕食も終わり、入浴も終わり、ちらちらと結弦のことを思いながら自室で勉強をしていると、携帯にメールが届いた。見ると、奏は思わず「あ、忘れてた……」と呟く。差出人は仙台敦穂。すぐに謝りのメールを送ろうとした。だが、文面を考えているうちに、メールではなく直接電話しようと考え直す。連絡し忘れたことへの謝罪だけならメールで十分だが、結弦と再会できたことも伝えようと考えたとたん、直接話した方が伝えやすいと思ったからだった。

電話を掛けるとすぐに敦穂が出た。

「ひどいわ奏……、私のことを忘れるなんて……。奏の心には、もうあの人しかいないの？」などと、開口一番悲しげに言いながら。彼女の言うあの人とはオオアリクイのことだったのだが、奏は結弦のことだと早合点してしまっていた。そのため、結弦のことばかり考えてしまっている自分を鑑みて、真面目に「今は、そんな感じかな。ごめんね、あっちゃん」と謝った。そんな事情など知る由もなく、これを敦穂は奏の冗談と受け取っていた。

「……そう。奏の心の中には、私の居場所はどこにもないのね」
「今は、って言ったでしょ」
「いいのよ。無理に慰めてくれなくても。そうか。タンスの裏とか、押し入れの奥とか、掛け軸の裏とか、壺の中とか、畳の下とか、BL本のカバーの裏とかにもないのね」
「私の心の中、あっちゃんにはそんな風景に見えてるのね……。それと、私そんな本持ってないし、好きでもないから」
「え？　じゃあガールズ？」
奏はここで、もう付き合いきれないと呆れたように「もう切るね」と言った。これを聞いて、冗談はここまでにしておいた方が良さそうだと考え、「で、あの人とはちゃんと再会できたんでしょ？」と敦穂は話題を変えた。繰り返しになるが、この場合の『あの人』とはオオアリクイ。そして相変わらず奏にとっては結弦のことを指し示していた。ゆえに、奏は驚いて「どうして知ってるの？」と聞いてしまった。
昨日一緒に雑貨屋へ行ってるのだから、どうしても何もないだろうと思った敦穂だったが、これはさっきのお返しかと誤判してしまい、ならば付き合ってあげようという優しい気持ちで「私の情報網をなめてもらっては困るわね」と返した。
それを聞いて、奏は考えた。
まさか、新聞部から情報提供があったのでは、と。結弦と再会した現場を新聞部がスクープしていても不思議ではない。本来ならば不思議と思ったりそんなはずはないかと笑い飛ばすところだろうが、あの新聞部に限っては何をやってもおかしくないと、卒業生や元教員を含めてほぼ全員が認識している現状を考えれば、奏が不思議と思わないのも無理はないだろう。賄賂一つ取っても、高校の新聞部の枠をはるかに超越していると言っても過言ではないのだし。
そして奏のその危惧は、思わず呟いてしまった「どうしよう……」という困惑の声に対して返ってきた敦穂の言葉で、さらに高まってしまった。

「観念することね」
「大騒ぎになるって言ったの、あっちゃんだよ?」不満気味に訴える奏。確かに敦穂は言った。ただし、残念ながら敦穂が話しているのは結弦のことではない。
「そんなこと言った記憶ないけど……、まあどのみち明日になれば、嫌でも学校中の人間が知ることになるんだから」
「それは、ちょっと困る」
「いいじゃない。またらぶらぶっぷりを見せつけてやれば。いっそのこと、みんなの前でキスでもしてやったら?」
「キ、キスって……、いきなりそんなこと出来るわけないじゃないっ!」
思わず、奏は顔を真っ赤にして大きな声で言い返してしまった。その動揺ぶりに、さすがにふざけて言っているのではないと気付き、ペンダントに口づけするだけなのに、そこまで声を荒げることだろうかと小首を傾げていた。そもそも、とっくにそうしていてもおかしくないほど、誰の前でも愛着を見せてきたというのに。
「そんなに恥ずかしがることでもないでしょうに」
「恥ずかしいに決まってるでしょ!」
奏の基準はいまいち分からん、と思いつつ、誤解したまま「まあ、人それぞれだからね。とにかく、これで一安心だ」と答える。確かに一安心である。結弦と再会を果たし、電話番号とメールアドレスを交換出来たのだから。
動揺を鎮めたのち、奏は当然「うん。すごくホッとした」と答えた。
噛み合っているようで実は噛み合っていないこの会話は、このままどこまでも続きそうな気配を漂わせていた。だが、さすがにこのまま終わることはなく、敦穂の次の言葉で二人はその事実にようやく気付いたのだった。
「しっかし、ほんと“直って”良かったよね」
「“治った”?」

一瞬、奏は結弦が怪我か病気でもしていたのかと考えてしまい、その詳細を聞こうと「どこか悪かったの？」と尋ねる。この質問に、敦穂は「あれ？」と思った。冗談にしては心配している様子が真に迫りすぎているのだ。それに、奏が迫真の演技で冗談を続けるとは考えにくい。基本、そこまでの悪乗りをする性格ではないのだ。立華奏という少女は。

そこで、敦穂は確認することにした。先ほどの不可解な動揺ぶりもあって。

「どこって……。あのさ、奏は何の話してるの？」

「何のって、だから音無くんのことでしょ？」

「……はい？」一瞬間を置いて、敦穂はそう答えた。話が食い違っているだろうとは予期できていたが、知らない名前が飛び出してくるとは思っていなかったのだ。そして敦穂のこのリアクションに、奏も「あれ？」と、話が食い違っていることに気が付いた。

「もしかしてあっちゃん、違う話してたの……？」

「……うん。もう思いっ切り。私はペンダントのこと喋ってたんだけど」

「え……。だって、『あの人』って言ったじゃない。だからてっきり」

「いや、私そこまでエスパーじゃないし。ていうか、電話した理由を考えれば普通はあのオオアリクイのことだと思うでしょ」

「それは、そうかもしれないけど……」

「んで、その音無くんって誰よ。キスって単語に随分と過剰反応していたけど、まさか例の男の子だったり？」

半分冗談ではあったが、奏のこれまでの反応を考えて残り半分を本気で言った。そして返ってきた言葉は、言い当てられた驚きで少々裏返ってしまっていた。

「なんで知ってるの？」

「いや、適当に言っただけだけど……、まさかホントに？」

「……うん。今日、偶然」

「偶然って……。それってまさに奇跡じゃない。ねえ、ホントのホントに会えたの？　冗談じゃなくて？」
「本当だよ」
「うっそ……。こんなことって、実際に起きるものなんだ……。いやあ、驚き……。久々に衝撃的な出来事だわ」
「私も、びっくりだった」
「そりゃそうでしょうよ」敦穂はこの奇跡をごくりと飲み込んで落ち着くまでに少々時間を要してから、「とにかく、良かったね。奏」と心からの祝福の言葉を贈った。
「ありがとう」
「それで？　再会して、その後どうなったの？　ていうか、どんな風に再会したの？」
「それは――」
それから奏は敦穂に説明を始めた。肩を叩かれて、振り返ったら彼だったというところから始まり、再会の喜びに自分が泣いてしまったこと。実は相手も、別の場所で自分とすれ違い、以来自分と会いたがっていたこと。そして自分と同じく、彼も嬉しさに泣いたこと。これに敦穂は、「それもまたすごい奇跡ね……。お互い一目見ただけなのに、両想いになってたってことでしょ？　まさにドラマの世界ね」とコメント。奏もそれには同意していた。
その後も、どういう話題で話をしたのかを喋った。細かい内容までは敦穂も求めなかったので、わりと簡単に話して終えた。
「なあるほどね。で、いつ私に紹介してくれるのかな？」
「あっちゃん、一度会ってるでしょ？」
「あれは会ってるとは言わないっしょ。とにかく、私に紹介したくない、と奏が言うのなら？　諦めるしかないけど？」
「そんなこと言うわけないじゃない。ただ、なんとなく恥ずかしいかなって……。それに、音無くんに聞いてみないと」
「ならさっそく聞いてみよう。連絡先もばっちり押さえているんだし」

「え、今？」
「もちろん！　と言いたいところだけど、そこまで鬼じゃないわよ。そのうち会わせてくれればいいわ。そうね……、期限として一ヶ月以内」
「なんで期限付き？」
「一ヶ月もあれば、紹介できるぐらいまで関係を深められるでしょ？」
関係を深める、という言葉から、ついつい「……あっちゃん、不潔」と答えてしまう奏。それを聞いた敦穂に、すかさず「不潔ってね……、奏こそ、なあに想像してんの？」としたり顔で指摘され、しまったと思いつつ少し間を置いてから、ぼそりと答えた。
「……黙秘」
「ずるいぞ奏。どんないけない想像をしたか白状しろい」
「黙秘」
「しゃあない……、なら、私が代弁してあげよう」
「それ、代弁じゃなくてあっちゃんの妄想だから」
などと脱線して笑いあったあと、敦穂はしみじみと言った。
「ついに奏に、恋人が出来たかあ」
「まだ恋人じゃないよ」
「照れながら言いやがってこの子は。両想いだったんだから、もう恋人確定でしょ。しっかし、これは大騒ぎになるわねえ。先週のバカ騒ぎを何倍にもしたぐらいの。立華奏についに恋人がっ！　その恋人とはいったいどこの誰なのか！　彼氏の正体を徹底調査！　その全貌が明らかに！　てな具合に新聞部が書き立てて。しかも、恋に破れた輩がもうろうと徘徊したり、本当の屍になってそこら辺に転がったりで、まるでお笑いホラー映画だわ」
「面白がらないでよ。もしそんなことになったら、わたし本当に困るんだから」奏が真剣に困ってしまうのも当然だろう。本当に新聞部が結弦の徹底調査をしてもおかしくないのだから。それは敦穂も理解しているので、ついつい悪乗りしてしまったと「ごめんごめん。

つい」と謝り、「確かに、笑ってばかりいられないわね」と思案げに呻った。いずれこの事実が学校中に知れ渡ることになり、そうなれば彼女が言ったような展開は、十二分に起こり得るどころかもはや避けられない運命と諦めるしかない。

だが、だからと言って諦めるわけにもいかない。あまりの騒ぎぶりに、奏がいま抱いている相手への気持ちが冷めてしまう可能性もないわけではない。事実、付き合い始めたばかりだったり、告白する前だったりに周りで囃し立てられたところ、すっかり気持ちが冷めてしまったという友人を何人か目にしてきた。

また、相手の結弦からすれば、降って湧いたように野次馬が押しかけてきて、あれこれと聞かれたり付きまとわれたりでもしたら、驚く程度では済まないだろう。最悪、面倒に感じて奏から去ってしまう可能性も決して低くはない。

その結果が奏にとって幸せなものであるはずもなく、敦穂としても、やはり二人が別れてしまうような結末だけは何としてでも阻止したい。

二人は、どう対処すればいいかを検討し始めた。

まず、この再会をこれ以上公言しないこと。情報源が多くなれば多くなるほど情報は漏洩しやすくなるのだから。ただし、今現在知っているのは敦穂のみなので、暴露されて広まってしまう危険性はない。だが、もし再会の現場をどこかで目撃されていたら、という話になると、不安が高まった。

ただ喋っていた場面なら、いくらでも嘘をつけられる。例えば、小学生のときの友達とか、中学生のときの友達とか。しかし、再会に思わず泣いてしまったあの瞬間を誰かに見られていたら。

可能性で考えれば、心配するようなことではない。ただしそれは一般生徒や教師だけに限って言えば、である。問題は、本職のパパラッチャーを雇っているとも噂されている神出鬼没の新聞部。彼らなら、何をしても不思議ではない。

「どうしよう……」

「どうしたものかねえ。いっそ、新聞部と裏取引するとか？」
「取引のしようがないよ。情報を提供するかわりに、こっちの条件を呑んでって言ったところで、あの新聞部がそれだけで納得するとは思えないもの。取引するなら、まず相手に、情報の価値がどれだけのものかを内容を言わずに認識させなきゃなんないし、もしかしたら早々に交渉を決裂させられて、きっと何かあるって裏で動き出されるだけになりそう」
「確かに……。でも、連中に隠し続けることなんて、まず不可能でしょ」
その後もしばらく検討し合いいくつか案が出されたがどれも採用には至らず、結局、当面は人目を忍ぶしかないというどうにも心許ない結論しか出せなかった。これではまるで、世間の注目を浴びている芸能人と変わりがないじゃない、と奏が愚痴をこぼすのも当然であり、入る高校を間違えたと今更ながらに後悔するのも当然だろう。
そして、このままでは確実に、騒ぎになったとき結弦に迷惑が掛かってしまう。いずれ新聞部が動き出すのなら、結弦にも事前に教えておくべきかもと奏は言う。しかし敦穂は、それを言ったがために彼が距離を置こうとしてしまうのではと内心で心配し、無理に話さなくてもいいんじゃないと諭した。
やがて敦穂との電話が終わると、すっかり勉強どころではなくなり、神様に祈るしかないのかしらとため息をつくばかりとなってしまっていた。
机の上に置かれているオオアリクイは、そんな奏の様子を気の毒そうに眺めていた。

奇跡とも言える再会を、結弦も奏もとうぜん喜んだ。しかし、何もかもが喜びに満ちあふれていたわけではない。結弦については、やはり教えなければいけないかなという義務感のようなものから、初音と母親に奏と会えたことを話し、初音の「早く家に連れてきてよお」というおねだり、というか強制命令に対処しなければならなかった。そして立華奏については、彼よりも深刻な問題に対処しなければいけなかった。

日が明けて月曜日。奏の足取りと気持ちは重かった。昨日はあれほど上機嫌だったのにと母親は不思議に思い、気分でも悪いのかと「大丈夫？　具合が悪いなら、休んでもいいのよ？」と言ってしまったほど。さすがに、朝から本当のことを説明する気にもなれず、「今日テストがあること、すっかり忘れてて」と誤魔化していた。

そして通学途中でも、何度もポケットからオオアリクイを取り出しては、ため息混じりに「もし学校が大騒ぎになってたら、どうしよう」と呟いていた。

学校に着くと、先週のケーキの一件による騒ぎはだいぶ沈静化していた。だが今はそれどころではない。昨日の一件が明るみに出されていないか、ということが何よりも問題である。幸いなことに、朝の段階では騒がれていないようで、ひとまずほっと胸を撫で下ろしていた。

その後も、方々からペンダント復活のお祝いをされた以外は特に変わった様子もなく、無事に一日が過ぎていく。そうして放課後を迎え、いよいよ帰るだけになる。この分なら誰にも見られていないのかなと、奏もようやく一安心できるようになっていた。もしも新聞部が情報を握っているのなら、この日のうちに何かしら動きを見せてくるだろうから。

敦穂もまた同じように考えていたようで、「ひとまず安心ね」と

こっそりと奏に耳打ちをして部活の練習に行き、奏は数人の友人と途中まで帰路を共にして家に帰った。

その道の途中、もちろん結弦のことは一切話さなかった。それが少し申し訳なく感じてしまっていた奏だったが、今はとにかく口外しないようにした方が良いというのは彼女も同意見だったので、ぐっと堪えるしかない。そのせいもあって、家に帰ったときにはすっかり気疲れしてしまっていた。

「ただいま」という言葉にもそれははっきりと現れ、今朝のこともあって母親は「やっぱり体調が悪かったんじゃないの？　とりあえず、ベッドでゆっくり休みなさい。すぐに飲み物持っていってあげるから」と、やや心配そうに言った。

強がる元気もあまり残っていなかった奏は、「ありがとう。そうする」と答えると、祖母の待つ居間へ行き、特にこの一年欠かさずやってきた、祖母への「ただいま、お祖母ちゃん」という言葉を掛けてすぐに、二階の自分の部屋へと上がっていった。

きちんと整頓されている部屋で奏は私服に着替え、ふうとベッドに腰を下ろすが、すぐに思い出したように、ハンガーに掛けられた制服の上着のポケットからオオアリクイを引っ張り出し、次いで携帯電話を鞄から取り出した。その二つを手に、再びベッドに座り、こてんと仰向けの格好で横になる。そして手にある二つを、見えるように宙に掲げた。

昨夜の敦穂との電話から今の今まで心配ばかりが先に立って、結弦との再会に喜び浸る余裕がほとんどなかった。だがここに至って、その疲労が奏の思考を良い方向に鈍らせたようで、新聞部のことはモヤの中に隠れ、替わって結弦のことがうっすらと現れてきた。すると、自然と奏の心は安らぎ、喜びがじわりと広がり、幸福感で頬が緩んでいった。

そんな自分を、私って単純なのかな、とくすりと笑う。それは自嘲ではなく、むしろそうであることが楽しく、嬉しいという気持ちで。

こうして心がすっかり軽くなった奏のもとに母親が飲み物を持って入ってくると、その豹変ぶりに少し驚いていた。
「あら、横になって少し楽になったのかしら？　それとも、その子が看病してくれたお陰かしら？」と冗談を交ぜて。その子とは、言うまでもなくオオアリクイ。
「うん。そうみたい」
奏はベッドから起き上がり、そう答えて飲み物を受け取る。しかし、危うくそれを落としそうになってしまった。というのも、母親が笑いながらこんなことを言ったからだ。
「なんだかその子、すっかりあなたの彼氏になっちゃったわね」
彼氏、という言葉に奏は一瞬どきりとした。結弦のことが発覚することを心配していただけに、何も知らない母親のこの言葉にさえ反応してしまうのも、しかたがないだろう。娘の動揺の理由を知らない母親は、うっかり手を滑らせた程度にしか思わなかったので、すぐに退室していったが、その動揺はすぐには収まってくれなかった。そして同時に、本当に両親にまで隠していなければいけないのかなと疑問も浮かんだ。
昨日の話で、情報源はこれ以上広げない方が良いとなった。両親が口を滑らせて、それが巡り巡って新聞部へと漏れ伝わってしまう可能性は否定できない。しかし、そこまで気にしていたら切りがないような気もする。せめて両親には話してもいいのではないか。
そんなことを考えているうちに、うとうととし始め、いつの間にか奏はベッドで寝息を立てていた。
目が覚めたのは、手に持ったままだった携帯電話がメールの着信を知らせたとき。起きたばかりのときは、それが現実のことなのか夢の中のことなのか、それともただの寝起きの妄想なのか判断できなかったが、なにはともあれ携帯を確認すると、現実のことであると判明。届いたメールは、奏が定期購読しているメールマガジンだった。半分瞼が閉じられたままで、そのメールに軽く目を通し、あとでもう一度読もうと思いつつ閉じる。そして彼女は別のメールを

開いた。
　昨日の夜届いた、結弦からのメール。
　昨日会えて嬉しかったことと、とても楽しかったこと。それと、今日は電話できそうにないことのお詫び、といった内容が、簡潔で短い文章でつづられている。その短さの中に凝縮されている結弦の気持ちが彼女の頭の中と心の中で再現されると、ついついほくそ笑んでしまっていた。
　そしてその日の夜。夕食を食べ終えて、自室で勉強をしていると、携帯が鳴った。今度はメールマガジンではなく直接の電話であり、結弦からのもの。夜に電話が掛かってくることは、すでに結弦とのメールのやり取りで分かっていたので、どきどきはしても慌てるようなこともなく、奏は電話を取った。
「もしもし」
「こんばんは、立華さん。こんな時間にごめん、今だいじょうぶ？」
「うん。大丈夫。いま自分の部屋だし」
「そか。俺もいま、自分の部屋から電話してるんだ。ってどうでもいいか。ははは。ってそうじゃなくて、昨日はごめん。電話できなくて」
「ううん。気にしないで。それに、こうして電話してくれただけで、すごく嬉しいから」
　奏は当たり前にそう返したのだが、結弦はこの言葉に顔を赤らめてしまっていた。「そ、そう？　あ、ありがと」と明らかに照れくささで動揺した声を出しながら。
　それから二人は、昨日のことを思い返しながらお喋りをした。奏が泣き出したとき、結弦がどれだけ動揺したかから始まり、私も音無くんが泣いたときはびっくりした、それは忘れてくれるとありがたいんだけど、などと冗談を言い合う。昨日の今日とあって、二人ともまだ鮮明に記憶に残っていたので、その場面場面をはっきりと思い出しながら。
　しかしそんな会話に、邪魔する不届き者が乱入してきた。

結弦が部屋で電話していると、珍しく夕食直後の時間に帰ってきた母親の声が廊下からした。
「何してるの？　そんなとこで」と。
結弦はいま自室の中。ドアも閉まっている。となれば、その声が結弦に向けられたものと判断するのは不自然である。彼は瞬時に、まさかと思った。そしてそのまさかを証明する声が、ドア越しにすぐに聞こえた。
「しー！」
明らかに初音の声である。しかも、「『しー』って、まさか初音、あなたってば……」と母親が実名入りで暴露。つまり、初音は部屋のすぐ外で盗み聞きしていた、というわけだ。これにはさすがに、母親にすべて任せて奏とお喋りを楽しみ続ける気にはなれない。一言でも何か言ってやらねばと、結弦は「ごめん、ちょっとだけ待っててもらえるかな。すぐ終わるから」と奏に言う。母親の声だけは奏の携帯のスピーカーからいくらか聞こえていたので、突然の用事が出来たのだろうと、「うん」と素直に答えた。
結弦は通話を保留にし、椅子から立ち上がる。そして、廊下から聞こえてる初音の応対する声に半分呆れ果てながらドアに近づき、がちゃりと開けた。その瞬間、初音が「あ……」という顔を彼に向けた。そんな初音に結弦は半眼で呻る。
「初ネエ……、いい趣味してるじゃないか」
「う……、うん！　そうでしょ？　やっぱり結弦もそう思うよね。それなのにお母さんってば――」
「……居直るなよ」
「だ、だって、やっぱり姉として心配じゃないっ。ちゃんとうまくお話しできてるのかな～、とか、失言とかしちゃってないかな～、とか色々と」
「初音。心配するのは良いことだけど、だからといって盗み聞きして良いとはならないでしょ？」とため息混じりで母親も初音を責める。二対一のこの状況で初音に勝機などあるはずもなく、母親をど

うにか味方に付けようとその後わずかな悪あがきを見せるも、最終的には「ごめんなさい」としょんぼり謝るほかなかった。

こうしてひとまず一件落着。ドアを閉め、部屋の前から遠ざかる足音を耳にしながら、やれやれと保留を解除する。

「ごめん、話の途中で」

「ううん。それより、用事は終わったの？」

「ああ。用事って呼べる代物じゃ、全然ないけど……」結弦は、我が姉には困ったもんだと思いつつそう答えたところで、はたと気が付いた。

耳にした足音が、一人分だったということに。

再度、まさかと思いながらがちゃりとドアを開ける。案の定、初音が片膝を付いてそこにいた。しかも、苦し紛れの苦笑いで「あ、足がね、痺れちゃって……」と言い訳をしてきた。これに、結弦の中の一本の血管が切れた。

「なら、俺が連れてってやる」

さすがにこれ以上はまずいかなと感じた初音は、「ああでも、もう治った。うん」と言ってすっくと立ち上がり、退散するように歩き出した。だが、結弦はそんな姉の肩をがっしと掴み、初音を止める。ぎくりとしつつ、初音はくるっと向き直り「な、なに？」と尋ねる。

「そっちじゃない。初ネエの行き先はリビングだ」初音が向かおうとしている先は、隣の彼女の部屋。そして間違いなく、壁に耳を当てて盗聴する気であることは、彼女の目を見れば明らか。となれば、盗み聞きできない場所へと追い払おうとするのも当然。

ここまで見透かされてしまっては、完全に白旗を揚げるしかない。

「しょうがないなあ」

「なにがしょうがないだよ。ったく」

「ちゃんと家にご招待するのよっ。いいわねっ」

「なに唐突に言ってんだ。しかも偉そうに。ほら、行った行った」

「はあい」

これでようやく、初音が結弦の部屋の前から去り、落ち着いて話せる環境になった。それはいいのだが、保留を解除してお喋りを再開しようとして、保留していないことに気が付いた。つまり今し方の会話がすべて奏に筒抜けだったということだ。

マジかよ。とげっそり肩を落とし、ドアを閉める結弦。

「……も、もしもし？　いや、ごめん。話している最中に。その……、やっぱり、聞こえてた、よね？」

「うん」

「あ、あはは、ほら、うちの姉すごく変だって、昨日話したよね」

「うん」

「まあ、こんな感じなんだ。ほんと、自分の姉ながら困るっていうか、もうちょっとなんとかなって欲しいところなんだけどね」

「でも、とっても楽しそう。私一人っ子だから、ちょっと羨ましい」

と奏は答えたところで、スピーカー越しに聞こえた初音の言葉を思い出してこう付け加えていた。純粋な気持ちで。

「それに、会ってみたいな。音無くんのお姉さんに」

結弦と奏が電話を切ったその数時間前、新星高校新聞部の編集室は、締め切り近くなったときの戦場のような喧噪とは対照的な不気味な静けさに包まれていた。また、窓はすべて外部から覗き見られないように遮光カーテンで閉め切られており、蛍光灯の明かりが虚ろに部屋の中を照らし出し、いっそう異様な雰囲気を醸し出している。

そんな部屋の中で、ホワイトボードに貼られた一枚の写真を、三人の部員が難しい顔をして見つめていた。一種異様な緊張感を漂わせて。

やがて、一人の男子生徒が厳かに口を開いた。

「さて、君たちはこれをどう思う？」

代表という肩書きの新聞部部長のその質問に、先に答えたのは三

年男子の企画部長だった。彼と同じく厳かな口調で。
「少なくとも、彼女にとって完全に気の許せる相手であるとは思いますね。しかし、彼女からしたら親しい友人としか見ていない可能性が高いでしょう。恋人関係という可能性は低いかと」
「ふむ。で、君の意見は？」続いて、編集長が指名された。
「企画部長の意見の前半については、私も同じです。ですが、後半は異なりますね」
「というと、恋人関係である可能性は高いと？」
「そこまでは言いません。いずれにしろ低い数字だと私も思います。ですが、少なくとも彼女は、“気を許せる”以上の信頼を彼に傾けていると感じます。この写真にある、彼女の表情から」
「女の直感、というヤツかな？」
「そんなところでしょう。アテにする代物ではありませんが」
「確かに、信頼に足るものではないな。しかし、ときとしてカンが真実を言い当てるときもある。そうだな……」
部長はそこで目を閉じて少し思案し、企画部長と編集長は、その決断を静かに待つ。そして、決断が下った。
「もしも二人が恋人関係であるのなら、記事として放ってはおけないな。うむ。調べ損になる可能性も大いにあるが、だから取材しない、というのは我が新星高校新聞部の主義に反する行為だ。ならば、真実を掴みにいくしかない。
ということで、まずは徹底調査が必要だな。企画部長、この件の取材にどれだけの人員を割けるかね？」
「そうですね……、四人までなら出せます」
「ではその四人の選出は君たちに任せよう。そしてその四人のチームリーダーを、編集長に任せる。良いかね？」
「はい。了解しました。それで、スコアはどうします？」
「ＡＡ（ダブル・エー）だ。慎重に頼むぞ」
スコアとは新聞部内部で使われている用語で、機密レベルを指す。初代新聞部部長が自身のボーリングのアベレージ・スコアをひた隠

しにしていたことから、転じて隠語として使われていた。なお、未だそのスコアは本人しか知らない。

そしてその評価段階は、最高がＡＡＡ（トリプル・エー）で最低がＥと七段階に分けられていた。つまりこの件の機密レベルは非常に高いということであり、調査や取材も、それだけ隠密性を求められるということでもあった。

企画部長と編集長は、部長の指示に従いさっそく人選作業に取りかかったのだった。

Road to the Thursday Evening

時刻は六時頃、曜日は木曜。帰りの途中、制服姿の奏はホームで驚いていた。そしてその隣にいた、やはり制服姿の結弦もまた驚いていた。そんな二人とは対照的に、一人の女性が満面の笑みを浮かべていた――。

遡ること三日前の月曜日の夜。

電話で結弦と喋っていた奏は、部屋の時計がちらりと目に入り、通話時間に気が付いた。話し始めておよそ一時間半。それだけ話せば十分だろう。二人はそこでお開きにして、

「それじゃあ、また明日。立華さん」

「うん。また明日」

と、電話を切った。そして奏は、明日もこうしてお喋りできる嬉しさに笑みをこぼしていた。一方結弦はというと、同じく嬉しさに浸るのではなく、さあどうしようと悩みだしていた。

明日の電話のことで悩んでいるのではない。さきほどの奏の一言に考え込んでしまったのだ。初音に会ってみたいという言葉に。

初音や母親にそのうち奏を紹介すると言ったように、奏にも「そのうちに、うん」と少々動揺の色の滲ませながら答えていた。だが、果たして本当に奏に会わせて良いものだろうかという不安が顔を覗かせてくる。今し方、弟の電話を必死に盗み聞きしようとしていた姉である。不安を感じてしまうのも不自然なことではない。ただしそれは、表面上の理由でしかない。

どちらにもそのうちと答えた以上、反故にするわけにはいかなず、やはりいずれは顔合わせをすることになる。ならばいつ頃にすれば良いのか。家族に紹介するという行為に特別な意味を持たせる必要などないのかもしれない。しかし彼女に特別な感情を抱いている結弦に、変に意識するなと言う方が難しいだろう。ゆえに、もう少し

二人で会ってからが順当だという考えがあった。知り合ったのも言葉を交わしたのも昨日が初めてなのだし、と。

それからしばらく思案した結果、「まあ、とにかくしばらくはないな」と結論付けて、この件は終わりにしたのだが、ふと、こんなことを思った。

どれだけ奏と会う機会があるのだろう、と。

同じ学校に通っているのであれば毎日のように会うことは難しくない。しかし二人の通う学校は別。会える時間はぐんと少なくなる。しかも奏は部活に入っており、火・水・金が活動日であることを聞いているので、その三日を除外。ということで、最大で月・木・土・日の四日になる。

それを少ないと感じるか多いと感じるかは人それぞれだが、結弦には少ないと感じられていた。同じ学校だったら、とどうしても思ってしまうからだ。

せっかく会えたのに、簡単に会えない。そんな寂しさともどかしさが湧き上がる。だがそれは駄々をこねたところでどうなるものでもない。彼ができることは、その四日をどう使うか。平日は無理だろうと諦めて過ごすのか、平日も会いたいと誘って、一日でも多く学校帰りに会うのか。

しかし女の子と一度も付き合った経験のない結弦には、平日に誘うというハードルは少々高かったようで、無理に誘って良いものかと決めあぐねてしまった。だが、誘えずに週末だけで我慢するというのも、なんとなく負けのような気がする。

初音と会う会わせないに続いて、またしても問題を抱えてしまったわけである。そしてこの問題を自力で解決できる自信は結弦にはなかった。となれば助力を求めるしかない。悶々と一人悩み続けるよりよっぽど良い選択である。ただし、ここで重要なのは、誰に助力を求めるか。奏が自分の誘いをどう受け取るかが不安である、という視点から考えれば、やはり奏と同性であった方が良い。しかし、悲しいかな結弦にはこんな相談のできる親しい女友達は一人もいな

い。昔は数人いたが、それは結弦が荒れ出す前のことで、小学生時代まで遡らなければならない。なら他にはと考え、暗闇の中を彷徨ったその最後に、初音と母親の顔が浮かんだ。しかし、母親に相談するのは恥ずかしすぎるので即却下。初音にしても、恥ずかしいというより何を言い出すか不安なので却下。

「俺、こんなに寂しいヤツだったんだ……」

相談できる異性が一人もいないという実情を思い知らされて、結弦はがっくりと肩を落としたのであった。そして、異性に相談することは諦め、手近なところで手を打つことにした。

「しかたない。五十嵐にでも聞いてみるか。あいつも、俺と似たような状況なわけだし」

その翌日の火曜日の昼休み、購買部で悠太を捕まえると、戦利品を手に適当な食事場所を探し歩き、腰を下ろしてパンをかじりつき始めると、さっそく聞いてみた。

「なあ、五十嵐。お前、宮倉さんと会えるのって週末ぐらいだろ？」

この質問に、悠太は思わず「……ずいぶんと唐突な質問だな」と驚いてしまった。しかしすぐに思い直すと、「いや、そういうわけでもないか。今のお前は」とにやりと笑みを浮かべる。

「それはいいから、どうなんだよ」

「ああ。週末だけだな。平日はいろいろと習い事してて忙しらしいし、例えそうじゃなかったにしても、ガードが堅いからな」

「ガード？　宮倉さん、お前のことけっこう気に入ってるんじゃないのか？　それだったら、平日会うぐらい」

「彼女自身のガードじゃない。彼女の周りにいる連中だ」

宮倉祐子はお嬢様である。さすがにＳＰを常に側に置いて生活しているような身分とまではいっていないが、それなりに監視の目はある。

「ああ、そういうことか」

「そういうことだ。んで、音無はどうなんだよ」

「どう……って」

「立華さん、だっけ？　お前のこと好きみたいなんだろ？　だったら平日会うぐらい何の問題もないだろ」

悠太のこのやり返しに、憎々しげに思いながら結弦は「う……」と喉を詰まらせた。見事的中、というよりも、考えるまでもないといった様子の悠太は、さらに結弦の言おうとしていたことを代弁する。

「それとも、平日誘ってみたはいいけど、引かれでもしたらどうしよう。なあんて、心配か？」

「わ、悪いかよ」ここまで容易く見抜かれたことで、つい口を尖らせてしまう結弦。そのことを相談しようとしていたのだから、素直に認めれば良さそうなものだが、人間、そう簡単で素直な生き物ではない。音無結弦という少年も然り。そんな少年を非難したり小馬鹿にすることなく、悠太は「いいや。俺としては、むしろ嬉しいね。そういう今のお前が」と素直に喜んでいた。結弦が荒れていた頃から知っている仲なだけに。

「ま、とにかくこれだけは言えるな。会いたいなら会いたいって言え」

「随分と簡単に言ってくれるな」

「お前だって俺に簡単に言っただろうが」

「それは……！　まあ、そうだけど」

「なあに、心配することはないだろ。聞くだけ聞いてみりゃいいだけのことだし、んなことで嫌われるとは、俺にはとうてい思えないからな。お前ののろけ話を聞く限りな。それともお前は、そんなことで引いてしまうような子だと思っているのか」

「なんかそういう言われ方すると、まるで俺が悪いみたいだな」

「ああ。お前が悪い。一点の曇りなくお前が悪い」

「そこまで言うか……」

「てことだ。当たって砕けてこい」

「砕けてどうする。っていうか、大丈夫だって言っただろ。今」

「愛は障害が多いほど、燃え上がるもんだからな。砕けてもなお立

ち向かっていけ、音無結弦」
楽しそうに無責任なこと言いやがって、と思った結弦は、その仕返しとばかりに半眼でこう言葉を返した。
「……そんな恥ずかしいセリフを平気で言えるヤツだったんだな。五十嵐って」
すると悠太は、とたんに「それは言うな！」と耳を真っ赤にしてそれまでの余裕を脱ぎ捨てた。どうやら本気で恥ずかしかったらしい。そしてこのリアクションに、結弦は呆れた口調で呟いた。
「だったら言うなよ……」
「親友のために自ら骨を断って言ってるというに、なんだその言い方は！」
「自分から複雑骨折しておいて、俺に文句言うな」
とこのような経緯を経て、最終的に結弦は、部活のない木曜日に会えないか奏に聞くことにした。ただし、なるべく軽い感じで、しかも自然な会話の流れの中で。そしてその日の夜、結弦は電話をし、勇気を出して聞いてみた。残念ながら自然な流れの中でではなく、唐突に。
「あの、明後日とかって、なにか予定とか入ってるのかな」
「ううん。今のところ、何もない」
「そ、そうなんだ……。そ、それじゃあさ、学校終わったあととか、どうかな」
何がどうかな、と察しの悪い相手なら思われてしまっていただろう。だが、何も察せないほど奏は鈍くない。むしろ頭の回転が速いので、何を言わんとしているかすぐに理解していた。
「うん。私も、また会いたいって思ってたから」
これで、無事交渉成立。それまでの緊張が結弦の身体から一気に抜け落ち、へなへなと力が失せていくのを感じていた。こうして明後日の木曜日に会うことになると、次は、どこで待ち合わせるかという話になった。目的はあくまでも会うことであり、二人で遊ぶことではない。ならば、自分の帰り道と奏の帰り道の中間地点付近で、

お茶できる場所がちょうど良いだろうと考え、とある駅を指名した。そこはわりと人の集まる街で、ゆえに奏はその案に少しだけ考えて、それから頷いた。人の集まる場所で会うのはなるべく避けた方が良いとは敦穂に言われていたからだ。だが、気にしすぎていてはどこも駄目ということになる。幸い、昨日今日と噂されておらず、新聞部も動きを見せていない。なら過敏に反応しすぎるのもどうかと思ったのだ。

しかし、翌日このことを敦穂に言ったところ、そこは避けるべきだと言われた。

「けっこううちの生徒、学校帰りに寄ってるらしいよ？　場所を変えた方が絶対にいいと思うけど」

「でも、もう決めちゃったし」

「ならさ、理由を付けて別の場所にしてもらえばいいんじゃない？　例えば、そのお店に行きたくなったから、とか」

「そのお店って？」

「例えば、ケーキ屋とかクレープ屋とかドーナツ屋とか。甘味どころでもいいし」

「……全部食べ物」

「なんでもいいのよ。とにかく、うちの生徒があんまり行かない場所にした方がいいよ。例えば――」

敦穂はいくつか候補を挙げ、好きなのを選んでと奏に言った。そして奏は敦穂の説得に折れ、その日の夜、今度は奏から結弦に電話をして場所の変更をお願いした。それを聞いた結弦は、当初の待ち合わせ場所に何のこだわりもなかったので、じゃあそこにしようとすぐに同意。

こうして、二人は木曜日を迎えたのだった。

Encounter

放課後になると、結弦はいそいそと待ち合わせ場所に向かった。てっきり、俺たちも連れて行けと悠太や斉東たちが言ってくるものだと思っていたのだが、彼らは「ヘマするなよ」と笑顔でお見送り。これは絶対に何か企んでいるに違いないと警戒の眼差しを向けたところ、見送りの一人から「そんな心配すんな。邪魔するほど野暮じゃねえよ。ただし、彼女の写メを送ってくれさえすればな」との返答が来た。

交換条件としては悪くない。恥ずかしさはあるが、隠したいことでもないのだから。結弦はその条件を呑み、学校で彼らと別れた。

待ち合わせの駅に着き改札を出ると、奏の姿を探すことなく、改札がよく見える場所に立つ。学校を出た際にメールを送り、その返信から自分が先に着くことは分かっており、彼女が学校を出たときに送ってきたメールによって、およそ二〇分後に着くことも分かっている。それまでの時間、結弦は改札を見つめながら待った。

電車が到着するたびに、降りた乗客が改札を抜けていった。私服姿の若者や背広姿のサラリーマン、初老の人、などなどが吐き出されるかのように。その中にもちろん、それぞれの学校の制服を着た学生の姿があった。レトロな黒の学生服や濃紺のセーラー服、今時といったデザインの洒落たブレザーなど。ちなみに結弦の学校の制服は、グレーのズボンまたはスカートに、ベージュのジャケット。そうした様々な制服を見ているうちに、奏の制服姿はどんなだろうと思い始めた。彼女の通う学校は知っているが、その学校の制服がどんなデザインかは分からない。そこで、目に付く制服姿の女子学生に奏を当てはめてみることにした。着せ替え人形のように、というよりも、奏の顔を貼り付けたコラージュ写真のように。

そうして三人目をじっと見つめたとき、見ず知らずのその女子生徒と目が合ってしまった。これには慌てて目を逸らし、素知らぬ顔

を別方向へと向けることとなった。もしもその相手に「なに見てんのよ」と詰め寄られたら、少々面倒なことになるなと思いながら。

幸い、その少女はそのまま行ってしまったので、結弦はほっと胸を撫で下ろすことが出来た。しかしこのアクシデントを教訓とする必要はある。奏が来たとき、自分は見知らぬ少女とトラブルの最中、などという展開を許容できるはずもないのだから。

そこで今度は、焦点を合わせていないような眼差しで、あまりしつこく見ていなければ良いのではと考え、いざ実践。するとその作戦は功を奏し、結弦の視線を感じて彼の方を見ることはあっても、すぐに前を向いて歩き去っていった。これで気をよくした結弦は、要領は得たと次のターゲットを探す。しかしほとんどの乗客は降りてしまい、改札を抜ける人影はもうない。

せっかく会得したスキルを生かせないという今の状況を少々残念に思いつつ、次の電車を待つ。それからしばらくして、先ほどとは反対方向の電車がやって来て再び改札が賑わうと、さっそくコラージュ開始。何の気なしの構えでしていたが、やがて結弦の表情に真剣味が滲んでくる。コラージュしやすいようにとわざわざ改札から少し離れた場所に移動している時点で、最初から何の気なしとは言えないのだが。

そして結弦は、ときおりどきりと胸を弾ませていた。被写体の女の子に対してではなく、脳内でコラージュされた奏の姿に。

そうして二〇分ほど経ち、おそらく奏が乗っているであろう電車がやってくると、改札を注視しながら降りてくる奏を待つ。しかし、改札を抜けてきた制服姿の少女に奏の顔をコラージュさせてきた影響が、ここで出てしまうこととなった。奏を待っているはずの結弦の視線は、当人の自覚なく、ついつい女子学生の制服にも向けられてしまっていたのだ。

そして改札から出てくる人々の中に、モスグリーンを基調にしたチェック柄のスカートに、柄のない同じモスグリーンのジャケットを羽織った少女がちらりと見えると、濃紺を基調としたジャケット

が多く目に付いていたことで、なおさらその制服に目を引かれ、オートマチックにコラージュしてその少女を見てみた。

うん。これもいいかも。

と感想を抱きつつ、焦点をずらしながら眺める。

その少女は、改札を出てきょろきょろと周囲を見てから、真っ直ぐ結弦の方へと向かってきた。気付かれたか、と思いはしたが、まあ大丈夫だろうと素知らぬ顔で視線を逸らす。そしてその少女のものらしき足音が着実に近づいてくると、焦りがじわりと滲みだしてきた。これはまずいかもと感じ始める結弦。そして、その足音が彼のすぐ前でぴたりと止まった。

万事休す。そう思った瞬間、「ごめんなさい、遅くなっちゃって」という少しばかり悲しげな声が聞こえてきた。しかも、奏とそっくりな声で。

あれ？　なんで立華さんの声が？　と不思議に思いつつ、恐る恐るといった具合で目だけちらりと向けた。そこにいたのは、モスグリーンのジャケットを羽織り、同色を基調としたチェック柄のスカートを穿いた、立華奏その人だった。しかも声と同様の表情をして。

この状況に、水槽でぱくぱくと口を開け閉めする魚のように、結弦は「え……、立華……さん……？」と目を点にさせてしまった。つまり結弦がコラージュした相手は、奏本人だったのである。

「本当に、ごめんなさい……」

「あ……、い、いや！　そんな！　ていうかなんで立華さんが謝るんだよ」

「でも、怒ったから、私のこと気付かない振りしたんでしょ……？　それとも、私の顔、もう忘れちゃったのかな……」

「違う違う！　そうじゃないんだ！　ただその……、ちょっと考え事してて……、それでぼーっとしてただけで、たまたまそう見えただけなんだ！　ほんと、ただそれだけなんだ！」

「本当に……？」

「もちろん、怒る要素なんてどこにもないし、こうしてまた会えて

すごく嬉しいし！　それに立華さんの顔忘れるなんて絶対にあり得ないから！　例え記憶喪失になろうとも、君のことだけは絶対に忘れないさ！」

　大衆の面前で、我ながらなんて恥ずかしいセリフを言ってるんだと思いつつ、奏を安心させるべく熱弁を振るう。じろじろと見る輩もいたが、そんな視線を気にしている場合ではない。そしてその誠意がしっかりと伝わったようで、奏は「良かった」とようやく悲しげな表情を解き、安堵のため息をついていた。あとはしっかりと謝るだけである。非はすべて自分にあるのだからと。

「ごめん、誤解させるようなことして。本当にごめん」

「ううん、私の方こそ、一人で勝手に勘違いして」

「でもやっぱり、君に嫌な思いさせたから」

「それは音無くんのせいじゃないから。だから、もう謝らないで、お願い」

　お願い、とまで言われてしまっては、これ以上しつこく謝罪しても迷惑なだけであろう。結弦は残りの謝罪の気持ちを集約させて謝った。

「それでもやっぱりごめん！」

　そして、バツの悪そうにはにかんだような表情で顔を上げた。それを見て、奏もこれで一件落着と感じた。しかし、すべてが済んだわけではない。改札前でこんなことをしていれば、すっかり注目されて当然。二人は速やかにこの場から逃げ出さねばならなかったのだ。走るわけにもいかず、競歩でもしているかのような急ぎ足で、脇目も振らずに。

　ようやく安心できる場所まで移動すると、二人は足を止めて呼吸を整える。気持ちが落ち着くと、つい今し方の恥ずかしさがぶり返す一方、なんとも締まらない一幕に二人してぷっと笑い出した。やがて笑い声は心を軽くさせ、すっかり晴れ晴れとしたものとなっていった。

　その後、奏がリクエストした、色とりどりの何種類ものワッフル

が揃った洋菓子屋へと移動。そのお店は、ビルの中にある店舗ではなく、ワゴン車を改造したもの。一頃はとても人気で、常に長蛇の列を作るほどの有名なお店だったのだが、今は昔ほど繁盛していないようだった。お客とはとても流動的で気まぐれな生き物であるのだから、それもまた自然の摂理と言えるだろう。

とはいえ、それでも数人の若い女性が列を作っており、その周囲では買ったばかりのワッフルを頬張っている若い女性が何人もいる。そしてその中には、改札前で結弦がコラージュした少女もいた。もしそのときのことをここで言われたらと、少しばかり緊張してしまったが、向こうには結弦を気にする様子などまったくなかったので、ふうとこっそり安堵のため息をもらしていた。

そして奏と一緒に列に並ぶと、なんだかこんなんばっかだな、と日曜日のことを思い出して苦笑しつつ、渡されたメニューを手に奏と喋りながら順番を待った。

「音無くんは、どれ食べるの？」

「え？　俺も食べるの？」

「え……、こういうの、嫌い？」

「いや、そんなことは全然ないけど。ていうかその考えがなかった。ん～、そうだな。せっかくだから食べるか。つっても……、種類がありすぎだって、これ」

その種類の豊富さに、どれが良いか見れば見るほど分からなくなる。そこで奏が「なら、店長オススメのこれなんてどうかな」と救いの手を差し伸べた。あれこれ悩むよりは、それにした方が手っ取り早いということで、店長オススメの一品に決定。奏も早々に一品を選び、順番が回ってくると注文。

彼女が頼んだのは、ワッフルの上に食べやすくカットされた苺とバニラクリームがトッピングされ、チョコレートソースがたっぷりとかけられた、苺チョコワッフル。一方結弦が頼んだ店長オススメの一品は、バニラクリームにレーズンとナッツがトッピングされ、キャラメルソースがかけられた、レーズンナッツワッフル。

注文を聞いた店員が「お持ち帰りですか？」と聞いてくると、奏は結弦を見た。どうしようか、といった眼差しで。この場で食べるのは少々恥ずかしかった結弦は、持ち帰りでと答える。それから間もなくして出来上がった二つのワッフルは仲良く一つの箱に収められて渡された。

二つのワッフル代と心ばかりの箱代を、ひとまず結弦が一括で支払い、ワゴン車から離れると、「さて、どこで食べようか」と結弦は思案した。すると、丁度いい場所があると奏が言ったので、それじゃあと任せることにした。

歩き出して数分後、途中で飲み物を買って大きなビルディングの敷地内にあるオープンエリアへとやって来ると、空いているベンチに腰を下ろした。もしも食べる場所に困ったらここに行きなさい、と事前に敦穂から教わったとおりに。

ベンチに座った二人は、さっそくワッフルを頂く。奏は慎重にゆっくりと、結弦はがぶりと。

ワッフルのおよそ四分の一を一口でかじり取り、もぐもぐと食べた結弦は、「美味い……。店長オススメは伊達じゃなかった」と感慨深そうに感想を述べ、奏はそんな結弦を見て、危うく吹き出しそうになっていた。結弦の鼻の頭に、バニラクリームとキャラメルソースが付いていたからだ。なぜ彼女が笑ったのか結弦が理解に苦しむ中、どうにか笑いを堪えきった奏は、自分のワッフルを脇に置き、ハンカチを取り出す。そしてそのハンカチで鼻を拭いてあげようと手を伸ばした。状況をまったく理解していない結弦は、「な、なに？」と身を引こうとする。

逃げられては拭くに拭けない奏は、「じっとして」と制し、石像のように固まる結弦の鼻先をハンカチで拭いた。これでようやく理解できた結弦は、自分がはしゃいでがっつく幼い子供のように思えて、「もう大丈夫」と奏に拭いてもらったあとは、慎重に食べることにしたのだった。その様子に奏がくすりと笑っていたのだが、またみっともないところを見られるよりはマシだと苦笑いで応えてい

た。
　そうしてワッフルを食べ終えると、満足至極といった笑みで口元を拭き、独り言のように「ワッフルなんて久々だったけど、こんなに美味いものだったんだな」と言い、奏も「うん。とっても美味しかった。次はどれ食べようかな」と言った。
「ひょっとして、今から？」
「さすがにそれは無理。晩ご飯、食べられなくなっちゃう」
「だろうね。けっこうボリュームあるからね、これ。さて、このあとどうしようか」
「とりあえず、食後の休憩、かな」
　奏が悪戯っぽく笑ってそう言うと、二人はそのベンチに座ったままお喋りを始めた。ただし、最初のうちは、いま食べたばかりのワッフルのことからスイーツの話となり、さほどスイーツに興味のない彼は聞き役に回るしかないような状態で、結弦が喋る余地が出たのは、話題がそれぞれの好きな食べ物の話へと移り変わった頃だった。
　そうして気が付けば、時間は六時ちょっと前。またもけっこうな時間話し込んでしまっていた。
　そろそろ帰ろうかとなり、ゴミを近くのゴミ箱に放り込んで、駅へと歩く。そして改札をくぐり、ホームで電車を待った。またも帰りの方向は同じではなく、結弦も奏も、少し寂しく感じていた。やがて電車が来るアナウンスが流れ、今回は結弦の乗る電車が先に到着することを告げる。見送る側と見送られる側が交代というわけである。
「今日はありがとう」
「ううん。私の方こそ。とっても楽しかった」
「俺も。それに、あのワッフルすごく美味かったしね。やっぱあそこで一つと言わず、もう一つ買うべきだったかも」
「そうね。二個いっぺんには食べられないけど、お土産に買っておいても良かったかな」

「お土産かあ。初ネエと母さんに買っていっても良かったんだな。まあ、今度来たときに買おう」
「そのときまでに、なにを買うか決めておかないとね」
「確かに。あそこでずっと悩んでたら、後ろの客にボコられそうだし」
「うん。女の子は、食べ物が絡むと本当に怖いから」
そして二人はけたけたと笑いあった。ほどなくして、アナウンスに続いて電車が入線してきたことを告げるようにレールから金属的な音が聞こえてきた。
「あの、音無くん？」
「なに？」やや遠慮がちに言う奏に答える。そして、今回は結弦に誘ってもらったのだから今度は自分からと決めていた奏は、「今度の日曜日なんだけど、またこうして、会えないかな」と少しだけ心配そうに尋ねた。
週末も自分から誘おうと思っていた結弦がそれを断るはずもない。また会えるという喜びの中で、もちろんと大きく頷こうとした。だがその言葉がすぐに出ることはなかった。というのも、先を越されてしまったからだ。
「もちろんよ！」
そう答えたのは、いつの間にか二人のすぐ側にいた、音無初音であった。まずその声に驚いて自分の耳を疑いながら結弦は振り返り、初音の顔を見てもう一度驚いた。
「は……、はつ……、初ネエっ！」
「そんなに驚くことないでしょお」と、ここまで驚かれたことに頬を膨らませる初音。
「お、驚くに決まってるだろ！」
「はいはい」初音はそう言うと、「それより、彼女が結弦の運命の人？」と不満顔を笑顔に変えて、結弦の隣で驚いている奏を見る。
そしてさっそく自己紹介を始めたところで、ふと思い出したのだった。

「立華奏さん、だよね。はじめまして。結弦の姉の、初音です――、って、あら？　あなた……。このまえ雑貨屋さんで、ペンダントの修理を頼んでた……？」

そう。奏がオオアリクイのペンダントの修理を頼んだときに助言したのは、実は初音だったのである。奏も、初音の顔を見てまさかと思いつつも、間違いないという気持ちで初音のことを見ていた。

「はい。あのときは、本当にありがとうございました」

「やっぱり！」

とここで、轟音を立てて電車がやって来た。会話は一時中断となり、僅かな間ではあるが三人とも静かになるのを待つ。そして会話が出来るぐらいになると「ちゃんと直してもらえた？　あのペンダント」と初音が尋ね、奏はポケットからそのペンダントを取り出し、

「このとおり」と見せて答える。

「ほんとだ。良かったね」

「はい」

すっかり和んだ雰囲気の中で話す奏と初音の間で、「まさか、知り合いだったの？」と驚きの冷めやらぬ表情で二人に聞く結弦。奏はそれに頷き、初音はしみじみといった様子で「知り合いっていうものでもないけど。そうかあ。あのときの子が、結弦の彼女だったのね。こんな偶然ってあるのねえ」と腕組み。

「いま初ネエがここにいる偶然の方が、俺的には驚きなんだけど」

「それはこっちのセリフよ」

そうして三人は驚きを口にしあったのだが、発車のベルが鳴ると、奏がそれを指摘。しかし、奏を交えてのこの場を終わりにする気などまったくなかった初音は「まだ終電じゃないから」と笑顔で返答。どうせそう言うだろうと思っていた結弦も、初音を残してひとり帰れないと電車をやり過ごし、奏の乗る電車が来るまでホームに残ったのだった。

学校帰りに奏と会い、ついでに初音ともばったり出くわしたその日の夜。結弦は、どうしてこうなるとため息を何度も落としていた。そして翌日もため息が止まることなく、学校へと行った。そんな結弦に、初音も母親も心配して気遣う様子はない。むしろ、やれやれと苦笑いを浮かべる中で、どこか楽しんでいるようでもあった。

学校に着くと、斉東たちが「ちゃんと撮ってきたよな」と声を掛けてきた。その中には、別のクラスの悠太もいた。しかし結弦の頭の中はそれどころではないといった状況で、その意味を理解できずに、なに言ってんだと簡単にあしらう。すると悠太が、まさか忘れたとは言わないよなと笑顔で言った。

「何を忘れたっていうんだ」と結弦は不機嫌そうに答えると、悠太の表情は、引きつっていない笑顔から、引きつった笑顔へと変わった。

「写真に決まってるだろ。カノジョの。……まさか、本気で忘れたのか？」

「あ……。ああ、すっかり忘れてた」そう答える結弦の表情も口調も、心ここにあらずといった感じで、真剣味がまったくない。

「ほほお。良い度胸じゃないか音無くん。交換条件を一方的に破り捨てるとは」と悠太が口元をやや吊り上げて言うと、結弦のそんな様子に何かを感じた田野中が、「まさか、もう彼女と喧嘩しちゃったのか？」と尋ねた。

その質問に、場の空気ががらりと変わった。しかし結弦の様子は変わることなく、「なわけないだろ」と素っ気ない返事を返す。

「じゃあどうしたっていうんだ？　ずいぶんと浮かない顔して。何かあったんだろ？」

「まあ……、な」

ここで悠太も、どうやら写真のことは後回しにして、今は田野中

に乗っかるべきところだろうと、糾弾の声はしまうことにした。「よし。それじゃあそれを話せ。事の次第によっては、写真の件は許してやろう」と言って。そして結弦は、その理由をざっくりと話した。誰だってため息出したくなるだろと言いたげに。しかし残念ながら誰からも賛同は得られず、それどころか「当てつけかコノヤロウ」と責められ、特に長年彼女募集中な友人などは、切実な形相で責め立てていた。

ある意味、火に油を注いだようなものだった。また、撮り忘れた写真のことを許してもらうこともなかった。そもそも、奏との時間が楽しくてすっかり撮り忘れた、では許してもらえるはずもない。

なお、写真の撮り忘れについては、次のような罰が採択された。

「いいか。彼女一人の写真じゃない。お前とツーショットだ。しかも顔をくっつけてだ。それ以外は認めん。もし今度もまた撮り忘れでもしやがったら……、今後お前のデートを邪魔してやる」

「ちょっと待て。なんでそこまでしなきゃならないんだ。ていうか五十嵐、お前、俺の応援団長じゃなかったのか」

「それとこれとは別だ」

「いや、一緒だろ……」

結弦の抵抗など、猛烈な風の中でそっと息きかけるようなもの。誰の耳にも聞き届けてもらえなかった。

そんな結弦と対照的に、奏の方はというと気の重いため息を落とすのではなく、いつものメロディーを口ずさむばかり。それは朝になっても同じで、上機嫌な娘に母親も父親も満足そうに朝の挨拶をしていた。通学の途中では、何度もポケットから出してはオオアリクイ相手に「楽しみだね」と満面の笑みで話し掛けていた。それを目撃した周囲の人々の幾人かは、いったい何が楽しみだというのだろうとこっそり思っていた。

学校に着くと、いつもの一日が始まった。波乱な幕開けとなった結弦とは異なり、平穏に。そしてお昼になり、教室で敦穂たちと一緒に昼食を食べ終えてお弁当箱をしまうと、敦穂は一日千秋の思い

で首を長くしてこの瞬間を待っていたかのように、「ちょおっといいかな」と奏を教室から引っ張りだし、密談できそうな場所へと急行。最初から校舎内にはないと考えていた敦穂は、そのまま校舎の外に出て、人気のない校庭の隅まで移動したのだった。

そこなら多少気を許しても良さそうなものだが、慎重に期して損はない。敦穂は少し声を押し殺しつつ、まずは「やったじゃない、奏」と、感激した表情で祝福の言葉を送った。たぶんそういう話だろうなと察していた奏は、圧倒されることなく答える。

「うん。でも、ちょっとどきどきしてる」

「そりゃそうよ。しっかし……。会って一週間で、ねえ……」

「私も、正直驚いてるの」

「私だって驚いたわよ。昨日聞いたときは、そりゃもう」

昨夜、自宅に帰った奏はこんなことがあったと敦穂にメールしていた。いつもなら受け取ってすぐに返信するか直接電話をするのだが、筋肉大移動トレーニングをやるぞと鼻息荒く意味不明な宣誓をした水泳部部長によって、ほとんどの部員と同様に部活でへとへとになり、奏に電話をするまでの気力は残っておらず、数回返信を送って力尽きていた。なので存分にやり取りができず、朝になるとたくさん喋りたいと身をよじり、結弦の話はみんなのいるところではできないので、朝からこの瞬間をうずうずと待っていたのだった。

という事情があって、二人は周囲への警戒を怠ることなく校庭の隅っこで喋り続けた。途中何度か、近づく人影や足音に話を中断させていたが、不意を突かれることは一度もなかった。やがてお昼休みの終わりを告げるベルが鳴り、お喋りはそこまでとなった。だが敦穂としてはまだまだ喋り足らず、どうにかして続きをしたいと直訴。その結果、奏の部活が終わった後で、どこかで落ち合おうことになり、昨日のハードな練習もあってこの日の部活はお休みの水泳部員は、それまで適当に時間を潰すことになったのだった。

そして夕方、約束通り二人はとある喫茶店で落ち合った。時間が時間ということがあり、あまり悠長に話してはいられなかったので、

敦穂は思いの丈をまくし立てるかのように喋り、奏はそれに短く答えるぐらいしか出来なかった。

そんな日々を経て、日曜日の朝がやってきた。

外は雨。昨晩から大雨が降り出し、今も降っているのだ。ただしその雨足は、夜中の激しさに比べればまだ大人しいものと言えた。例えお世辞でも弱い雨とは言えない程度の雨足ではあったが。

この雨が何かを告げているように思えてならない結弦は、朝から少々気を重くしていた。なので、初音はいつになく強い口調で叱責した。

「ちょっと結弦！　なんて顔してるの！　もっとしゃっきりしなさい！」

誰のせいだよと思いつつ、確かに今のままではまずいなと気持ちを入れ替えて、洗面所で顔を洗った。そして姉に言われっぱなしというのも少々面白くないので、洗面所を出ると、釘を刺す意味でも言い返しておいた。

「初ネエ、恥ずかしいことだけは絶対するなよ」

「失礼ね。そんなことするわけないでしょ」

「それじゃあ、俺の部屋を覗き見したり、ドアとか壁に耳を押しつけたりしないよな」

「しないわよ。そんなこと。もう、本当に失礼なんだから」

「前科者が何を言う」

といったやり取りをしているうちに、やがて家を出る時間を迎えた。傘を手に玄関を開けた結弦は、なんだってこんな日にこんな雨が降るかなあと憎々しげに空を見上げ、傘を広げて一歩前に出る。瞬く間に靴がびしょ濡れになってしまい、さらに雨を恨めしく思った。しかしどれだけ雨を呪っても晴れてはくれない。

「ったく」と、しかたなくささやかな愚痴をこぼすにとどめ、バス停へと歩き出した。一人で、ではなく二人で……。

「なんで初ネエが付いてくるんだよ！」ぴたりと足を止めて声を上げる結弦。しかし、まったく動じない初音は、そんな結弦を軽くあ

しらうように言った。
「別にいいじゃない。どのみち一緒なんだから。さ、こんな雨の中で立ち止まってないで、歩いた歩いた」
ここで言い合いしたところで初音が家に戻るとはとうてい思えず、不毛なことは止めておくべきだろうと、結弦はため息をこぼして歩き始めた。初音が一緒であることに、なんとも恥ずかしく思えてしまっていたのだ。
バス停で数分待っていると、雨の中バスがやって来た。傘を畳みながら乗り込み、定期券を見せて奥に移動。車内では数人の乗客が静かに座っており、結弦は二人掛けの座席に座る。続いて乗り込んだ初音は、結弦の隣に腰を下ろした。
乗客が座席に着いたことをミラーで確認した運転手は、ドアを閉めるとアクセルペダルを踏む。モーターが瞬時に全力で働きだし、バスはやや身重そうにゆらりと前に進み、すぐにストレスなく、容赦なく雨に叩かれながら駅へと向かって走りだした。
そして二人は、声の大きさを少し控えながら静かな車内で喋った。というよりも、初音が一方的に喋り、結弦はほとんど聞き役に徹していたような感じではあったが。そしてそんな初音の楽しそうな表情に、まあ、これはこれでいいのかなと結弦ようやく思えるようになっていた。
やがてバスは駅前に着き、二人は他の降りる乗客たちを見送ってから最後にバスを降り、駅の改札へと向かう。そして改札の前で足を止めると、初音は「まだみたいね」と言った。
「そうだな。ま、予定通りってことか」
「ちょっとだけ電車遅れてるみたいだけど」
言われて気付いた結弦は、改札の上にぶら下がっている電光掲示板に目をやった。初音が言うように、数分遅れて運行している。まさか、大雨で電車が止まるなんてことないよな、と冗談で思ってみたところ、あり得ない話ではないことにハッとし、さすがにそこまで呪われてはいないだろと振り払った。

「どうしたの？」
「いや、まさか電車が止まるなんてことないよな、って思って」
「心配しすぎ。もっと楽に構えなさい」
初音はそう言って、隣に並んで立つ結弦の左肩を、踵を上げて自分の右肩でこつんと押した。すると今度は、「心配にもなるさ」と、初音の真似をするように結弦がちょんと押す。それから二人は、「それはどういう意味かな？」「そういう意味だよ」などとじゃれ合うように肩を押し合った。決して強すぎず、弱々しくもなく。
雨の中の、仲の良い姉弟の風景。二人が姉弟であることを知らない者からすれば、仲の良いカップルにも見えよう。鬱陶しいはずの雨音は、微笑ましいそんな二人の様子を盛り上げる小太鼓のように地面を叩き、跳ね回っているようでもあった。
そうこうしているうちに、電車がやってきた。しかし二人が待っている電車とは逆方向なので、改札から出てきた人々を気にすることはなかった。それからさらに待ち、そして今度こそ待っていた電車がやってきた。
「これかな」と待ち遠しそうに初音が尋ねる。
「たぶん」
そう答える結弦は、これでは自分と初音の立場が逆じゃないかと苦笑していた。そして同時に、そんな姉の様子を感慨深く思った。どんなときでも、必死に笑顔で前を向き続けてきた姉らしいと。
などと考えていると、改札口に人の波が押し寄せてきた。と言っても、その数はそう多いものでもない。せいぜいが駅前の大型ブックストアーぐらいで、他に何があるわけでもない町の駅に降り立つ人の数などたかが知れているし、何よりまだ昼前という時間なのだから。なので、結弦も初音も、まったく苦労せず、一目でその人を見つけた。
本来であれば、結弦が真っ先に手を振って声を掛ける場面であろう。しかし、見事に姉に先を越されてしまったのだった。
「奏ちゃ～ん！　ここだよお！」

初音の声が、降りしきる雨音などものともせず響き渡った。次いで、“奏ちゃん”を捜すような視線がちらほら彷徨うこととなり、結弦はこの事態に、やっぱり強引にでも初音を家に置いてくるべきだったと思うのであった。

しかし、思ったところで後の祭りである。

Fling Body Attack

電車の窓を飽きることなく叩き、後方へと吹き飛ばされていく雨粒の向こうに見える風景をぼんやりと眺めながら、奏は電車にちょこんと腰掛けていた。彼女は今、結弦の家に向かっている途中である。

この日結弦と会うことは、三日前の木曜日の帰り、ホームの上で決まった。ただし、今度は自分が誘う番だと奏が言った瞬間までは、結弦の家に行くことになるとは夢にも思っていなかった。それが、突如現れた初音の「だったらうちに来てよ！」という要望によってこのような状況に。良い意味での青天の霹靂のようなこの展開を、何度思い返してもおかしく思えてならなかった。

一方、このお願いに当初さすがに抵抗しようとした結弦ではあったが、奏を味方に付けられては勝ち目などあるはずもない。そしてそのことは初音もすぐに理解していたので、すかさず問答無用で奏を抱き込む作戦に打って出る。

「ねえ、いいよね？　立華さん？」そう言われて断れるはずもなく、奏は「はい」と答える。ただしこのときの奏は、結弦の家に行くことを嫌だとは思っていなかったので、正直に答えたに過ぎなかった。しかし当然これを脅迫、もしくは懐柔と見た結弦は、無理に言わなくていいからと奏を諭そうとする。が、あえなく敗退し、この勝負そのものにも早々に敗北したのであった。

こうして、再会して一週間目にして結弦の家に行くことになったのだった。この慌ただしくもどこか笑える展開を思い返していた奏は、もはや肌身離さずといった様相を呈しているオオアリクイのペンダントをポケットから取り出し、「なんだか、本当に冗談みたいね」と楽しげに話し掛けていた。

やがて、電車は結弦たちの待つ駅へと滑り込んでいった。この駅は素通りすることがほとんどだが、たまにここで下車することもあ

る。事実、二週間前も降り立っていた。そして彼女が降りる理由は、専門書の品揃えが良い大きなブックストアーで本を買うこと以外には何もなかった。

しかしこの日、初めて本の購入以外の理由で降りた。しかもその理由は他愛のないものなどではなく、一大イベントと呼ぶべきもの。なので、電車がぴたりと止まり、さあどうぞとドアが開くと、奏はふうと一息してからホームに降りた。とたんに、雨音と見知らぬ人々の足音が、彼女を決戦の地へと送り出すたくさんの小太鼓のように周囲で乱舞しだしたように感じた。それを、奏は「大袈裟なんだから」と苦笑する。そう感じた自分自身に対して。そして、この日の結弦の家への訪問に、ああしなさい、ああしちゃ駄目だ、とまるで娘を心配する母親のように熱かった敦穂に対して。

気を取り直すと、奏は改札へと向かうべく歩き出し、降りた人たちの流れに加わる。すると、今まで何の気なしに利用していた駅の一つ一つの風景が、それまでと少々違った雰囲気を漂わせているように思えた。今し方意識しすぎと自分を笑ったにも関わらずそう思ってしまった自分自身に、私もあっちゃんと同じみたい、と苦笑を一つ付け加えていた。

改札口の見えるところまでやってきた奏は、その向こうに、結弦と初音の姿を目に止めた。まさにその瞬間だった。

「奏ちゃ～ん！　ここだよお！」

という声が、改札へと押し寄せる音を切り裂いてびりびりと飛んできた。

自分の名前を大声で呼ばれたことでどきりとする奏。しかも、続いてきょろきょろとし出す周囲の無関係な人々の様子に、恥ずかしさがちらりと顔を出し、初音へどう応えればよいのだろうかと困ってしまった。だが、初音の隣で申し訳なさそうに手のひらを合わせて謝っている結弦の姿に、戸惑いを軽く押し退けて可笑しさが奏の心をすっぽりと覆ってしまうと、初音に応えた。さすがに大声で返したり、自分が“奏ちゃん”であることを大々的に宣伝するような

リアクションはできなかったが、手を少し挙げ、軽く振って。
改札を抜けて、結弦たちのもとにやって来ると、挨拶するよりも先に、結弦が謝ってきた。
「ごめん立華さん、恥ずかしい思いさせちゃって」
これを聞いた初音は、その原因が自分にあることが分かっていないようで、「結弦、奏ちゃんに恥ずかしいことさせたの？」と驚きの眼差しを結弦に向ける。
「俺じゃなくて初ネエがだっ！」
「へ？　なんで私？　なんにもしてないじゃない」自分のせいだとは微塵も考えていなかった初音は、不満げに頬を膨らませる。しかし、「こんな場所で、あんな大声で自分の名前言われりゃ、誰だって恥ずかしいだろっ！」と結弦に言われると、ようやく弟の言っている意味を理解した。ただし意味は理解しても、「そう？」と小首を傾げ、共感するまでには至らなかったが。
このようなリアクションでは、このあと結弦がいくら説教しようとも虚しいだけである。不毛な努力は止めておこうと、この件についてこれ以上は不問とすることにした。やれやれとため息を落としながら。そしてようやく、出鼻から完全にタイミングを失っていた奏にチャンスが訪れたのだった。
「こんにちは、音無くん。初音さん」と挨拶をするチャンスが。
そういえばまだだったと、結弦は慌てて「あ、こんにちは」と少々間の抜けた感じで答え、初音は「ようこそ、奏ちゃん」と満面の笑みで答え、なんともドタバタなこの状況に、奏は楽しそうにこっそりと苦笑していた。
そして、これでひとまず落ち着くのかなと思いつつ、とりあえずバスが来るまでここで待っていようと言うと、初音が何やら彼を責めるような目つきで「結弦？」と言った。
「なんだよ」
「なんだよ、じゃない。大切なこと忘れてるでしょっ」
「大切なこと？」何を言ってるんだといった怪訝な眼差しを初音に

返す結弦。今度は結弦が、初音の言わんとしていることに気付かなかった。また奏も、二人を傍観するように眺めながら、大切なことってなんだろうと考える。

そんな不甲斐ない弟の有様に、初音はほとほと参ったと言わんばかりに「もう。そんなだから、こうしてついてきてあげなきゃいけなくなるんじゃない」とこぼすと、ここは無理矢理にでも気付かせなければと使命感に燃えた初音は、さっそく実力行使に打って出た。

謂われのない非難を浴びていると思った結弦が初音に文句を言い、次いで奏に「こんな姉で、ほんとごめん」と言った隙をついて素早く結弦の背後に回り込み、彼の両の耳を塞ぐかのようにぐわしと手のひらで頭を押さえつけた。

突然の姉の行動に虚を突かれた結弦は、一瞬なにごとかと混乱してしまった。しかしすぐに、呆れた様子で「なにしてんだよ、初ネエ」とその手をどけようとした。すると、初音は「奏ちゃんに言うべきことがあるでしょっ」と強い口調で言った。

「意味わからん」

「つべこべ言わずに、まっすぐ奏ちゃんを見る」

「だからなんで――」

「ほらっ。ちゃんと見てっ」

何があっても一歩も引かないといった姿勢の初音に、これ以上抵抗して奏に気を遣わせるような状況に陥らせるのは拙いと思った結弦は、無理矢理やらされているような気分であったために、しかたなくといった不満顔で奏に視線を向ける。だがその不満は、奏の顔が瞳に映り混んだその瞬間に隅へと引っ込み、代わりに笑顔が浮かび上がった。姉の行動にやれやれと苦笑気味に。

そして「ごめん、もうすぐ終わると思うから。もうちょっと待ってて」と奏に言うと、初音が「そうじゃないでしょっ」と一喝。

「じゃあどうしろって言うんだよ」

「ちゃんと見てる？　奏ちゃんのこと」

「見てるよ」

「だったら、いま奏ちゃんに言うべきことは分かるでしょ。ここまで言ってわかんないんじゃ、結弦、あなた奏ちゃんと付き合うどころか、女の子と付き合うことじたいできないわよ？」
「んな大袈裟な」
「大袈裟じゃない。ほら、上から下まで、穴が空くまで見て」
「だから見てるって」
結弦はその言葉に誘導されるように、奏を頭のてっぺんから足下まで、視線をゆっくりと下げながら見た。
見つめられて、少し恥ずかしそうにしている奏の表情。きれいな首筋。先週も身に付けていたペンダント。ワンポイントの可愛らしい柄が左胸にあしらわれた、マリーゴールドのノースリーブシャツ。黒のミニスカート。膝下丈のグレーのレギンス。そしてお洒落なブーツと見紛う、チョコレート色の長靴。
そして結弦は、頬をやや赤くしてごくりと唾を飲み込んだのだった。その音をしっかりと聞き取った初音はようやく結弦を解放すると、満足そうに聞き質す。
「で、言うべき言葉は分かったかしら？」
ここまできて分からなかったら相当重症ということになるが、さすがに結弦も初音が言わせようとしていたことを理解した。だが、ここでそれを口にするのは恥ずかしい。周囲にはバスの到着を待つ人が何人もいて、なにより姉がいるのだから当然だろう。なんだよこの羞恥プレイは、と口元が強張るのも然り。
どうやら結弦も分かってくれたと安心した初音は、そんな結弦を一押しすべく囁いた。
「絶対に喜ぶよ。奏ちゃん」
今この場所で言わなければいけないことなのかという抵抗はあった。しかし、初音の言うとおり言葉にすれば奏が喜ぶとは結弦も分かっている。そして、喜んだ奏の顔を見たい、と思った。
結弦は、「かんばれ男の子」という初音の最後の一押しで腹をくくり、照れくささは振り払いきれなかったが、見事に言ってのけた。

「あの、すごく似合ってる……。可愛いと、思う……よ……。ほんとに……」

そう言われた奏もまた、耳から顔から全部を真っ赤にして「ありがとう……」ともじもじと答える。その姿がまた破壊的に可愛く映った結弦は、このとき本気で、俺もうこのまま悶絶死してもいい、と思ったのであった。そして初音も、奏の破壊力にくらっとしていたのだった。

この一幕は、とうぜんバスを待っていた人たちには聞かれていたし、ちらちらと見られてもいた。そして結弦たちが乗るバスに同乗する者もその中に含まれていた。ちなみに、ありがとうと言った奏の姿をちらっと見ていた男性の中には、結弦の感想に近いものを抱いていた者も少なくなかった。

となれば、結弦にとってバスの中の居心地が快適であるはずもなく、これこそが本当の羞恥プレイだと心の中で叫び続けながら、コンマ一秒でも早く自分たちの降りるバス停に着いてくれと願っていた。一方奏は、結弦に可愛いと言ってもらえたことに、心の中でずっと酔いしれていたので、他の乗客のことなどまったく気にならず、目に入ることもなかった。そして初音は、初々しいこのカップルを、自慢げにしていた。

悲喜こもごも、といったバスの時間は、人によってはとてつもなく長く感じ、人によってはあっという間に感じるものだった。そうして、住宅街の中にぽつんと佇む、彼らが降りるバス停に着いた。三人は傘を広げてバスを降り、雨の中、家へと歩き出した。

バスを降りたことで、やっと羞恥プレイから解放されて楽になれたと胸を撫で下ろしていたのだが、波乱はこれで終わりとはなってくれなかった。

バス停から自宅まで数分。その間、足下以外にも雨にいくらか濡れてしまうのはしかたのないこと。雨足も弱くはないのだから。しかし、誰が予想できよう。そのわずか数分の間に起きた大惨事を。

歩道を歩いていると、一台の中型トラックが向こうから走ってき

た。安全走行していたそのトラックは、三人の脇を通り過ぎていった。ただ通り過ぎただけではなく、車道脇の水溜まりを盛大に跳ね上げて。それが頭上から降ってきたのなら傘が防いでいたのだろうが、残念ながら一瞬にして横から飛来されては防ぎようながない。勢いよく低空飛行で発射されたその大量の雨水は、結弦の前で、奏とお喋りに興じながら車道側を歩いていた初音に直撃。水も滴るなんとやら、などと呑気に冗談を言える余地など一ミクロンもないほど、全身ずぶ濡れの姿に。

隣を歩いていた奏も被害を受けたが初音ほどではなく、今は自分のことよりもとハンカチを出して少しでも拭いてあげようと初音の正面に回り込もうとする。そして、不幸が続いた。後続の車が今し方と同じように水溜まりの水を跳ね上げたのだ。今度の被害者は奏。せっかくの洋服がずぶ濡れとなってしまった。

幸い、結弦だけは被害を被ることはなかったのだが、当然そのことを喜べるはずもなかった。

はじめまして、という奏の挨拶に反射的に答えた直後、唖然としてしまっていた母親ははたと我に返り、「ちょっとどうしたの！」と慌てて大声を上げていた。そして彼女の目の前には、一人だけ被害を免れた結弦はさておき、玄関で髪から服からとぼたぼた水を滴らせている初音と、本日の大切な客人である奏の、初音同様の無惨な姿があった。

「それよりお母さん、バスタオル」

「え！？　ああ、そうね、ちょっと待ってて！」初音に言われて、母親は全速力でバスタオルを取りに行き、猛スピードで玄関へと戻ってきた。バスタオルを受け取った初音と奏は、とりあえずびしょ濡れの髪を拭く。しかし水分をたっぷりと含ませた洋服はどうにもならない。拭いたところで焼け石に水であることは一目瞭然。

母親はすぐに、そのままお風呂場に行くように二人に言った。奏としては、家の中を濡らしてしまうと躊躇いもあったのだが、そうも言っていられない状況である。やむなく、すみませんと一言謝り、靴を脱ぐと初音に引っ張られてお風呂場へと向かった。

その足音と、点々と続く濡れた廊下を見送ると、母親は結弦に説明を求める。

「で、何があったのよ。あんなになっちゃって」

「車が道路脇の水を跳ね上げてさ。そしたら、二人に思いっ切り命中して」

「まあ……」不幸なこの事故に、母親はそう応えるしかなかった。とりあえずこの説明で納得した母親は、次の問題に対処しなければとお風呂場に向かう。一人ぽつんと玄関に残された結弦は、誰か俺たちに呪いでもかけているのかとため息を落とし、ひとまずリビングに向かった。

脱衣所へとやってきた初音は、まだ買ってそんなに着ていないのにと文句を言いながら、ぐっしょりと濡れている服をすぐに脱ぎ始める。奏も、べったりと肌に吸い付く濡れた服を脱いでいった。初音のように口に出して文句を言うことはなかったが、心の中では、せっかく音無くんに褒めてもらえたのに、としょんぼりしていた。

そして一通り脱ぎ、下着姿になるとバスタオルで身体を拭き始める。とそこで、母親がやってきた。

「大丈夫？」

「私は平気だけど」初音はそう答えて、少し気の毒そうに奏を見やる。

「私も大丈夫です」と奏は答えるが、実際問題として大丈夫とは言えない。せっかくの洋服がこうも濡れてしまっていては。

「急いで洗濯して、乾かさないとね。それまで、初音の服で我慢してもらえるかしら」

「我慢だなんて、そんな」

「私のじゃちょっと大きいけど。ああでも、それはそれで結弦にはいいのかも」

「また変なこと言ってないで、とりあえずお風呂に入りなさいな。まだちょっと温いかもしれないけど、すぐに沸くと思うから。立華さんも、どうぞお風呂に入って」

「すみません。お借りします」

「まあ、とっても礼儀正しいお嬢さんなのね」ほほほと笑顔でそう言うと、「それじゃあ適当に選んで持ってくるわね。下着は大丈夫？」

少々濡れてはいたが、どうしても替えなければいけないほどでもないと、奏は「はい。これぐらいなら」と答える。しかし、奏の控え目な性格はすでに把握していたので、どれどれと初音は直に触ってみる。すると見過ごせない湿り気がじわりと感じられた。衣類乾燥機で乾かせればいいのだが、お風呂から出てくるまでには十分に乾いてはいないだろうということで、洗濯機行きを宣言。そうなる

と替えの下着が必要になる。そこで、買ってまだ穿いていない自分の下着があるからそれを貸してあげると奏に言った。

さすがにそこまでしてもらってはと奏は遠慮したのだが、この際だからいいじゃないと押し切られてしまい、ついでにブラも洗濯してもらうことになった。こうして話がまとまると、二人は脱衣所からお風呂場に入った。

そう広いお風呂場でもないので、二人同時に洗ったり湯船に浸かったりはできない。なので初音が一足先に入り、少し温いお風呂のお湯を数回かぶり浴槽に入る。そして奏を招き入れて「お先にどうぞ」と髪を洗わせた。奏は少し急いで髪を洗いだしたのだが、そんなに急がなくていいよと初音に言われ、少しだけその手を遅くしていた。奏が髪を洗っている間、初音はしげしげと奏の身体を眺めながら、きれいな髪だね、肌もつやつやで羨ましいな、などと話しかけていた。

奏が髪を洗い終えて、シャワーでしっかりと泡を流し落とすと、お待たせしましたと初音と交代。初音はそれじゃあと浴槽から出て、奏がお湯に浸かる。まだ少しだけ温かったが、それでも十分な心地良さがあり、びしょ濡れだった気持ちがふんわりと温まっていくようだった。

そして、こうして結弦の家のお風呂に入っていると、路肩の水を被ったことや、いま目の前にいる初音と木曜日にホームで遭遇したことなど、良いこと悪いこと関係なく思いも寄らないハプニングだらけねとくすりと笑い、それがまた彼女の心を温めていった。

だがそんな気持ちは、不意に彼女の瞳に映ったものによって、一時的にではあるが慌ててどこかに隠れてしまった。

浴槽でふうと一息つき、長い髪にシャンプーをかける初音へと自然と視線が向けられた。きれいな髪だなと感心して眺めていると、初音は腰辺りまである髪を洗うべく、その髪を背中から胸の前へと持っていく。そしてそのとき、鋭利な刃物で斬りつけられたような傷が複数、彼女の背中にちらりと見えたのだった。

横からの眺めなのではっきりとは見て取れず、だかといって身を乗り出して覗き込んだり、じっと見つめるわけにはいかない。なので、いったい何があったというのだろうと考えながら、ちらちらと視線を送ってしまっていた。そうしているうちに背中以外にも上気する肌に傷跡がうっすらと浮かんでいることに気が付いた。背中のものほどはっきりとしたものではなかったが、その生々しさを感じさせる傷跡に、ついつい魅入られたように初音の身体をじっと見つめてしまっていた。

すると、奏の視線に気付いた初音が、「ああ、これね」と柔らかい表情で言った。そこには不快感などない。まるで、ちょっと擦り剥いた傷のことを言っているような気軽さがあった。

だが身体のあちこちにある傷は明らかにそうは言っていない。ゆえに、気安く見てはいけないものを覗き見てしまったような気持ちになった奏は、そんな自分の行いに心の中で「ばか」と怒鳴りつけ、初音には申し訳なさで「ごめんさない」と謝った。

「いいのよ。気にしないで」

初音はそう言って、にこりと笑う。それは無理に作った笑顔ではなく、嘘偽りのない本心。これらの傷跡に、恥ずかしいとかみっともないなどといった、世間体的な後ろめたさなど一点もない。だからと言って自慢げに見せびらかすようなものでもなく、ぺらぺらとその理由を喋るようなものでもない。できれば何も聞かないで欲しい類のものであった。なので初音は、「でも、結弦にはこれのこと、言わないでね」とだけ付け加えた。

平気で人の心に土足で踏み込むような人間であれば、初音の様子から何かを察してもなお、どうしてと思慮なく尋ねていただろう。しかし、彼女の言葉の裏にあるものは他人が簡単に触れていいようなものではないと感じた奏は、素直に「はい」とだけ答えて、それ以上はそのことに触れることなく、結弦がこのことを知っているのかどうかという疑問も、心の奥底にカギを掛けてしまっておくことにした。

とはいえ、どうしたってその傷は目に付く。奏はそれを気にしないようにと自分に言い聞かせる。そんな奏に、初音は「ありがとう」と言い、結弦の想い人が彼女で良かったとつくづく思ったのだった。

その後二人は、髪の手入れのことからシャンプー談義を始め、反響するお風呂場の中できゃっきゃとお喋りをした。すると、その雰囲気から自然と傷跡のことは気にならなくなっていた。

やがて初音が髪を洗い終えると、自分の方が髪を乾かすのに時間がかかるから先に乾かしていて、と奏に言い、身体もすっかり温まっていた奏はそれじゃあと先にお風呂を出て、初音は空いた浴槽にどぶんと浸かった。

脱衣所に出た奏は、せっせと静かに働いている洗濯機の横にあるバスケットの中の、新しく用意されたバスタオルの一枚を取り、身体を拭き、髪もさっと拭くだけにして、次は服を着る番だと、二組の洋服の一方に手を伸ばす。

どちらを着ればよいのか、それを判断する材料がなかったのなら、奏はここで困ってしまっていただろう。しかし幸か不幸かあからさまな判断材料があったので、すぐに選ぶことができていた。その材料とは、一式揃えられている二つの山の片方には、奏の胸では悲しいかな隙間だらけになってしまうブラが鎮座していたからだ。思わず、奏は自分の小振りな胸を恨めしそうに見下ろしてしまっていた。

どうにか気を取り直すと、下着を穿き、ジーンズを穿く。奏と初音との身長差は十数センチあるので、必然的に裾を少し折らなければならなかった。それは別段気にするものでもなかったが、ヒップの余り具合に少し悲しくなり、ちらちらと目に入る初音のブラが追い打ちをかける。奏もやはりそういう年頃の女の子ということだ。

次いでインナーキャミソールを着て、クリーム色のチュニックを着終えると、ドライヤーで髪に熱風を吹きかける。そしてある程度乾くと、お風呂場の扉を少しだけ開けて「終わりました」と初音に告げる。わかったと初音がすぐに返事をすると、奏は扉を閉めて脱衣所を出る。とそこに、奏の声を耳にしていた母親がぱたぱたとや

ってきた。
　奏はすぐに「ありがとうございました」とぺこりとお辞儀する。母親も「いいのよ。それにしても、大変な目にあっちゃったわね」と答える。しかし、その表情にあった柔らかな微笑みはすぐに曇ってしまっていた。その変化に、奏は「あの、どこか、変ですか？」とやや心配そうに尋ねる。母親は、真剣味のある表情で答えた。
「変じゃないけど、問題が、ね」
　そう言われて、奏は母親の視線を追って自分の胸元を見る。そしてそこで、今自分がどんな状態であるかを理解すると、顔を赤くして「そう、ですね……」と呟いた。母親が適当に選んできた、首周りが大きめにカットされたチュニックでは、サイズが合わない為に少しばかり奏の胸元が広く見えており、しかもインナーのキャミソールもサイズが合っていないのであまり胸元を隠せていない。
　胸元の露出をあまり気にしない性格ならばそれでも問題ないのかもしれないが、ここにいる二人はそうではない。しかもリビングにいる健全な男子高校生音無結弦には、そのような格好の奏はあまりにも刺激が強すぎる。
　そして、これはさすがにと二人で思ったところで、その結弦が廊下から聞こえる二人の話し声に「風呂出たんだ」とリビングから出てきた。奏はとっさに背中を向け、母親はとっさに奏を隠すように位置をずらす。その様子を見て、結弦は不思議そうな表情で尋ねた。
「ん？　どうかしたの？」
「なんでもないから、リビングに戻ってなさい」
　なんでもないと言われても、奏の今の反応から、なんどもないのかと即座に納得できるはずもない。「でも」と、もう一度問い質す。しかし、「いいからリビングに戻って。ほら、早く早く。デリカシーのない男の子は、女の子に嫌われるわよ」と強く言われると、いったい何なんだと思いながらも、母親に隠されて奏の格好をほとんど見られないまま、ここはひとまずリビングに戻るしかないかと退散した。しかも、私が良いと言うまで部屋から出てきたら駄目だと

も言われ、ますます首を傾げることになったのだった。
結弦が引っ込むと、母親はひとまず初音の部屋に案内。そして、替わりにちょうど良い服はないか探そうかといったん考えはしたのだが、自分が物色するよりは、奏にはここで少しだけ待ってもらい、初音に後を任せた方が良いということになり、「ごめんなさいね、気が付かなくて。ちょっとここで待っててて」と申し訳なさそうに部屋を出た。
脱衣所へと戻ってきた母親は、お風呂から上がったばかりの初音に事情を説明。それを聞いた初音は、あまり一人で待たせてしまうのは可哀想だと、急いで支度を終わらせた。なお、初音はジーンズに柄物の半袖シャツという出で立ち。髪はまだまだ生乾きだったが、あとでちゃんと乾かせば良いと脱衣所を出て、自分の部屋へと向かう。ドアを開けると、ティーカップを手に、所在なさげにちょこんとベッドの端に座っている奏がこちらを向いた。
「ごめんね、待たせちゃって」
「いえ、そんなことないです」
「とにかく、服替えなきゃね。確かにそれじゃあ、結弦にはちょっと刺激が強すぎるものね」
改めてそう言われると、恥ずかしさが再びこみ上がってくる。奏は頬を赤くし、胸元を隠すように肩をすぼめて腕を真ん中に寄せ、猫のように背中を小さく丸めて「はい」とか細く答えていた。そしてその姿に、初音は心の中で叫んでいた。
か、可愛い！　と。

初音に事情を伝え終えた母親は、やれやれとキッチンに行き、紅茶を煎れる。することなくただ待っているだけでは大変だろうと気遣って。ついでにクッキーを五つほど小皿に盛り、紅茶と一緒にお盆に載せて再び初音の部屋に行き、これでも食べていてくださいなと奏に渡した。
それから母親はキッチンに戻り、お昼ご飯の準備を再開させる。

このとき母親は、良いと言うまで部屋から出ては駄目、と結弦に言ったことをすっかり忘れていた。なので、違う服に着替えた奏を連れて初音がリビングにやってくるまで、結弦は一人でぼうっとテレビを眺める他なかった。

しかも二人がやって来たのは、お風呂を出てからけっこうな時間が経ってから。

実は、奏の服を選び出していた初音が、これなんかどう？　ちょっと着てみて？　と途中から目的を見失い始め、少し大きいサイズの服を着た奏の姿を見ているうちに、彼女を着せ替えることにすっかり夢中になってしまっていたのだった。そんな状況に、最初こそ奏は戸惑っていた様子だったが、楽しそうにしている初音につられるように、彼女の心も楽しくなっていた。

まるで、仲良しの実のお姉ちゃんと遊んでいるような気持ちで。

リビングにやってきた奏に、実際のところ結弦は激しくどきりとし、思わずじっと凝視してしまうところだった。しかし今はそれよりも初音に言っておかなければとその念を断ち、どうにか怪訝な表情を作って「いったい何してたんだ？」と尋ねた。

「決まってるでしょ。奏ちゃんのファッションショーよ」

「決まってないし……。わるい、立華さん。変なのに付き合わせちゃって」

「変なのとはなによ」初音は不満そうに頬を膨らませる。結弦を待たせてしまったことについては悪いことしたかなという気持ちはあった奏だったが、しかし「ううん。とっても楽しかった」と初音をフォロー。これで初音の表情は「ほおら」と得意げなものに変わっていた。

そんな初音にやれやれと思いながら、立華さんがいいならまあいいかと結弦はこの件について終わりにすることにし、「はいはい」と答える。すると初音が、猫の目のような勢いで今度はにんまりと結弦に質問してきた。

「で、どう？」

「なにが？」

「もう。さっき駅で学習したばかりでしょ？」

つまり、今の奏の格好を褒めろ、ということである。初ネエが一緒でなければもう感想を口にしていたところだよ、という気持ちで「わ、わかってるよ」と結弦が言うと、奏が少々緊張気味に身構えた。自分で選んだ、というわけでなく全て初音のコーディネートなので、そう緊張する必要もないのかもしれないが、そこは女の子。誰がコーディネートしたにせよ、見た目どう思われるか気になるところであるし、評価する人物が結弦となればどうしたって緊張するというものだろう。

彼女の服装は、奇抜なものでもなく露出の多いものでもない。特にどうということのない格好と言ってしまえばそれまでのもの。下はロールアップしたジーンズのままで、トップスは白のTシャツの上にグレージュのキャミソールの組み合わせ。ついでにイヤリングまで耳たぶにぶら下がっている。

敦穂が今の奏を見たのなら、特別な感想などほとんどないだろう。せいぜいがイヤリングをしている姿に目新しさを感じる程度。しかし、結弦は違った。それまで彼が見てきた奏の格好は基本スカート。そしてそこには常に可愛らしさと清楚な雰囲気があった。制服姿であってもである。なので、先ほどは母親に邪魔されてちゃんと見ることのできなかった奏のジーンズ姿がとにかく新鮮に映っていた。またTシャツにキャミソールという組み合わせに、それまでと違った可愛らしさが感じられ、耳元のイヤリングもまた相当な破壊力を持って揺れている。

これまでとまた違った奏の魅力を目の当たりにしたといった気持ちでクラッときていた結弦は、やや惚けた声と表情で「その、すごくいいと、思う……。うん……」と感想を口にする。

初音としては、もっとたくさんの、そして深いコメントが欲しいところだったが、顔を真っ赤にしている奏を横に見て、変にごちゃごちゃと感想を言うより、こっちの方が正解なのかなと妥協。そして、奏をコーディネートし、結弦と良い雰囲気を作れたことに心の中でガッツポーズをしていた。

当の奏はというと、やはりすっかり照れてしまい、「ありがとう」と答えるのが精一杯だった。

それからしばらく結弦も奏も満足に喋ることができず、場を切り盛りすることとなった初音は、ちょっとがんばりすぎたかなと苦笑いをしていた。二人がやっとほぼ正常な状態に戻ったのは、母親がお昼ご飯を作り終えて、食事の用意ができたことを知らせにリビングへとやってきた頃だった。

三人がダイニングキッチンに場所を移すと、テーブルには四人分

のチキンピラフとサラダ、それと飲み物が並べられていた。食欲をそそる良い香りを立ち上らせているこのチキンピラフは、毎日のように夜遅くまで働き、せいぜい休日の晩ご飯ぐらいしか料理をすることのない母親が、自信を持って客人に出せる数少ないレパートリーの一つである。本当はこの日の昼食は初音が作るつもりだったのだが、私に作らせてと母親のたってのお願いに、その気持ちを酌んで任せることにした、という裏事情があっての品でもあった。

そして肝心の料理の味だが、母親は奏に、お口に合わないかもしれないけどと不安を少し覗かせていた。しかし奏の評価は、結弦や初音と同じで「とっても美味しいです」というもの。むろん、お世辞や社交辞令ではなく。それを聞いて、母親はほっと胸を撫で下ろしていた。

口にこそ出さなかったが、彼女の中では結弦の初めての恋人に食べてもらうというプレッシャーがあっただけに、その安堵感は特別なものだった。

それから四人で食事しながら歓談。話題は主に奏のものだった。となれば初音や母親がここぞとばかりにあれやこれやと奏に質問攻めをしてもおかしくなさそうだが、二人とも無遠慮な質問などは一切せず、ほとんどを奏が話すに任せていた。それは、ある程度のことはすでに結弦から聞いていたので、それ以上のことをこちらから無理に聞こうとするのは失礼だと考えてのこと。そしてその裏には、思慮なく尋ね、結果的に土足で彼女の心に踏み入ってしまうことになるのでは、という危惧がちらちらと頭をよぎったから。そんな二人の心の内をなんとなく察していた結弦もまた、再会した瞬間からずっとそうしてきたように、この場でも自分からあまりあれこれ質問しようとはしなかった。

そうしたことは、それぞれの生来の性格に因るところも多分にあったのだが、三人とも、土足で踏み入られた経験をうんざりするほどしてきたこともあって、以来、どこか臆病になっていた節もあった。ただし、だからといってこの会話そのものが余所余所しさを感

じさせるものになることはなく、四人全員にとってとても楽しい時間となっていた。

やがて食事が終わり、四人での歓談の時間も一段落すると、結弦は「それじゃあ、俺たち部屋に行くから」と席を立つ。俺たち、というのはもちろん結弦と奏の二人。しかし奏は、ご馳走になったのだから洗い物のお手伝いをすると言った。さすがに客人に手伝ってもらうわけにもいかない母親は、そんなに気を遣わないでいいのよと丁重に断り、初音も「また結弦を一人ぼっちにするのも可哀想だから」と冗談交じりで奏に言い、小さな背中を押してダイニングキッチンから退室させていた。

強制退去となった奏は、結弦に案内されて彼の部屋に行く。このとき結弦は、てっきり初音も一緒についてくるものと思っていた。しかし彼女もそこまで野暮ではない。明らかに母親一人の手で十二分に事足りる量であるにもかかわらず、洗い物を手伝うからとキッチンに残った。

結弦に招かれて彼の部屋に入った奏は、少しどきどきしながら部屋の中を見回した。シングルのベッドに勉強机、ラック、小さなテーブル、クッションと、部屋の中を構成する基本的なものは奏の部屋のものととても似ている。しかし、彼女の部屋とこの部屋とでは決定的な違いがあった。それは部屋を飾るようなもの、例えばちょっとした小物やポスターなどがここにはまったくと言って良いほどなく、ひどく殺風景な印象があるのだ。

今まで同世代の男子の部屋に入ったことが一度もなかった彼女はなおさら、男の子の部屋とはこういうものなのだろうかと驚いてしまっていた。そんな奏の様子を見て、結弦は「つまらない部屋でしょ」と笑う。

「そういうわけじゃないけど、ちょっとびっくりしちゃった。女の子の部屋と男の子の部屋じゃ、やっぱりこれだけ違うものなのね。私の部屋なんて、細かいものがいっぱいあって、お掃除するのが大変なぐらい」

「男でも色々と小物を置きたがるヤツはいるよ。それこそ、地震でも起きたら大惨事間違いなしなくらいにね」
「そうなの？」
「ああ。中にはとんでもないヤツもいるよ。友達にそういうヤツがいてさ。そいつミリタリーファンで、たまに自分でジオラマ作っちゃあ部屋に飾ってるんだ。それがもう何年も続いてるもんだから、部屋中戦車やら兵士やら戦闘機やらのジオラマだらけで。地震でラックやら何やら倒れでもしたら、それこそ壊滅的大打撃さ」
　とここで、ジオラマという単語に聞き覚えのない奏は、話の腰を折ること覚悟で「あの、ジオラマって？」と尋ねる。分からないまま相槌を打ち続けるより良いだろうと考えて。
「ああ、ごめん。説明が必要だったね。ジオラマっていうのは――」
　それから結弦が簡単な説明をすると、奏はすぐにジオラマがどういうものか理解した。ただし、結弦の言っているジオラマと奏が想像できるジオラマには大きな隔たりがあった。もし奏がこの話題にあまり興味を示さなければ、すぐにでも話題を変えるつもりだったのだが、彼の予想に反し奏は興味深そうに知りたがったので、結弦は自分のネットワーク端末で検索し、ネットに掲載されているジオラマ写真をいくつか見せた。すると奏は、さらに感心した表情で「すごい、本物みたい。人の手だけでこういうの作れちゃうんだ」と感嘆の声を上げていた。
　精巧なジオラマというものは、多くの人に感嘆と共に迎え入れられやすいもの。ましてや、造作もなく立体模型をオートマチックに作れるこの時代にあっては、大地や木々、川のせせらぎ、破壊された建物、仕草を含めて表情豊かな兵士や看護士、ちょっとした看板などなどを、様々な素材と工程で一つ一つ手作りし、組み立てられたジオラマは、それこそ驚きの世界である。
「正直、よく作れるよなって思うよ。その友達のもけっこうすごいんだ。さすがにこの写真ほどとはいかないけど」
「私も見てみたいな」

「そうだなあ。さすがに友達のは借りられないから、展示してある場所でも探してみて、今度そこに行ってみようか」
「うん」
こうして次のデートの約束が取り交わされたのだが、さすがにジオラマを見に行くことになるとは夢にも思っていなかった結弦は、本当に世の中なにが起こるか分からないものだと心の中で苦笑していた。
それからもうしばらく、その友人からの受け売りを頼りにしつつジオラマの話を続けたのだが、結弦自身詳しいわけでもなく、実際にジオラマを作製したことも一度たりとないので、そう長くは続かずに別の話題へと移っていった。
二人がこうして楽しくお喋りをし始めた頃、ダイニングキッチンでは母親が洗剤で食器を洗い、初音がその洗剤を水で洗い流しては水を拭き取る最中、二人はお喋りをしていた。話題は当然、奏である。ただしその連携作業は早々に終わってしまっていたが。
そして二人の奏への印象や評価は、とても良いものだった。
「ずいぶんと礼儀正しくて、できたお嬢さんね」と、とても嬉しそうに母親が言う。
「でしょ？」
「ええ。あなたの言うとおりだったわ。しかもとっても可愛らしくて。結弦ったら、ずいぶんといい子を見つけたものね」
「ほんと。結弦、奏ちゃんと出会えて良かったよね。正直、さすがに本気で再会できるとは私も思ってなかったけど、でも、こうして会えたってことは、二人が赤い糸で結ばれてるっていうことなのよ。絶対にそう。うん。ていうことは、奏ちゃん、将来的に私の妹になるんだ。うふふ、これは楽しみ」
すっかりその気になり、目尻をこれ以上ないほど下げていた初音に、母親は半分呆れるように笑い、「それはちょっと気が早すぎるんじゃない？　二人ともまだ高校生だし」と苦言。
「数年もすれば二十歳になるんだから、そう遠い話とは思わないけ

ど？」

「まあそうなんだけど」母親はそう言うと、「でも、ちょっと心配なのよね」と少し顔を曇らせた。なにが心配だというのか分からない初音は、「なんで？」と尋ねる。

母親は、一瞬躊躇ってからその理由を口にした。

「大人しい感じの子だから、結弦とで大丈夫なのかなって」

それは、結弦が奏に対して、という意味で言ったのではない。奏が結弦をどう思うか、という意味である。荒れていた時代の結弦の姿が、心が痛むほどこびり付いてしまっているために、奏が結弦から去っていってしまうのではと危惧してのこと。

そんな母親の心の内をその表情から察した初音は「お母さん」と声を掛ける。慰めるような力ない声ではなく、明るく弾むような声で。

「そんな心配はいらないよ。もうあの頃の結弦じゃないんだから。それに、奏ちゃんって、けっこう芯の強い子だと思うよ？　だから大丈夫。もしかしたら、いつのまにか結弦をうまく尻に敷かせちゃってるかもしれないしね。とにかく、結弦と奏ちゃんを信じよう。ね、お母さん」

母親は、二人を信じてやれなかった自分自身に、いつまで経っても母親失格ねと自嘲気味に笑った。

Photograph

この日一日を通して、結弦と奏が二人っきりになれた時間は実はそう長くなかった。昼食後、野暮なことは止めておこうと初音は母親とダイニングキッチンに居残り、しばらく結弦の部屋に寄りつかなかったのだが、三時を大きく回ったころ、二人分の紅茶と少々のお菓子をお盆に載せて結弦の部屋に入ると、我慢の限界を迎えてしまったようで、すぐさま自分の分の紅茶を手に、再度彼の部屋に押し入っていた。

結弦としては、そんな初音を追い出したいところではあったが、露骨に「二人っきりになりたい」と奏の前で宣言するようで、二の足を踏んでしまっていた。本音は二人だけになりたいと思っているのに素直にそれを口に出せないあたり、音無結弦という少年はまだまだという証拠であろう。

それから三人でお喋りすることになり、奏がテレビゲームというモノをほとんどしない、という事実を知った初音は、なら今から対戦しようと言いだした。どこから“なら”という言葉が導き出されたのか謎であったが、とにもかくにも三人でゲームをすることになった。

選んだゲームは、三人一緒に遊べるパーティーゲーム。最初のうちこそ、ルールの理解度と不慣れな操作で奏は勝てなかったが、コツを掴んでしまうと、意外にも二人に対し五分五分以上の強さを見せることとなった。ただ、結弦も初音も今までたくさんゲームをやってきたわけではないので、奏の順応性の高さを証明することにはならなかったが。

そうして夕方の五時を半ば過ぎた頃、リビングでテレビゲームを楽しんでいたところで、奏の帰宅の時間が訪れた。初音は晩ご飯も食べていってと言ったのだが、母が用意しているはずだからと奏は断り、すっかり乾いた自分の服に初音の部屋で着替えると、玄関に

立った。
「お邪魔しました」
奏はぺこりと頭を下げ、見送る初音と母親に挨拶をする。
「うん。また遊びに来てね。それまでにたくさん、奏ちゃんの服を用意しておくから」
「しなくていい」とすかさず結弦。しかし、そう言っておきながら次の初音の発言に、本音がぽろりとこぼれた。
「そんなこと言って。結弦だって、もっといろんな奏ちゃん見てみたいでしょ？」
「そ、そりゃあ……。って、そういう問題じゃない！」
「ていうことだから、絶対にまた来てね」
「はい」
次いで母親も「もし良かったら、また遊びに来てちょうだいね」と挨拶し、ちゃんとお送りするようにと結弦に言う。するとその直後に、初音が「今度こそ、奏ちゃんを守るのよ」と付け加えた。
「分かってるよ」結弦がそう答え、そして奏は二人の笑顔に見送られて音無家を後にした。
空はまだどんよりと曇っていたが、雨はすっかり上がっている。とはいえ水溜まりはあちらこちらにあり、また水を跳ね上げられでもしたらと、結弦はこっそり気を引き締めていた。そういうこともあり、危険性を少しでも減らすべく来たときと違う道を選んでいた。
奏には初めて通る道だが、結弦にとってはとうぜん見知った道である。そしてその風景の中に映るものは、変化というものをほとんど知らないかのように退屈そうに佇んでおり、意識を向ける対象ですらなくなっていた。しかし、このときばかりは違った。水溜まりや近づいてくる車に注意しながら歩いていたこともあって、普段気にしていなかったものが目に映り、改めて知ることがわりと多かったのだが、なにより、隣で奏が歩いているというこの風景に、驚くほど新鮮さを感じていたのだ。
まるで、鉛筆画に水彩を加えたようだ、と思いながら、見慣れて

いるはずの風景を目にしていく。
状況が変われば同じ風景でも違って見える、ということを先週も体験していた結弦は、改めてそのことを実感したのであった。
そうして、二人は無事にバス停までやって来た。バスの時刻表を見ると、あと一〇分ほどで到着。ただしバスという乗り物は、道路状況でいくらでもずれるもの。それはいつの時代になっても、どれだけ科学技術が進歩してもどうにもできないことのようだ。
ひとまず時間を確認した二人は、彼ら以外待ち人のいないバス停で待った。その際、すぐ側に水溜まりがないかを確認していたのだが、互いに同じことをしていることに気が付くと、けたけたと笑い合った。当分トラウマになりそうだね、などと言いながら。
やがて、定刻より三分遅れでバスがやってきた。ついでに駅前のブックストアーに行こうと思っていた結弦も一緒にそのバスに乗り込む。車内はひどく閑散としており、二人の他には運転手と二〇歳代の男性が一人、そして中年の主婦が一人座っているだけ。向かう方向が異なればその乗客数も異なる、というのは電車でも同じこと。なので、駅から結弦の家へと向かうバスの中と状況が激しく異なるのも驚くことではまったくない。しかし、日常生活の中でほとんどバスを利用しない奏にとっては物珍しく映ったようだった。
その中で、行きのバスの中でのことをふと思い出した奏がくすりと笑うと、隣に座る結弦が「どうしたの？」と、何事かと尋ねた。
「最初にこのバスに乗ったときのこと思い出して」
「最初？」
「音無君の家に行くとき」
そう言われて結弦も思い返す。とたんに、羞恥プレイによる恥ずかしさと、やり場のない悔しさがこみ上がり、どんよりとした笑顔でぼそりと呟く。
「忘れよう……。あれは、白昼夢だったんだ……」
その様子についつい苦笑しながら、奏は「音無くんは大変だったよね」とフォローするが、続けて「でも、私は嬉しかった」と嘘偽

りのない気持ちを言った。
「でも、周りからけっこう注目されてたし、やっぱり恥ずかしかったでしょ」
「そういうのは、あんまり気にならなかった」
平然とそう答えた奏に、「そうなんだ……」と返す結弦は、内心でこう思っていた。
やっぱり、ああいった場面じゃ、女の子の方が男よりもはるかに図太いもんなんだな、と。そして、彼女に比べて自分の狼狽えぶりはなんと情けないことか、とも。
そんな情けない姿をいつまでも彼女の前で晒し続けるわけにはいかない、と思うと、自分も図太く堂々としていられるようにせねばと鼻息を荒くしたくなるもの。だがそうできる自信があまりないのも事実。どうしたものかと頭の片隅で考える一方で、こんな自分をどうにか改善するにはけっこうな時間が必要になるだろうと、あまり明るくない見通しに苦々しく笑いたくなっていた。
そしてそんな結弦を嘲笑するように、途中で若いカップルがバスに乗り込んできた。歳は結弦たちと同じぐらいか少し年上。その二人は、座席に座るといちゃいちゃとし始める。そんな彼らに、俺もあれぐらい堂々とできればな、と結弦は思うのであった。奏もまた、結弦ともっと親しくなって、ああいう風にできたらいいな、とこっそり思っていた。
二人想い合っていることは疑いようのないこと。それは結弦も奏も認めるところ。しかし、まだ出会って一週間。面と向かって会った回数は今日を入れて三回目。恋人同士と認め合うにはまだ早すぎる、という思いがともにあったために、恋人同士らしい行動なりに躊躇いがあったのだった。
二人とも異性と付き合うのはこれが初めて。いたしかたのないことだろう。
それからも途中数人の乗客を乗せ、そして降ろして、バスは駅へと走り続けた。やがて駅前の停留所に着くと、結弦と奏を含めて七

人の乗客が降り、並んで待っていた十数人の乗客が乗り込む。ほどなくして次の停留所へと走り出していった。

そして、この日奏と並んで過ごせる時間はいよいよ終わり。

「今日はありがとう、音無くん」

「いや、こっちこそ。それより、なんだかドタバタしてばっかりで、疲れたでしょ」

「正直言うと、ちょっとだけ疲れたかな。緊張も少ししちゃってたし。でも、とっても楽しかった」奏は、少し悪戯っぽくそう答える。

「そう、なら良かったけど……、今度来るときはもっとくつろげるようにするよ。特に初ネエをどうにかさせて」

「そんなこと言ったら、お姉さん可哀想だよ」

「どちらかと言えば、俺の方が可哀想な気もするんだけど」

「私は、本当のお姉ちゃんができたみたいですごく良かったよ。私一人っ子だから、余計にそう感じるのかもしれないけど」

「まあ、それはあるのかもね」

それから数分、名残惜しむように改札の前で立ち話をした二人は、プラットホームから流れ聞こえてきた、間もなく電車が到着することを知らせるアナウンスを耳にして、「それじゃあ」と立ち話を終わりにした。

「またね。音無くん」

「ああ、また電話するよ」

「うん」

そして、奏はパスケースを手に改札へと歩き出す。その後ろ姿を眺める結弦は、ふと何かを忘れているような気がした。しかもとても重要なことを。はて何だったろうと考えたそのとき、奏が最後にもう一度、足を止めて手を振ってきた。胸元で小さく振るその手に応えるように結弦は手を小さく挙げる。奏のその表情とその姿を見て、写真に撮っておきたいな、と思った。

とそこで、彼は雷に打たれたような衝撃とともに思い出した。思わず、「ちょっと待った！」と慌てて奏に声を掛けて。

改札をくぐる僅か一メートル手前で奏は足を止めて振り返り、不思議そうな顔で「うん？」と小首を傾げると、結弦が駆け寄ってくるのを見守った。

「どうしたの？」

「その、頼みがあったんだ」

「どんな？」

「それは……」照れくさそうに結弦は言い淀むと、ここでは邪魔になると思い、「ちょっといいかな」と、この場から移動することを示唆するように指を一方へ向ける。それを見て奏は頷き、結弦の後について改札前から移動し、駅前の広場の隅っこで止まった。

「あの、写真、撮りたいんだけど……」

「なんの？」

それは、立華奏の写真。彼女の写真を撮ってこいという友人らの命令を思い出したのだ。今回も撮り忘れると、歓迎したくないことを本気でやってくる可能性がある。撮らないわけにはいかない。ただし彼らの要求どおりの写真、というのはハードルが高すぎる。二人顔を寄せ合って一枚に収めた写真を要求されても無理な相談だ。

なので結弦は、心の中で「これで満足しろ、お前ら」と悠太たちに向けて言い放ち、奏には「立華さんの、写真なんだけど」と答えた。

「私の？」

「駄目、かな」

一瞬混乱してしまった奏だったが、少しだけ早くなった鼓動を感じつつ、「うん。いいよ」と快諾。これを聞いて、結弦はさっそく携帯をポケットから取りだし、カメラを向ける。一瞬にしてピントが合い、奏の表情がきれいに画面に映し出された。ついつい、見とれてシャッターボタンを押すことを忘れそうになる結弦。

何やってんだ、と自分を叱責し、改めてシャッターボタンを押そうとするのだが、今画面に映っている奏のショルダーショットも良いが、全身写真も是非とも撮りたい、という気持ちが湧き上がると、

またも指が止まりかける。
　両方撮りたいならもう一枚お願いすればいいだけだろと、さっさとシャッターを押さない自分を再度叱責し、とりあえずショルダーショットを撮影。続いて「ごめん、もう一回」と、カメラを向けたままズームアウトしつつ数歩後退し、ちょうど良いところで足を止めて二枚目を撮影。どちらもきれいに撮れており、無事終了した。ただし、バス待ちの人々の注目をいくらか集めてしまっていたが。
　こうして写真を撮り終えると、今度は奏が「私も、いい？」と撮影を求めてきた。照れくささはあったが、自分だけ奏の写真を撮って自分のは嫌だとは言えない。結弦は「ああ」と答え、被写体の側となった。
　奏は携帯を取りだし、やや緊張気味の結弦を画面に収める。すると、ほっこり胸が温まるのを感じた。彼女の手にある携帯には、結弦の携帯の番号とメール、住所が記録されている。そして今、結弦の写真もその中に入ろうとしている。少しずつ増えていく、結弦に関するもの。再会した日の帰りの電車の中で、結弦のプロフィールが空欄だらけであることに寂しさを感じていた彼女にとって、こうして増えていくことに喜びを感じないはずもない。
「あの、まだかな」
「あ……、うん。今」
　シャッターボタンを押すことをすっかり忘れてしまっていた自分に苦笑しつつ、「それじゃあ、撮るね」と合図を送り、写真を撮った。いつまでも大切に保存することになる、思い出の一枚を。
　こうして二人とも撮り終えたところで、電車が音を立ててやってきた。名残惜しそうに互いに手を振り、今度こそ奏は改札をくぐりプラットホームへと小走りで急いだ。そんな彼女の後ろ姿に、結局最後はドタバタになるのかと苦笑する結弦。しかし周囲の目を感じると、いそいそとブックストアーへと歩き出していた。
　このとき、結弦はまったく気付いていなかった。かつて友人であり仲間だったと呼べなくもない男が一人、一部始終を遠目に見てい

たことを。

それから数日後、仲睦まじき一組の男女を撮した写真と記事が、新星高校の学校新聞に掲載された。色々な意味で明らかに不釣り合いなその組み合わせに、ほぼすべての生徒や教師たちは大いに驚かされることとなった。

そしてその中の一人に、奏も含まれていた。

Shadow of the Past

彼の名前は玄田鉄心。その名前からイメージされる人物像は、いかつい体躯と、いかつい顔つきと、いかつい性格を持った男性といったところだろう。もしくは、たくさんの弟子たちから師匠と崇められる、威厳と風格を纏った眼光鋭い白髪の老人か。しかし実際の玄田鉄心は、見事に名前負けしている男だった。身長は一六四センチ、体重は七〇キロ。天然パーマの毛髪は、まるで鳥の巣のような状況になっている。性格は控え目で、自分をアピールすることはあまりない。表情も性格に似て控えめなのかあまり感情を出さず、覇気というものを感じない。そして彼の顔つきはというと、鼻はややつぶれ、目は糸のように細く、瞼が分厚くのしかかっている。唇は薄く、血色はあまり良くない。

要するに、容姿も性格もとても冴えない男というわけである。しかもその姿は子供の頃からあまり変わりない。となれば、少年時代からずっと異性と縁がなかったとしても、疑問に思う者が誰一人いないのもしかたのないことだろう。それどころか、縁があった場合の方が疑問に思われてしまうようなタイプの男だった。

そんな彼は、安アパートで一人暮らしをしている、三二歳の独身男。そして、新星高校で日本史を担当している教師でもある。このような男が教壇に立っていれば、日々生徒たちにからかわれても不思議ではない。しかし、彼を小馬鹿にする者はほとんどいなかった。というのも、日本の歴史を深く愛するその情熱と博識ぶりに、生徒の多くや同僚たちは、大なり小なり尊敬の念を抱かずにはいられなかったのだ。そして同時に、その誰もがこう思わずにはいられなかった。

これで性格と見てくれが、せめて平均値に達していれば、と。また、情熱の幾分かでも歴史以外にも向けられるようになればと。

といった人物なので、当然、彼に色恋沙汰が起きるとは誰も予想

しなかったし、玄田鉄心自身も、このまま死ぬまで女性とは縁のないものと諦めていた。

だが、天は実に慈悲深かった。

前の年の冬、有給休暇を利用して二泊三日の一人旅をした。目的は、旅先となる土地の、細心の注意を払って保管し展示されている歴史的資料を見学し、その土地を実際に自分の足で歩くことだった。散策するのなら寒い冬場ではなく、もっと暖かい季節にした方が良いのだろうが、一人静かにゆっくりと、その時代に想いを馳せながら歩き回りたい場合は、彼にとってはこの季節の方が都合がよいのだ。というわけで、金曜日の夕方に出発した玄田は、夜に宿に着き、翌日の土曜日に資料館を訪ねた。その資料館の外観はとても質素なもので、もの寂しささえ感じられる。館内に入ってもそれは同じで、来場者数の多い有名な施設とは異なり展示の仕方も非常に地味なものだった。しかし、彼にとってそのようなことは些末なこと。大切なのは展示してある資料の内容であり、保存状態であり、保管環境である。そうした観点から見た場合、この資料館はとても優秀なものであると、玄田は高く評価していた。

閑散とした資料館の中をじっくりと見て回った玄田は、退屈していた館長と談義に花を咲かせることとなり、朝一番に入館したというのに、退館したのは閉館時間を一時間以上過ぎた頃となっていた。歴史が関わると、人が変わったようになるゆえの出来事であり、このような展開になることは少なくはなく、結局この日、予定では午後の数時間を散策に当てるつもりだったのだが、断念することとなっていた。

明くる日、玄田は早朝から外を歩き回った。のどかな田舎の風景が周囲を取り囲み、都市部に見られるような斬新で先進的建物は一軒たりとも見当たらず、どれも前時代的な様式の建物。景色の半分には、空に向けて刃を向けている鋸のような山々の稜線が、ずっと向こうで薄ぼんやりと浮かんでおり、残り半分は、冬を迎えた寒々しい小高い山々が間近でずしりと座り込んでいた。

この時代にあって、貴重な風景であり、土地である。

お昼になると、玄田はすでにチェックアウトを済ませていたが手荷物を預かってもらっている宿に戻り、食堂で昼食を取ると再び散策をした。この地に伝わる歴史的伝承の足跡を辿るように歩き、山道を通って山に分け入る。その時代の歴史を思い返し、その中で起きた伝承に想いを馳せ、その当時の息吹を全身で感じ取ろうと、一呼吸一呼吸深くする。冷たい空気が肺を満たし、吐き出される白い息が静かに消えていく。

やがて、沢の音が聞こえてきた。冷たい清流の水を一口飲んで一息入れようと思い、少しだけ足を速めて沢を目指す。そして沢に出ると、さっそく透明な水面に手のひらを浸す。とたんに、その冷たさに火傷したような痛みが走る。だが手を引っ込めることなく、上手にすくい上げて水をすする。そして、うまいと呻った。

と、不意にすぐ近くから笑い声が聞こえた。それは女性の声で、しかも若い。

とんだ邪魔が入ったと気分を害した玄田は早々に立ち去ろうとしたのだが、女性の声が乱暴に玄田を呼び止めた。しかも呂律が回っていない様子で。関わり合いにならない方が良さそうだと思ったものの、いったいどんな女性か一目見てやろうとちらりと目を向けると、そこにいたのは、ハーフコートを羽織った、二〇歳前後と思わしき美しい女性だった。だが彼が思わず注目してしまったのはその整った顔立ちではなく、長い黒髪でもない。彼女の右手にある残り僅かなウィスキーの瓶と、乱雑に脱ぎ捨てられた二つのパンプス、それとストッキングを穿いた足先の汚れだった。

このまま放って去ってしまう、という選択肢もあったが、彼女の安全を考えると無視できない。人通りのほとんどない山道から少し外れたこんな場所で、このままウィスキーを飲み干して完全に酔っぱらい、寝入ってしまったら大変なことになることは間違いない。となると、放っておくわけにはいかなくなる。そこで玄田は、嫌々ながらいったいどうしたのかと尋ねた。

その女は心配する玄田に、どうせアンタも私のカラダしか興味ないんだろと罵ると、次いでその口調と表情を豹変させて、だからアンタの好きにさせてあげるよ、となまめかしい口調で彼を誘うように言い始めた。

その妖艶で淫靡な誘いに、男としてついついごくりと唾を飲み込んでしまった玄田だったが、相手は酔っぱらい。まともに受け取る言葉でもなく、そういう状況ではまったくない。今やるべきことは、彼女をここから移動させ、交番なりどこなりに預けることだ。なので、玄田はその女性に、とにかくここから移動しようと言う。しかしその女性は言うことを聞かないどころか、どうせアンタも私のことバカにしてんだろと喧嘩腰で喚きだした。

これではどうしようもない。とにかく酔いが覚めるか寝てしまうまで待つしかない。と判断し、あまり出来の良くない生徒を相手にするような気持ちで、彼女の言いたいままにさせることにした。すると、そんな玄田の態度が面白くないようで、そうやっていつまでもバカにしてんじゃねえぞと怒鳴り、彼を殴ってやろうと立ち上がった。だが瓶の中身をほとんど飲み干しすっかり出来上がっていた彼女の身体は、瞬く間にぐにゃりと崩れた。

すると今度は、崩れ倒れた際に手のひらや肘や膝を打ち、か細い声で痛いと呻くと、童女のようにメソメソと泣き出した。

怪我の具合を心配した玄田は、大丈夫ですかと近寄る。お前のせいだと叩かれたり罵詈雑言を叩きつけられるものと覚悟していたのだが、その女性は痛いよ痛いよとすすり泣くばかりで、彼を攻撃してやろうという気力は完全に失せてしまったようだった。この状態なら、どうにか対応のしようがあると一安心すると、ハンカチを沢の水で濡らし、じわりと血が滲む手のひらの擦り傷を拭く。ウィスキーがあったので、アルコール消毒にちょうど良いと考えたのだが、さらなる痛みで火を噴いたように泣き出されたらと思いとどまった。肘や膝については、せいぜい打ち身程度だろうと判断し、ここで看るのも少々面倒であることから断念することにした。

女性が抵抗する気力を失ってくれたおかげで、玄田は彼女をおんぶすることができるようになり、彼女を背負って山を下りた。残り僅かな瓶の中身は沢に流し、空き瓶をウェストポーチに押し込んで。

彼の背中の女性は、痛みによるすすり泣きからやがて、みんな嫌いだと悲しそうに呟き続け、そのまま寝入ってしまい、預ける場所を考えているうちに宿に着いたときには寝息を立てていた。宿の人に事情を話すと、とんだ目に遭いましたねと言われ、まったくですと答えて食堂で休憩することにした。なおその女性は、宿の計らいで空いている部屋でひとまず寝かせてもらうこととなった。

出立予定時刻まで一、二時間ほどあったが、散策するにしては中途半端すぎる時間でもある。今回の旅行はここまでかなと、この食堂で時間を潰すことにした玄田は、食堂のおばちゃんからこの町の言い伝えについて話を聞くことにした。そうして時間が過ぎ、いよいよ出立の時間となったとき、先ほどの女性が宿の人とふらふらと食堂に現れた。

目を覚ましたその女性が、どうして自分がここにいるのかと宿の人に尋ねたところ、ここまで背負ってきてくれた人がいたんだと答え、その人はまだ食堂にいると聞くと、連れていって欲しいと頼んだのだ。

女性は玄田を紹介されると、まだ覚めきっていない意識と頭痛による気分の悪い中で、どうにかありがとうと礼を言う。玄田はこれに対し、戸惑った様子でどういたしましてと答える。きれいな女性からありがとうなどと言われたことは、彼の生涯の中で一度たりともなかったので、どう対応したらよいのか分からなくなってしまったのだ。

だが、彼女に言ってあげられるのなら言ってあげようと思っていた言葉は、しっかりと伝えることができた。

「何があったかは知りませんが、こんな私みたいな人間でも、こうして生きてるんですから。あなたなら絶対に大丈夫です」と。

その言葉が彼女の心の柱を完全に崩し、その女性は泣き崩れてし

まった。他に客がいないとはいえ、さすがにここで泣き続けられても困る。宿の人は、とりあえず部屋に戻りましょうと二人掛かりで彼女を先ほど寝かせた部屋へと連れて行った。そして彼女のそんな姿を見送った玄田は、帰路に就いた。

それが、玄田鉄心とその女性、水沢咲との出会いだった。

再び二人が会ったのは、それから数ヶ月経った翌年の二月のこと。玄田はあれ以来、名前も聞かなかったあの女性は大丈夫だろうかと心の隅で心配しつつも、もう二度と会うことはないと信じて疑わなかったので、心配してもしかたのないことと片付けようとしていた。そんなある日、一本の電話が掛かってきた。

電話を掛けてきた相手は女性で、水沢咲と名乗った。そんな名前に覚えなどない玄田は、間違い電話か悪戯電話か、はたまた怪しい勧誘電話かと疑った。しかし、数ヶ月前に助けた女性だと教えられると、しばし言葉を失ってしまうほど驚いてしまった。

どうやってあのときの男が自分だと、そしてどうやってこの電話番号を調べたのかと尋ねると、あのときの宿の人に必死に頼み込んで教えてもらったのだそうだ。にわかに信じがたかった玄田は、もう一度会ってちゃんとお礼を言いたいと言われ、どうしたものかと考えてしまった。どうにも話がうますぎると思ったのだ。それに、あれから数ヶ月という時間が流れているのに、いまさらお礼を言いたいというのも変な話である。

ここは断っておくべきだろう、と一瞬考える。しかし、本当にあのとき助けた女性で、邪心なく電話を掛けてきてお礼を言いたいと言っているのなら、それを断るのは失礼な話となる。

玄田は逡巡し、そして決断を下した。実際会ってみなければ何も始まらない。歴史を知ることも、実際に足を運ばなければ暗い深淵で冷たく眠る事実に触れることは出来ないのだし、と。ということで、数日後に会うことが決まった。

そして当日、待ち合わせ場所にいたのは、見間違えようもなくあのときの女性だった。しかも、あのときも綺麗な人だと思ったが、

それを遙かに凌ぐほどに綺麗に見えた。それもそのはず。いま彼の目の前にいる彼女は泥酔しておらず、気分の悪そうな顔もしていない。少々戸惑いを感じさせつつも真っ直ぐに笑顔を浮かべていたのだから。

こうして再会した二人は、とある居酒屋で祝杯を挙げ、玄田は、彼女が電話をしてきた理由を彼女の口から聞いた。彼にちゃんとお礼を言いたくなった、ということの他にもう一つあった。それは、玄田の背中のぬくもりが日を追う事に恋しく感じてきたから、ということだった。その言葉を鵜呑みにして心ときめかせるほど玄田は純朴で純情だったわけではなく、こんな背中なんかと玄田は言った。しかし水沢は、彼の背中がとっても温かくて、とっても大きくて、とっても心地良かったと言って決して譲ろうとはしなかった。

それから水沢は、あの日に至った経緯を話し出した。

彼女は高校生の頃からモデルをやっていた。周囲にはとても好意的な態度で接してくるたくさんの人がいた。しかし実際は、そうした人々にはたくさんの妬みや憎しみがあった。友人と思っていた相手が、実は陰で悪口を言って回っていたり、悪い噂を流布していたりしたことは何度もあった。付き合った男性はどれも、最初は優しくても次第に彼女を罵倒したり卑下したりするようになり、最終的に別れた。どうやら、二股三股かけていたその彼氏が水沢咲と別れるためにそうしていたらしい。

そういったことが何年にも渡って繰り返され、すっかり心をすり減らしてしまった彼女は、半ば自己否定をし、自暴自棄になってしまったのだった。

あの日彼女は、死んでもいいと思っていたと告白した。あの場所を選んだのは、裏切った友人と来たことがあり、その友人への当て付けのようなものだとも言った。それを聞いた玄田は、あの日の彼女の言葉を一つ一つ思い出した。心の中にあった怒りや悲しみや悔しさを。そしてそれは、自己否定の中でもがいていた彼の少年時代を思い起こさせ、他人事のようには思えなくなっていた。

今の彼女に、なにか力になれないかと考えた玄田は、こう語った。

「すべての人間があなたを裏切るわけじゃない。あなたを慕い、あなたを想う人はいる。それは、あなたが今考えている以上に。こんな私でさえ、慕ってくれる生徒がいるんですから。あなたのような人なら、それこそ数え切れないほどいますよ」

すると、水沢は彼に尋ねた。あなたは、私を裏切らない人でいてくれますか、と。

その言葉は告白のようでもあったが、実際のところそこまでの意味を込めて言った言葉ではなかった。そして玄田も、それを告白と受け取ることはなかった。そもそも告白される日が来るという夢は、ずっと昔に跡形もなく捨ててしまっていたのだから。自覚のないままに彼女に惹かれていようとも。

しかし、この再会を期に会う回数を重ねていくうちに、玄田は本当に告白されることとなった。ある日の夜、二人はいつものように待ち合わせ、食事をした。そして彼は、水沢から一緒に暮らしたいと言われた。

これには驚き、そんな馬鹿なと自分の頭を巨大なハンマーで叩いてみたくなったほどだった。そして彼は、あなたなら優しくて格好いい人といくらでも出会えるのに、なんでよりにもよってこんな男と、いったいこんな男のどこがいいのか、と我ながら卑屈なセリフだなと思いつつ言った。

すると水沢はこう答えた。

「見た目カッコイイだけで最低な男を、うんざりするほど見てきましたから。それに、本当の格好良さってそういうところじゃないと思うんです。玄田さんみたい人をカッコイイと、私は思いますよ。それに玄田さんは、とても優しいです。ほら、私にはぴったりじゃないですか」

彼女は本気だった。会うたびに、玄田の中にある思いやりと優しさに惹かれて、ついには彼への揺るぎない愛情を抱いていたのだ。

こうして、再会から数ヶ月という時間の中で互いに惹かれあって

いった二人は、一緒に暮らすことになった。ただし、すぐに同棲するわけではない。彼がいま住んでいるアパートでは少々狭すぎるし、何より安アパートに迎え入れるというのは彼女に申し訳ないという彼の思いがあり、もっとマシなマンションに引っ越してから、ということだった。

ひとまず同棲することが決まったその週の末、玄田と水沢は仲睦まじく腕を組みながら不動産屋を回った。ネットと電話だけでひとまず選ぶことはできるのだが、実際に不動産屋の意見を聞くことも決して無駄ではないという玄田の意見に、水沢はそうだねと頷いてのことだったのだが、実のところ、彼の意見と彼女の同意には、デート気分で二人で街中を歩けるという狙いがあった。

物件探しというよりも、デートの合間に不動産屋に立ち寄る、といった感じで数件巡り、それぞれの要望をもとにいくつか良い物件を選ぶと、互いの要望が一致する物件に限定して絞り込んでいった。そうして三つの物件が生き残り、翌週末、雨の降るなか二人は不動産屋とともに物件の下見を行い、新居が決まった。

となれば、次は引っ越しである。二人とも一人暮らしであるにもかかわらず、荷造りに苦労しそうな量の荷物を持っていた。水沢はたくさんの服や靴にファッション関連の雑誌。玄田はうずたかく積まれている歴史に関する書籍。どちらも、単身で居を移すだけならば、これらの荷物と格闘することに早々にげんなりし、挫折していたことだろう。しかし、互いに想う相手が引っ越し先で待っていると思えば、荷造りの苦もだいぶ軽減されるというもの。

そうして数日が過ぎた日の朝のこと。

玄田はいつものように新星高校に出勤した。すると、校門を通り抜ける前から学校の中が騒然としていることに嫌でも気が付いた。今度はいったい何の騒ぎだろうと、他人事と思いつつ校舎に向かうと、校舎手前で群れをなしていた生徒たちが、玄田の登場に地鳴りのようなどよめきを起こした。

それもそのはずである。新聞部発行の学校新聞の一面を飾ってい

たのは、玄田鉄心その人だったのだから。しかもその一面には、水沢咲と仲良く腕を組んでいる写真。それは二人でデートしながら不動産屋を巡り歩いていたときのもの。そして写真の横には、これ見よがしに大きく見出しが書かれていた。

『玄田先生に熱愛発覚！　お相手は、二二歳の美人モデル！』

この記事に、ほとんどの生徒が驚天動地の驚きを顕わにしていた。なお、出勤した直後に玄田鉄心が校長室に呼び出されたことは言うまでもないだろう。そして、してやったりと新聞部が喜んでいたことも。

しかしその新聞部の中には、盛り上がる他の部員とは少々違った様子の者がいた。それが理由の全てというわけでもなかったが、新聞部部長はこの日の夕方、部員たちが次々と帰宅の途に就いていく中で、頼みたい用事があるからとその人物には最後まで居残ってもらった。部室に部長と、その人物である編集長の二人だけとなると、前置きなど一切なしに本題を切り出した。

「個人的に内偵を進めている案件があるようだが、進捗具合はどうかな？」

遠回しに居残りを命じられた時点でそう来るだろうと考えていた編集長は、すぐに白旗を揚げた。もう少し情報を集めて整理してから部長には報告するつもりだったので、考えていたより少々報告が早まっただけの話だが。

「知ってたんですね、代表」

「もちろん。でなければ代表は務まらんよ。と言っても、詳細までは知らないがね。さて、君のその案件についてだが、私としては君の判断に一任するつもりだ。しかし、どういった状況かは聞かせ欲しいのだが、良いかな？」

「はい」

編集長は、一枚の写真を部長に見せた。それは、十日ほど前に結弦と奏が再会したときの写真。お互いに泣いたときのものではなく、修理の済んだオオアリクイのペンダントを受け取って少し経ったあ

たりのもの。この写真は、編集長の個人的な情報源から送られてきたものだった。

「ほう。君はこの写真を、慎重に扱うべきとても重要なものと判断したのだね？」

「実を言うと、最初この写真を見たときは、友人とのただのツーショット写真かと思って、隅に置いたままにしてたんですが、しかし数日おいて改めて見たら、彼女のこのような表情がどうにも気になりまして」

「つまり、玄田先生と水沢咲のときと同じく、女のカン、というやつかな？」

「それと、彼女を見てきたその経験から。それで、まず事実関係を調べて、それから報告するに足るものか判断しようかと」

「ふむ。それで内々に調べていた、と。で、となりの男性についてはどこまで調べがついているのだね？」

部長がそう尋ねると、編集長は今現在までに集めた情報を自分用にとまとめたレポートを差し出した。そのレポートには付箋がいくつか立てられており、一通り目を通す前に、まずは付箋箇所をチェックする。そしてすぐに部長の手がとまり、一瞬真剣な表情を覗かせると難しげな表情で言った。

「もし君の推測どおり、彼女らがただの友人以上の関係だとしたら、これは少々困った問題になるね。大いにセンセーショナルではあるが。ところで、彼女はこのことを知っているのかな？」

Hand in Hand

それまで女性とまったく縁のなかった冴えない容姿と冴えない性格の三二歳独身男に、よりにもよって一〇歳も年下の現役美人モデルの恋人がおり、しかも熱愛中という記事に、学校はまたもお祭り騒ぎとなった。そしてこの騒ぎは、ケーキの一件での騒ぎとはその性質を異にしており、前回は縁日的なお祭り騒ぎだったのに対し、今回は呑気な笑い声など一つもなく、まさに阿鼻叫喚といった様相を呈していた。生徒のほぼ全員と教職員の多くが、理由は人それぞれどうあれ玄田鉄心に恋人ができる日が訪れるとは思っていなかっただけに。

考えようによっては、それだけ多くの者たちが玄田に彼女が出来るはずないとほぼ確信していたのなら、この記事を、事実無根の新聞部によるねつ造であると鼻で笑って終わっていたはずである。しかし事態がこうも騒然としたものになったのは、やはり新聞部に対する信頼度がそれだけ高いからこそ。中には、この記事を懐疑的に見る者もそれなりに存在していたが、割合で言えば微々たるものでしかなく、ほとんどの者たちが大なり小なりこの記事を信頼しての感想や思いを吐露していた。

そして吐露されていた言葉には、玄田に祝福を送るものもあったのだが、その数もまた微々たるもので、大半が水沢咲を非難するもの。しかもその中には、玄田を色仕掛けでたぶらかし、彼を見下しながら高笑いしている性悪女だと決め付けて彼女への罵詈雑言を吐き散らす者もおり、そうした者は決して少なくはなかった。むしろ、ほとんどが玄田に対しての忠告だったり説得だったりの意見であり、水沢咲への誹謗中傷だった。

方や女性に無縁の男、方や歳がずっと下のモデル女性というカップリングとなれば、そういう見解が多くを占めてしまってもしかたのないことだろう。だが、これをしかたのないことと済ませられな

い者は当然いる。校長や教頭もその中に含まれ、だからこそ出勤してきたばかりの当事者を呼びつけたわけだが、誰よりもその当事者である玄田鉄心が、この状況を傍観してなどいられなかった。

恋人である水沢咲が、何も知らないような生徒達から一方的に罵倒されているのだから。

そんな彼に渡りの船を着けたのは新聞部だった。彼の窮状を救うべく、などという正義感などあろうはずもなく、『このタイミングを逃してなるものか』と。彼らは玄田にインタビューを依頼。彼らによってこれだけの騒ぎにされてしまったというのに、彼らの力を借りてこの状況をどうにかするということに、やはり心に引っ掛かるものはあった。だが、彼らの力を借りなければ、最愛の人が果てしなく貶まされてしまう。彼がどれほど周囲に訴えようと、彼一人の声だけではやはり限界があり、流れを変えるにはあまりにも非力。しかも正しく届きそうになかったのだから。

背に腹は代えられない。玄田は考えた末、やむなくインタビューの依頼を受けたのだった。その日のお昼休み、言葉はとても少なかったがとにかく語り、その内容は翌日の号外によって掲載された。

彼が語ったことは、主に水沢咲に関することで、互いに本気で想い合い、愛し合っているということをとにかく強調し、だから彼女を悪く言ったり思わないで欲しいと訴えるものがほとんど。

このインタビュー記事を読んでもなお、彼女を悪く言う者はいた。それどころかより過激に叫ぶ者もいた。しかし、彼の切実なる訴えに、ちょっと言い過ぎたかな、玄田先生に悪いことしたな、と態度を改める者もおり、幸いなことにその数は日毎に増え、大半の意見が表面上おとなしいものへと変わっていったのだった。

ただし、だからといって彼らの水沢咲への感情が完全に改められたわけではなく、くすぶる疑念は消えずにいたが。

なお、二人の愛は本物であると認めた者もおり、その中には、真実はいったいどこにあるのかと頭を抱える者や、世界の仕組みにただただ困惑する者、絶望する者、むしろ希望の光を見いだして神様

に祈りを捧げる者、ついには新興宗教さながらに玄田を師と仰ごうとする数人の集団までもが現れていた。

この一件は、実は多くの者にとって他人事ではなかったわけだが、立華奏にとっても、無関係な傍観者となれる出来事ではなかった。それどころか、だいぶ意識の外へと押しやっていた不安が思い出したように姿を現していた。その不安とは、結弦との仲が公表されてしまうことであり、公表されてしまったときのこと。

さすがに、その際に今回と同じような周囲の反応になるとは思えないが、平穏無事にコトが起こり収束するはずもない。そうした不安を敦穂もまた募らせ、週末の結弦とのデートは止めておいた方が良いと提案。奏もちらりとそうした方が良いような気もしたのだが、彼女自身とても楽しみにしていたこともあって、その提案は退けていた。

それから週末までの数日間、話題は玄田が独占し続け、奏と結弦のことが取り上げられることも噂されることもなく、新聞部も目立った動きを奏に見せることは一切なく過ぎていった。

そうして、週末を迎えた。

この日二人は午前中に待ち合わせ、片道二時間以上かけてとあるイベントに向かった。そのイベント会場では、フィギュアや模型などが数多く展示・販売され、数多くのジオラマ作品もその中にあった。しかも縦横数十センチのサイズのものから数メートルのものまで。

先週、奏がジオラマを実際に見てみたいと言ったので、結弦はさっそくネットで調べ、このイベントを見つけてのこの日。往復で五時間近くという遠方になるので、正直どうだろうという気持ちはあったのだが、このことを日曜日のうちに奏へ伝えると、意外と好奇心豊かな奏はさらに興味を示し、早々に行くことが決まり、こうして向かっていたのだ。

なおこのことを翌日の月曜日に、悠太ら一部友人に奏の写真を見せた際に付け加えて言ったところ、それまで盛り上がっていた友人

らは、一瞬にして呆れ返ったように口をあんぐりと開けたり、その一歩手前でこめかみをひくつかせたり、眉間にしわを寄せて自身の頭を押さえたり、可哀想な生き物を哀れむように見つめたり、しまいには、「お前、本気でいっぺん死んでこい……」と深い深いため息混じりに悠太が言ったりしていた。

なんでこうもひどい反応されなきゃならないんだと憮然とした気持ちで「いいだろ別に。彼女が見てみたいっていうんだから」と言い返すと、悠太はこう言った。

「良いわけないだろ……。彼女とデートだってのに……、しかも、昨日家に招待して、写真撮りあって、さらにすげー良い感じになってるみたいだってのに……、二人でジオラマ見に行くつもりだあ？　ぅあほかあっ！　ンなトコ、ムードもくそもないだろがっ！　なに考えてんだお前はっ！　つか考えろよっ！　この流れをっ！」

それからこの日の休み時間を惜しまずに使って、悠太や斉東たちは結弦のために切々と語って聞かせたのだった。結局、結弦は週末のデートの変更を頑として受け付けなかったので、その甲斐はがあったのかどうかはかなり疑問の残るところだが、彼らの言わんとしていることを結弦が理解してくれたという点においては、無駄ではなかった言えた。

とにもかくにも、二人とも色々とあった一週間を経て、イベント会場へとやってきた。その会場は、ニュースなどでもよく映る、巨大なオブジェといった印象のある独特な形の巨大な建物で、緑豊かな場所に厳然と寝ころんでいるといった格好で建っている。その巨大オブジェの中へ、二人と同じようにこの会場へとやってきたたくさんの来場者とともに入っていく。

昼過ぎに到着した二人は一日入場券を窓口で購入して、すぐに会場を見て回るのではなく、先に腹ごしらえをしてしまおうということになった。二人にとって勝手知る場所ではなく、そもそも生まれて初めて足を踏み入れた場所なので、案内板に頼りながらレストラン街を探すことになった。そしてここで、奏は一つ結弦に関するこ

とを知った。
　音無結弦が、ひどい方向音痴であることを。そして、子供の頃はよく初音に手を引いてもらっていたことを。
　となると、やや迷路じみた複雑な構造をした建物の中で、しかも大勢の人で賑わっているこの状況は、結弦にとって好ましくない状況であると言える。さらに言えば、一緒にいる奏にとっても。万一はぐれても携帯電話があるので大きな心配はないが、落ち合う手間がそれ相応に掛かるだろうことは想像に容易い。
　ということで、とにかくお互い離れないように歩こうということで意見が一致した。しかし、昼食を食べ終え、いざイベントエリアの入場ゲートを通ると、それはなかなかに難しそうだと瞬時に思った。それだけ人が大勢いたのだ。果たして何事もなく無事に見て回れるかという不安を抱きつつ、結弦はジオラマが展示されているW－四ホールの入り口に向かう。どうにかそこまでは無事に辿り着き、ほっと一息つく。そして、これからが本番だとホールの中に目を向けると、それなりに賑わってはいるのだが、広い通路の混雑具合に比べると人の数がぐんと少ないことに少々驚いてしまっていた。
　どうやら来場者の多くのお目当てはこのホールではないようだった。
「良かった、これならゆっくり見られそうだ」
「うん。人ばっかりで何も見えなかったらどうしようって、実はちょっと心配だったの」
「俺も。それに、これならはぐれる危険もなさそうだ」
「そうね」
　そんな会話のとおり、二人はじっくりとジオラマを見て回った。その種類は様々で、ＳＦやファンタジーをモチーフにしたもの、現代の日常的な風景や、懐古的な古い時代の風景、そして時代や場所を問わず戦場を切り取ったものなど。そのどれもが臨場感に溢れており、奏は一点一点を感心しきりに見ていった。もちろん結弦も一緒になって感心していたのだが、心の半分は、実は目を輝かせっぱ

なしの奏に向けられていたのだった。
　遅々とした歩みでW―四ホール内をぐるりと一周し終えると、奏は感動覚めやらずといった様子で、別のホールにも行ってみようと言った。時間はまだまだ残っており、結弦も他のホールを見てみたいという気持ちがあったので、人混みに対する不安を背に隣のホールへと足を向ける。幸いにして先ほどのホールよりもさらに人が少なく、はぐれる心配はないに等しいような状況だったのだが、ただし、車を中心とした大型模型が単品で並んでいるばかりで、結弦も奏もあまり魅力を感じることなく、先ほどよりも少々速い足取りで見終えていた。
　続いて入ったホールはこれまでと対照的に大盛況。そこはキャラクターフィギュアが中心に展示されており、立ち止まってゆっくり観賞する余裕などまったくないことは一目瞭然。入ろうかどうしようかと一瞬考えた二人だったが、せっかく来たのだから見るだけでも見ていこうということになった。もしも、ただ見て回っただけならば少なからず後悔していただろう。しかし、後悔するどころか、入って良かったと二人とも心底思うこととなった。なぜならば、こう混雑していてははぐれてしまう危険が大いにあり、その危険を避けるべく終始手を繋ぐこととなったのだから。しかも、最初は恥ずかしさからお互い軽く手を握りあうといった感じだったが、そうもしていられないという状況から無意識のうちにしっかりと握られ、そのことに途中から気が付いていたが、相手の手の温もりを手放したくなかったので、結局手を離すことは一度もなかった。
　これでは、目的がホール内を見て回る事ではなく手を繋ぐことになってしまったようなものだったが、それはそれで二人にとって良いことであることに間違いない。ブース内の関係者や警備や案内などのスタッフがそんな二人をどう思おうとも。
　大盛況のホールを押し流されるように見て回り終えて、そのホールから出た二人はふうと一息ついた。身体的にはそれだけ疲れる観賞だったということだが、結弦の心と奏の心には疲労感など微塵も

なく、むしろ高揚感で鼓動を少々速まらせていた。そしてその高揚感の源である手を、二人は慌てて離すのではなく、照れくさそうに微笑みあっただけだった。

それから二人はしばらく手を繋いだまま、もういくつかのホールを見て回ったのち、タイムリミットとなり、会場を後にした。空はまだ暮れてはいなかったが、帰るのにかかる時間を考えればしかたがない。特に、両親にまだ結弦のことを話していない奏にとっては。

最寄りの駅に着くと、結弦の説得に失敗しがっくりと肩を落としていた友人たちが最後の忠告として言っていたとおり、改札前は大混雑していた。結弦から事前にこうなっているだろうことを聞いていた奏はこの光景を前に驚くことはなかったが、果たしてここでどれだけ待つことになるのだろうと思うと、忘れていた疲労感がどっと肩に降りてきたような気がした。

そんな奏の様子に、同じくこの光景に疲労感が降りていた結弦は

「さすがに疲れたね」と苦笑した。

「うん。今日はいっぱい歩いたし」

「たくさん歩いて、お腹も減ってきたし」

「私も」お腹に手を当てて奏も苦笑。

さすがに二人とも、ハンバーガー一つとポテトだけではそう保つはずもない。

「途中で何か食べてく?」

「でも、晩ご飯食べられなくなっちゃうんじゃないかな」

「少しぐらいなら大丈夫なんじゃない? さすがにハンバーガーはもういいけど、そうだな、例えば肉まんとかあんまんとか、半ラーメンとか」

奏は「どうしよう」と少し考える。今すぐ何か食べたい、とまでの空腹感ではなかったが、夕食までにお腹が鳴り止まなくなる気配は十分に察知している。それを考えれば考えるほど、食べ物への誘惑が冷笑する死に神のように迫ってくる。

そしてついに、その誘惑に屈したのであった。

「少しぐらいなら」
「それじゃあ決まりだね。で、どこで食べようか」
そうして二人はどこで降りるかを相談した。はるか先の河口へとゆっくり流れ進む大河のような列の中で、はぐれてしまわないように手を繋ぎながら。

Turning Point

立華奏は完全に油断してしまっていた。しかし、結弦との至福の時間の中にいては、それもしかたのないことだ。

乗換駅に着くと、ついでだからここで小腹を満たしていこうということになり、そこで途中下車。駅を出ると、夕方の五時半を回った駅前は、そろそろ帰宅の途に就こうとし始めた大勢の人を吸い寄せると同時に、これからこの街へ繰り出そうという大勢の人を吐き出している最中といった状況で、二人は濁流となった川でばたばたと泳ぎ進む魚のように駅前の繁華街へと歩き出す。ただし、イベント会場の混雑ぶりに比べればずっと歩きやすくはあったので、そう苦になるものではなく、迷子になる心配をするような状態でもなく、手を繋がねばならない状態でもない。

しかし、だからといって手を繋いではいけない、という道理などない。むしろ、この程度の混雑でも手を繋ぐ理由としては十分であると考えるべきところ。そもそもを言ってしまえば、手を繋ぐ理由など、そうしたいという思いがあればそれで十分。

ということで、二人はまた手を繋ごうと、「あの」と同時に切り出した。そして一度だけ譲り合いがなされてから、それぞれ相手の表情から、何を言おうとしているのかすぐに読み取ると、お互いに苦笑しあう。

「はぐれたら大変だからね」

「うん。音無くんが迷子になったら、大変だから」

「いや、そこまで方向音痴じゃないんだけど……」

「そうなの？」

「まさか、そこまで重症だと思ってた？」

奏はその問いに、冗談で大きく頷き、「だから、しっかり握ってないと」と楽しそうに微笑んだ。そして、奏の小さくて白い手と、本当に重症だと思われているのだろうかと心配になってしまった結

弦のややごつごつした手がしっかりと結ばれ、二人は互いの手の温もりを感じながら食事先を探した。通りにはそれなりに人がいるので、自然と肩をぴたりと寄せ合うようにして歩き、見るからに恋人同士といった様子で。

二人はハンバーガーショップやコーヒーショップの前を気に留めることなく通り過ぎ、やがて、中華料理屋の前で結弦が足を止めた。

「ここなんてどうかな」

小腹を満たす程度にしては量がありすぎるのではないかと思った奏は、「晩ご飯、食べられなくなっちゃいそう」とやや戸惑い気味に答える。

「大丈夫。定食しかないわけじゃないから。一品ものを一つ二つ頼めばいいんだし、立華さんが食べきれない分は俺が食べるから」

そう結弦が言うと、奏は感心した様子で「そういう頼み方ができるんだ。私、こういうお店ってほとんど入ったことないから」と言った。すると結弦は少し考え深げに奏を眺め、宮倉祐子を連想しながら「へえ、どこぞのお嬢様みたいだね」と返す。

「そういうものなの？　お嬢様って」

「たぶん」

「そうなんだ」

「まあでも、お嬢様は外でクレープを堂々と頬張ったりはしないか」

結弦はおどけるように言う。これに応えて奏は「私、堂々となんてしてないもん。音無くんこそ、あっという間に食べちゃったじゃない」と、少々不満げに視線を逸らしてそう言うが、本気で気に障ったわけではなく、冗談で言ったまでのこと。その証拠に、彼女の表情からも口調からもわざとらしさが滲み出ている。それを見て取っていた結弦は、その冗談に乗っかるように言った。

「それじゃあ、俺もおぼっちゃまじゃないってことか。おぼっちゃまは大口開けて食べたりしないからね」

「うんうん」

「それじゃあ一般庶民同士、仲良く入ろうか」

「うん」そっぽ向けていた顔を笑みに変えて、奏は結弦にそう答えた。

そしてお店に入ろうとしたところ、その手前で自動ドアが開いた。そこには食事を終えて店を出るお客の姿があり、結弦はそのお客とぶつかってしまわないようにと、とっさに奏の手を軽く引いていったん脇にどいた。そして出てきたお客をやり過ごそうと待ったのだが、その客はなんと仙台敦穂だった。

思わぬ場所での親友の登場に、奏は思わず「あっちゃん！」と驚いてしまい、その声に反応して敦穂が奏を見ると、彼女も同じく「奏っ！」と驚いていた。

「どうしてあっちゃんがここにいるの？」

「それはこっちのセリフよ」敦穂はオウム返しにそう尋ねると、結弦の存在に気が付いて「あ、どうも。奏の友達の仙台です」と一応挨拶をしておき、再び奏に向けて喋り出す。一方結弦は、この人が立華さんがよく話している友達かと、どこか感心するような眼差しで見ていた。

「イベントに行ってたんじゃないの？」

「うん。いまその帰り。でもお腹が空いちゃって、それでちょっとだけ食べて帰ろうってなって。あっちゃんは？　一人で食べてたの？」

「わたしゃそんなに寂しい女じゃないやい。弟と一緒よ。っていっても、食べ終わったらさっさと先に帰りやがったけどね」

敦穂はそこまで言うと、「それにしても」と奏をにやりと見て、一呼吸置いてからしみじみと言った。

「しっかり恋人しているみたいで、私は安心したよ」

なお、そう言われるまで奏と結弦の手はまだ結ばれたままだったのだが、ついつい二人とも手を離してしまい、その様子に敦穂が「ほんと初々しいねえ」とにんまり笑う。そんな敦穂に、「あっちゃん、悪趣味」と奏は頬を膨らませたのだが、今までのように恋人じゃないと否定するのではなかったことに、さらに敦穂の表情はにん

まりとしたものとなった。
そして、まさにその直後、あろうことかまた別の邪魔者が登場した。
数メートル離れた場所で、隣に立つ人物に「やっぱりそうじゃん！」と声を上げた、奏のクラスメイトであり良き友人である段田花子と、「いやあ、驚きだわ」と呻くその人物、苗田紗英。彼女らの登場に驚いたのは奏だけではなく、敦穂もまた驚いていた。しまった、といった気持ちで。
そして結弦は、取り残されたようにぽつんと佇むほかなかった。
段田と苗田の二人は実はしばらく前に、見知らぬ男子と仲良く手を繋き、しかも楽しそうに歩いている奏の姿を目に止めて、ついついこっそりと様子をうかがおうと、気付かれないように少し離れて尾行し、観察していたのだった。
今まで何人もの男子が言い寄り、そのことごとくをあっさりと袖に振ってきた彼女の過去を考えれば、彼女らがことさら驚き、隣にいる男子はまさか奏の恋人なのではなかろうかと、好奇心を大いに掻き立てられても無理からぬこと。褒められた行為では決してないが。
そして二人は、直撃インタビューしたい衝動を抑えて後を追い、敦穂が降って湧いたように登場すると、なんてタイミングで出やがるんだと憎々しげに思いつつ、これが凶と出ないことを祈り、あわよくば吉と出ることを祈り、敦穂の「しっかり恋人してる」という言葉に、思わず声を上げてしまった、という次第だった。
もはや隠れていられる状況でなくなった段田は、「なんだ、ナカナってば、ちゃんと恋人いるんじゃん！」と大きな声で三人のもとへと駆け寄り、苗田もその後に続いた。
「なんであんたらがいんのよ！　てか声デカイぞ、花！」そう二人を迎え撃ったのは敦穂。
「そりゃあデカくなるさ！」と、このビッグニュースに興奮している段田が言い返すと、敦穂は「いいからちょっと黙りなさいっての

！」と言い返す。

すると、苗田がこめかみを押さえながら「どっちも黙れ。そして周りを見ろ」と呟いた。

そう言われて、確かに自分も注目を集める要因の一つになっていることに気付いた敦穂は、コホンと一つ咳をして取り繕い、段田は苦笑いしながら「だって、ねえ」と弁解し、騒がしさはひとまず止んだ。

こうして主導権が敦穂から苗田に移ると、苗田は次に、「それと、私らけっこう邪魔なんじゃない？」と冷静な声で言って、奏たちが入ろうとしていた中華料理屋の入口のドアを指さした。

実際問題、邪魔なのは敦穂と段田と苗田の三人であって、結弦と奏は店内に入ってしまえば良いだけのこと。それを分かっていた結弦ではあったが、三人は奏の友達であり、彼には初対面の相手。「ほら、こっちこっち」と誘導する段田と、こうなったら説明した方が良さそうだと言う敦穂についつい引っ張られてしまった奏の後に、変なことになったなと思いながら大人しくついていくしかなかった。

少し前の結弦であれば、この状況に激しく動揺していたことだろう。奏とのことをあれこれ聞かれることはまず間違いなく、目の前にいる新たに加わった奏の二人の友人たちから、奏の恋人なのかと尋ねられることも間違いない。しかしまだ面と向かって奏に好きですと告白するなり、付き合って下さいと交際を申し込んでいるわけでもないので、恋人ですと答えるわけにもいかず、どう答えれば良いだろうと。

だが、仙台敦穂の「しっかり恋人している」という言葉に対して奏は否定しなかった。ならば堂々と答えれば良いだけだ。そもそも、お互いに好意を寄せ合っていることは認めているところであり、この日に至ってはしっかりと二人手を繋いで歩き回っていたのだから、返答に困ってしまうような段階ではもはやない。ここで変に恥ずかしがって否定などしたり誤魔化したりするなど言語道断。それは男として風上にも置けない最低最悪の行為であり、奏に対して卑劣で

卑怯極まりない裏切り行為だと言っても過言ではない。
ならば、ここで恋人宣言することに問題はない。できればこのような状況になる前に、自分からちゃんと告白したかったという気持ちはあったが、それは些末なこと。
といったことを考えた末、結弦の腹は括られていた。ゆえに奏が「ごめんね」と、このような状況になったことで迷惑をかけてしまったと謝ってきたのに対して、「別にいいんじゃないか」と、余裕の笑みを浮かべて答えることができた。そしてそれを見た奏は、結弦が自分のことを恋人として見てくれているのだと強く実感することができて、今この場で泣き出したいぐらいの嬉しさが心の半分を満たしていた。残りの半分は、言わずもがなであろう。
そうして五人は、立ち話のしやすい少し先の横道に入り、足を止めた。
これでやっと質問できる状況になったと、段田は喜び勇んで「で、本当に奏の彼氏なの？」と奏に尋ねた。
奏は、迷うことなく頷こうとした。しかしその前に、敦穂が「その前に――」と割って入った。
「この事は絶対に他言無用だからね。余所に言い触らしたら、マジでイカるから」
「ンなことしないよ」と段田が鼻を鳴らすように答えると、苗田も「奏を新聞部に売るようなマネ、あたしらがするわけないっしょ」と答えた。二人とも、このことが新聞部の耳に入り、広く知られることになった場合のことをすぐに想定できていたのだ。そして、知っていながら自分たちに教えなかった敦穂が何を考えていたかも、だいたい予想はできていた。さしずめ、壁に耳あり障子に目ありと、新聞部に対して用心に用心を重ねるためだろうと。
「んで、どうなのかな？　ナカナ」と段田が再び尋ねる。段田も苗田もすでに答えは得ているのだよと言いたげな面持ちで質問しているので、どうもこうも今更なのだが。そしてその質問に奏が答えようとしたとき、またしても邪魔者が入ってきた。ただし今度の邪魔

者は奏の友人でもなければ新聞部の関係者でもない。結弦のかつての仲間、真木だった。

あまりガラの良くなさそうな男四人を後ろに従えて、不貞不貞しい態度で現れた真木は、どこか見下すような視線を向けて、結弦に声を掛けてきた。

「よおう、久しぶりじゃねえかあ」

「……真木。久しぶりだな」

そう答える結弦は、その表情が物語るようにこの再会を決して喜んでなどいなかった。そして、そんな結弦の様子に、真木はさらに楽しそうな顔をして言った。

「ずいぶんと景気良さそうだなあ。音無よぉ」

真木のその言葉と表情、そして結弦の表情に、奏や敦穂たちは嫌な予感を感じずにはいられなかった。

Ｔｕｒｎｉｎｇ　Ｐｏｉｎｔ（後書き）

５ヶ月ぶりの更新……。まだ読んでくれる人、いるのか？

Ghost from the Past Part I

真木の登場に場の雰囲気が一変し、女性陣は緊張した面持ちとなった。男兄弟に挟まれて育った敦穂でさえ、見るからに関わり合いにならない方が良さそうな連中の乱入に臆してしまっていた。

そして、真木が結弦の名前を口にした瞬間、真木の後ろにいた四人の雰囲気も一変した。

「音無って……、まさかあの？」と口々にする四人の表情は、驚きと畏怖に塗り潰されている。そうした反応を耳にした真木は、四人に向けて凄味を利かせて高らかに言った。

「ああそうだよ。あの音無だ」

いかにも結弦を挑発するような言い方に、結弦の表情に敵意がにじみ出て、「昔の話だろ」という口調にもその感情が表れていた。すると、真木はそれをせせら笑うように言った。

「ああ、そういやあお前、今は真面目に高校生やってるんだっけなあ」こうもあからさまな態度を見せられれば、真木が結弦との再会を喜び合うために声を掛けてきたわけではないことなど明白であり、最悪の事態も視野に入れおく必要はある。最悪の事態とは、つまり喧嘩。

「ああ。まあな。で、俺に用があるんだろ？」

結弦はそう言って数歩前に出る。そして、奏たちを避難させておくに越したことはないと、「ごめん、そういうわけだから、今日はここまでってことで。それじゃあまた」と奏に言った。この状況とこの雰囲気でそう言われれば、逃げろというメッセージだと理解できないはずもなく、渡りに船とばかりにこの場から立ち去ろうと、敦穂や段田、苗田は、奏の背中を押して退散しようと考えた。

しかし、恫喝するような「ちょっと待てや！」という真木の声に、思わずびくりと足を止めてしまった。

「彼女たちは関係ないだろ」

「おいおい、そりゃあねえだろ。一人だけ美味しい思いってえのはズりぃんじゃね？　お前らもそう思うだろ？」

真木がそう言うと、そうだそうだと四人も言いだす。ただしその表情には躊躇いが少しあった。結弦の噂を耳にしていただけに。

この状況に、敦穂たちは身の危険を感じ、ごくりと息を呑んでいた。走って逃げることを考えたが、すぐに捕まってしまうだろうと諦め、大声を上げて助けを求めればと考えたが、助けに入ってきてくれる人がいるかどうか怪しいものだと期待できず、ならば警官がそこにいるような事を言って退散させてしまえば、と考えたが、この場は事なきを得るとしても、警官がどこかに行ってしまえば状況は振り出しに戻るだけだろう、などと解決策を見出せずにいる中で。

そして、なんだってこんな目に遭わなきゃいけないんだと思えば思うほど、結弦がこの連中と知り合いであるということに、段田と苗田はその怒りの矛先を向けたくなっていた。彼へのそんな自分の感情が正しいものだと思っていなくても。

その結弦は、「だったら、お前らも自分たちでどうにかしてみせろよ。俺と違って楽勝だろ？」と、ややおどけた様子で答える。しかしそれは、笑いでこの場をどうにか切り抜けようといった雰囲気のものではなく、むしろ、彼らの挑発に乗るような雰囲気がある。真木は余裕の表情を浮かべるだけで、仕留めた獲物にヨダレをしたたらせている獣といった印象を受けることもあり、奏たちの緊張はさらに高まった。

と、その緊張感を砕くように真木が唐突に笑った。

「なあんてな。そうムキになんじゃねえよ。俺はよお、真面目になった音無くんとちっとばかし遊びたかっただけなんだよ」

すると、そうだったのかと真木の連れの四人も少々残念そうに、だが内心では結弦の相手をせずに済むと少しだけほっとしつつ笑い、その様子に、ひょっとしたらもう心配する必要はないのではと、敦穂たちも少しだけほっと胸を撫で下ろし、場の緊張がやや解けたかに見えた。だが、結弦は緊張を解くことはしなかった。真木という

男を知っているだけに。

真木は「だからよお、そんな怖い顔すんなよお。音無ぃ。あの頃みたいに、楽しくしようぜ」とおどけるようにそう言いながら、結弦に近付く。そのまま笑いながら仲良く昔話に花でも咲かせるのだろうかと、半ば祈るような期待で奏や敦穂たちは見守っていた。だが、それは大きな間違いであった。

結弦のすぐ側で足を止めた真木は、「そういやあ、まだしてなかったよなあ。お前が真面目になった――」と言うと、嬉々とした顔で「お祝いをよおっ！」と続けて、突然右足で結弦の脇へと回し蹴りを入れた。

その行動に、苗田は小さな悲鳴を上げ、敦穂は呆気にとられ、奏と段田は思わず目を背けていた。

真木が何かしてくるだろうと最初から思っており、あの頃という言葉でほぼ確信を得ていた結弦は、威力のあるその蹴りに上体をよろめかせていたが、無様に不意打ちを食らい倒れることは免れていた。続いて、真木の左拳が結弦の腹めがけて繰り出された。これも結弦は腕でカバーする。しかし、真木が最初から狙っていた三撃目の鋭い右の拳までは反応しきれず、その硬い拳が結弦の頬を突き刺した。

固い鉄球で殴られたような激痛とともに、結弦は地面に勢いよく倒れた。真木は追い討ちを掛けて、倒れた結弦の腹と背中を、罵声を浴びせながら容赦なく蹴る。

「気取ってんじゃねえぞ！　真面目になっただあ？　ざっけんじゃねえ！　てめえはこっち側の人間なんだよっ！　俺らと同じ、どうしようもないクズ野郎なんだよっ！」

真木の表情は、いつしか嘲笑したようなものから、怒りを顕わにしたものとなっていた。

右の拳で意識が飛びかけた結弦は、辛うじて失神することはなかったが、いくらかぼんやりとしてしまっており、反撃するどころか相手の攻撃を防ぐどころでもなく、一方的に腹や背中を蹴られたり

脇腹などを踏みつけられたりするばかり。
普段はそれなりに仲が良い自身の男兄弟同士が、流血有りの容赦ない喧嘩を繰り広げる光景を何度も間近で見てきた敦穂でさえ、目の前の一方的な暴力行為に血の気が引きそうになっていた。段田と苗田に至っては、半ば恐怖していた。奏も、やはり怖かった。ずっと目を背けていたかった。だが、敦穂の「ひどいよ……」という小さな悲鳴と、真木の罵声と、胸が痛くなる結弦の呻き声に、このまま何もせずにいていいのかと、勇気を出して目を向けた。そして、気が付けば駆けだしていた。
「やめて！」と叫んで。
奏は真木を止めようと必死にしがみつく。もうやめて、と涙をこぼして訴えながら。
その声で、結弦の意識は少しだけ戻った。そして真木をどうにか止めさせようとする奏の姿がややぼやけた視界の中に映り、「うぜえんだよクソアマっ！」と真木が奏を乱暴に振り払って突き飛ばし、彼女が地面に打ち付けられる姿を見た。
なぜそんなことになっているのか一瞬理解できなかった結弦であったが、痛そうにゆっくりと起き上がる奏と、堪らず駆け寄った敦穂を見て、次いで憎々しげに二人を睨みつける真木を見てから、状況を理解した。
「立華さん……！　真木……、てめえ……！」と苦しそうな声を絞り出す。
その声に真木は再び結弦に視線を戻し、「んだよその目は。ああ？」と呻る。そして不機嫌なその表情はすぐに薄笑いへと変わり、冷笑した。
「そんなに睨むことないじゃん。お前に比べりゃあ、ずうっと優しいだろお？　俺の方がよお。なんつったって俺は、お前と違っててめえの姉貴を殺しかけるほど残忍じゃあねえからなあ。いあやほんと、お前に比べりゃ俺って、紳士だよなあ」
真木の言葉に、敦穂や段田、苗田は結弦を凝視した。その瞳に宿

っているものは、驚愕と畏怖。真木と結弦が知り合いであり、二人の会話の内容から、以前は結弦が真木の仲間であり、不良であったことは明白。そんな結弦が姉を殺しかけたと聞かされては、冗談と笑い飛ばして心穏やかに眺めていられるはずもない。奏から色々と話を聞いている敦穂でさえ、結弦という少年を理解できるほど知っているわけではなく、このような視線を向けてしまっているのだから、何も知らない段田と苗田はなおさら。

奏もやはり驚いてしまっていたが、結弦が本気で初音を殺そうとした、などと一片たりとも信じはしなかった。二人の仲睦まじい様子を、実際に目で見て、触れてきた彼女には、とうてい信じられるものではなかった。ただただ、悪意を感じるその言葉の裏にある真実はいったいどういうものなのかと、唖然としてしまった頭の片隅でぐるぐると考えるばかりだった。

そんな彼女たちとは対照的に、「やっぱマジだったンすか？」と興奮気味に聞く、真木の連れたち。

そして結弦は、地面に横たわったまま、苛烈な電気ショックを受けたかのように大きく目を見開き、言葉というものを忘れ、声にならない声を絞り出していた。真木の言葉が引き金となって、昨日のことのように三年前の映像が鮮明に蘇ったことにより。

今の彼の瞳に映っているのは、奏や真木たちの姿ではなく、三年前の凄惨な光景。彼の耳に届いているのは、そのときの声。それと、耳障りなノイズのように聞こえる真木たちの楽しげな会話。底なしの沼でもがき苦しむように、三年前のその光景から意識を脱出させようとするが、足を掴んで邪魔をするかのようにノイズが叫く。それを振り払おうと「黙れ……」とうわごとのような声で呟いた。しかし、その声が届いていない真木たちは結弦を嘲笑うように話を続ける。

ノイズは止まず、三年前の映像と音も消えようとしない。それが腹立たしく、辛く、悲しく、恐ろしく、そうした感情が、彼らの耳に届かない呟きとなり、それらは徐々に肥大化し、混濁し、悪夢が

彼の心を蝕み削っていく。
「ああ、嘘じゃねえよ。なあ音無？　てめえの姉貴を殺しかけたんだよなあ、その手でよお」
――黙れ
「ひえ～、マジでイカレてやがったのか、こいつ」
――黙れ
「さすがにそれはねえわ。家族を殺そうとするなんてよ」
――黙れ
「俺、てっきり都市伝説みたいなもんだと思ってたぜ」
――黙れ
「んじゃあ、一面血の海の中で高笑いしてたってのも本当なンすか？」
――黙れ
「じゃねえのお？　なんせ音無だからなあ」真木はそう言うと、足下に倒れている結弦の頭を、薄笑いを浮かべて思い切り踏みつけた。ガリ、と路面にこすれ、ほお骨のあたりからじわりと血が滲む。さらなる怒りが、結弦を突き動かそうとしだす。
「まあ、血がドバドバ出るスプラッターものも真っ青って感じだったらしいぜ？」
「それで、その姉貴ってどうなったンすか？　こいつ、本当に殺しちまったンすか？」
「まだくたばっちゃあいねえらしいな。つっても、弟に殺されかけて、おまけに傷物の身体にされちまったんだ。恥ずかしくて外も歩けねえだろうから、くたばったも同然だけどな。まったく、可哀想な姉貴だよなあ」
そしてその言葉で、ついに結弦の心がぎしりと軋んだ。

Ghost from the Past Part II

「うっわ。鬼だな」
「鬼ってより悪魔だろ。今ここでぶっ殺しといた方がよくね？　そいつ」
「でも、呪われるかもよ？」
「そりゃあこええな」
「なら、死んでも俺らを呪えねえほどミンチにしちまえばいいんじゃん」
「どうやって」
「んなの、肉屋にでも持っていきゃあいいだろ」
　一方的な状況であることにすっかり安心しきったようで、下品な笑い声を立てながらそんな軽口を叩いている真木の連れ。そんな彼らのセリフを楽しむように耳を傾けていた真木は、いま自分が踏みつけている結弦へと向けられた奏たちの視線に気が付いた。その表情と瞳から、まるで恐ろしい化け物を見るような心境にあるのだと真木は信じて疑わなかった。確かに敦穂や段田、苗田は結弦に対し恐怖心を抱いていた。真木たちに向けた恐怖心以上に。しかし、奏だけは違うものを見つめていたし、恐れおののいているような表情と視線と判断するには少々無理のあるものでもあった。
　奏に関しては思い違いであったが、それは真木にとってどうでも良いことである。重要なのは、結弦の心を深く傷付けられる材料かどうかということ。そういう意味で、これは良い材料だと思った真木は、奏たちへ得意げに、結弦をしっかりと貶めるように言った。
「なあんだ、お前ら、知らなかったのかあ。だったら、これからは気ぃつけるんだなあ。こいつに切り刻まれて、殺されかけないようによお」
　そして、真木の身体がぐらりと揺れた。起き上がろうとした結弦の「るせえっつってんだよっ！」という怒号とともに。

結弦は、自分の頭を踏みつけている真木の足を両手で掴み、無理矢理どかせて起き上がった。その際に顔をいくらか擦り剥いたのだが、そんな痛みなど今の彼には関係ない。片足をすくわれたことでややバランスを失った真木が転倒を免れようとするその僅かな時間のうちに立ち上がると、反撃の時間を与える前に真木の顔面を思いっ切り殴った。すっかり油断し不意打ちを食らった真木は、そのまま地面に倒れた。結弦はさらに殴りかかろうとしたのだが、真木の連れが一足遅れに「なにしやがんだ！」とその行く手を阻む。それでも真木に襲いかかろうと、結弦はその四人を相手に拳を振るった。

荒れていた頃、数的劣勢の中で喧嘩したことは一度や二度ではない。その中で、相手の力量や数の差にも因るが、最後まで倒れなかったことも一度や二度ではない。そしていま相手にしている四人の力量は、あまり喧嘩慣れしていないような動きをしており、たいしたことのない相手と言えた。

結弦は一人の鳩尾に拳をめり込ませ、一人の顔面を殴打して地面に這いつくばらせた。だが彼にできたのはそこまで。先ほどの真木に受けたダメージはすでに結弦の力の多くを奪っていたのだ。二人目を倒したところでぐらりと身体が傾き、三人目を叩き伏せる前に相手の蹴りで倒され、抵抗する隙を与えられることなく好き放題に蹴られることになってしまった。腹や脇腹を。

そして再び、結弦へのリンチが始まった。

奏は、もう一度結弦を助けようとする。しかし、敦穂がそれを止めた。今度こそ何をされるか分からないという思いがあったからだ。そのかわりに、助けを呼ぼうと考えて周囲に目を向ける。そこでようやく気付いたのだが、多くの野次馬が遠巻きに眺めていた。これだけの騒ぎを起こしているのだから、人が集まってきても何の不思議もない。そしてその野次馬は、好き勝手なことをひそひそと話し合ったり、携帯で撮影したりするばかりで、誰も助けに入ろうとはしなかった。しかも、にやにやと笑って高見席から鑑賞しているような者の姿は決して少なくなかった。

そんな野次馬に、敦穂は怒りの念を沸々と抱いたのだが、その怒りを爆発させる前に、真木の仲間の一人の「死ねや悪魔野郎っ！」という怒声に目が向き、その瞳に映り混んだ光景に、自分の目を疑いたくなった。

怒声を上げたその男が、結弦の側頭部を思い切り蹴ったのだ。まるでサッカーボールでも蹴るように。

糸が切れた人形のように結弦がごろりと地面で動き、敦穂は背筋に冷たいものを感じながら息を呑む。段田や苗田も小さな悲鳴を上げ、野次馬からも不謹慎な歓声とともに様々な悲鳴が上がった。そして奏は、声を失い、意識まで失いかけた。

すでに立ち上がっていた真木は血の混じった唾を吐き、目を見開いたままだらりと力なく倒れているを見て、冷ややかに笑う。

「はっ。ずいぶんと弱っちくなったもんだなあ。昔のお前だったら、こいつら程度楽勝だろうに。ついでに情け容赦なく病院送りにしてよ。やっぱ、日頃から鍛えておくべきじゃね？　昔のお前みたいによ」

その声は、結弦の頭の中でゆらりと漂い、どこかへと彷徨い消えていった。またも辛うじて意識を奪われずに済んでいたが、意識の混濁はさきほどよりもひどい。

結弦を蹴り倒したことですっかりいい気分になったその男は、悪魔野郎もたいしたことねえなと息を巻くと、奏たちの方を見て言った。

「で、こいつらどうします？」

すると同じく高揚感から、結弦に倒されなかったもう一人の男が「戦利品として頂くに決まってんじゃん」と言った。しかもその男は、怯えながらも守ろうとする敦穂を無視し、呆然とする奏の細い腕を掴んだ。敦穂は、やめてよと必死に声を荒げる。

真木としては、正直なところ奏たちをどうこうするつもりなどなかった。あくまでもターゲットは結弦ただ一人。なので、やめとけと連れを止めようと思った。しかし、そう命じるまでもなかった。

完全にノックダウンしていたと思っていた結弦が、突如としてその男に飛びかかったのだ。

その数瞬前、結弦は朦朧とする意識で、視界に映る景色をぼんやりと眺めていた。結弦を助けようと奏が真木に飛びついたときは、視覚情報は正確に脳へと伝えられており、その情報から判断できるようになるのにさして時間はかからなかった。しかし今は違う。軽い脳震盪を起こしている彼の脳では、視覚情報が書き換えられ、付加要素も多く埋め込まれていた。

男が奏の腕を掴み、敦穂が目に涙を浮かべながらその手を外そうとしている光景も、その例外とはならなかった。

敦穂は、怯えた表情で泣き叫んでいる母親となっていた。

奏は、力なく横たわる血まみれの初音となっていた。

そして、まるで赤い海のような血だまりの中、奏に掴む男は結弦自身となった。怒りに飲み込まれた醜い表情をして、その手には、血をしたたり落としている大きなガラスの破片を持って――。

結弦は意識の中で、悪鬼のごとき自身の姿に、喉が切り裂けんばかりに怒りの悲鳴を上げた。

やめろ、と。

結弦は意識の中で、血だらけになりながらも必死に優しく微笑んでいる初音の姿に、悲しみと罪悪感の悲鳴を上げた。

やめてくれ、と。

結弦は、怒りに任せてガラス片を初音へと振り下ろす自身の姿に、憎悪の悲鳴を上げた。意識の中ではなく、獣の咆吼のような「あああああっ！」という叫びを、実際に口に出して。

奏の腕を掴んだ男にとって、それは一瞬の出来事だった。気が付けば結弦に低い姿勢からタックルを食らい、思わず奏の腕を放し、したたかに後頭部を打ちつけていた。その痛みに頭を押さえた男は、すぐにやり返してやろうとする。だが気付けば倒れた身体の上にはすでに馬乗りになった結弦がおり、やり返すどころか顔面を殴られた。

「お前はもういねえんだよっ！」と結弦が叫ぶ中で。
その拳は一度きりでは止まらなかった。結弦自身、止めることなどできるはずもなかった。いま彼の目に映っているのは、真木の連れではなく、冷笑している醜いもう一人の自分なのだから。
「もう死んでんだよっ！　なのになんでここにいんだよ！　俺の前に、出てきてんじゃねえよ！」そう叫びながら、取り憑かれたかのようにもう数回顔面を殴った。男の唇が切れて血が流れ出し、鼻孔からも鼻血が流れ出す。その光景は、結弦をリンチするが如く真木たちが暴力を振るっていたときのような、圧倒的な暴力の脅威といった怖さと異なり、狂気に支配されているような怖さがあるように思え、敦穂は助けを求めることを忘れ、ただただ慄然としてしまっていた。
そして真木は、そんな結弦の姿に「んだよ、まだ元気あんじゃん」と心底楽しそうに笑うと、真下の相手を殴ることしか頭にない無防備な結弦を難なく蹴り倒した。結弦の身体が横に吹っ飛ぶ。しかし今の結弦は痛みを感じる余地などなく、今度は、醜い自身の姿を真木に重ね、殴りかかろうとした。だが脳震盪を起こしている脳は、今回は身体をうまく動かすことができなかったようで、即座に真っ直ぐ真木へと向かうことができなかった。
となれば、容易く真木に胸ぐらを掴まれ、そのまま押されて背中から壁に叩きつけてしまうのも必然。そして真木は依然として胸ぐらを掴んだまま結弦を壁に押しつけ、満足そうに言った。
「やっぱお前よお、ちっとも変わってねえなあ。安心したぜ？」
その声は、自身の声となって結弦の頭の中で響く。狂気に充ち満ちた高笑いとともに。
「俺はもう、あのときの俺じゃないんだっ！」結弦はそう怒鳴ると、真木の脇腹を殴った。その痛みに少し顔を歪めた真木は、「変わってねえっつってんだろ！」と結弦の顔面を殴り返す。そして二人は、一言ごとに一発ずつ拳や膝を出し合った。体勢的には押さえつけられている結弦が圧倒的不利に立たされているようだったが、至近距

離からのボディブローはその不利を打ち消し、数発打ち込むと真木は押さえつける力を失う。すると二人の間に空間ができ、結弦が平衡感覚を取り戻し始めたこともあって、ノーガードの殴り合いとなった。言葉を拳にこめながら。

「黙れ！　てめえはもういねえんだ！　もういねえんだよっ！」

「ここにいんだろうがよっ！　いつまでも真面目ヅラしてんじゃねえぞ！」

「てめえこそ今さらのこのこツラ見せてんじゃねえっ！　とっとと消えろや！」

「消えんのはてめえだ！　てめえは俺らと同類なんだよっ！　真面目に生きられる人間じゃねえんだ！　死ぬまでずっと社会のクズのまんまなんだよ！　イカレたクズなんだよ！」

「違うっ！」

「違わねえ！」

「俺はもうお前じゃない！」

「いつまでもまともぶってんじゃねえ！　反吐が出んだよ！　クソ音無っ！」

壮絶なこの殴り合いに、真木の連れたちは彼に加勢するべきところだというのに、ただただ圧倒されてしまっていた。そして野次馬たちは、まるで拳闘の見物客のように歓声を上げ始めた。だがその歓声はそう時間も経たずして、通報を受けて現場に到着した警察官たちによってため息とブーイングに変わった。

最初に駆けつけた二人の警察官は、殴り合う結弦と真木の間に割って入って止めようとした。だが二人は殴り合いを止めようとせず、それどころか、真木は邪魔すんなと警察官を振りほどこうと暴れ、結弦は最悪なことに、その警察官にも忌まわしき自分を重ねてしまい、憎悪を込めて殴ってしまっていた。

こうして二人の殴り合いは二人の警察官を巻き込んでさらに混乱したものとなった。この事態に、真木の連れたちは「これ以上はヤバイっすよ」と説得しようとした。だが今の彼には聞く耳などなく、

このままこの場にいると、自分たちもとばっちりを食らうことになると、早々に真木を見捨てて走り去っていった。

それからほどなくして警察官がさらに二名現れ、その後も数名加わると、ようやく二人は力ずくで引き離され、それぞれ数人の警察官によって取り押さえられることとなった。

結弦が錯乱状態から脱したのは、また暴れ出さないようにと手錠を掛けられたときだった。両の手首に感じる冷たい感触が、荒れていた頃に何度かこうして手錠を掛けられた記憶を呼び起こし、彼を現実に引き戻したのだ。そして八人の警察官と何十人という周囲の野次馬にしばし呆然としてしまうと、次いで体中の痛みが一斉に目を覚ましたように暴れ出し、自分のしたことを思い出した。

手錠を掛けられた結弦と真木は、その後パトカーに押し込まれたのだが、そのとき奏たちの姿はどこにもなかった。そこまで気を回す余裕のなかった結弦は、その事実に気付くことなく、野次馬に見送られながら警察署へと連れて行かれたのだった。

Family

晩ご飯の支度もそろそろ終わろうかという頃、音無家の電話が鳴った。初音はキッチンで手をふさがれていたので、電話に出たのは母親。帰りが少し遅くなるから奏と二人で夕食を食べていくことになった、といった電話でも結弦がしてきたのだろうかと冗談半分で思いながら、受話器を取った。

「はい、音無です」

そう受話器に向かって快活に話すと、すぐに相手の声がスピーカーから聞こえた。その声は結弦のものではなく、まったく聞き覚えのない声。そしてその声が喋りだしてすぐに、いま電話中であることを完全に失念し、呼吸することさえ忘れて呆然とした表情で立ち尽くしてしまった。キッチンにいた初音は最初のうちこそ、そこから見える母親の凍り付いたように佇むその背中に、一方的に話を聞いているだけなのか、それとも相手が一時的に電話から離れているのかなとしか思っていなかったのだが、どうやら様子が少し変だと感じ始めると、「お母さん？　誰から？」と声を掛けてみた。

しかし母親は返事することなく、身じろぎすらもない。急に言いしれぬ不安がせり上がってくると、支度途中の手を止めて母親のもとに行く。そして母親の表情を見た途端、不安が正しいことを知った。

「お母さん、どうしたの？」

初音はもう一度声を掛けると、間近で言われたことで母親はようやくはっとしたように身体を震わせ、呆然とした表情で初音を見る。このような状態の母親に質問するよりも、電話を替わった方がすぐに分かると判断した初音は、「電話、代わるね」と言って母親の手に握られている受話器を奪い、「もしもし」と電話の相手に話し掛けた。

その相手は、誰かと何やら相談しているようだったが、初音の声

でその相談を中断させて、「もしもし？　大丈夫ですか？」と言った。その真意をすぐに理解できなかった初音は、「え？　あの……、何が、ですか？」と答えてしまったのだが、そんな初音の応対に、いま話している人物が最初に電話に出た人物と違うと察した相手の男は、それを確認するように言う。

「失礼ですが、最初に電話に出られた方とは違う方ですか？」

「あ、はい。そうです」

「それで、あなたは音無結弦くんのご家族の方ですか？」

結弦の名前に、血の気が引いたように感じながら「はい、結弦の姉ですが……」と答える。そして、相手の男は冷静で事務的な声で言った。

「私は、渋井警察署の者です。実は弟さんの結弦くんが、街中で喧嘩をしまして。相当興奮していた様子で、我々の制止も聞き入れようとしなかったので、いま署の方で預からせていただいているのですが。ご家族のどなたか、こちらにお越しいただけないでしょうか。あの、もしもし？　私の声、聞こえてますか？」

初音も、母親と同じようになりかけてしまっていた。だがすんでのところで踏み留まり、答える。ただし、受けたショックはどうにもならず、その声はどこか虚ろなもの。

「……はい、聞こえてます。あの……、結弦はいま、どうしてますか？」

「今は落ち着いていますよ。憑き物が落ちてしまったあとのように。それで、どれくらいでこちらに来られそうですか？」

そう聞かれて、すぐに時間を計算できるだけの思考力さえ取り戻せていなかった初音は、「それは、ええと……」と頼りない声を出す。なので、相手の警察官は質問の仕方を変えた。

「では、どれくらいで家から出られます？」

住所は分かっているので、警察署までのおおよその時間は調べられる。あとは大きく加味されるかもしれない出立までの時間を聞いておけばよい、という判断での問いだった。この判断は初音を助け

た。こう聞かれれば、時間を計算する必要はなくなるのだから。
「すぐ、行きます」
「わかりました。ではお待ちしております」
「はい……」
そして電話は切れた。初音はゆっくりと受話器を降ろし、すぐ側に佇む母親に目を向ける。母親は依然として呆然とした顔をして、涙を流していた。その涙は、結弦を責めるものではなく、自身を責めるもの。その証拠に、彼女は苦しそうにこう呟いた。
「私が……、また私が、あの子を苦しめたの……？」
その言葉に、初音の瞳に精気が戻る。自分のせいと考える母親を放ってはおけないと。
「そんなことないよ、お母さん。そんなことない。絶対にないから」
「でも……」
「きっと、なにか事情があるはずよ。だって、結弦はもうあの頃の結弦じゃないんだよ？　そうでしょ？　だから、あの子は何も悪くない。なら、お母さんが責任を感じることじゃない」
そう言われても、自身を責める気持ちは簡単には捨てられない。そんな母親に、初音は「毎日たくさんあの子を見てきた私が言ってるんだよ？　私の言葉を信じて。そして結弦のことも。ね、お母さん」と言って、ひどく弱々しく、そして小さく映る母親を抱きしめた。母親は娘のその抱擁に救いを感じ、どうにか悲嘆に押し潰されずに済んでいた。自身を責める気持ちを全て拭いきるまではできなかったが。
それから数分後、調理中のガスを止めただけで支度途中の晩ご飯をそのままに、二人は家を出て、結弦のいる警察署へと足早に向かった。
初音も母親も、途中口を開くことはなかった。すっかり暮れた空の下を歩いているときも、バスに揺られているときも、電車に乗っているときも。二人とも思考と心がいっこうに落ち着こうとせず、相手に話し掛ける余裕がまったくなかったのだ。その不安定さは、

結弦を信頼していないからということではない。彼が荒れていた頃のさまざまな記憶が蘇り、二人の心を激しく掻き乱していたからだ。

そうして、二人は警察署へとやってきた。

署内に入り、窓口で結弦の家族であることを告げると、そちらのソファーで少々お待ち下さいと婦人警官に言われ、二人ともソファーに腰掛けてじっと待つ。それから一分と経たずに体格の良い中年の刑事が一人やってきた。

「どうも、少年課の浦辺です」とその刑事が二人に話し掛けると、母親は慌てて立ち上がり、この度は申し訳ありませんでしたと、何度も何度も頭を下げた。初音も、母親ほどではないが頭を下げる。刑事はそんな初音と母親を諭して頭を上げさせると、奥へと案内した。

二人は刑事の後について、足音の響く署内の廊下を黙って歩く。やがて『少年課』と書かれた札が掛けられたドアの前へやってきた。刑事はこちらですとそのドアを開けて中に招き入れる。課内には数人の刑事が仕事をしていた。

母親はそれを見て、この度はご迷惑をおかけしましたと何度も謝り、初音も謝る。それはもういいですから、と案内した刑事に再度止められ、二人は先へと進んだ。その少年課の部屋の奥にある一室の前に来ると、刑事は足を止めて「浦辺です」と言いながらドアをノックする。

「おう、入れ」という嗄れた男性の声が返ってくると、失礼しますとドアを開けた。

そして小会議室といった部屋の中で、ノックの音にびくりと身体を震わせた結弦が包帯の巻かれた拳をぎゅっと握りしめ、唇を噛み、パイプ椅子に座って背中を小さく丸め、絆創膏と晴れ上がった生々しいアザばかりの顔を俯かせている姿を、初音と母親は目にした。

結弦のそんな姿に、母親は堪らずに言った。悲嘆に潤んだ声で、

「ごめんね」と。

その言葉に、結弦は息を止めるほど驚き、堪らず叫んだ。ただし

視線は下に落としたままで。
「なんで母さんが謝んだよ！」
「そう大声出すな。せっかく来てくれたお袋さんに向かって」部屋の中にいた老刑事が、穏やかな口調で言う。
「でも……！　俺が、全部悪いのに……」
「なら余計に大声は出すな。それが、今お前がお袋さんにすべきことの一つだ。そうは思わんか？」
そう言われて、結弦はぐっと言葉を呑み込み、渋々「はい」と答える。
初音と母親は、二人を案内した刑事に椅子に座るよう勧められ、結弦の隣に座ろうとした母親を制して初音が彼の隣に、そしてその隣に母親が座る。これで場が整うと、老刑事が穏やかに事情を説明し始めた。ただしそれは、真木から聞き出した内容にひどく頼ったもの。当事者のもう一人である結弦は事情を聞かれても自分が昔のままだからと言うばかりで、事の詳細などどうでも良いといった具合なために、満足に聞き出せなかったのだった。
また現場にいた野次馬たちの目撃証言を参考にしようにも、最初から見ていたという者は一人もおらず、わざとデタラメを言って警察をからかってやろうという者も少なくなかったためにかえって情報が錯綜し、参考にならなくなっていた。
結果として、真木の言葉に頼らざるを得なかったわけだが、結局のところこれは不良と元不良の喧嘩でしかなく、時間と労力を割いて真実を追究するような事案ではない。それに何より、結弦の語ったことを真木に、真木の語ったことを結弦に教え、それは違うと反論を上げることを二人ともしなかったとあれば、落としどころは決まってくるというもの。老刑事としても、重大な犯罪の影は微塵もないと長年の経験からすぐに判断していたので、喧嘩両成敗といったスタンスでいたのだった。
そうして、早々に説明が終わると老刑事は最後にこう付け加えた。
「まあ、先に手を出してきたのは向こうですし、少々興奮しすぎて

しまったようですが、正当防衛とも言えるわけですから、あまり息子さんを責めないでください」

この喧嘩の発端は、ほんの一時だったがかつて仲間だった結弦が、足を洗って真っ当に暮らしていることを真木がずっと面白く思っていなかったことにあった。しかも、最近結弦が幸せそうにしているという話を聞いてなおさら面白くなかった。そんな中、偶然街中で結弦を見つけ、腹いせにと殴りつけ、そのまま喧嘩に発展。興奮しきっていた二人は止めに入った警察官に抵抗し、とにかく落ち着かせるべくここまで連れてきた。

というのが老刑事からの説明。かなりの部分が省略された短い内容だったが、母親にとってそれはあまり問題ではなかった。

過去、この警察署ではなく地元の警察署であったが、彼女はこうして呼び出されては、誰彼構わず不遜な態度で悪態をつく息子に激しく腹を立て、ヒステリックに怒鳴り、情けない気持ちで警察官にすみませんでしたと謝っていた。しかし今の結弦は、自身の行いにひどく落ち込んでいる。自分は昔のままだと痛々しいほど悲しげに。その姿は、もう昔の結弦はどこにもいないのだという確固たる証拠として母親の目に映り、もうそれだけで十二分だったのだった。

なお、説明の中で奏たちの存在はまったく触れられていなかった。野次馬からの証言にその存在が認められていたが、デタラメな情報も多く、肝心の少女達の姿も現場になかったので、説明に加えるに十分な確証を得るに至らなかった、ということもあったが、何より、結弦も真木も彼女たちの存在を否定したことに、老刑事は意図的に説明からも調書からも外すことにしたのだった。

きっと、彼らなりの最低限スジを通さなければいけないことなのだろうと思いながら。

老刑事は一通り話し終えると、最後に「正当防衛も必要だが、ほどほどにするようにしろよ?」と結弦に向けて優しく諭すように締めくくり、三人は自宅に帰ることとなった。その足取りはとうぜん軽いはずもない。特に結弦の脚は重い枷を負われた者のようでもあ

り、表情は憔悴し、どれだけ彼の心が疲弊しているかを如実に物語っている。そんな結弦を気遣い、電車やバスは使わずに、タクシーを拾って自宅へと直行することに決めると、初音が「それじゃあ私、タクシー拾ってくるから、お母さんたちはここで待ってて」と言って、駅前へと一人で向かった。

警察署の前で結弦と二人きりになった母親は、傷だらけの息子の顔を見て、「痛くない？」と声を掛ける。結弦は、その問いに答えるかわりにぼそりと呟いた。

「……ごめん、母さん」

「いいのよ、そんなこと言わなくて。あなたは何も悪くないんだから」

母親は優しくそう答える。しかし彼の心は、一言ごとに悲鳴を上げていく。涙をこぼして。

「でも俺……、また母さんや初ネエに、迷惑かけた……。辛い思いをさせた……。俺、何も変わってなかった……。あのときのまんまだったよ……。ガキのまんま、イカレたまんまだっ……！」

そんな悲痛に嘆く息子に、母親もまた涙を流していた。

「そんなことない。あなたはもうあの頃のあなたじゃない。じゃなかったら、こうして、泣いたりなんかしないでしょ？　それに、謝るのは私の方。あなたを信じてあげなくて、本当にごめんなさい。本当に、ごめんね、結弦――」

その謝罪には、言葉どおりに、警察からの電話を受けてから事情を聞くまで、結弦が昔の結弦に戻ってしまったのではないかという不安を抱いてしまっていたことに対するものであると同時に、過去への謝罪も含まれていた。

結弦が喧嘩などで補導される度に、彼女は警察署に呼ばれた。そして毎回、結弦を激しく怒鳴っていた。彼の心が荒んだ原因が自分と夫との不協和音にあるのだと考えることなく、なんでこんな真似をするのと。どうして私を困らせることばかりするのと。

そのときの彼女は、過度のストレスで結弦や初音を思いやること

ができなかった。その余裕がまったくなかった。もしもあの頃、もっと早く結弦が発信していたＳＯＳに気付いていれば、結弦を苦しめることも、初音を苦しめることもなかった。

しかし、結局はとことんまで苦しめ、追いつめ、深く深く傷付けてしまった。

彼女は今でも、自分はなんて愚かなことをしてきたのだろうと悲しくなるときがある。そして、警察署の一室で身体を小さくして自分を責める結弦の姿をさきほど見て、今こうして「ごめん、ごめん、ごめん、ごめん――」と涙する声を聞いて、過去の自分の愚かさに心が引きちぎれんばかりに悲しくなった。

どうしてあのとき、結弦を怒ったりしたの？

どうしてあのとき、ごめんなさいって結弦に謝らなかったの？

どうしてあのとき、結弦や初音のことを考えてあげなかったの？

どうして私は、こんなにも愚かなの？

どうして私は、こんなにも母親失格なの？

そんな後悔の思いが、いつしか「ごめんね、結弦、ごめんね」という涙声となって、とめどとなくあふれ出していた。

その涙は、初音が駅前でタクシーを拾い警察署の前にやってきたときも流れていた。二人して泣いている様子に、彼女の涙腺も緩んでしまっていたが、一緒に大泣きするわけにもいかないので、そこはぐっと堪え、「泣くのも謝るのも後にして、早く帰ろ。私、お腹すいちゃった」とがんばって笑顔を作り、二人をタクシーに押し込み、自宅へと向かったのだった。

そしてその車内で結弦が初音にごめんと謝り、自分はあの頃のままだと言う。そんな結弦に、初音は優しく言った。

「結弦は、ちっちゃいときからずっと、優しいまんまだよ」

After the Night

自宅に着いたときには、結弦の精神状態はだいぶ落ち着いたものになっていたが、罪の意識はまだまだ重く、口の中を数カ所切っていたこともあり、食欲はまったくと言ってよいほどなかった。そんな結弦に、それでも何かしら口に入れさせなくちゃと、少しでも食べやすいものをと考えて初音はコーンポタージュと摺り下ろしたリンゴを用意し、結弦の部屋に運んだ。

ひどく汚れた服を着替えて憔悴した心と体をベッドに横たえていた結弦は、いまは何も食べる気しないからと断った。だが、いま食べなきゃだめよと優しく言う初音に、彼女の心遣いを無碍にするのはやはり良くないと考え直し、とにかく口はつけようと、一口二口すすった。

すると、心は欲していなくても身体は相当に欲していたようで、スプーンを口に運ぶ手は止まることなく、とてもゆっくりと動き続けた。その様子にほっとした初音は、あとで食器取りに来るから食べ終わったらそのままにしておいて、と言って部屋を出た。再び部屋に一人となった結弦は、口内の傷口の痛みに幾度となく表情をしかめながらすすり続け、コーンポタージュも摺り下ろしリンゴもきれいに食べ終えると、食器をそのままにしてベッドに寝転がり、いつの間にか寝てしまっていた。

その夜、結弦は夢を見た。取り返しのつかない傷を初音に負わせてしまった日の夢を。

そして夢を見たのは結弦だけではなかった。初音は、背中に大怪我を負ったあとの結弦のことを、母親は、助けてくれと泣いて訴えながら見知らぬ少年たちと喧嘩している息子と、血だらけだというのに私は平気だからと無理に笑ってみせる娘を前に、自分はただ怒鳴り散らしているだけという夢を見ていた。

翌朝、三人が悲しい気持ちで目を覚ましたことは言うまでもない

だろう。

目が覚めた結弦は、身体のあちこちに痛みが感じられる中、ベッドから起きて時間を確認した。時刻はいつもより一時間ほど早い。夢を見てしまったこともあって、結弦の心はひどく重苦しく、現実から逃げるようにもう一眠りしようかと思ったが、もう一度悪夢にうなされるかもしれないと考えると、ベッドにいられなくなった。そして昨日お風呂に入っていないことを思い出すと、傷口にしみるだろうがとりあえずシャワーを浴びようと考えた。

その後のこと、つまり今日学校に行くのか行かないのかは、シャワーを浴びてから。

腫れと絆創膏だらけの顔と包帯の巻かれた拳がとても目を引くその様で学校に行くのはこの日が初めてではなく、荒れていた頃はしょっちゅうだったので、そういう点においては登校することに何の抵抗はなかった。

唯一にして最大の問題は、昨日と過去への後悔と懺悔の念。学校にはちゃんと行かなければという気持ちはあっても、その念が行動を起こす気力の多くを奪っている。シャワーを浴びることで気分転換ができて、学校に行くことにするかもしれず、逆に気持ちがさらに沈み休むことにするかもしれないが、今はとにかく決められる状態ではなかった。

結弦は替えの下着とバスタオルを持って部屋を出る。いつもより一時間早い時刻とあって、初音が朝食の支度をする物音は聞こえず、ひっそりと静まりかえっている印象があった。しかしお風呂場へと向かう途中で、まだ寝ているものだと思っていた初音と廊下で出くわした。彼女の髪はしっとりと濡らしており、肌もうっすらと上気していて、お風呂に入っていたことを明確に物語っていた。

事実、夢にうなされいつもより早く起きた初音は、気分転換にとお風呂に入っていた。

初音は結弦を見てにこりと「おはよう、結弦」と挨拶をする。結弦も、一瞬躊躇ってから「おはよ」と答えた。しかし彼の表情はぎ

こちない笑顔。そのぎこちなさに気付かないはずもなく、その理由も考えるまでもない。

考えようによっては、余計なことはいっさい言わずに今はそっとしておくべきだろう。しかし初音はそうは思わなかった。

あの日から結弦は十分に苦しんできた。悔やんできた。なのに、今になってまた、その頃のように苦しみ悔やむ必要なんてない。あってはならない。そんな考えが初音の心で訴える。

「結弦。まだ気にしてるんでしょ？　昨日のこと。それと、あの日のこと」

まさに図星。結弦としては、そんなことないと誤魔化したかったが、それを見透かすように初音は言葉を続けた。

「今すぐ忘れなさい、なんて言わない。そんな簡単に割り切れることじゃないことぐらい、分かってるから。きっとあなたは、自分を責め続けようとしてしまう。きっとあなたは、私やお母さんに謝り続けようとしてしまう。それはもう、どうしようもないことかもしれない。

でもね、結弦。あなたは、もう十二分に辛い思いをしてきた。誰が何と言おうと、私もお母さんもそれは分かってる。だから、ゆっくりでいいから、もう許してあげて？　あなたが、あなた自身を」

初音の優しい言葉に、俯き佇む結弦の胸が熱くなる。

「でも俺は、初ネエに……」

「ねえ、結弦。私にとって一番辛いことって、なんだと思う？　それはね、結弦やお母さんが、とても辛くて悲しい気持ちでいること。だから、結弦には笑って欲しい。今は無理かもしれないけど、一日でも早く」

そう言われても、という気持ちはあった。だが、自分がこのままでいることが初音を悲しませ、辛い思いをさせることになると考えると、どうにかしなければいけないとも思う。初音の言うとおり簡単に割り切れるものではなく、すぐに気持ちを切り替えることはできない。しかし、自分を責めることよりも、初音や母親のことをま

ず考えるべきだという気持ちは、確実に結弦の心の中で芽吹いていた。その息吹を感じさせるように、結弦は初音に向けて言った。

「……ありがとう、初ネエ」と、やはりぎこちなさはあったが、先ほどよりかは自然に感じられるはにかんだ笑顔で。その笑顔に、初音は自分の言葉が届いてくれたとほっとすると、次いで結弦の手にあるものに注目した。

「ところでさ、結弦。もしかしなくても、これからお風呂入るつもりなの？」

「ああ」

「でも……、痛いんじゃない？」

「そりゃあ、まあ……。でも、慣れてるから。伊達に不良やってなかったからね」痛そうな表情を浮かべている初音に、結弦は今できる精一杯の軽口を言って、照れくさそうにお風呂場へ向かった。お風呂出たら絆創膏とか包帯とか替えてあげるね、という初音の言葉を背にして。

そうして結弦は脱衣所に着くと、痛みを感じながらそろりと服を脱ぐ。鏡に映った自分の姿にちらりと目が向けられると、擦り傷のある膝や肘、打撲の跡がいくつもある腹部や腕が見てとれた。

「けっこう派手にやったんだな」自嘲するようにそう呟くと、お風呂場へ入る。初音が入ったばかりとあって浴室内は暖かく、湯気が霧となって漂っていた。結弦はお湯を少しぬるめにしてシャワーを浴びる。打ち付けるお湯は容赦なく傷口を刺激し、その痛みから結弦の表情が歪む。しかしこれも自分への戒めだと、シャワーを止めることなくお湯を浴び続ける。さすがに石けんとあかすりタオルを使ってゴシゴシと洗うほどの自虐行為はしなかったが。

シャワーだけなので早々に浴室から出た結弦は、使い物にならなくなった包帯をとり、絆創膏を剥がし、濡れた身体を拭く。バスタオルは、じわりと湿った傷口から吸い取った血をあちこちで滲ませていった。そして服を着て脱衣所から出ると、その音を耳にした初音がリビングから「結弦、こっち」と呼びかけてきた。

リビングに行くと、テーブルには絆創膏と消毒液と包帯と軟膏がずらりと置かれており、それからしばらく、結弦は無抵抗状態で初音に傷口を消毒されて顔をしかめたり、絆創膏をぺたぺたと貼られたり、包帯を巻かれたり、軟膏を塗られてそのくすぐったさに笑っては「じっとしてくれなきゃ塗れないでしょ」と言われたりすることとなった。

その最中、今日は学校どうするのと初音が尋ねた。初音のおかげでいくらか心が軽くなった結弦は、「そうだな……。家にいてもすることないし、学校に行くかな」と答える。

「でも、今日は無理しないで、ゆっくり休んだ方がいいんじゃない？」

「休まなきゃならないような代物じゃないよ。この程度」

痛みは確かにあるが、その言葉は強がりではなく、彼の表情にもそれがはっきりと出ている。初音としては、怪我だらけの結弦にはできれば今日一日休んで欲しいところだったが、自分でそうと決めたのなら無理に休ませることもない。やむなく、初音は分かったと言って、手当が終わると朝食の準備に取り掛かった。

初音から解放された結弦は、自室で制服に着替えて、ダイニングキッチンに行った。そこには朝食の支度をしている初音と、椅子に座ってお茶に口を付けている、起きてきたばかりの母親がいた。母親の目は真っ赤に腫れており、ちくりと罪悪感が疼いたが、それを表に出さないように気をつけながら「おはよう、母さん」と声を掛ける。母親もまた、結弦に余計な心配をかけさせてはいけないと、平静を保とうとしながら「おはよう、結弦。今日学校行くって本当？　身体は平気なの？」と尋ねた。

どちらも相手を気遣った、どこかぎこちないもので、それは互いに感じ取っていた。ただ一人、必死に笑顔でいようとしている初音のことを想えば、そんなぎこちなさは早くなくしてしまった方が良いに決まっている。しかし、もう少しだけ待っていて欲しいと二人の心が頭を下げていた。

結局結弦も母親も、その場ではぎこちなさを取り除くことはできなかった。ただし、初音のためにもゆっくりと自分を許していこうと二人だけで話し合うまでに、そう何日も必要とはしなかった。

そんな二人の前に朝食が運ばれ、母親と初音はご飯を、結弦はスープと摺り下ろしリンゴをゆっくりと食べていると、家の電話が鳴った。一瞬、昨晩の警察署からの電話が初音と母親の頭をよぎったが、また警察署から、ということはまずないだろうとすぐに切り捨て、初音がその電話に出る。

電話の相手は、結弦の担任教師だった。担任は手短に用件を伝えると電話を切る。初音はその間、ほとんど聞くだけといった感じだったので、結弦も母親も、相手が誰かまったく想像できず、初音が受話器を置くのを待って「誰からだったの？」と母親が聞く。

「結弦の学校から。今日は、自宅にいて欲しいんだって」初音は、結弦に向かってそう答えた。

それはつまり、今日は謹慎していろ、ということであり、警察から学校に連絡がいったということ。中学時代に同じようなことは何度もあったので、今の初音の言葉で、結弦も母親もすぐに理解した。結弦は何も悪くないのにと母親は腹立たしく思ったが、これはこれで心身共に結弦が休めるのだからとも思えていた。そして初音はその気持ちを代弁するように、彼女もやはり思っていたことを口に出していた。

「そういうことだから、今日一日、ゆっくり休むこと。ちょうど良かったじゃない」

そうして結弦はこの日、学校には行かないこととなったわけだが、そんな結弦に付き合うように、初音も母親も今日は休むと言いだした。大学生の初ネエはともかくとして、さすがに母さんはまずいだろ、と結弦は母親を説得。こういうときこそ母親として何かしてあげなければと思っていた彼女だったが、渋々いつもの時間に会社へと行った。

そしてその日の昼過ぎ、学校から再び電話があり、一週間の停学

処分が決まったことが伝えられた。

Visitors

日曜日のデートはどうだったかじっくり聞いてやろうと思い、斉東たちに混じって悠太も一緒に教室で待ちかまえていたのだが、始業ベルが鳴っても結弦は姿を現さず、なんだよ遅刻かよと文句を言う。そして、じきに学校に来るだろうと思っていた彼らは、次の休み時間こそと待ちかまえたのだが、一限目が終わっても姿を現さず、二限目になっても来ない。ここまでくれば、風邪でも引いたかと考えるようになっていた。また冗談で、もしかしたらデートで何か大きな失敗があり、傷心のために学校に来られないのでは、と笑ったりもしていた。

しかし昼休みも終わろうかという時間になって、彼らは笑ってなどいられなくなった。音無結弦に一週間の停学処分が下されたことが、彼らの耳に伝わってきたからだ。いったい何があったんだとざわついているうちに五限目が始まり、幾人かは、授業中にも関わらず結弦にこっそりメールを送っていた。残念ながら、その頃結弦はリビングでテレビを見ており、自室に置きっぱなしの携帯が着信を知らせていたことに気付かなかった。

結弦からの返信がこないまま五限目が終わると、ならば担任に聞いてやろうと斉東ら数人は職員室に出向き、問い質す。そして担任から、昨日の夕方に他校の生徒と乱闘したから、という理由を聞くと、どうしてそんなことになったのかとさらに尋ねた。彼らは結弦が一頃荒れていたことを間接的にではあるが知っている。しかし悠太と違い直接目の当たりにしてきたわけではなく、今の結弦のイメージの方が遙かに勝っているがゆえに、どうにも信じられなかったのだ。

担任は、次の授業の準備をしながら、向こうが先に手を出してきたことを話す。これを聞いた斉東たちは、ならば音無は被害者で、正当防衛をしたまでで非はなく、停学はおかしいと抗議の声を上げ、

職員室内が騒がしくなった。そんな彼らに担任が「職員室でそう騒ぐな。ホームルームで説明するから」と言うが、かまうことなく停学を撤回しろと要求。

彼らの一歩も引きそうにない様子に、仕方がないと担任が「先に相手が手を出したとは言え、他校の生徒と乱闘したことには変わりないし、止めようとする警察官にまで暴力を振るって喧嘩を続けてしまっては、一方的な被害者とはもはや呼べないだろう？」と説明した。

警察官に暴力を振るってしまってはさすがに穏便には済まされないことぐらい彼らにも理解できるが、だからといって、はいそうですねと素直に納得することはできなかった斉東たちは、結局、他の先生の仕事の邪魔になっていることもわかれと担任に言われて職員室から追い出され、釈然としない気持ちで教室に戻ることとなった。

教室ではクラスメイトから説明を求められ、今度は担任の言葉を少々借りて説明する側に立った。話を聞いた聴衆の中には、さすがにこの処分は仕方がないと言う者もいたが、立派な正当防衛なのだから停学処分は重すぎだ、絶対におかしいという者や、男として正しいと鼻息荒く賞賛する者もいた。ただし擁護派のはほとんど男子で、残念ながら女子のほぼ全員はむしろ評価を下げており、今回の件で彼を粗暴な人物と見なす者も少なくはなかった。

結末はどうあれ、奏たちを守ろうとしていたことが知られていれば、男子からの評価はさらに上がり、女子からの評価は天と地がひっくり返るほどに変わっていただろうが。

六限目が終わり、ホームルームで担任が説明した後も、その状況は変わらなかった。

放課後になると、斉東や田野中たち、そして悠太も加えてのちょっとした団体となって結弦の家に行こうという話になった。しかし大人数で行っても迷惑じゃないかという意見が出されると、それもそうだということになり、結局、代表者二名が行くということになった。選出されたのは、まず結弦の親友である悠太。そしてクラス

代表の斉東。
　聞きづらいだろうけどできるだけコトの詳細を持ち帰ってきてくれと見送られながら、二人は学校を出た。もちろん悠太も斉東も、言われるまでもなくできる範囲で聞くつもりでいた。そうして、少しばかりはやる気持ちをそのままに二人は結弦の家へとやってきた。悠太にとっては何度も訪れている場所だが、斉東は今回で三度目。呼び鈴が押され、「はあい」という初音の声とともに玄関のドアが開く。初音のファンである二人は、一瞬どきりとしてしまっていた。
「あら、五十嵐くん。それと、斉東くん、だっけ」
「はいっ、斉東ですっ！」
「こんにちは、初音さん」
「こんにちは」初音は笑顔でそう答えると、ちょっと待っててねと言って家の中に戻っていった。普段であれば迷わず家に上がってもらうところだが、昨日の結弦の様子を鑑みて、どうするかは結弦に決めてもらった方が良いと思ったからだ。
　結弦の部屋に行くと、ベッドに寝っ転がり、友人たちから送られたメールの返信をせっせとしているところだった。
「結弦、五十嵐くんと斉東くんが来てるけど、どうする？」
　初音がそう尋ねると、少なくとも悠太は来るだろうと思っていた結弦は、「まさか追い返すわけにはいかないだろ？」と苦笑しながらむくりとベッドから起き上がり、二人が待つ玄関に行く。ドアを開けた結弦は、その有様にぎょっとした斉東と、過去何度も見ているので驚くこともなかった悠太を笑顔で迎えた。
「よお」
「よお。ずいぶんと派手にやったみたいだな」とお気楽に答える悠太に対し、斉東は「大丈夫か？」と痛そうに顔を歪めていた。
「今のところ、飯と風呂以外は大丈夫っぽいな」
「それって大丈夫じゃないってことじゃないか」と斉東。結弦や悠太と違って、殴り合いの激しい喧嘩などしたことのない斉東にとっては、とうてい大丈夫とは言えない状態に思えたのだ。二人にして

みれば、この程度と一言で終わらせる代物だが。
玄関先で少々言葉を交わした後、結弦は二人を家に招き入れると自分の部屋に案内した。部屋に入ると、クラスメイトや他のクラスの友人から多数のメールやらを受け取っていたこともあって、結弦は二人に「ごめん、心配かけて」と頭を下げる。
これに悠太が「なことはいいって。しっかし、どこの馬の骨だ？お前に喧嘩を売ったアホは」と冗談めかして言った。それはただ単に、場を堅苦しいものにしないための軽口に過ぎなかった。だが、結弦が神妙な様子で「真木だ」と答えたことによって、状況はそうもいかなくなってしまっていた。真木の名を聞いた悠太は、思わず目をむくほど驚き、それから少し間を開けてから無理に表情を崩して「おいおい、笑えない冗談だぞ」と言う。そして、冗談などではないと結弦の様子から理解すると、怒りを露わに「なんで今頃！」と怒鳴った。
「ずっと忘れられなかったんだそうだ。俺のことを」
「けどあいつ、上から釘刺されてるはずだろ！」
「俺もそう思ってたけどな」
とここで、真木のことを知らず、話にまったくついていけてない斉東が「誰だよ、その真木って」と二人に向けて説明を求めた。これに答えたのは結弦。
「昔の喧嘩仲間だったヤツ。まあ付き合いはたいして長くなかったけど」
「なんで仲間だったヤツが、お前に喧嘩売るんだ？」
「俺が不良やめたのが、今でも気にくわないらしい。ついでに、俺が平和に過ごしてるのも」
結弦と真木は、一頃だが喧嘩仲間だった。敵対するグループに対して二人で無茶な喧嘩をしたこともあった。ただし、だからといって特別仲が良かったわけではなく、怒りのはけ口が同じ方を向いていただけで、友情や信頼など二人の間には最初から最後まで存在しなかった。

やがて結弦が更生の道を決意すると、そんな彼を真木は裏切り者として敵視し、心を入れ替えて間もない頃の結弦に、仲間を連れて何度かリンチまがいのことをしていた。その状況を見かねた先輩たちが、足を洗った音無に二度と手を出すなと真木に命じ、以来そのようなことはなくなっていた。

一昨日までは。

という話を聞いた斉東は、「そんなの、完璧な八つ当たりじゃないか。ずいぶんと迷惑なやつだな」と腹立たしげに言った。すると悠太が「迷惑どころじゃねえ！」と、斉東に向けてというよりも真木に向けて荒々しく吠え、「あの野郎、息の根止めてやろうか」と独り言のように呻った。

半分本気なその目に、結弦は「五十嵐、お前が言うと冗談に聞こえないからやめてくれ」と彼を制するように言う。

「ああ？　俺は本気で言ってんだぜ？」

「なお悪い」

「悪いのは真木の野郎だ。いいか？　あの野郎のことだ。またお前にふざけた真似を仕掛けてきてもおかしくないんだぜ？　だったら、早いうちに潰しておくべきだろ」

「まあ、これで終わりとは、俺も思わないけどな。でも、だからってこっちから仕掛けるっていうのも。それに、そんなことしたら、また昔の俺と同じになっちまうし、初ネエと母さんに合わせる顔、なくなるし……」

「――っ、そりゃあ、そうかもしれねえけど……」

今後も何かしらしてくるだろう真木をどうするか、という問題に結弦は深刻な面持ちで考え、悠太も握り拳を怒りで振るわせ眉間にしわを寄せながら考えだし、場の雰囲気は悠太の当初の思惑に反して重苦しいものになってしまった。そして、またしても一人取り残されてしまった感の強い斉東は、この状況に困り果ててしまった。真木がまた結弦に喧嘩を仕掛けてくる可能性に、斉東としても他人事として見てはいられなかったのだが、このまま三人で悩んでも時

間が過ぎていくだけだという思いがあったのだ。
ならば、やはりこの問題は後回しにして、他にも聞いておくべきコトを優先させた方が良いだろうと決めて、「五十嵐、とりあえずそいつのことは置いとかないか？　他にも聞きたいこと、あるんだしさ」と、話の矛先を変えようと訴えた。
斉東の提案がもっともなものであることは、悠太も分かっていた。だが煮えくりかえっている感情を抑え込むにはまだ時間が必要で、すぐに首を縦に振ることができない。そんな彼に救いの手を差し伸べるように、来客を告げるチャイムの音が結弦の部屋に聞こえてきて、早々に部屋の戸がノックされた。
「結弦、先生がいらっしゃったわよ。リビングにお通ししたから」
ドア越しに聞こえる初音の声に、結弦は「分かった。いま行く」と答え、二人に「悪い。ちょっと待っててくれないか？　たぶんすぐに終わるだろうから」と言い残して部屋を出た。残った斉東は、担任の来訪に少々驚いてしまっていたのだが、驚くことでもないかとすぐに考え直し、一方悠太は、経験則から驚きもしなかった。むろん結弦は事前に知っていたので、驚くはずもなかった。
初音とともにリビングに入ると、ソファーに腰を下ろし書類をじっと見つめていた担任がそれに気付き二人を見て、結弦の有様に思わず驚き立ち上がってしまっていた。それだけ彼にとって結弦の怪我の具合がひどく感じられたのだ。
「音無、怪我、大丈夫か？　ちゃんと病院に行ってきたか？」
「いや。まだ。ていうか、そんな大袈裟なものじゃないんで」
「大袈裟じゃないって、そんなことないだろっ」
担任はそう心配を口にするが、結弦は「いや、ほんとに」とあくまでも大丈夫と言う。出来れば言うことを聞いて欲しいところだが、訪問したのはそれが目的ではない。とにかく病院には一度行くようにと言い渡し、本題へと話を移すことにしたのだった。

No Call

担任が結弦の家にやってきた目的は、今回の処分内容とその理由の説明、それと、結弦から事情を聞くことにあった。

まず最初に、担任は申し訳なさそうに一週間の停学を直接言い渡し、これこれこうだからと話した。その中で一切言及されていなかったが、結弦の過去の経歴が加味されていたことは明白だった。その点について結弦は腹を立てることもなく、何も言わなかった。今回のこと以外でも過去を引き合いに出され白い目が加わるたびに、巨大な鉄球のような自業自得という言葉がいつも彼の心にズシリと落ち、この時もやはり落ちてきていたのだ。

そんな結弦の隣で保護者として座っている初音もまた、この処分を黙って受け入れていた。警察官に暴力を振るってしまったのは覆しようのない事実で、これもしかたのないことだと、最初に電話越しに聞かされたときから納得していたから。

担任にとって一番気の重かった話がこうしてあっさりと終わると、少し安堵しつつ、結弦からの事情説明を求めた。これは校長や教頭から言い渡されたことではなく、警察からの説明だけでは事実を知る上で不十分と判断しての、いわば個人的なもの。

結弦は最初、言いづらそうにぼそぼそと話していた。というのも、奏の存在をここでも隠すために言葉を選んでいたからだったのだが、それを知る由もない担任は、自分のしてしまったことにそれだけ後ろめたさを感じ、後悔しているのだと勘違いをしていた。確かに結弦は今回の件でひどく後悔しているのだが、この場で見せている姿はそれではないのだから。

結弦が語った内容は、担任が警察から報告を受けた内容と大差なく、僅かに状況説明が補足されたにすぎないもの。出来ることなら少しでも結弦の正当性を強く訴えられる話が聞けたらと、ささやかながら期待していただけに、担任としては少々落胆するものだった。

「まあ、頭に血が上って自分を見失ってしまうことは誰にでもあり得ることだからな。けど、それで取り返しのつかないことになることだってあるんだから、今後は気を付けろよ？」

「はい、気を付けます」心に痛みを感じながら結弦はそう答える。そしてその隣でそんな彼の様子をちらりと見た初音は、背中に疼きを感じながら、結弦を少し心配していた。この言葉によって、また自分を強く責めてしまってはいないかと。

「うん。それじゃあ、家でおとなしくしていろよ？　それと、病院に行くこと。いいな」

「はい」

そして最後に、担任としてお前の力になりきれなくてすまないと、処分内容について結弦に頭を下げ、帰っていった。

荒れていた頃に何度もあった似たようなシチュエーションと比較すると、なんとも拍子抜けなものに感じられた結弦は、これなら電話だけで済んでいたことだし、わざわざ家に来るまでもなかっただろと、玄関で担任を見送り終えたのちに口にする。これに初音は、「そんなこと言っちゃだめでしょ。こうして足を運ばせてしまったんだから」と注意。だがすぐに表情を和らげて、でもまあ私もそう思ったけどねといたずらっぽく冗談を言ったのだった。

結弦の心にあるだろう思いを少しでも軽くできたら、と。

担任が帰り、初音はリビングに、結弦は自室へと戻った。時間にして二〇分ほど。悠太も冷静になれているだろうと思いつつ、戸を開ける。完全に気持ちを切り替えられたわけではなさそうだが、話題を変えられるだけの切り替えは出来ていた。

不機嫌さの残る表情で、悠太がまず「なんだって？」と担任とのやり取りを尋ねてきた。「なんもないよ」と結弦はつまらなそうに答える。当然、その答えに満足できるはずもなく、「なにもないってこともないだろ。どんな話だったんだよ」と今度は斉東が尋ねた。わざわざ説明するほどのものでもないと思っていたので、結弦は最大限に簡素化して話した。『一週間の停学』『その理由』『事情説

明をした』という言葉で大半を占めて。
そして、『事情説明をした』という言葉から、悠太と斉東は本来の目的に話を戻したのだった。また説明するのかと少々げんなりしてしまった結弦だったが、今度の説明は先ほどのものと同じにはならなかった。
真木に喧嘩をふっかけられて、という冒頭部分の直後、斉東が話の腰をいきなり折って質問をした。
「とその前に、聞いておきたいんだけどさ。そんとき彼女は一緒だったのか？」
これに結弦は一瞬どきりとし、どう答えようかと逡巡した。極力奏に迷惑が掛からないようにここでも隠しておくべきか、それとも二人には打ち明けておくべきか。むろん口止め前提で。
彼が選んだのは後者。二人なら秘密を守ってくれると信頼しての判断で。一緒だったと聞かされた斉東は、なんて間の悪いと顔をしかめ、「で、彼女は大丈夫だったのか？」とまた質問をする。この質問に、結弦は戸惑った様子で「大きな怪我は、してないと思うけど……」と答え、奏が真木に突き飛ばされたことを話した。これに斉東は「なんだとお！　ゆ、許せん！　その真木ってやつを！」と大いに腹を立てて、次いで「それで、頭に血が上りすぎて、警官まで殴っちまったってわけか」と納得していた。
確かにそのことで結弦は激しい怒りに駆られた。だが、彼が我を忘れた本当の理由はそれではない。そのことを明かさねばならないわけでもないが、彼らに対して隠さなければならないわけでもない。正直言えば、結弦としては口に出したくないという思いが強かったが。というのも、言葉にした途端、痛む心がさらなる激痛に苛まれることは火を見るよりも明らかだからだ。しかし、だからといって二人に隠していいのか、という問いが容赦なく自身に迫る。
結局、これも罰だと考え至り、ふうと一息し、無理のある苦笑いの表情で話し始めた。そしてやはり、自身の発する言葉一つ一つが鋭い棘だらけの強靱なムチとなり、傷口を深く深くえぐっていく。

心はその痛みに歪み、被っている仮面が瞬く間に歪なものになり、あっという間に、悠太にとって見るに堪えられないものとなっていった。

「そういうわけじゃないんだ。そりゃあ、立華さんが乱暴されて頭にきたけど、その後に俺、頭蹴られてさ。そしたら頭がぼーっとして……、

真木たちが、俺に見えたんだ……。初ネエと母さんを傷付けてて、初ネエが……、血だらけで、俺はそれを見ながら――」

「もういい」結弦が語り出してすぐ、大鉈をぶんと振り下ろすように悠太が強い口調で話を断ち切った。突然のことに、結弦はやや虚ろな瞳で「五十嵐……」と悠太を見やる。

「もういい」悠太は、もう一度繰り返した。苦々しげな表情で視線を背けたまま、今度は静かに諭すように。

この言葉を受けて、それまで無理に作っていた結弦の歪な表情が壊れだした。懺悔をする罪人が優しき神父に心を救われていくように。そして、辛そうではあったがどこかほっとしたような表情でぼそりと続けた。あのときの幻影を省略し。

「……気が付いたら、お巡りに手錠掛けられてた。だから、立華さんのことであなったわけじゃないんだ。俺は、俺から、逃げたかったんだ……」

「そうか」ぼそりと悠太が受け止める。

なぜ悠太が結弦の話を断ち切ったのか、なぜ結弦の表情が変わっていったのか、その理由を知らない斉東としては釈然としない気持ちだったが、二人の様子から説明を求められる雰囲気でないことなど確認するまでもなく、「つまり音無は、頭を蹴られたせいで、わけのわからない幻覚相手にブチ切れてた、ってことか？」と言うに止めていた。

「なんだよ、それじゃあ音無は何も悪くないじゃんか。それ、ちゃんと警察にも担任にも話したんだろ？」

「いや」斉東に聞かれ、結弦はそう答える。

「『いや』って。何で話さないんだよ」
「警官殴ったのは、事実だしな」
「けど、それはお前のせいじゃなくて――」
とここで、悠太が「斉東、そこまでにしとけ」と、今度は斉東を制した。だが、これについては納得のいかない斉東は、「なんでだよ、おかしいだろ」と反論。しかし、「音無なりの理由があってそうしたんだ。それを否定できるのも、音無だけだ。俺たちじゃない。違うか？」という、有無を言わせぬ悠太の真剣な表情と言葉に、斉東は渋々矛を収め、一転して表情を崩して言った悠太の「それに、下手に話すと立華さんの存在がばれかねない。ってのもあるんだろ？　音無」という言葉に、それ以上の反論は諦めたのだった。結弦のためにもこのことをみんなに教えたいという誘惑とともに。
結弦の様子から、とりあえず質問はひとまず休止にしようと斉東は、しかしとんだ災難だったなと笑う。重苦しいこの雰囲気を少しでもよいから軽くしたいという思いもあって。悠太もこの雰囲気のままを良しとは思っておらず、結弦の気持ちも考えて、そうだなと同意し話題を変えた。
最初は、開催の見通しがいまだたっていない斉東主催の合コン企画第二弾について。とにかく我が侭な参加希望者が多すぎて収拾つかず、また共同主催者である安達美和との調整が難航していることもその要因となっており、誰かどうにかしてくれという斉東の愚痴や悲鳴から始まった。
それから話題はいくつか変わり、気が付けばそろそろ引き揚げる頃合いとなっていた。二人は話していた話題が一段落すると、「そろそろ帰るか」と腰を上げる。その頃には結弦の気持ちもすっかり落ち着きを取り戻しており、二人は少しほっとしていたのだが、それが斉東にとって油断となってしまったようで、この日の最後の締めくくりとしてこう言った。
「しかし、ほんと災難だったよな。彼女、なんて言ってた？」
この質問に、結弦は一瞬どきりとし、言葉を詰まらせてしまう。

手錠をはめられてようやく我に返った結弦の周囲には奏たちの姿はどこにもなく、それっきり。今のところ向こうからの連絡もなく、彼女がどう思っているのか直接は聞いていない。だが、きっとこう思っているだろうという推測は結弦の中にあり、その推測が正しいと半ば確信していたが故に。

すぐに答えが返ってくるものと待ち構えていた斉東は、「どうした？」と小首を傾げる。喧嘩のあと、立華奏と直接的なり間接的なり何かしらやりとりはしていると信じて疑っていなかったのだ。例えば警察署まで奏が付き添っていたり、最低でも電話なりメールなりで。しかもそのやりとりは、結弦から聞く二人の仲から、きっとその仲が進展したことを証明するようなものとも考えていた。

それとは対照的に、奏が喧嘩の現場にいたと聞かされてからずっと嫌な予感を感じていた悠太は、結弦の今の表情にさらなる不安に駆られ、力なく苦笑しての返答に不安は絶望に近いものとなってしまっていた。

「……いや、どう、だろうな」

結弦は、少し困ったように歯切れ悪くそう答えた。その言葉に、斉東は傾げた首をさらに傾げるように「どうだろうなって、どういうことだよ」と尋ねる。分からないはずないだろうと言いたげに。

「実は、あのときは頭に血が上りすぎてて、立華さんどころじゃなかったっていうか。その後も余裕なかったしで、あれきりなんだ。だから、どう思ってるかは」

「あれきりって、まさか向こうからも何もないってのか？」

「彼女の目の前で、あんな殴り合いの喧嘩、したからな」力ない苦笑でそう答えた結弦に、斉東は「でもそれは」と反論しようとしたのだが、すぐにそれは喉の奥に引っ込んでしまっていた。

数時間前、結弦が他校の生徒と喧嘩したことについて、ほとんどの女子がどう反応するかを見てきた。立華奏とクラスの女子とでは、結弦と相対する距離や立場は違い、ゆえに思うところは違うかもしれないが、奏は乱闘する結弦を目の当たりにしている。真木に乱暴

されてもいる。
　そして、まだ昨日の今日とはいえ何の連絡もしてこない。例えばたまたま連絡するタイミングがなかっただけ、という可能性もあるが、二人の仲がそれまでと同じなら、せめてメールでも無理に寄こしていそうなもの。
　そうした点を考慮すると、クラスの女子と意見を同じくしている可能性は十二分にあると言わざるを得ない。
　結弦とともに中学時代を過ごしてきた悠太ならなおさらのこと、その可能性は絶望的数字となって現れていた。どうしても中学時代の結弦の周囲の人々と奏が重なってしまうがために。
　そもそも立華奏のことは、悠太も斉東もよく知っているわけではなく、結弦からほんの少し聞いて知っているに過ぎない。それでは奏を心から信頼するに足りるものを持ち合わせているはずもない。さらに言えば、結弦と奏が出会ったのは二週間前。正確に言えば三週間前だが、いくら出会った瞬間からお互いに一目惚れし合ったような仲だと言っても、積み重ねた時間はまだその程度。
　今回のことで彼女が結弦のもとから去ってしまっても不思議ではないと考えることは、決して不自然なことではない。
　とはいえ、だからしかたがないと完全に割り切れるものでもない。結弦は加害者ではなく被害者と言えるのだから。斉東は今の結弦に対する精一杯の言葉として「まあとりあえず、彼女にメールぐらいはしておけよ」とだけ言う。結弦もまた、精一杯の答えを返す。
「ああ、わかってる」
　その表情に希望を抱かせるものはなく、むしろ期待を失わせるもので、それを指摘し、無理矢理にでも奮起させたいところではあった。だがここで無理強いできるはずもなく、それで引き下がらざるを得ない。悠太も気持ちは同じだったが、あえてこう添えていた。いかにも冗談といった体で。
「まあ、メールの内容に困ったら、初音さんに相談しろよ。俺が宮倉さんにどうメール出せばいいかわらないときに相談したように。

なんなら、いま初音さんを呼んでこようか？」
　これに結弦は、半眼で「……お前、まだ根に持ってたのか？」と答えた。
「まさか。俺は感謝してるんだぜ？　あのとき初音さんに話を振ってくれたお前に」
「そんな嘘くさい目で言われても、説得力ないんだけどな」
「失礼なヤツだ」
　悠太は不機嫌そうにそう締めくくり、これでお終いとばかりにドアへと向かい、斉東も続く。そして二人は結弦の部屋を出て、結弦も一緒に玄関へと向かった。するとその足音を耳にした初音がリビングから出てきて、お邪魔しましたと言う二人に「あら、もう帰るの？　お夕飯、うちで食べていったら？」と言ってきた。初音のファンならば当然のこと、二人はこの誘惑に思わず飛びつきそうになったが、長居して結弦に気を遣わせてしまうかもしれないと、誘惑を振り切って結弦の家を後にしていた。
　ただし、その帰り道では二人とも未練たらたらで、やっぱり帰るべきじゃなかった、初音さんの手料理を食べたかった、と何度も言っていたが。
　そしてその道中、二人は結弦と奏のことも話していた。その内容はどうしても悲観的なものとなり、悠太は斉東よりもずっと悲観的だった。結弦の部屋にいる間ずっと、彼がなにを思い、考えているのか、嫌というほどひしひしと感じられていたゆえに。
　喧嘩の際に頭を蹴られたことで結弦が見た幻覚は、まったくの絵空事ではなく、過去の記憶の一部だということを悠太は知っている。だからこそ結弦は過去の自分を前にして冷静でいられなくなったのだ。そして、嫌というほど蘇った記憶に、過去の自分と今の自分を責めずにはいられず、結果として、立華奏から離れていこうと自らしている。その証拠に結弦は、頭を蹴られたことで見たものを、酷く心を痛めながら語り、彼女に連絡を入れていないことについて、諦めに似た表情を浮かべながら余裕がなかったと言い訳をしていた。

そして、彼女の目の前で喧嘩をしてしまったと言った。昔の自分を見せてしまったのだと言いたげに。

応援団長としても、そんな今の結弦を黙認していたくはない。しかし、かといって今の彼に無理強いするのはあまりにも酷というもの。彼の背中を押すにしても、それに応えられるだけの心へと回復するための時間が必要だ。しかも、回復するにも方向性があり、前向きになっていく場合もあれば、諦めを強くしていく場合もあり、明らかに結弦は限りなく後者に近い。

そして時間は、そんな二人の距離を確実に広げ続け、引き返す道を壊していくだろう。深淵へと続く広大な漆黒の溝を創って。

そんな悠太の不安を証明するかのように、その日、結弦が奏に連絡を取ることはなく、また奏から連絡が来ることもなく、その翌日も、翌々日もそれは変わらなかった。それからさらに数日経っても変わらず、日一日と刻まれていく時間は、厳然たる事実として重く、そして冷たく過ぎていったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7320m/

Ｄｕｅｔ　Ｂｅａｔ

2011年11月22日01時56分発行